青森県埋蔵文化財調査報告書　第428集

田代遺跡Ⅱ

－県道八戸大野線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２００７年３月

青森県教育委員会

調査区全景

北区　東側斜面　遺構検出

北区　西側斜面　遺構検出

北区　遺構検出状況

第33号竪穴住居跡

第36号竪穴住居跡　複式炉

第32号竪穴住居跡　複式炉

第45号竪穴住居跡

第45号竪穴住居跡出土遺物

第46号竪穴住居跡出土遺物

弥生時代の遺構・遺物

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成１６・１７年度に県道八戸大野線道路改良事業予定地内に所在する八戸市南郷区田代遺跡の発掘調査を実施しました。田代遺跡は、平成１６年度の調査結果から、縄文時代中期末の集落跡であることが判明しています。平成１７年度の調査でも、縄文時代の竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構などが発見され、縄文時代中期末の集落跡がさらに拡がること、縄文時代後期や晩期にも遺跡が営まれていたこと、弥生時代中期の集落跡が存在したことが分かりました。

本報告書は、平成１７年度田代遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものですが、この成果が広く埋蔵文化財の保護と研究等に活用され、地域社会の歴史・文化への普及活動に資することを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書作成にあたり御指導、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く感謝を申し上げます。

平成１９年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長　白　鳥　隆　昭

例　　言

1　本報告書は、平成17年度に実施した県道八戸大野線道路改良事業に伴う八戸市南郷区田代遺跡の発掘調査報告書である。

2　田代遺跡は、青森県八戸市南郷区島守字番屋に所在する。

3　田代遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に、青森県遺跡番号65042として登録されている。

4　調査期間は以下のとおりである。

　　発掘作業期間　平成17年4月20日～7月29日

　　整理作業期間　平成18年4月1日～平成19年3月31日

5　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター　坂本文化財保護主査・工藤副参事・宮嶋文化財保護主査が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、執筆者名を文頭に記した。

6　発掘調査・整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。

7　本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、階上町発行の25,000分の1地形図「管内図」を複写・加工したものである。青森県全図は、国土地理院発行数値地図50ｍメッシュのデータに基づき「カシミール3D　ver. 8.6で作成したものである。

8　資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した（敬称略）

石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山　力
火山灰分析	国立大学法人　弘前大学　理工学部教授	柴　正敏
炭化木材樹種・種実同定	株式会社　パレオ・ラボ	
赤色顔料分析	株式会社　パレオ・ラボ	

9　遺構・遺物の表現は原則として次の基準・様式に拠った。主たる遺物の分類及び凡例についての詳細は、第1章第4節に記載してある。

（1）挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。遺構は、1/60・1/30・1/80、遺物は、剥片石器（石鏃）2/3、剥片石器（石鏃以外）・土製品・石製品1/2、土器1/3、礫石器1/2・1/3・1/6を基本としている。

（2）公共座標は旧日本測地系に基づき、図中の方位は座標北を表す。

（3）堆積土の色及び土器の色については『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄　1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては便宜的に次のとおり表記し、それ以外のものは適宜形状と大きさを記した。混入物の状態については、主たる次のものを記載している。

・粒状　「粒」＝粒経2mm以下、「中粒」＝2～5mm程度、「大粒」＝5～10mm程度

・塊状　「塊」＝粒経10mm以下、「中塊」＝10～20mm程度、「大塊」＝20～50mm程度

「斑状」斑点状。「濃集」極度に集中する。

（4）竪穴住居跡の主軸方向は、住居跡の中心と炉を結んだ住居跡の長軸の方向とし、北からどれくらい傾いているかを示す。表記例）N－115°－E：北から東に115度の位置

（5）竪穴住居跡の床面積は、残存する床部分を壁溝を除いて計測した値である。

（6）ピット番号は、調査時の番号をそのまま用いている。文章中に引用される場合と出土遺物の存在する場合はピット番号を付した。その他の場合は、ピットの深さを表示するに留めた。ピットの深さは、竪穴住居跡は床面から、それ以外は検出面から計測した。

（7）本稿で使用した遺構の略号は、SI＝竪穴住居跡、SK＝土坑、SN＝焼土遺構、SR＝土器埋設遺構である。

（8）遺物番号は、図版ごとに通し番号を付した（図版番号－遺物番号）。本文中・観察表・写真図版もこれに対応している。

10　写真図版の遺物写真の縮尺は不同である。

11　引用・参考文献は巻末にまとめて示した。

12　発掘調査及び報告書作成における出土遺物・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

13　発掘調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々から御協力・御指導を頂いた（敬称略、順不同）。

小保内裕之、春日信興、小久保拓也、佐々木浩一、杉山陽亮、村木　淳、森　淳、八戸市南郷歴史民俗資料館

14　観察表中の矢印（→）は旧→新を表す。

目　　次

序
例言
目次
図版・写真目次

第１章　調査概要

第１節　調査要項 ……1
第２節　発掘作業の経過 ……1
第３節　整理作業の経過 ……2

第２章　遺跡概要

第１節　周辺の遺跡 ……4
第２節　地理的環境 ……4
第３節　調査方法 ……8
第４節　遺物の分類 …… 10

第３章　遺構と出土遺物

第１節　竪穴住居跡 …… 16
第２節　土坑 …… 27
第３節　その他の遺構 …… 30
１.焼土遺構　２.屋外炉　３.土器埋設遺構　４.杭列
第４節　遺構外出土遺物 …… 73
南区 …… 73
１.土器　２.剥片石器　３.礫石器・石製品　４.土製品
北区 …… 80
１.土器　２.剥片石器　３.礫石器・石製品　４.土製品

第４章 理化学的分析

第１節　田代遺跡の火山灰について ……118
第２節　土器付着・床面赤色顔料の材質分析 ……120
第３節　竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定 ……123
第４節　田代遺跡から出土した炭化種実 ……125

第５章　まとめ

第１節　縄文時代 ……127
第２節　弥生時代 ……139
遺物観察表……143
写真図版 ……162
報告書抄録

図版目次

図1　遺跡位置 …… 3
図2　遺跡周辺の地形面区分 …… 6
図3　基本層序 …… 7
図4　調査区域 …… 9
図5　遺構配置全体 (1/1600) …… 13
図6　南区遺構配置 (1/200) …… 14
図7　北区遺構配置 (1/500) …… 15
図8　第31号竪穴住居跡 …… 32
図9　第32号竪穴住居跡 …… 33
図10　第33号竪穴住居跡 …… 34
図11　第34・35号竪穴住居跡 …… 35
図12　第36号竪穴住居跡 …… 36
図13　第37・38号竪穴住居跡 …… 37
図14　第39・40号竪穴住居跡 (1) …… 38
図15　第39・40号竪穴住居跡 (2) …… 39
図16　第41・42号竪穴住居跡 …… 40
図17　第44号竪穴住居跡 …… 41
図18　第45号竪穴住居跡 (1) …… 42
図19　第45号竪穴住居跡 (2) …… 43
図20　第45号竪穴住居跡 (3) …… 44
図21　第46号竪穴住居跡 …… 45
図22　第47号竪穴住居跡 …… 46
図23　第27～34号土坑 …… 47
図24　第35～42号土坑 …… 48
図25　焼土遺構・土器埋設遺構・屋外炉 …… 49
図26　杭列 …… 50
図27　第31号竪穴住居跡出土遺物 …… 51
図28　第32号竪穴住居跡出土遺物 …… 52
図29　第33号竪穴住居跡出土遺物 (1) …… 53
図30　第33号竪穴住居跡出土遺物 (2) …… 54
図31　第34・35号竪穴住居跡出土遺物 …… 55
図32　第36・37号竪穴住居跡出土遺物 …… 56
図33　第38号竪穴住居跡出土遺物 …… 57
図34　第39号竪穴住居跡出土遺物 …… 58
図35　第40号竪穴住居跡出土遺物 …… 59
図36　第41号竪穴住居跡出土遺物 …… 60
図37　第42・44号竪穴住居跡出土遺物 …… 61
図38　第45号竪穴住居跡出土遺物 (1) …… 62
図39　第45号竪穴住居跡出土遺物 (2) …… 63
図40　第45号竪穴住居跡出土遺物 (3) …… 64
図41　第45号竪穴住居跡出土遺物 (4) …… 65
図42　第45号竪穴住居跡出土遺物 (5) …… 66
図43　第45号竪穴住居跡出土遺物 (6) …… 67
図44　第45号竪穴住居跡出土遺物 (7) …… 68
図45　第45号竪穴住居跡出土遺物 (8) …… 69
図46　第46号竪穴住居跡出土遺物 …… 70
図47　第47号竪穴住居跡・土坑出土遺物 …… 71
図48　土器埋設遺構・屋外炉出土遺物 …… 72
図49　遺構外出土土器 (1) …… 75
図50　遺構外出土土器 (2) …… 76
図51　遺構外出土石器 (1) …… 77
図52　遺構外出土石器 (2) …… 78
図53　遺構外出土土製品 (1) …… 79
図54　遺構外出土土器 (3) …… 84
図55　遺構外出土土器 (4) …… 85
図56　遺構外出土土器 (5) …… 86
図57　遺構外出土土器 (6) …… 87
図58　遺構外出土土器 (7) …… 88
図59　遺構外出土土器 (8) …… 89
図60　遺構外出土土器 (9) …… 90
図61　遺構外出土土器 (10) …… 91
図62　遺構外出土土器 (11) …… 92
図63　遺構外出土土器 (12) …… 93
図64　遺構外出土土器 (13) …… 94
図65　遺構外出土土器 (14) …… 95
図66　遺構外出土土器 (15) …… 96
図67　遺構外出土土器 (16) …… 97
図68　遺構外出土土器 (17) …… 98
図69　遺構外出土土器 (18) …… 100
図70　遺構外出土土器 (19) …… 101
図71　遺構外出土土器 (20) …… 102
図72　遺構外出土石器 (3) …… 104
図73　遺構外出土石器 (4) …… 105
図74　遺構外出土石器 (5) …… 107
図75　遺構外出土石器 (6) …… 108
図76　遺構外出土石器 (7) …… 109
図77　遺構外出土石器 (8) …… 110
図78　遺構外出土石器 (9) …… 111
図79　遺構外出土石器 (10) …… 113
図80　遺構外出土石器 (11) …… 114
図81　遺構外出土石器 (12) …… 115
図82　遺構外出土土製品 (2) …… 117
図83　SI1～21 出土土器 (413 集所収) …… 130
図84　SI26・27 (413 集所収), 他遺跡の出土土器 … 131
図85　SI31～47, SR3・5 出土土器 (今回報告) … 132
図86　南区の時期別遺構配置 …… 134

写 真 目 次

写真 1　調査区全景 …… 162
写真 2　調査開始前の状況、検出前の状況 …… 163
写真 3　基本層序、作業風景 …… 164
写真 4　第 31 号竪穴住居跡 …… 165
写真 5　第 32 号竪穴住居跡 …… 166
写真 6　第 33 号竪穴住居跡 …… 167
写真 7　第 34・35 号竪穴住居跡 …… 168
写真 8　第 36 号竪穴住居跡 …… 169
写真 9　第 37・38 号竪穴住居跡 …… 170
写真 10　第 39・40 号竪穴住居跡 …… 171
写真 11　第 39 号竪穴住居跡 …… 172
写真 12　第 41 号竪穴住居跡 …… 173
写真 13　第 42 号竪穴住居跡 …… 174
写真 14　第 44 号竪穴住居跡 …… 175
写真 15　第 45 号竪穴住居跡 (1) …… 176
写真 16　第 45 号竪穴住居跡 (2) …… 177
写真 17　第 46 号竪穴住居跡 …… 178
写真 18　第 47 号竪穴住居跡 …… 179
写真 19　第 27 ～ 34 号土坑 …… 180
写真 20　第 35 ～ 42 号土坑 …… 181
写真 21　焼土遺構、土器埋設遺構、屋外炉、杭列 …… 182
写真 22　第 31・32・33 (1) 号竪穴住居跡出土土器 …… 183
写真 23　第 33 (2)・34 ～ 36 号竪穴住居跡出土土器 …… 184
写真 24　第 37 ～ 39 号竪穴住居跡出土土器 …… 185
写真 25　第 40 ～ 42 号竪穴住居跡出土土器 …… 186
写真 26　第 44・45 (1) 号竪穴住居跡出土土器 …… 187
写真 27　第 45 (2) 号竪穴住居跡出土土器 …… 188
写真 28　第 45 (3) 号竪穴住居跡出土土器 …… 189
写真 29　第 46・47 号竪穴住居跡出土土器 …… 190
写真 30　土坑・土器埋設遺構出土土器 …… 191
写真 31　遺構外出土土器 (南区) …… 192
写真 32　遺構外出土土器 (北区 1) …… 193
写真 33　遺構外出土土器 (北区 2) …… 194
写真 34　遺構外出土土器 (北区 3) …… 195
写真 35　遺構外出土土器 (北区 4) …… 196
写真 36　遺構外出土土器 (北区 5) …… 197
写真 37　遺構外出土土器 (北区 6) …… 198
写真 38　遺構外出土土器 (北区 7) …… 199
写真 39　第 31 ～ 44 号竪穴住居跡出土石器 …… 200
写真 40　第 45 号竪穴住居跡・屋外炉・南区出土石器 …… 201
写真 41　遺構外出土石器 (北区 1) …… 202
写真 42　遺構外出土石器 (北区 2) …… 203
写真 43　遺構外出土石器 (北区 3) …… 204
写真 44　遺構外出土石器 (北区 4)、土製品類 (1) …… 205
写真 45　遺構外出土土製品類 (2) …… 206

第１章　調査概要

第１節　調査要項

１　調査目的
県道八戸大野線道路改良事業の実施に先立ち、当該地区に所在する田代遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

２　発掘調査期間　　平成１７年４月２０日から同年７月２９日まで

３　遺跡名及び所在地　田代遺跡（青森県遺跡番号６５０４２）
八戸市南郷区大字島守字番屋

４　調査予定面積　　３，６００平方メートル

５　調査委託者　　青森県県土整備部道路課

６　調査受託者　　青森県教育委員会

７　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

８　調査体制
調査指導員　　市川　金丸　　前青森県考古学会会長（考古学）
調　査　員　　松山　　力　　八戸市文化財審議委員（地質学）
調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター
所長　　白鳥　隆昭
次長　　三浦　圭介
総務ＧＬ　　櫻庭　孝雄
調査第二ＧＬ　　工藤　　大
文化財保護主査　　宮嶋　　豊
文化財保護主事　　坂本　真弓（現　文化財保護主査）
調査補助員　　榊　　知佳（平成 18 年３月退職）・
關　　尊文・金澤　徳彦・木下　梨恵

第２節　発掘作業の経過

4月20日に作業器材等の搬入を行い調査開始となったが、周辺住民からの苦情により、5月前にはプレハブを二階建てから平屋建てに建替えることとなった。平成 16 年度、スギの伐採木が多く、手

をつけられなかった北区の東側斜面の状況を確認するため、試掘抗をあけて確認した。この作業と並行して南区の盛土を除去する算段を行った。南区には消火栓が残存しており、この消火栓の撤去時期が調査期間内に終了しない可能性が高くなったため、消火栓の設置されていない範囲まで上物のない南側斜面の調査から行うことにした。また、今年度の調査に伴って生じる排土は工事区域内の南側斜面奥に仮置きし、工事発注後にその業者が処分することとなった。

5月中旬には、南区の盛土を除去する作業を始めた。盛土は厚い所で8m程に達した。

北区の西側斜面は、粗掘を行いつつ遺構精査を順次進めていった。斜面上部から順に基本層序Ⅱ・Ⅲ層を重機により除去し、Ⅳ層からは手掘りでの掘り下げを行い、遺構・遺物の確認を行った。ここでは、遺構が数多く発見された。

7月上旬は長雨が続いたが、無事に空中写真撮影を行うことができた。

7月中旬には今年度出土した遺物の整理、後片付けをはじめた。調査で使用した器材は調査区の隣接地の器材庫に保管し、29日にはすべての作業を終了した。

第3節　整理作業の経過

平成17年度の発掘調査では、遺構実測の大部分は光波トランシットを用いたトータルステーションによる測量で行った。ただし、細かい実測図は遣り方測量で作成したため、発掘調査終了後、室内でデジタルトレース作業を行って、当該年度内に多くの遺構図面をデジタル化した。遺構図の修正は、平成18年度に、株式会社アイシン精機の「遺構実測支援システム」を使用して行った。

遺物については、4月から、出土別の数量・重量計測作業、注記の確認を行った上で、各遺構・各出土地区単位で接合作業を行った。ある程度、接合が進んだ遺物に関しては、さらにその周辺の土器との接合を行い、できる限り、復元ができるように努めた。6月からはこれらの遺物に石膏をいれ、形を整える作業を行った。本遺跡の出土遺物は、個体となるものが少なく、石膏で形を整える作業には苦慮した。このほか、剥片石器を60点選別し、株式会社アルカに実測委託を行った。9月には報告書に掲載する出土遺物の選別作業を終え、10月から土器の拓本取りを行い、11月には、土器・石器の実測作業に入った。1月には図版作成を行い、2月16日に報告書の入札を行った。

八戸市
新井田川
松館川
階上岳
種差海岸階上岳県立自然公園
田代遺跡
古里川
S=1/50,000
0
2,000
4,000m

図１　遺跡位置

第２章　遺跡概要

第１節　周辺の遺跡

田代遺跡の立地する階上岳から連なる丘陵地には、数多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。本遺跡は、昭和 48 年に田代児童館建設の際、縄文時代中期・後期の遺物散布地として登録された遺跡である。平成 17 年度に刊行された『田代遺跡』にその詳細が記載されている。

本遺跡の南側周辺は、前述のとおり階上岳の山裾にあたる蒼前平段丘高位面に立地することから、埋蔵文化財包蔵地は少なく、八戸市で３遺跡、岩手県軽米町で２遺跡が登録されている。本遺跡の北側では新井田川・松館川・馬渡川とその支流によって形成された開析地や前述した段丘面で、多数の遺跡が確認されている。

第２節　地理的環境

平成 17 年度に刊行した『田代遺跡』にその詳細が記載されている。ここでは要約したものを掲載する。

位置と周辺の地形

遺跡の東方には、5km 先に山頂、1km 余の距離に西側山麓線をもつ、標高 740m、長さ 10km（西南西～東北東方向）、幅 6 ㎞の階上岳の山体が横たわっている。

階上岳の北～西方には、広大な台地（段丘群）が拡がっている。段丘群は、高位の段丘面については、九戸面を市野沢面と鴨平面とに分け、また、蒼前平面と天狗岱面を合せて天狗岱面とし、天狗岱面を蒼前平高位面、蒼前平低位面、白銀平面、野場面の４段に区分した（大和伸友 2005 他）。中位の段丘面は高館段丘、根城段丘、低位の段丘面は長七谷地段丘や田面木段丘と、沖積段丘などに分けられてきた。

図2は、田代遺跡を中央においた、東西 5km、南北 3.5km の範囲の地形面区分図である。

遺跡周辺の段丘群は、新田川とその支流の松館川や古里川、あるいはそれらの小支流に刻まれ、河川に沿って随所に渓谷や、谷細長い谷底平野や小盆地（沖積地）が断続している。

遺跡は、東側の台地から番尻の台地に続く連結部の南側で東側台地の頂部西側の、姉市沢の谷に向かって、西南西に下る長さ 500m ほどの 2 つの小谷の上流部両側斜面と、その間に張り出す段丘面にまたがって立地している。遺跡直近城の段丘面は市野沢面であたる。張り出す段丘面は幅 50 ～ 120m の緩やかな起伏地であるが、遺跡は、勾配 5 分の 1 ～ 3 分の 1 程度の急斜面にまで拡がっている。

周辺の地質

遺跡周辺の基盤は、大部分が中生代ジュラ紀～白亜紀の堆積岩や火成岩であるが、北西方に 2.5km 以上離れた島守盆地周辺は、新生代第三紀中新世の堆積岩・火山岩（安山岩）である。これらの基盤岩の上には、第四紀の段丘堆積物とこれらを覆う火山灰層がのっている。

中生代の岩石は、砂岩・頁岩・チャート・緑色凝灰岩類などの堆積岩や、花こう閃緑岩・斑れい岩などの火成岩で、やや北東方に離れた階上岳北麓周辺にまで範囲を広げれば、これらのほかに、粘板岩・石灰岩などの堆積岩、半深成岩・安山岩・流紋岩などの火成岩、ホルンフェルス・片岩類・大理

石なども分布し、石器類の材料に用いられる岩種が豊富である。階上岳は花こう閃緑岩を主とする。

段丘堆積物は、侵食による基盤の起伏を埋め立てるように堆積した１～10m 余の厚さの地層で、礫・砂・シルト・粘土などで構成され、ところによっては火山砕屑物層も見られる。

更新世（洪積世）の段丘群は、侵食・削剥の影響の少ない場所では、高位の段丘ほどより古い火山灰層をのせていて、九戸段丘（市野沢面・鴨平面）では九戸火山灰層（25 万年以上前）以上をのせている。九戸火山灰層は、幾枚もの軽石層を伴う、よくしまって硬い粘土質暗褐色火山灰層（いわゆるローム）で、火山砕屑物の構成鉱物に雲母を伴う部分が多い。これ以降の降下年代については、前述した『田代遺跡』を参考にしていただきたい。

遺跡内の地質と土層序

Ⅰ層（厚さ 1.2～1.3 m）は表土に当たる黒褐色（10YR2/2）土層の耕作土で、粒径１～２mm 余の軽石粒が散らばっている。

Ⅱ層（厚さ 25 ～ 35cm）は、粒径１～２mm 余の軽石粒が散らばる黒色（10YR2/1）土層で、縄文時代晩期～平安期程度の年代の土層と推定される。

Ⅲａ層は、南部中撒層由来の粒径１～２mm 余の軽石粒が多量（50%）に混じる厚さ 12 ～ 30cm の黒褐色（10YR3/2）土層となっている。

Ⅲｂ層は、南部浮石層由来の粒径１～ 10mm 余の軽石粒が多量（25%）に混じる厚さ 30 ～ 40cm の黒色（10YR1.7/1）土層となっている。

Ⅳ層（厚さ 15 ～ 40cm）は、Ⅲ層同様の南部浮石層由来の粒径１～ 50mm 余の軽石粒が多量に混じった黒色（10YR2/1）土層である。

Ⅴ層（厚さ 5 ～ 25cm）は南部浮石層で、下半部に明黄褐色（10YR6/8）、上半部に橙色（7.5YR6/8）の軽石粒（粒径が砂粒大～ 12mm）が密集し、間隙を中粒～粗粒砂大の暗色（褐灰色～黒褐色）岩片が充填し、膠結していないために崩れやすい。随所に、軽石が混入した黒褐色砂質土塊が入り込んでいる。

Ⅵ層（厚さ 20 ～ 30cm）は、暗褐色（10YR3/3）の砂質土層で、下位のⅦ層に混入していると同様色調の軽石粒（粒径 2 ～ 10mm）が混入している。軽石粒の混入は全体的に散らばる程度である。

Ⅶ層（厚さ 50 ～ 75cm）は、平均的には、上半部（Ⅶ-1）が黄褐色(10YR5/6）土層、下半部（Ⅶ-2）が褐色（10YR4/4）土層で、部分的には両層が土塊となって混合するところもある。これらの土層にはところにより密に、ところによりややまばらに、粒径 2 ～ 40mm の黄橙色軽石粒が散らばっている。

Ⅷ層（厚さ7～60cm）は、よくしまって硬い、明黄褐色（10YR6/6）の火山灰混じりの粘土質火山灰層である。八戸火山灰二次風成層で、二ノ倉火山灰と混合している可能性がある。

Ⅸ層は、チャートの風化部分が露頭する。間隙を鈍い黄褐色土（10YR5/4）や明黄褐色土（10YR7/6）の粒子が充填する。

＊『田代遺跡』とほとんどの層序に変化はないが、一部層序の異なるところは、Ⅲa層の中撥浮石を主体とした層が新たに加わることである。「Ⅲb層」と『田代遺跡』の「Ⅲ層」は基本的に同じである。また、『田代遺跡』Ⅸ層とⅩ層の高舘火山灰相当層が今回報告の基本層序内で欠如しているため(調査区内では確認できる部分もある。)、本報告の「Ⅸ層」とは異なるものである。

松山　力　2006　「第2節地理的環境　遺跡と周辺の地形・地質」『田代遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第413集　青森県教育委員会
大和伸友　2005　八戸市史　自然編、1部1章2節および付録資料・段丘区分図

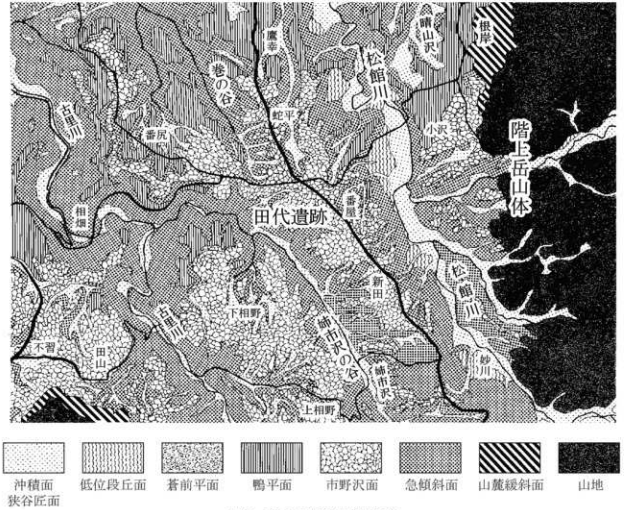
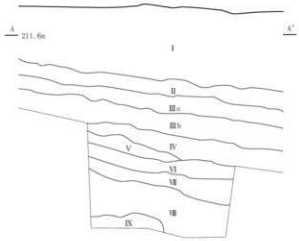
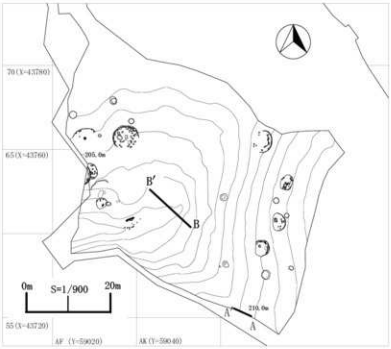


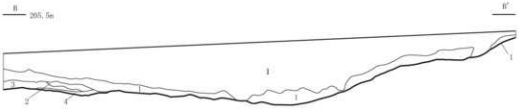
図2　遺跡周辺の地形面区分



Ⅰ層	10YR2/2	黒褐色土	畑の耕作土。南部浮石粒1%以下
Ⅱ層	10YR2/1	黒色土	南部浮石粒1%以下
Ⅲa層	10YR3/2	黒褐色土	火山灰主体、黒褐色土30%混入
Ⅲb層	10YR1.7/1	黒色土	南部浮石粒～中粒1%・中塊1%、黒褐色土3%
Ⅳ層	10YR2/1	黒色土	南部浮石粒～大粒40%・中塊～大塊5%、黒褐色土10%
Ⅴ層	10YR5/8	黄褐色土	南部浮石主体。暗褐色土30%、南部浮石粒～中粒5%
Ⅵ層	10YR3/3	暗褐色土	南部浮石中粒～大粒15%、暗褐色土5%
Ⅶ層	10YR5/6	黄褐色土	黒褐色土10%、暗褐色土5%、南部浮石粒2%・大塊1%
Ⅷ層	10YR5/6	黄褐色土	八戸火山灰二次堆積層（二ノ倉火山灰と混合ふり、ローム主体）黄褐色ローム30%
Ⅸ層	岩盤主体層		チャートの風化部分が露出、黒色土・黄褐色土・明黄褐色土が混入

0　S=1/60　2m





1層	10YR2/1	黒色土	暗褐色土が10%ほど層下面中央部分に濃集する。南部浮石粒～大粒が1%程度層全体に混入
1層	10YR2/2	黒褐色土	汎底部分にあたる黄褐色火山灰が7%ほど層右側の根刮部分に混じる。南部浮石粒～大粒が1%以下層全体に混入
2層	10YR2/2	黒褐色土	30%程の暗褐色土と混ざり合って堆積している。南部浮石粒～大粒が1%以下層全体に混入
3層	10YR2/3	黒褐色土	南部浮石粒～大粒1%混入
4層	10YR3/3	暗褐色土	汎底部分にあたる黄褐色火山灰が1%ほど層全体に混ざる

0m　1/100　3m

図3　基本層序

第３節　調査方法

粗掘り作業は、表土、盛土、試掘の結果に基づいて遺構や遺物に支障のない範囲で、排土移動や軽石層の除去などの作業は重機で行った。これ以外の遺物散布が認められる範囲は人力による作業を行った。

グリッド設定については、調査区の範囲が東西に広くなることが予想されたため、すべての調査範囲内に整数値のグリッドを設定できるよう配慮した。工事用図面が旧日本測地系を元に作成されているため、旧日本測地系の座標を基準にしている。平面直角座標第Ｘ系のＸ＝ 43500、Ｙ＝ 59200 を原点ＣＡ－０とし、原点から東西方向のＹラインに二文字のアルファベットを、南北方向のＸラインには２桁の算用数字を付した。アルファベットはＡからＹまでの 25 文字を使用した。Ｙラインは基点のＣＡから東４ｍ毎にＣＢ・ＣＣ･･･ＣＹとアルファベットを順に追い、西４ｍ毎にＢＹ・ＢＸ・ＢＷ･･･ＢＡとアルファベットを逆に追っている。100 ｍ毎にアルファベット左側文字が変化し、東方向では繰り上がり（ＤＡ・ＥＡ）、西方向では繰り下がる（ＢＡ・ＡＡ）。グリッドの呼称は南西角の交点の値をアルファベット優先で読むこととした（例：ＢＰ－ 40）。

標高は遺跡周辺にある測量基準点から、調査区内に移設した。

遺構確認は随時行い、調査区単位で、発見順に遺構名を付した。遺構名称は、遺構種別と番号を付した（例：ＳＩ８＝第８号竪穴住居跡）。

実測図の作成は、平面図は、株式会社アイシン精機「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で行った。炉などの細かい平面図（おもに１／１０）は簡易遣り方測量を行った。断面図は１／２０で実測を行った。

遺構内・遺構外遺物ともグリッド・層位を明記して取り上げた。遺構内遺物は遺構堆積土の層位毎に、遺構外遺物は基本層序に依って取り上げている。このうち、遺構内の遺物の大部分、遺構外遺物の一部を「遺構実測支援システム」を用いてドットマップを作成した。この場合、遺構内遺物は遺構毎に１から番号を用い、遺構外遺物は１から通し番号を用いた。遺物は土器（Ｐ）・石器（Ｓ）・その他（Ｃ）と三種類に大別し、それぞれ１から番号を用いた。

調査に当たっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は『標準土色帖』を用いた。土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付すことを原則とした。

遺構の堆積土内や炉堆積土内に炭化物が含まれていることが観察された場合、土壌を土嚢袋で取り上げて、現場内で洗浄作業を行った。出土遺物は、種類別にし、遺構別、グリッド別などに大別した。これらはダンボール箱に収納し、すべての箱に通し番号を付して収納台帳を作成した。

写真撮影は適宜行うこととし、35mm カラーリバーサル、35mm モノクロームの各フィルムおよびデジタルカメラを使用した。必要に応じて６×７中判カメラ、４×５大判カメラを用いた。遺跡全体写真は６×７中判カメラ、35mm カラーリバーサルを用いて行った。

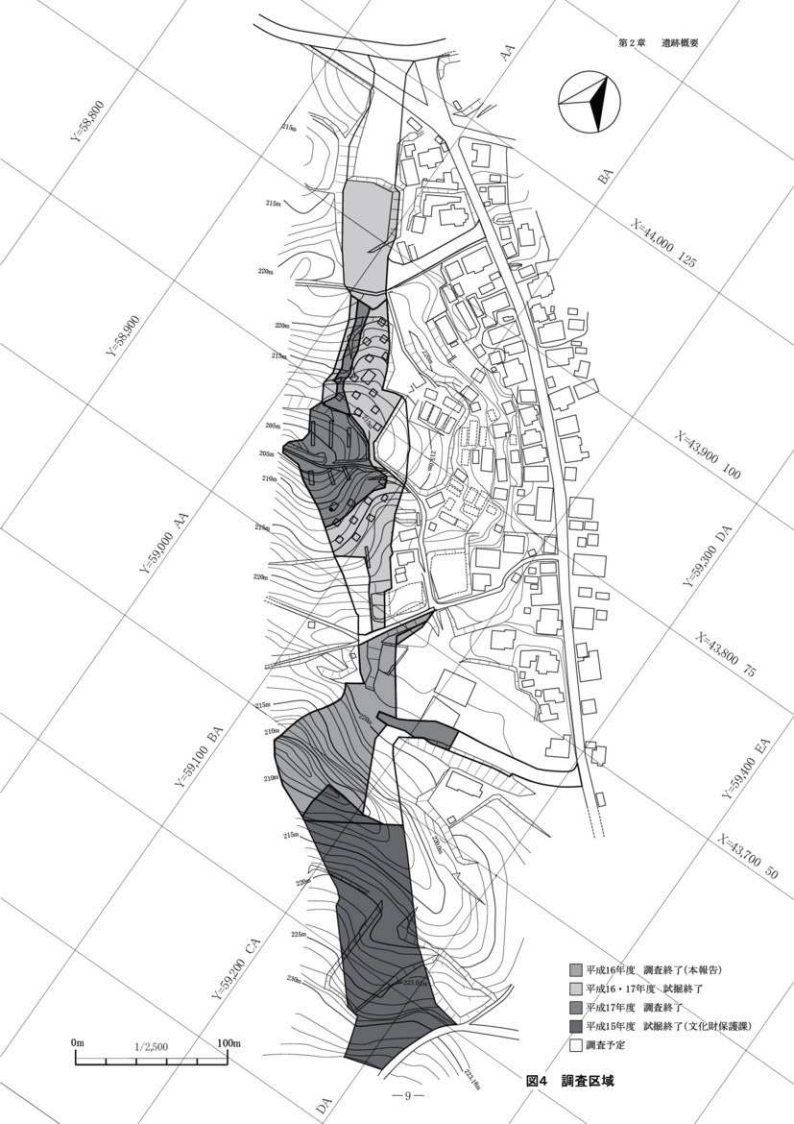

Y=58,800
Y=58,900
Y=59,000 AA
Y=59,100 BA
Y=59,200 CA
DA
AA
BA
X=44,000 125
X=43,900 100
Y=59,300 DA
X=43,800 75
Y=59,400 EA
X=43,700 50
平成16年度　調査終了(本報告)
平成16・17年度　試掘終了
平成17年度　調査終了
平成15年度　試掘終了(文化財保護課)
調査予定
0m
1/2,500
100m

図4　調査区域

第４節　遺物の分類

個々の遺物の属性については観察表を参照されたいが、ここでは各遺物がどのような観点で分類されているかの基準説明を行う。

土器

土器の分類は土器型式ごとに行っている。数量的に多い土器（特に中期末～後期初頭）について、報告書に使用した型式名を以下に列挙し、その分類基準を掲げておく。

縄文時代早期中葉

鳥木沢式－底部尖底で、口縁部文様帯を構成し、胴部は無文になる土器で、口縁部には貝殻腹縁文が押圧される。

物見台式－貝殻腹縁文・沈線・刺突で構成される土器。幾何学的文様構成がみられる。

縄文時代中期

最花式－口唇部が無文帯となり、以下に刺突列が巡るものもある。胴部は２～３条の縦位沈線が施文されるのを特徴とする。

大木 10 式併行期－口縁部が無文帯と縄文が施文されるものがあり、胴部にJ字やO字の文様構成を取ることを特徴とする。胴部に沈線で区画された縄文施文部分、無文部分が見られる。

中期後半－口縁部の折り返し部が器面とほとんど変わらない器厚で、折り返し部分の幅が広いもの。胎土は白っぽい。

中期末～後期初頭の土器－口縁部・胴部とも地文縄文のみを施文しているもので用いている。主に２段原体の縦回転、３段原体の縦回転(繊維を含まない土器の)絡条体回転のみの破片を指している。

縄文時代後期

十腰内Ⅰ群・十腰内Ⅱ群・十腰内Ⅲ群、十腰内Ⅴ群土器などの分類を使用した。

後期初頭－粘土紐の貼付け、縄文原体の押圧、磨消縄文、胴部の幾何学的文様構成が見られるもの。地文縄文は縦方向に回転施文されることが多い。折り返し口縁も含む。折り返し部分は縄文原体が回転施文されることが多い。

後期前葉－折り返し口縁を含む口縁部を持つ深鉢形土器に絡条体を縦・斜方向に施文するもの、縄文原体を施文するものを含む。焼成は堅緻で、内外面の無文部分は丁寧なミガキが施される。

後期後半－後期前葉に比べてやや厚手で、口縁が内湾するもの。縄文原体を横方向に施文し、羽状縄文とする。底外面は台状になるものを含めた。

縄文時代晩期

大洞ＢＣ式・大洞Ｃ１式、大洞Ｃ２式などを用いた。大洞B式からＣ１式までを前半、Ｃ２式からA'式までを後半とした。

弥生時代の土器

文献（須藤 1998）を元に弥生時代を６期とした。弥生時代１期－弥生時代前期前半、弥生時代２期－弥生時代前期後半、弥生時代３期－弥生時代中期前葉、弥生時代４期－弥生時代中期中葉、弥生時代５期－弥生時代中期後葉、弥生時代６期－弥生時代後期とした。この内、使用した時期は、弥生

時代２期、弥生時代４期、弥生時代５期、弥生時代６期である。弥生時代２期は二枚橋式・馬場野Ⅱ式などに相当する。弥生時代４期は田舎館２・３群土器、弥生時代６期は天王山式などが相当する。

剥片石器

実測図－アスファルト状物質付着範囲－アミかけ、　火はじけ・節理面・風化面－ドットで表す。

　石鏃・石錐・石匙・石篦・二次調整のある剥片・微小剥離痕のある剥片・両極加撃痕跡のある剥片、剥片、石核、砕片の10器種に大別している。

石鏃－凹基鏃、有茎鏃、平基鏃に３種類に分類される。この他、未製品と思われるものもある。

石錐－先端部に摩耗等の痕跡があるもの。棒状、つまみ部を有するもの、剥片を使用するものの３種類に分類される。

石匙－縦形、横形の２種類に分類される。

石篦－撥形で、両面加工されているもの。つまみ部を有するもの、上端が弧状になるもの、上端が水平なものの３種類に分類される。今回、出土しなかった。

二次調整のある剥片－調整加工が施されているが、定形石器に該当しないもの。定形石器の破損品を含む。二次調整のある剥片はさらに三分類される。１　剥片の一部に急角度の刃部が作り出されているものを削器と呼称した。２　剥片の一部に鈍角度の刃部が作り出されているものを掻器と呼称した。３　剥片を周辺から中心に向かって打ち欠き、形状を整えているものを石器未成品と呼称した。

微小剥離痕のある剥片－剥片の縁辺に、調整加工以外の剥離が連続的にみられる剥片。

両極加撃痕跡のある剥片－打点が対に複数存在する剥片。

剥片－調整加工、微小剥離がなく、最大幅・厚が１cm より大きいもの。

砕片－調整加工、微小剥離がなく、最大幅・厚が１cm 未満のもの。

石核－素材剥片作出後の原石素材。今回出土しなかった。

礫石器

実測図－擦り（摩耗痕、擦過痕、研磨痕等）、敲き（敲打痕等）、くぼみ（敲打痕、線状痕等を伴うくぼみ）の凡例は図のとおりである。

磨製石斧－転用品等も含める。

石錘

敲磨器－擦り石・敲き石・くぼみ石の類。

石皿・台石類

原材－剥片石器の原材・母岩の類

石製品

　実測図－礫石器の凡例に準ずる。

装身具－穿孔のあるもの。

円盤状石製品

加工礫－加工・整形痕のある礫。
その他の石製品－種別の分からないもの。

擦り

敲き

凹み

土製品類

ミニチュア・小型土器－小型の非実用的な土器
土偶
円盤状土製品－円形に加工した土器片
土製装飾品
三角形土版
異形土製品
焼成粘土塊
泥面子

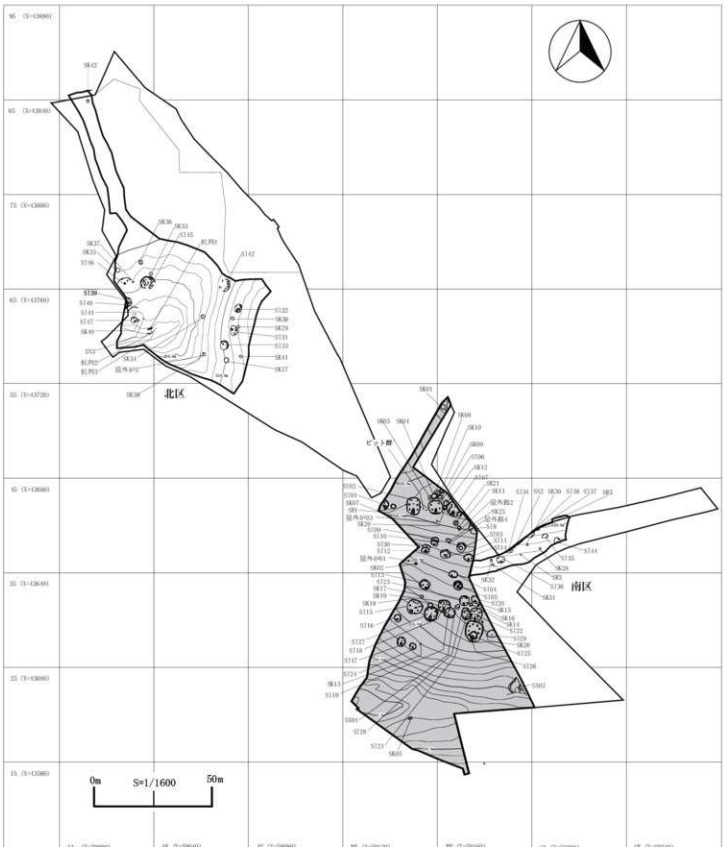


図5　遺構配置全体（1/1600）

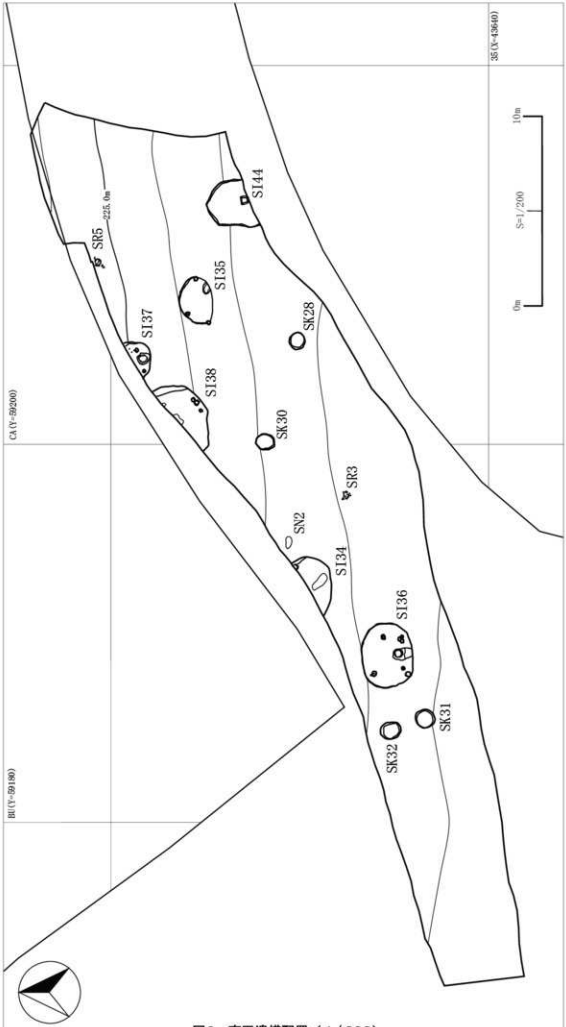


図6　南区遺構配置（1/200）

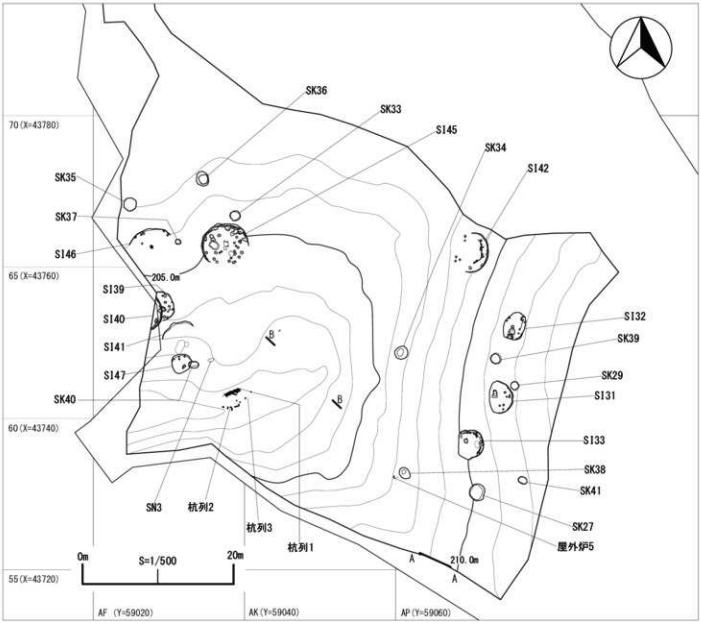


図7　北区遺構配置（1／500）

第３章　遺構と出土遺物

第１節　竪穴住居跡

第３１号竪穴住居跡（図８、遺物図 27、写真４、遺物写真 22・39）

［位置・確認］ＡＳ－ 60・61 グリッドに位置し、標高 212 m前後の斜面上に立地する。Ⅴ層上面で検出した。西側約半分が道路造成によって壊されている。

［平面形・規模］正確には不明だが、平面形は楕円形と考えられる。残存する部分は、長軸 4.3 m、短軸 3.14 m、床面積は 9.65 ㎡である。

［壁・床面］東壁 31 ㎝、南壁 19 ㎝、北壁 11 ㎝である。床面には起伏があり、全体的に堅緻である。Ⅵ層をそのまま床にしており、貼床は見られない。

［壁溝］東壁中央付近で長さ約３m、幅 10 ㎝程の壁溝を検出した。

［柱穴］東壁際と南壁際でピット７基を検出した。長軸 14 ～ 28 ㎝、深さ 19 ～ 57 ㎝である。柱穴配置は不明であるが、Pit １・７が柱穴になる可能性がある。

［炉］住居跡南西側で複式炉が検出された。石組部・前庭部から構成される。床面を浅く掘り込んで構築されており、全長 92 ㎝、幅 62 ㎝、各部の規模は、石組部 72×46 ㎝の長方形、前庭部 46×20cm の長方形である。床面から各部の深さは、石組部 3.4cm、前庭部 2.8cm で、主軸方向は真北である。炉内の堆積土は、10 層に分層され、暗褐色土を主体としている。堆積土には全体に焼土粒と炭化物粒が混入する。

石組部は、南側を除きコの字状に礫を囲っている。石組部底面は炉石に接して被熱しており、一辺 40 ㎝の方形に広がっている。炉石も熱を受け赤変し、底面には起伏がある。石組部の構築は、まず、炉の内部を浅く掘り込み、据える礫を形状に合わせてさらに浅く掘り込み礫を設置する。この掘り込みは礫が設置されていない部分でも確認されており、炉石が抜き取られたものと思われる。前庭部の底面は非常に堅緻で起伏があり、石組部との境界はほとんどない。南側は緩やかに立ち上がる。

［堆積土］黒褐色土主体の堆積土である。西側では暗褐色土が堆積する。

［出土遺物］土器片は総数 119 点、2,011 g出土した。検出面から床面までが浅いため、ほとんどが床面直上やその上部の１層から出土した。地文縄文のみを縦方向に施文した土器片が多い。27- 1はやや外反する土器である。27-12 は口縁部無文帯で、胴部との境界に縄文原体を押圧し、ボタン状の貼付を施し、縄文時代後期初頭のに比定される。礫石器は、敲磨器が堆積土１層から１点出土した。他に、棒状の加工礫が堆積土１層から１点出土した。

［時期］出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代中期末～後期初頭である。

第３２号竪穴住居跡（図９、遺物図 28、写真５、遺物写真 22・39・44）

［位置と確認］ＡＳ・ＡＴ－ 62・63 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ⅴ層上面で確認し、西側は斜面地のため検出できなかった。

［平面形・規模］平面形は隅丸長方形で、長軸 3.68 m、短軸 2.78 m、床面積は 7.97 ㎡、主軸方向は真北である。

［壁・床面］壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は、東側で36cm、南側で11cm、北側で20㎝である。Ⅵ層をそのまま床にしており、貼床は見られない。床面は堅緻で、特に炉の周辺は顕著である。このほかPit 1とPit 2との間に長さ1.2 m程の浅い溝状の掘り込みが確認された。深さは数㎝である。

［壁溝］南東壁付近で検出した。全体の長さ約1.3 m、幅4～18 ㎝、床面からの深さ約11 ㎝である。

［柱穴］ピット11基を検出した。このうち、Pit 1・2・6・9・10は柱痕こそ確認できなかったものの、いずれも炉の主軸方向を中心に左右対称に配置されており、主柱穴と考えられる。主柱穴の掘り方はほぼ円形で、ピットの長軸は20～28 ㎝、深さ15～42 ㎝である。ピットの堆積土は黒褐色土主体である。桁行の柱穴間は1.2・1.6 mである。炉の左右壁際1基ずつみられるピットは、炉に関連するピットの可能性もある。

［炉］住居跡南西壁中央に接した複式炉が検出された。地床炉部・石組部・前庭部の三部から構成される複式炉で、全長1.8 m、幅90 ㎝である。主軸方向は、N－20°－Eである。地床炉部は42×36 ㎝の規模でほぼ円形に数㎝掘りこまれ、その周囲は非常に硬化している。掘り込みの周辺には被熱した範囲が広がっているが、掘り込み内部は被熱していない。石組部は、90×82 ㎝の規模でほぼ円形状である。石組部と床面はやや高低差があり、石組部の周縁は土が土手状に盛られ、硬化している。底面形状は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。炉石は前庭部との境界にあたる南側に2個確認された。礫の下部の大きさに合わせて石組部壁際を10 ㎝程掘り込み、長さ20 ㎝前後の扁平な礫を据えている。これらの炉石は被熱して内側に面した部分が被熱していた。中央には被熱した痕跡があり、42×34 ㎝の規模で、平面形はほぼ円形である。被熱の深さは4㎝である。

前庭部は、硬化面が形成され、64×50 ㎝のほぼ円形で、住居内床面で最も堅緻である。硬化面の両脇にはPit 9・10が位置しており、主柱穴と関連するピットと考えられる。炉跡の前庭部直下で硬化面の下から浅い溝状の掘り込みが確認された。長さ88 ㎝、幅10～20 ㎝、深さ8～12 ㎝である。壁溝の堆積土は黒褐色土主体である。この溝が構築時に掘りこまれたものか、炉の作り替え等による痕跡なのかははっきりしなかった。

［堆積土］暗褐色土主体の堆積土で、ローム土が混入する。壁際付近では黄ロームブロックの崩落土が確認された。

［出土遺物］土器片は総数107点、2,889 g出土した。検出面から床面までが浅く、床面直上から大半の遺物が出土した。炉の床面付近では、土圧により潰れた状態の略完形土器が出土している（28- 1）。この土器は口縁部付近では横方向に縄文原体を回転させている。このほかは、地文縄文のみを縦方向に施文した土器片が多い。壁際の堆積土中には炭化材やコハク砕片が出土した。炭化材の樹種はクリと判明した。剥片は、床面から頁岩の微小剥離痕をもつ石器が1点出土し、礫石器は、縁を少し高く作り出した脚付きの石皿が1点出土した。床面直上から出土した破片と、堆積土2層から出土した破片が接合したものである。このほか出土したものは円盤状土製品で、28-13は土器胴部断片を利用し、単節LR縦方向の縄文を施す。

［時期］出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代中期末～後期初頭である。

第３３号竪穴住居跡（図10、遺物図29・30、写真6、遺物写真22・23・39）

［位置・確認］ ＡＲ－58・59 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ⅴ層上面で確認した。床面は風倒木痕の上部に作られる。住居跡西側は斜面地下部で住居跡範囲を明瞭に確認できなかった。

［平面形・規模］ 平面形はほぼ円形で、長軸 3.9 m、短軸 3.28 mである。床面積は 10.3 ㎡である。

［壁・床面］ 住居跡の北側から東側、南東側にかけてテラスを有する住居跡である。テラス部分は、住居跡壁に接し、巡るように作られている。長さ 5.88 m、幅約 30 ㎝、底面面積は 1.4 ㎡である。テラス底面はほぼ平坦で、テラス底面から住居壁にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。テラス底面から確認面までの壁高は、東壁で 59 ㎝、北壁で 19 ㎝である。テラス底面から床面までの高さは約 10 ㎝である。床面は全体的に硬化し、貼床は検出されなかった。東側の床面では被熱した範囲が確認された。平面形はほぼ長方形状である。被熱の深さはほとんど確認できないほど浅く、一時的に熱を受けたものと思われる。

［壁溝］ 北側から東側、南東側にかけてほぼ全周する。長さ 5.08 m、幅 16 ～ 40 ㎝、深さ 15 ～ 29 ㎝である。溝の底面にはピット状の掘りこみがほぼ全体で確認された。

［柱穴］ テラスと床面の壁際及びテラス底面でピットを検出した。テラス上ではピット６基を確認した。東側で4 基、南北角に各1 基である。ピットはほぼ長方形で、規模は長軸 16 ～ 26cm、深さ5 ～ 53cm である。主柱穴は不明であるが、壁際のピットが壁柱穴となる。

［炉］ 住居跡の北西側で、石囲炉を検出した。平面形は方形で、規模は長軸 66 ㎝、短軸 52cm、炉石から火床面までの深さ 13cm である。主軸方向はＮ－ 27° －Ｗである。炉石は、20 ㎝前後の扁平な礫を隙間なく隣接させて据えている。床面を数㎝掘り込み礫の下部を据えている。火床面は石で囲った部分全体に及び、被熱の深さは約６㎝である。

［堆積土］ ８層に分層した。堆積土全体に炭化物を含む。１層は黒褐色土主体である。

［出土遺物］ 土器片は総数 321 点、8,490 ｇ、とくに北西側の堆積土中から多く出土した。29- 1 ・3は口縁部が外反する土器である。29- 3は文様帯区画に縄文原体を押圧する。このほか縄文原体を口縁部に用いる 29- 9 ・ 10 がある。粘土紐を用いるものは､29- 4 ・ 6､30- 1 ～ 3 ・ 5 である。29- 4 ・ 6は口縁部に沿って粘土紐を貼り巡らせ、その上部から縄文原体を回転施文する。29-4 は文様帯区画に縄文原体を押圧して用いる。30- 1～3は同一個体で、縦横に粘土紐を貼付けた後、沈線で区画し、その内部を縄文原体で施文する。堆積土から珪質頁岩の掻器1点と剥片１点が出土し、掻器を図示した。掻器は縦長剥片を素材とし、周縁に刃部を形成する。礫石器は、磨製石斧が2 点と石皿が2 点出土した。磨製石斧は､床面と堆積土2 層から出土したもので､いずれも両刃の縦斧である。石皿(30-15)は、北西角の床面から出土し、炉に近接しており、当時ここに置かれた状態であったと思われる。堆積土5 層から出土した石皿は、第５号屋外炉から出土した破片と接合し、そちらに図示した。

［時期］ 堆積土出土土器から本遺構の構築時期は縄文時代後期初頭である。

第３４号竪穴住居跡 (図 11、遺物図 31、写真7、遺物写真 23・39・44)

［位置・確認］ ＢＷ・ＢＸ－ 37 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ⅵ層上面で確認した。調査境界外側に住居跡が延びている。

［平面形・規模］ 平面形は不明だが、残存する形状はほぼ半円形である。残存する長軸 3.1 m、残存する短軸 1.4 mである。残存する床面積は 3.07 ㎡である。

［壁・床面］壁は北東壁の一部のみが残存し、底面からやや広がるように緩やかに立ち上がる。確認面からの壁高は 25cm である。Ⅵ層をそのまま床にしており、床面はほぼ平坦である。床面中央付近でとくに硬化した範囲が検出された。ほぼ長方形を呈し、長軸 1 m、短軸 41 ㎝である。

［柱穴］北東壁際からピットが 1 基検出された。調査区境界に接しており、全体は確認できなかった。ピットは長方形もしくは円形で、ピットの規模は残存する長軸 24cm、深さ 64cm である。

［炉］検出されなかった。

［堆積土］10 層に分層した。北東側から南西側にかけて暗褐色の２層土が流れ込んでいるような状況が確認された。

［出土遺物］堆積土中位から 157 点、1,886 g の土器片が出土した。土器は、大部分が地文縄文のみを縦方向に施文する一群で、31-11 は沈線で区画した縄文を磨消す。堆積土中から二次調整のある剥片２点が出土した。すべて珪質頁岩で総重量 58.6 g である。31-16 は縦長剥片の下端とその周縁に刃部を施す。31-17 は背面を周縁から打ち欠いて整形する。土製品類は３点出土した。31-18 は小型土器底部で、ＲＬ縦回転縄文を施文する。31-19 は土製環断片１点の出土である。31-20 は小型土器胴部～底部で、ＬＲ縦回転縄文を施文する。

［時期］堆積土出土土器から本遺構の構築時期は大木 10 式併行期である。

第３５号竪穴住居跡（図 11、遺物図 31、写真7、遺物写真 23・39）

［位置・確認］ＣＢ・ＣＣ－ 38・ 39 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ⅴ層上面で確認した。斜面下にある住居跡南側がやや不明瞭な検出である。

［平面形・規模］平面形はほぼ楕円形で、長軸 2.52 m、短軸 1.8 m である。残存する床面積は 3.3 ㎡である。

［壁・床面］斜面上部の壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの壁高は東側が 16cm、西側が 17cm、北側が 42cm である。Ⅵ層をそのまま床にしており、全体的に堅緻である。床面はほぼ平坦である。

［柱穴］住居跡壁際からピットが３基検出された。東・西・北の壁際で１基ずつ検出し、ピットは径約 20 ㎝、深さ 15 ～ 36 ㎝である。これらは壁柱穴と考えられる。

［炉］住居跡南東側床面で、地床炉を検出した。炉の南側は遺構確認の際に掘り下げたため削平された。平面形は楕円形を呈するものと思われ、残存する長軸 46 ㎝、短軸 42 ㎝、深さ３㎝である。床面を浅く掘り込み、火を焚いている。被熱した深さは３㎝である。

［堆積土］３層に分層した。黒褐色土主体で、自然堆積層と考えられる。

［出土遺物］土器片は 103 点、1,284 g 出土した。すべて地文縄文のみ縦方向に施文される土器である。31-21・22 は容量がほぼ等しい小型深鉢で、21 は波状口縁であり、波頂部に棒状工具で施文される。礫石器は、珪質頁岩の破砕礫が堆積土３層から１点出土した。他に、長方形の大きな加工礫（31-30）が床面から１点出土した。

［時期］堆積土出土土器から本遺構の構築時期は縄文時代中期末～後期初頭である。

第３６号竪穴住居跡（図 12、遺物図 32、写真８、遺物写真 23・39）

［位置・確認］ BV・BW－36 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ⅴ層上面で確認した。斜面下にある住居跡南側がやや不明瞭な検出である。

［平面形・規模］ 平面形は楕円形で、長軸 3.28 m、短軸 2.68 m、床面積は 7.5 ㎡である。

［壁・床面］ 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は、東側で 26cm、西側で 10cm、北側で 40 ㎝である。Ⅴ・Ⅵ層をそのまま床にしており、床面は堅緻である。

［柱穴］ ピット5基を確認した。ピットはほぼ円形で、長軸 18 ～ 36 ㎝、深さ 9 ～ 37 ㎝である。ピットの規模から、Pit 1・2・4は主柱穴の可能性がある。堆積土は黒褐色土主体で、南部浮石粒を混入する。

［炉］ 住居跡南側中央で複式炉が検出された。石組部・前庭部の二部から成り、ほぼ長方形を呈し、全長 1 m、幅 62 ㎝、主軸方向はN－5°－Wである。石組部は浅く掘り込んだ方形の掘り込み中央にさらに径 40 ㎝、深さ 20 ㎝の円形に掘り込む。その内部を礫と粘土で円形に囲み、火を焚いている。全体の長さ一辺 62 ㎝、円形部分の径 40 ㎝、床面から火床面までの深さは 11 ㎝である。礫は、長さ 20 ㎝前後の扁平な礫を燃焼部と前庭部の境界に据えている。粘土は、厚さ 1 ㎝、高さ 10 ㎝、長さ 80 ㎝程の大きさを掘り方壁に貼付けている。礫・粘土とも赤変し、床面にまで及んでいる。火床面の被熱の深さは 12 ㎝である。堆積土は、10 層に分層され、褐色土を主体としている。全体的に焼土粒や炭化物粒が微量混入する。前庭部は、平面形がほぼ方形で、底面は非常に堅緻でやや起伏がある。

［堆積土］ 5層に分層した。黒褐色土主体で、南部浮石粒が多く混入する。

［出土遺物］ Pit 1 周辺の床面上では、赤色顔料が径 10 ㎝程の範囲で検出された（赤色試料№1）。土器片は総数 198 点、3,297 g が出土し、1 層及び床面からの割合が多い。床面からは地文縄文のみを施文した土器(32- 1) が出土した。口縁部の波頂部にボタン状の粘土を貼付けたもの(32-2)、磨消縄文を施すもの(32-7) が出土したほかは、ほとんど縄文原体のみを施文している。堆積土中から剥片 7 点、石錐 1 点、微小剥離痕のある石器 1 点が出土した。すべて珪質頁岩で、重さは 61.3 g である。礫石器は、小型の敲磨器が堆積土 1 層から 1 点出土した。

［時期］ 床面出土遺物から本遺構の構築時期は縄文時代中期末～後期初頭である。

第３７号竪穴住居跡（図 13、遺物図 32、写真 9、遺物写真 24・39）

［位置・確認］ CA・CB－39 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ⅵ層上面で確認した。住居跡北側は調査区域外に延びている。斜面下にある住居跡南側がやや不明瞭な検出である。

［平面形・規模］ 平面形は不明であるが、残存する平面形は半円形で、長軸 2.04 m、残存する短軸 1 m、残存する床面積は 1.4 ㎡である。

［壁・床面］ 壁は北東壁のみ残存する。床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は 22cm である。Ⅵ層をそのまま床にしており、床面は全体に堅緻である。

［柱穴］ ピット 2 基を検出した。Pit 1－ 16 × 14 ㎝、深さ 21 ㎝、Pit 2－径 18 ㎝、深さ 36 ㎝である。

［炉］ 地床炉 1 基が検出された。住居跡中央に位置し、床面を掘りこみ、その内部で火を焚いている。平面形が長方形で、規模が長軸 66 ㎝、短軸 60 ㎝、深さ 7 ㎝、底面には起伏がある。被熱範囲は掘り込み中央に広がり、径 40 ㎝の範囲で広がっている。火床面上部の堆積土中には焼土粒及び炭化物粒を含んでいる。

［堆積土］３層に分層した。黒褐色土主体の土が堆積しており、床面直上で遺物が多く出土している。
［出土遺物］土器片は 15 点、212 ｇが出土した。出土した土器はすべて地文縄文のみを施文している。礫石器は、破損した石皿が床面から1点出土した。
［時期］床面出土遺物から本遺構の構築時期は縄文時代中期末～後期初頭である。

第３８号竪穴住居跡（図 13、遺物図 33、写真 9、遺物写真 24・39）
［位置・確認］ＣＡ－ 38・39 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ⅵ層上面で確認した。住居跡北側は調査区域外に延びている。斜面下にある住居跡南壁がやや不明瞭な検出である。
［平面形・規模］平面形は不明であるが、残存する平面形は半円形である。長軸 4.1 m、残存する短軸 1.56 mである。残存する床面積は 4.4 ㎡である。
［壁・床面］壁は東壁のみ残存する。確認面からの壁高は 44cm である。Ⅵ層をそのまま床にしており、床面は全体に堅緻である。
［柱穴］住居跡壁際からピットが近接して３基検出された。Pit １－ 26 × 24 ㎝、深さ 14 ㎝、Pit ２－径 20 ㎝、深さ 36 ㎝、Pit ３－ 16 × 14 ㎝、深さ 14 ㎝である。ピットの堆積土は褐色土が主体である。
［炉］残存する住居跡中央から地床炉の一部が検出された。規模は長軸 68 ㎝、残存する短軸 14 ㎝、被熱の深さは7㎝である。この地床炉と住居壁の中間でも床面に被熱した痕跡が検出された。長軸 16 ㎝、短軸 14 ㎝、被熱の深さはごく浅い。この被熱範囲は、一時的に火が焚かれたものと考えられる。
［堆積土］10 層に分層した。北東側の壁際には黒褐色土が堆積しており、自然流入したと思われる。この上部には、１・２層の黄褐色土主体の土が堆積している。黒褐色土の流入後、北東方向から南西方向に向かって流れ込んでいるような堆積状況で、埋め戻されたと思われる。
［出土遺物］遺物は住居跡外から多く出土し、住居跡内の埋め戻された黄褐色土からはほとんど出土しなかった。北東方向から南西方向に向かって流れ込んでいる黒褐色土から多くの遺物が出土している。土器は 152 点、3,082 ｇ出土した。折り返し口縁（33- ５・６・８）や口縁部に粘土を貼付けて厚みを持たせるもの（33- 7）などがある。33- 5は胴部に単軸絡条体を施文する。磨消縄文である 33-９のほかは、ほとんどが縄文原体を縦方向に施文する一群である。剥片が堆積土中から1点、床面直上から１点出土した。いずれも珪質頁岩で、重さは２ｇである。礫石器は、敲磨器が2点、石皿が2点、剥離痕のある頁岩の破砕礫が1点、堆積土２・３層から出土した。石皿はいずれも破損品だが、１点は脚部を作り出したものである。他に、長い板状の加工礫が堆積土3層から１点出土した。
［時期］床面直上出土土器から本遺構の構築時期は、縄文時代中期末～後期初頭と考えられる。（坂本）

第３９号竪穴住居跡（図 14・15、遺物図 34、写真 10・11、遺物写真 24・44）
［位置・確認］ＡＨ－ 63・64 グリッドに位置し、緩斜面地に立地する。Ⅱ層上面で確認した。住居跡南西側は第 40 号竪穴住居跡構築時に破壊されており、明瞭に確認できなかった。斜面下にある住居跡南壁がやや不明瞭な検出である。
［平面形・規模］重複のため全体は不明であるが、残存する平面形は半円形である。長軸 3.98 m、残存する短軸 1.94 mである。残存する床面積は 5.32 ㎡である。
［壁・床面］壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は、東側で 27cm、南側で 8cm、

北側で47㎝である。Ⅲ層をそのまま床にしており、貼床は見られない。床面は堅緻である。

［柱穴］ピット8基を検出した。このうち、ピットの長軸は14～38㎝、短軸は14～30㎝、深さ13～65㎝である。ピットの堆積土は黒褐色土主体である。

［炉］残存する住居跡中央から石組炉の一部が検出された。規模は残存する長軸48cm、短軸40cm、残存する石組部は直径64㎝のほぼ円形で、最大34cm、最小4cmの炉石を用いている。火床面は長軸42cm、短軸34cm、被熱の深さは6㎝である。

［堆積土］3層に分層し、確認面から床面にかけては黒褐色土主体で、南部浮石粒の混入が見られる。

［出土遺物］2層を中心に257点3,720ｇの土器片が出土した。縄文土器が大半を占めるが、34-9のように弥生土器も一部混入する。34-10は口縁部と胴部の文様帯区画に粘土紐を貼付け、上部から円形刺突を施す。34-12・19は磨消縄文で、沈線の施文が稚拙である。34-20は遺構外出土の手づくね皿形土器（55-15）と同一個体の可能性が高い。土製品類は2点出土し、34-21は炉内3層から出土した無文壷形のミニチュア土器である。34-22は土器底部を利用し、文様は判別不能であるが、網代痕の可能性がある。

［時期］堆積土出土土器から本遺構の構築時期は大木10式併行期である。

第40号竪穴住居跡（図14・15、遺物図35、写真10・11、遺物写真25・39）

［位置・確認］AG－62・63、AH－63グリッドに位置し、緩斜面地に立地する。第39号竪穴住居跡の南西側を破壊して構築されている。Ⅲ層上面で確認した。住居跡西側は調査区域外に延びている。

［平面形・規模］平面形は不明であるが、残存する平面形は半円形である。長軸4.4ｍ、残存する短軸1.26ｍである。残存する床面積は2.54㎡である。

［壁・床面］壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は、東側で19cm、南側で19cm、北側で15㎝である。Ⅳ層をそのまま床にしており、貼床は見られない。床面は堅緻である。

［壁溝］調査区域内の北側から東側、南側にかけてほぼ全周する。幅10～50㎝、深さ15～48㎝である。溝の底面にはピット状の掘りこみがほぼ全体で確認された。壁溝の堆積土は黒褐色土主体である。

［柱穴］ピット2基を検出した。Pit 1の長軸は60㎝、短軸は52㎝、深さ44㎝である。Pit2は壁溝底面に位置し、長軸は28㎝、短軸は18㎝、住居床面からの深さ52㎝である。ピットの堆積土は黒褐色土主体である。

［炉］検出されなかった。

［堆積土］6層に分層した。確認面から床面にかけて黒褐色土主体で、南部浮石粒の混入が見られる。

［出土遺物］遺構内2層を中心に99点、1,517ｇの土器片が出土した。2層から出土した土器が最も多い。弥生土器は、35-10・11は甕の口縁部、22は甕の胴部、35-5・23・24は壷形土器の一部が出土した。このほかは、縄文時代中期末～後期初頭の縄文土器である。

［時期］堆積土出土土器から本遺構の構築時期は弥生時代である。（宮嶋）

第41号竪穴住居跡（図16、遺物図36、写真12、遺物写真25・39）

［位置・確認］AH・AI－62・63グリッドに位置し、沢際の緩斜面地に立地する。Ⅴ層上面で確認した。斜面下にある住居跡南側がやや不明瞭な検出である。

［平面形・規模］平面形は不明だが、残存する平面形はほぼ半円形で、長軸 4.38 m、残存する短軸 1.48 m、残存する床面積は 3.2 ㎡である。

［壁・床面］壁は床面から緩やかに立ち上がる。床面から確認面までの壁高は東壁で 12 ㎝、西壁で8 ㎝、北壁で 27 ㎝である。Ⅴ層を床面とし、床面は全体的にやや起伏がある。

［柱穴］検出されなかった。

［炉］住居跡壁際から 2.8 m南側で地床炉を検出した。風倒木痕の上部に火床面が形成されており、周辺にはロームブロックの範囲が広がる。火床面の平面形は、ほぼ円形で、長軸 68 ㎝、短軸43 ㎝、被熱の深さは 16 ㎝程である。火床面やその内部は植物による撹乱を受けているため、起伏が非常に大きい。

［堆積土］３層に分層した。確認面から床面にかけては黒褐色土主体である。

［出土遺物］遺物が比較的多く出土した沢際と住居跡の範囲が重なっているため、多くを遺構外の土器として取り上げた。土器片全体では 183 点・2,626 g出土し、１層からのものが最も多い。床面から石鏃1点、石匙1点、出土層位不明な剥片1点が出土した。いずれも珪質頁岩で、重さは 31.3 gである。礫石器は、敲磨器が3点と破損した石皿が1点出土した。敲磨器のうち1点は床面から、他の3点は堆積土1層から出土したものである。

［時期］床面出土遺物から、本遺構の構築時期は、縄文時代中期末～後期初頭である。

第４２号竪穴住居跡（図 16、遺物図 37、写真 13、遺物写真 25・39）

［位置と確認］ＡＲ－ 64 ～ 66 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ⅵ層上面で確認した。斜面下にある住居跡西側がやや不明瞭な検出である。

［平面形・規模］平面形は不明だが、ほぼ楕円形になると推定される。長軸 5.3 m、短軸 2.26 mである。残存する床面積は 9.61 ㎡である。

［壁・床面］壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの壁高は東側が 43 ㎝、南側が 28cm である。Ⅵ層をそのまま床にしており、床面はほぼ平坦である。Pit 1から Pit 7・Pit15 との間に長さ約 3.5 m程の浅い段状の掘り込みが確認された。段の高さは数㎝である。

［壁溝］北～東、東～東南にかけて壁溝が確認された。幅 10 ～ 22 ㎝、深さ５～ 40 ㎝である。東側の壁溝が途切れる部分は、ピット状に深く掘りこまれている。

［柱穴］住居跡床面からピットが 16 基検出された。壁際から３基、床面中央付近のテラス状段差に沿って８基、住居跡の北西側から２基、南西側から３基の出土である。主柱穴は Pit １・７・９・10・13 の５本と考えられる。

［炉］検出されなかった。

［堆積土］黒色土主体で6層に分層した。層全体に黄褐色の浮石粒・ローム粒を混入する。

［出土遺物］土器片は5点、57 g出土した。すべて地文縄文のみの施文で、縄文原体を縦方向に施文している。37- １・２は内外面とも良く磨かれる。礫石器は、磨製石斧が床面から1点出土した。両刃の偏減りした縦斧で、刃部には刃こぼれ状の剥離痕がみられる。

［時期］堆積土出土土器から本遺構の構築時期は大木 10 式併行期である。

第４３号竪穴住居跡　欠番とする。

第４４号竪穴住居跡（図 17、遺物図 37、写真 14、遺物写真 26・39）

［位置・確認］ＣＣ・ＣＤ－ 38 グリッドに位置し、急な斜面地に立地する。Ｖ層上面で確認した。住居跡南側の一部は調査区域外にあり、詳細は不明である。住居跡東側は風倒木痕の上部に構築されている。

［平面形・規模］平面形はほぼ隅丸方形で、長軸 2.52 m、残存する短軸 2.4 m、残存する床面積は 4.67 ㎡である。

［壁・床面］斜面上部の壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの壁高は東壁 16cm、西壁 22 ㎝、北壁が 31 ㎝である。Ｖ層をそのまま床にしており、床面は全体に堅緻である。

［柱穴］検出されなかった。

［炉］住居跡南側床面で、複式炉を検出した。石組部・前庭部の二部から成ると考えられる。残存する全長 56 ㎝、幅 44 ㎝、床面から火床面までの深さ８㎝である。主軸方向は、Ｎ－９°－Ｗである。石組部は一辺が 40 ～ 45cm の方形である。構築方法は、方形状に掘り込んだ後、その壁際をさらに数 cm掘り込み、長軸 30 ㎝の大型板状礫を据える。その後、大型炉石と大型炉石の隙間には小型礫を据える。炉石はとくに赤変していないが、石組内では火床面が検出された。底面は数cm被熱している。被熱範囲は掘りこみ内に一辺 28 ㎝の方形に広がっている。堆積土には焼土粒や炭化物粒が微量混入する。前庭部は、全体を検出出来なかったが、石組部に接しており、床面とほぼ同じ高さで検出された。底面はとくに堅緻である。

［堆積土］黒褐色土主体で、６層に分層した。南部浮石粒が全体に混入する。

［出土遺物］出土した土器片は 87 点 2,198 ｇで、床面から完形の土器が２点出土した。37- 6は口縁部に円形刺突を施す。横長の楕円形状モチーフが描かれる磨消縄文である。口縁部はやや肥厚し、波頂部口端から内面にかけて粘土を厚く使用し楕円形状の文様を施す。37- 5は胴部中央に最大径がくる器形で、口縁はわずかに外反する。37- 7の下部は沈線のようにみえるが、口縁部にやや厚めに粘土が貼付けられているため段差がみられるものである。37- 8・10 は縦方向の縄文施文、37- 9は羽状縄文である。礫石器は、棒状の加工礫が炉跡から１点出土した。炉石として使われたものだが、炉石としては小さめの破損礫である。

［時期］床面出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代中期末大木 10 式併行期である。

第４５号竪穴住居跡（図 18 ～ 20、遺物図 38 ～ 45、写真 15・16、遺物写真 26 ～ 28・40・44）

［位置・確認］ＡＩ・ＡＪ・ＡＫ－ 65・66 グリッドに位置し、緩斜面地に立地する。遺構確認前の当初、円形状に遺物が密集して出土したため遺構の存在が推測され、Ⅲ層中から確認することができた。確実に検出できたのはＶ層上面である。

［平面形・規模］平面形は隅丸方形で、長軸 6.42 m、短軸 4.50 m、床面積は 19.23 ㎡である。

［壁・床面］壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は、東側で 11 ㎝、北側で 35cm、西側で 24 ㎝である。Ｖ層をそのまま床にしており、床面はほぼ平坦で、堅緻である。貼床は確認されなかった。

［壁溝］南側を除いてほぼ検出された。北側及び北東側では一部途切れる。幅 12～48 ㎝、深さ7～27 ㎝で、壁溝内ではピット状掘り込みが検出され、最深 45 ㎝である。

［柱穴］ピット 32 基、壁際で小ピット８基を検出した。ピット数が多数検出されており、数時期の建替え等が推測される。主柱穴となるのは Pit １・５・８・18 の４本と考えられる。これらはいずれも炉１を中心として台形状の配置を成す。主柱穴の掘り方は、Pit ８以外円形で、Pit １－径 36 ㎝、深さ 51 ㎝、Pit ５－ 52×46 ㎝、深さ 68 ㎝、Pit ８－ 1.12 m× 56 ㎝、深さ 78 ㎝、Pit18 －径 42 ㎝、深さ 55 ㎝である。Pit ８は長楕円形の平面形状を呈しており、柱抜き取り痕と思われる。壁溝に接したピットは壁柱穴の役割をもつものと考えられ、Pit ２・３・４がこれに該当すると考えられる。比較的規模が小さく浅いものを除くと、炉の周囲には Pit ６・12・16・19・20・29 が主柱穴となる規模を有し、Pit ６・16・19・29 が、炉１を中心とするとほぼ正方形状の配置を成す。この配置は炉２に近接しているため、台形状配置の前段階で構築されたものと考えられる。これらの主柱穴は壁溝脇及び壁溝内の壁柱穴と上屋を支える構造になっていると考えられる。検出されたピット堆積土は主として黒色土が主体である。

［炉］住居跡中央部（炉１）及び住居跡南側中央部（炉２）で炉が検出された。炉１と炉２は近接し、その間隔は 60 ㎝程である。炉１は石組炉で、炉２は地床炉である。炉１の規模は径 62 ㎝で、ほぼ円形に被熱しており、中央がやや窪む。被熱の深さは４㎝である。床面を掘りこんで炉石を据え、被熱の形状から本来は円形状に石を囲んだものと思われる。炉石は３点残存しており、規模は 16～24 ㎝の角礫で被熱により脆くなっている。炉内の堆積土は黒褐色土を主体としている。炉２の規模は 80 ㎝× 60 ㎝の長方形状で、火床面はやや起伏がある。被熱の深さは６㎝である。

［堆積土］黒褐色土主体で 11 層に分層した。検出面の上部２層中に二次堆積の火山灰が確認された。火山灰範囲は比較的斜面下側で連続的に検出され、斜面上部では、ブロック状に検出された。軽石が濃集する部分とシルト状に濃集する部分に大別される。火山灰層は斜面上部から床面まで黒褐色土主体であるが、住居跡中央部付近の２層は、褐色土主体の堆積土が確認面から床面まで、最大 20 ㎝ほどの厚さで堆積している。これらの火山灰については、第４章第１節の分析の結果、十和田ｂ降下火山灰の成分を有しないことが分かった。しかし、その堆積状況や形状から十和田ｂ降下火山灰として扱うのが妥当と考え、「火山灰」は「十和田ｂ降下火山灰」としたい。

［出土遺物］出土した土器は 1,883 点、28 ㎏である。竪穴住居跡の窪地に遺物が多量に廃棄されていた。出土した土器の６割強に当たる。縄文土器・弥生土器が混在するが、とくに、弥生時代４期の長頸甕、小型甕、高坏、弥生時代５期（中期後葉）と考えられる粗雑な作りの甕など復元可能なものも含めてまとまって出土した。弥生時代４期のものは 38- 1～7で、平行沈線や山形沈線を多用し、列天文を施文し、地文縄文はＲＬ縄文を縦走させる一群である。火山灰直下の６層からはＬＲ縄文を施文する壺・小型甕・甕が出土した。器形から弥生時代２期のものと考えられる。縄文時代の土器は中期後半から後期にかけて時期のもので、火山灰下層・上層から出土した。剥片石器は 23 点出土した。火山灰上層から 16 点、火山灰層中から１点、火山灰下層から５点、堆積土中から１点の出土である。石鏃１点、石錐１点、削器１点、微小剥離痕２点、両極加撃痕１点、剥片 17 点ある。石英 0.5 ｇ、珪質頁岩 168.3 ｇで、総重量 168.8 ｇである。礫石器は、磨製石斧の小破片が１点と敲磨器が４点出土した。敲磨器のうち１点は床面から、他の４点は堆積土（火山灰の上下?）から出土したものである。

この他、板状等の加工礫が床面から1点、堆積土から3点出土した。45-11は無文埴形の略完形小型土器である。

［時期］堆積土出土土器から本遺構の構築時期は弥生時代中期～後期である。

第46号竪穴住居跡（図21、遺物図46、写真17、遺物写真29・44）

［位置・確認］AG・AH－65・66グリッドに位置し、緩斜面地に立地する。V層上面で確認した。斜面下にある住居跡南側がやや不明瞭な検出である。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、長軸5.54 m、残存する短軸1.46 m、床面積は5.4 ㎡である。

［壁・床面］斜面上部の北壁は床面から緩やかに立ち上がる。確認面からの壁高は東側が9㎝、西側が14cm、北側が48cmである。V層をそのまま床にしており、床面は全体に堅緻である。

［柱穴］ピットが7基検出された。ピットの平面形は円形で、規模は長軸12～28㎝、深さ13～47㎝である。堆積土はいずれも黒褐色土主体である。これらは1基を除くと壁際に位置しており、壁柱穴と考えられる。

［炉］住居跡中央床面から地床炉を検出した。一辺26㎝の方形で、被熱の深さは7㎝程である。火床面は床面に直接火を焚いて形成されている。

［堆積土］黒褐色土主体で4層に分層した。確認面から床面にかけて南部浮石粒が微量混入する。

［出土遺物］住居跡中央の壁際から地床炉にかけての床面で、ほぼ完形の甕形土器2点と底部を欠く鉢1点が出土した。甕形土器はいずれも長頸甕だが、若干、器形等が異なる。46-1の口縁部器形はやや外側に開くもののほぼ垂直である。46-2の口縁部器形は外側に開き、五波状となる。口縁部は46-1が無文、46-2は口端付近の口縁部に縄文原体を施文し、肩部と接する口縁では無文である。肩部から底部にかけてはいずれも地文縄文を施文する。46-3は口縁部が大きく外反する器形で、胴部は縄文原体を施文する。このほか堆積土中からは後期から晩期にかけての縄文土器が出土した。剥片は、1点出土した。珪質頁岩で、重さ3.4 gである。46-20は高杯の脚部と思われる。胴部三方に幅広のカニバサミ形にとった沈線による枠内にLR横縄文を施文する。施文部には赤色顔料による彩色が見られる。

［時期］床面出土土器から本遺構の構築時期は弥生時代前期末である。

第47号竪穴住居跡（図22、遺物図47、写真18、遺物写真29）

［位置・確認］AH・AI－61・62グリッドに位置し、沢際の緩斜面地に立地する。遺構確認面の上部は遺物が比較的多く出土しており、床面近くのV層上面で確認した。南東側の一部が第40号土坑と隣接している。

［平面形・規模］平面形は円形である。長軸2.68 m、短軸2.54 mである。床面積は㎡である。

［壁・床面］斜面上部の北壁は床面から垂直に立ち上がる。確認面からの壁高は東側が20㎝、西側が24cm、北側が62cmである。Ⅵ層をそのまま床にしており、床面はほぼ平坦である。貼床は検出されなかった。

［柱穴］ピットが5基検出された。すべて壁際で検出されており、壁柱穴と考えられる。Pit 4はピットの堆積土中位に土器片を敷き並べた状態で埋納されていた。

［炉］住居跡中央からやや南東に偏った位置で石囲炉が検出された。平面形は方形で、一辺約40㎝で

ある。住居跡の床面を浅く掘り込み、その周囲に礫を据える穴を掘って炉石を設置する。炉石は最大16 ㎝、最小８㎝の粘板岩を使用する。炉内は底面が被熱しており、28 × 20 ㎝の範囲で被熱している。
［堆積土］黒褐色土主体で３層に分層した。堆積土上部は遺構外出土遺物として取り上げた際に掘り上げたものである。
［出土遺物］土器片は 73 点、2,560 g出土した。47- 1はピット内に土器片を敷き重ねたような状態で出土し、口縁部から胴部下半まで復元された。47- 2は 47- 9と同一個体の可能性がある。47- 3は磨消縄文と思われる。
［時期］ピット内部から出土した土器により、本遺構の構築時期は縄文時代中期末～後期初頭である。

第２節　土坑

土坑は、南区から４基、北区から 12 基の計 16 基検出された。堆積土中に縄文時代中期末～後期初頭の遺物が含まれることが多い。

第２７号土坑（図 23、写真 19）

壁は底面から緩やかに立ち上がっているが、Ⅴ層土を壁としているため崩れやすい。底面はⅥ層土で、ほぼ平坦である。堆積土は３層に分層される。ほとんどが黒褐色土の堆積土である。３層は南部浮石が混入する。遺物は出土しなかった。

第２８号土坑（図 23、遺物図 47、写真 19、遺物写真 30）

壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色土主体で、南部浮石粒を全体に混入する。出土遺物は、土器片が１点・5.4 g出土した。地文縄文のみを施文している。出土遺物から縄文時代と考えられる。

第２９号土坑（図 23、遺物図 47、写真 19、遺物写真 30）

第３１号竪穴住居跡の北側に近接する。断面形が台形で、底面から開口部にかけて内湾する。斜面下側ではほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色土と暗褐色土、南部浮石が混在しており、人為堆積の可能性がある。出土遺物は、堆積土中から土器片が 13 点・189 g出土した。47-13 は磨消縄文である。47-14・15・17・18 は同一個体で地文縄文のみの施文である。47-16 は無文で、輪積み痕が観察される。出土遺物から縄文時代中期末と考えられる。

第３０号土坑（図 23、遺物図 47、写真 19、遺物写真 30）

壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色土主体だが、褐色土や暗黒色土のブロックを含み、人為堆積の可能性がある。出土遺物は、土器片が２点・19.9 g出土した。いずれも地文縄文のみの施文で、口縁部片１点・胴部片１点である。出土遺物から縄文時代中期末～後期初頭と考えられる。

第３１号土坑（図 23、遺物図 47、写真 19、遺物写真 30）

壁は底面から垂直に立ち上がり、断面形状は円筒形である。底面は平坦である。堆積土は、８層に分層され、壁際は褐色土を多く含む堆積土で、上部は黒褐色土主体である。堆積土中位から下位にかけて長軸 20 ㎝程の自然礫が出土した。このほか地文縄文のみを施文した土器片が1点、16.2 g出土した。遺構の時期は土器片から、縄文時代中期末～後期初頭と思われる。

第３２号土坑（図 23、写真 19）

斜面上部の壁は底面からやや内湾して立ち上がり、中位から開口部にかけて開くように立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。堆積土は黒褐色土主体で南部浮石粒が混入し、自然堆積の様相である。遺物は出土しなかった。

第３３号土坑（図 23、遺物図 47、写真 19、遺物写真 30）

第 45 号竪穴住居跡の北側に近接する土坑である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は起伏がある。堆積土は黒褐色土主体で、壁際と一部底面に崩落した壁土の崩落土が堆積する。出土遺物は、土器片が8点出土した。いずれも縦位に回転した縄文で施文している。出土遺物から、縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。

第３４号土坑（図 23、写真 19）

急な斜面地に立地する土坑である。壁は底面から開くように立ち上がり、断面形は三角形状である。底面はⅤ層土であり、起伏が大きい。堆積土は黒褐色土の単層で、南部浮石粒を混入する。遺物は出土しなかった。

第３５号土坑（図 24、遺物図 47、写真 20、遺物写真 30）

壁は底面からやや内側に向かって真っ直ぐ立ち上がる。底面は平坦である。堆積土はほぼ黒褐色土主体であるが、上部に黄褐色土のブロックが堆積する。出土遺物は、土器片が4点・34.2 g出土した。47-32 は磨消縄文である。このほかは地文縄文のみの施文である。出土遺物から縄文時代中期末～後期初頭と考えられる。

第３６号土坑（図 24、写真 20）

壁は底面から垂直に、中位から開口部にかけて開くように立ち上がる。断面形状は漏斗状である。壁はⅤ層土を主体としているため崩れやすい。底面はⅥ層土で、やや起伏がある。堆積土は、黒褐色土主体で、３層に分層される。壁際の２・３層は黒褐色土と南部浮石が互層になっており壁の崩落土が堆積し、１層はレンズ状の堆積状態であり、自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

第３７号土坑（図 24、遺物図 47、写真 20、遺物写真 30）

壁は底面からやや内湾して立ち上がり、底面にはやや起伏がある。壁はⅤ層土であるため、崩れやすい。堆積土は黒褐色土主体で3層に分層される。出土遺物は、土器片が7点・56 g出土した。出土

遺物は、地文縄文のみの施文である。出土遺物から縄文時代と考えられる。

第３８号土坑（図 24、遺物図 47、写真 20、遺物写真 30）

壁は底面から緩やかに立ち上がり、断面形状は皿状である。底面にはやや起伏がある。堆積土は黒褐色土が主体でレンズ状の堆積を呈し、自然堆積と考えられる。出土遺物は、土器片が2点・39 g出土した。地文縄文のみの施文であり、縄文時代と考えられる。

第３９号土坑（図 24、写真 20）

壁は、底面から内側に向かって直線的に立ち上がり、断面形状はフラスコ形を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土上部は暗褐色土主体の堆積土、下部は黒褐色土主体の堆積土である。遺物は出土しなかった。

第４０号土坑（図 24、写真 20）

第 47 号竪穴住居跡の東側に接しているが新旧関係は不明である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形状は円筒形である。底面は平坦である。堆積土は黒褐色土主体の堆積土で、堆積土下部は黒褐色土と黄褐色土が互層になってレンズ状に堆積する。遺物は出土しなかった。

第４１号土坑（図 24、写真 20）

上部が削平されたごく浅い土坑で、底面にはやや起伏がある。堆積土は黒褐色土主体の単層である。遺物は出土しなかった。

第４２号土坑（図 24、写真 20）

断面形状が漏斗状の土坑で、壁は底面から上位にかけてほぼ垂直に、開口部付近は開くように立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色土主体で、３層に分けられる。遺物は出土しなかった。

番号	地区	グリッド	検出面	規模（cm）			（cm）	時期
				平面形	検出面	底面	深さ	
27	北	AR-57	Ⅴ	円	214 × 208	170 × 156	79	時期不明、縄文時代？
28	南	CB-37	Ⅴ	円	94 × 86	78 × 70	28	縄文時代中期～後期
29	北	AS・AT-60・61	Ⅵ	円	110 × 106	120 × 116	48	縄文時代中期末
30	南	BY・CA-37・38	Ⅵ	円	98 × 86	90 × 74	40	縄文時代中期～後期
31	南	BV-35	Ⅵ	円	108 × 100	86 × 82	115	縄文時代中期～後期
32	南	BV-36	Ⅵ	円	112 × 88	84 × 76	49	時期不明、縄文時代？
33	北	AJ-66	Ⅵ	円	142 × 136	118 × 114	48	縄文時代中期～後期
34	北	AP-61・62	Ⅵ	円	176 × 170	106 × 78	100	時期不明、縄文時代？
35	北	AG-66・67	Ⅵ	円	172 × 168	180 × 176	50	縄文時代中期末
36	北	AI-67・68	Ⅵ	円	194 × 164	118 × 108	114	時期不明、縄文時代？
37	北	AH-65	Ⅵ	円	76 × 68	66 × 52	61	縄文時代中期～後期
38	北	AP-58	Ⅵ	楕円	166 × 126	58 × 52	95	縄文時代中期～後期
39	北	AS-61・62	Ⅴ	円	126 × 116	150 × 148	71	時期不明、縄文時代？
40	北	AI-61	Ⅴ	円	138 × 88	110 × 54	108	時期不明、縄文時代？
41	北	AT-57・58	Ⅴ	楕円	122 × 92	112 × 82	39	時期不明、縄文時代？
42	北	AC・AD-84・85	Ⅴ	円	122 × 110	66 × 62	70	時期不明、縄文時代？

第３節　その他の遺構

１　焼土遺構

第２号焼土遺構（図 25、写真 21）

ＢＸ３７グリッドの斜面地、Ⅳ層上面で検出した。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸 64 ㎝、短軸 33 ㎝である。Ⅳ層上面は被熱により赤く変色し、中央部分がやや窪む。被熱の深さは約５㎝である。遺物は１点出土した。

第３号焼土遺構（図 25、写真 21）

ＡＩ -61 グリッドの緩斜面地、Ⅳ層上面で検出した。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸 80 ㎝、短軸 42 ㎝である。Ⅳ層上面は被熱により赤く変色し、被熱の深さは約６㎝である。堆積土は褐色土を主体としている。遺物は出土しなかった。

２　屋外炉

第５号屋外炉（図 25、遺物図 48、写真 21、遺物写真 40）

ＡＯ・ＡＰ -58 グリッドの斜面地、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形で規模は長軸 48 ㎝、残存する短軸 11 ㎝である。炉石は西側半分のみの検出である。火床面は中央部に拡がり、長軸 37 ㎝、短軸 26 ㎝のほぼ楕円形である。被熱の深さは６㎝である。炉石は板状の礫を石の形状に合わせて掘り込み、据えている。自然礫のほか、割れた石皿の破片２点を使用している。１点はＳＩ 33 の堆積土５層から出土した破片と接合したものである。このことから、屋外炉が構築された時期には、第 33 号竪穴住居跡は廃絶されており、第 33 号竪穴住居跡よりは新しい時期のものである。

３　土器埋設遺構

第３号土器埋設遺構（図 25、遺物図 48、写真 21、遺物写真 30）

ＢＹ-36 グリッドの斜面地、Ⅲ層上面で検出した。口縁部から底部までの土器が正位に埋設される。斜面地であるためかやや斜面下に傾く。口縁部径 28 ㎝、深さ 22 ㎝である。掘り方は、土器よりも２・３㎝大きく掘りこんでいる。堆積土は黒褐色土主体である。土器は、１個体全体で 110 点、1,768 ｇ出土した。地文縄文のみの施文で、胴部中央に最大径がある。

第４号土器埋設遺構　欠番

第５号土器埋設遺構（図 25、遺物図 48、写真 21、遺物写真 30）

ＣＣ-40 グリッドの斜面地、Ⅵ層上面で検出した。胴部の土器が正位に埋設され、径 32 ㎝、高さ 18 ㎝である。土器内部は長軸 30 ㎝、短軸 15 ㎝の焼土範囲が広がり、土器周辺にも 10 ～ 20 ㎝の範囲で広がる。ほぼ土器の形状に合わせて土を掘りこみ、掘り方は確認できなかった。土器下部の堆積土は暗褐色土主体である。遺構確認面で自然礫２点が出土した。土器は口縁部及び底部を欠き、胴部中央のみが残存する。地文縄文のみの施文であり、輪積み痕が観察される。本遺構は焼土を伴っており、土器埋設炉の可能性が高い。周辺で柱穴等が確認できなかったため、土器埋設遺構として扱った。

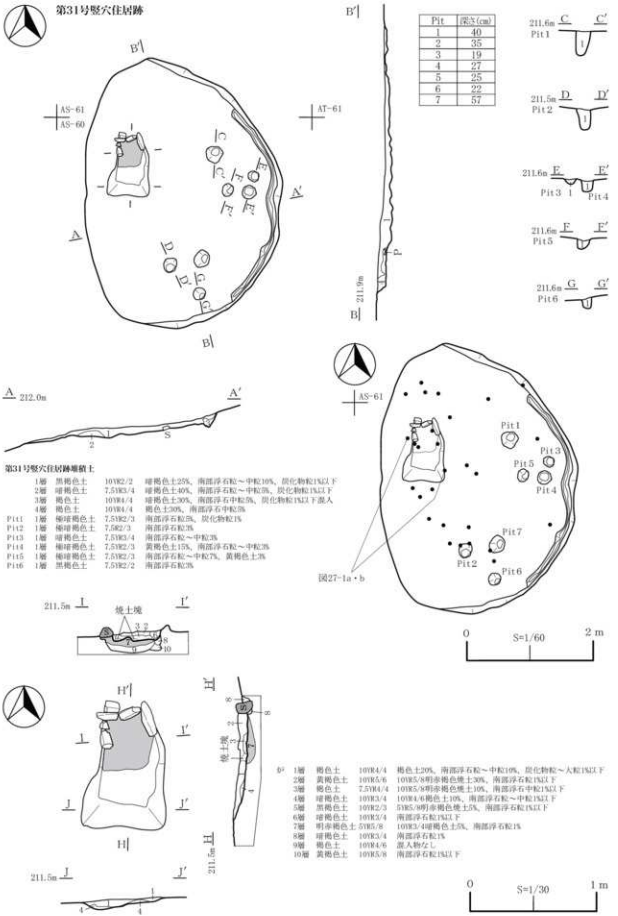
杭列（図 26）

北区の沢斜面から沢底にかけての標高 201 ｍＡＪ・ＡＫ-60 グリッドで、Ⅰ層直下から近代と思われる杭列を三列検出した。杭は下端部分を鋭く尖らせている。

杭列１は長さ 2.07 ｍ、幅 30 ㎝、高さ 45 ㎝程で、板材と丸木材の尖端を尖らせ、沢底に打ち込んでいる。板材と丸木材は交互に隙間なく打ち込まれており、深さは 15 ～ 30 ㎝に及ぶ。板材と丸木材の上端部には横にされた丸木材が置かれている。沢の斜面際に平行に設置されていることから土留めの役割を果たしたものと思われる。

杭列２は杭列１の南側に位置し、常に水の流れが絶えない沢底である。沢の基盤である礫層の欠如する部分に半円状に打ち込まれた杭とここから 30 ～ 40 ㎝離れた部分に打ち込まれた杭から構成される。半円状の杭列は径約 60 ㎝で、10 ～ 20 ㎝の間隔で丸木杭が打ち込まれる。沢の流れに沿って設置されることから、水に漬けたものを固定させたり、上流から流れたゴミなどの進入を防ぐ役割を果たしたものと思われる。

杭列３は水の流れに沿って約 60 ～１ｍ間隔で杭が打ち込まれている。すべて丸木杭である。これらの杭も水の流れに沿っていることから導水などに関わる杭列と思われる。（坂本）



Pit	深さ(cm)
1	40
2	35
3	19
4	27
5	25
6	22
7	57

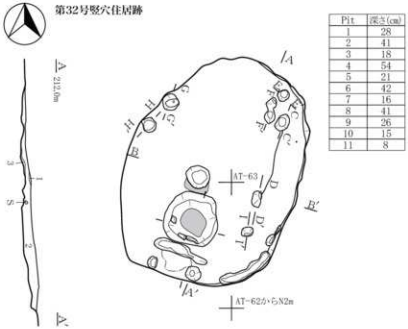
第31号竪穴住居跡堆積土

	1層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土25%、南部浮石粒～中粒10%、炭化物粒1%以下
	2層	暗褐色土	7.5YR3/4	暗褐色土40%、南部浮石粒～中粒3%、炭化物粒1%以下
	3層	褐色土	10YR4/4	暗褐色土30%、南部浮石中粒5%、炭化物粒1%以下混入
	4層	褐色土	10YR4/4	褐色土30%、南部浮石中粒3%
P14は	1層	極暗褐色土	7.5YR2/3	南部浮石粒3%、炭化物粒1%
P14は	2層	極暗褐色土	7.5R2/3	南部浮石粒3%
P14は	1層	暗褐色土	7.5YR3/4	南部浮石粒～中粒3%
P14は	2層	極暗褐色土	7.5YR2/3	黄褐色土15%、南部浮石粒～中粒3%
P14は	1層	極暗褐色土	7.5YR2/3	南部浮石粒～中粒7%、黄褐色土3%
P14は	2層	黒褐色土	7.5YR2/2	南部浮石粒3%

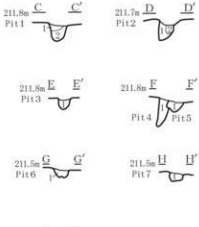
6ﾍﾞ	1層	褐色土	10YR4/4	褐色土20%、南部浮石粒～中粒10%、炭化物粒～大粒1%以下
	2層	黄褐色土	10YR5/6	10YR5/8明赤褐色土30%、南部浮石粒1%以下
	3層	褐色土	7.5YR4/4	10YR5/8明赤褐色土10%、南部浮石中粒1%以下
	4層	暗褐色土	10YR3/4	10YR4/6褐色土10%、南部浮石粒～中粒1%以下
	5層	黒褐色土	10YR2/3	5YR5/8明赤褐色土5%、南部浮石粒1%以下
	6層	暗褐色土	10YR3/4	南部浮石粒1%以下
	7層	明赤褐色土	5YR5/8	10YR3/4暗褐色土5%、南部浮石粒1%
	8層	暗褐色土	10YR3/4	南部浮石粒1%
	9層	褐色土	10YR4/6	混入物なし
	10層	黄褐色土	10YR5/8	南部浮石粒1%以下

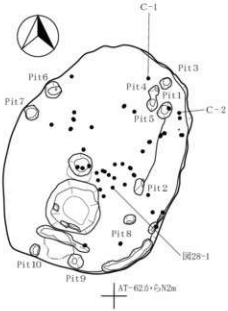
図8　第31号竪穴住居跡

第32号竪穴住居跡



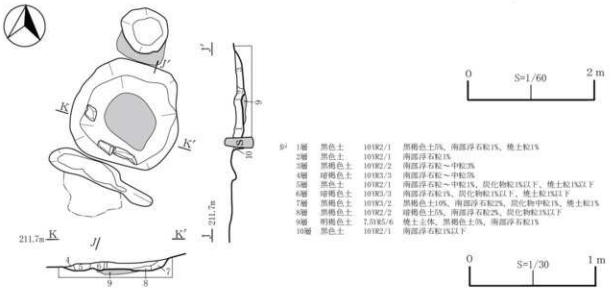
Pit	深さ(cm)
1	28
2	41
3	18
4	54
5	21
6	42
7	16
8	41
9	26
10	15
11	8





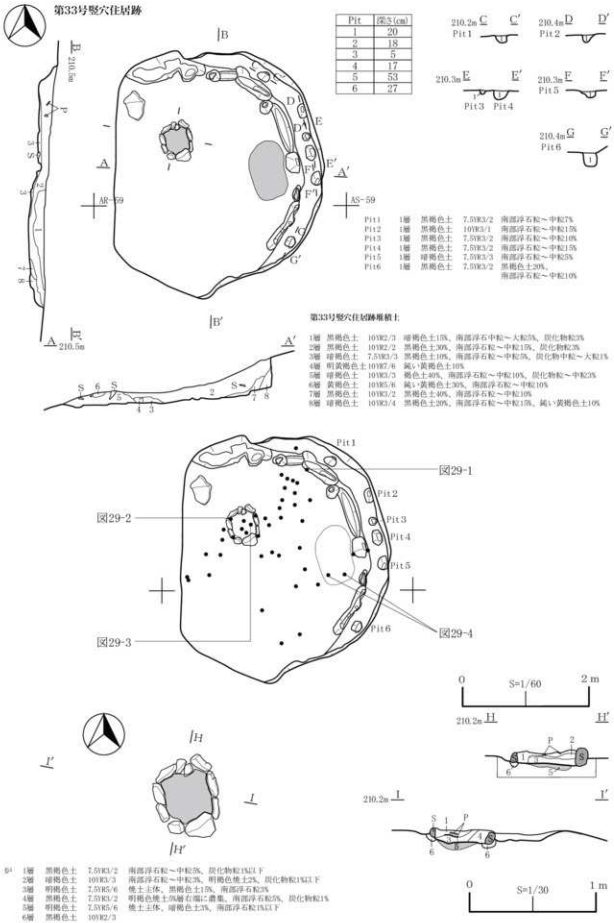
第32号竪穴住居跡堆積土

	1層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒15%、炭化物中粒3%以下
	2層	暗褐色土	10YR3/3	黄褐色土20%、南部浮石粒～中粒5%、炭化物粒～中粒1%
	3層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土20%、南部浮石粒2%、炭化物粒～中粒2%以下
	4層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒3%以下
	5層	明褐色土	7.5YR5/6	南部浮石粒15%
	6層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒3%、炭化物粒2%
Pit1	1層	黒褐色土	10YR2/2	黒色土5%、褐色土粒2%斑状、南部浮石粒～中粒1%
	2層	褐色土	10YR4/4	暗褐色土30%、黒褐色土2%、南部浮石粒～中粒1%
Pit2	1層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土5%、南部浮石粒1%
	2層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土5%、南部浮石粒2%
Pit3	1層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土10%、南部浮石粒1%
Pit4	1層	黒色土	10YR2/1	暗褐色土10%、南部浮石粒1%
Pit5	1層	黒褐色土	10YR2/2	褐色土5%、南部浮石粒1%
Pit6	1層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土5%、褐色土2%、南部浮石粒1%以下
Pit7	1層	暗褐色土	10YR3/4	南部浮石粒～中粒10%、黒褐色土2%
Pit8	1層	黒褐色土	10YR3/1	暗褐色土10%、褐色土3%、南部浮石粒～中粒3%



炉	1層	黒色土	10YR2/1	黒褐色土5%、南部浮石粒1%、焼土粒1%
	2層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒1%
	3層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒2%
	4層	暗褐色土	10YR3/3	南部浮石粒～中粒2%
	5層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒2%、炭化物粒1%以下、焼土粒1%以下
	6層	暗褐色土	10YR3/3	南部浮石粒1%、炭化物粒1%以下、焼土粒1%以下
	7層	黒褐色土	10YR2/2	黒褐色土10%、南部浮石粒2%、炭化物中粒1%、焼土粒1%
	8層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土5%、南部浮石粒2%、炭化物粒1%以下
	9層	明褐色土	7.5YR5/6	焼土主体、黒褐色土5%、南部浮石粒1%
	10層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒1%以下

図9　第32号竪穴住居跡



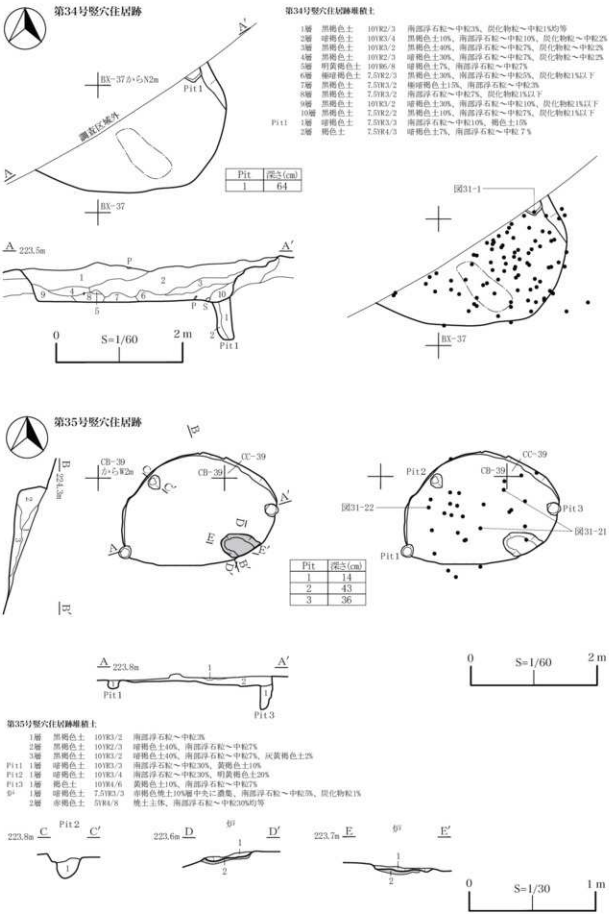
Pit	深さ(cm)
1	20
2	18
3	5
4	17
5	53
6	27

Pit1	1層	黒褐色土	7.5YR3/2	南部浮石粒～中粒7%
Pit2	1層	黒褐色土	10YR3/1	南部浮石粒～中粒15%
Pit3	1層	黒褐色土	7.5YR3/2	南部浮石粒～中粒10%
Pit4	1層	黒褐色土	7.5YR3/2	南部浮石粒～中粒15%
Pit5	1層	暗褐色土	7.5YR3/3	南部浮石粒～中粒5%
Pit6	1層	黒褐色土	7.5YR3/2	黒褐色土20%、南部浮石粒～中粒10%

1層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土15%、南部浮石中粒～大粒5%、炭化物粒3%
2層	黒褐色土	10YR2/2	黒褐色土30%、南部浮石粒～中粒15%、炭化物粒2%
3層	暗褐色土	7.5YR3/3	黒褐色土10%、南部浮石粒～中粒5%、炭化物中粒～大粒1%
4層	明黄褐色土	10YR7/6	褐い黄褐色土10%
5層	暗褐色土	10YR3/3	褐色土40%、南部浮石粒～中粒10%、炭化物粒～中粒3%
6層	黄褐色土	10YR5/6	褐い黄褐色土30%、南部浮石粒～中粒10%
7層	黒褐色土	10YR3/2	黒褐色土40%、南部浮石粒～中粒10%
8層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土20%、南部浮石粒～中粒15%、褐い黄褐色土10%

1層	黒褐色土	7.5YR3/2	南部浮石粒～中粒5%、炭化物粒1%以下
2層	暗褐色土	10YR3/3	南部浮石粒～中粒3%、明褐色焼土2%、炭化物粒1%以下
3層	明褐色土	7.5YR5/6	焼土土体、黒褐色土15%、南部浮石粒3%
4層	黒褐色土	7.5YR3/2	明褐色焼土塊が塊に集集、南部浮石粒5%、炭化物粒1%
5層	明褐色土	7.5YR5/6	焼土土体、暗褐色土3%、南部浮石粒1%以下
6層	黒褐色土	10YR2/3	

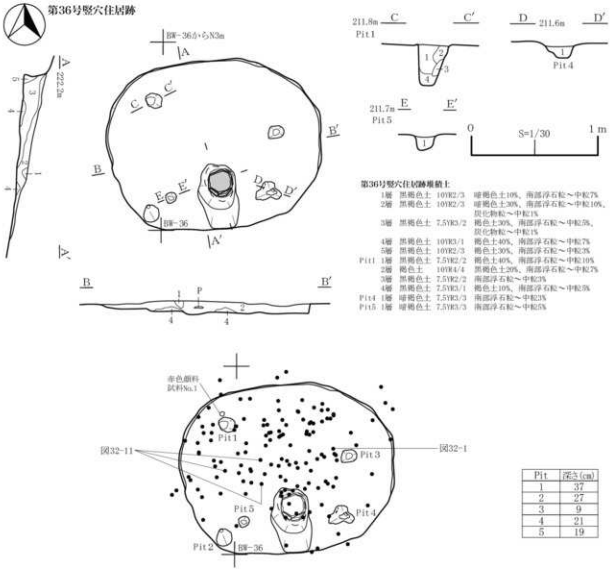
図10　第33号竪穴住居跡



Pit	深さ(cm)
1	64

Pit	深さ(cm)
1	14
2	43
3	36

図11　第34・35号竪穴住居跡



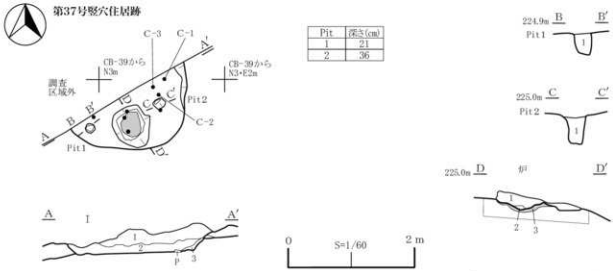
第36号竪穴住居跡堆積土

	1層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土10%、南部浮石粒～中粒7%
	2層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土30%、南部浮石粒～中粒10%、炭化物粒～中粒1%
	3層	黒褐色土	7.5YR3/2	褐色土30%、南部浮石粒～中粒5%、炭化物粒～中粒1%
	4層	黒褐色土	10YR3/1	褐色土40%、南部浮石粒～中粒7%
	5層	黒褐色土	10YR2/3	褐色土30%、南部浮石粒～中粒2%
Pit1	1層	黒褐色土	7.5YR2/2	褐色土40%、南部浮石粒～中粒10%
	2層	褐色土	10YR4/4	黒褐色土20%、南部浮石粒～中粒7%
	3層	黒褐色土	7.5YR2/2	南部浮石粒～中粒3%
	4層	黒褐色土	7.5YR3/1	褐色土10%、南部浮石粒～中粒5%
Pit4	1層	暗褐色土	7.5YR3/3	南部浮石粒～中粒25%
Pit5	1層	暗褐色土	7.5YR3/3	南部浮石粒～中粒5%

Pit	深さ(cm)
1	37
2	27
3	9
4	21
5	19

G'	1層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土20%、南部浮石粒5%、黄い黄褐色土2%
	2層	暗褐色土	7.5YR3/3	黒褐色土20%、暗褐色土5%、南部浮石粒～中粒2%
	3層	黒褐色土	7.5YR3/2	黒褐色土10%、黄い赤褐色粘土5%、南部浮石粒～中粒2%
	4層	褐色土	7.5YR4/2	黒褐色土10%、南部浮石粒～中粒2%
	5層	黄い赤褐色土	5YR4/4	粘土主体、暗褐色土10%、南部浮石粒～中粒3%、炭化物粒1%以下
	6層	明赤褐色土	5YR5/8	粘土主体、南部浮石粒5%、炭化物粒1%
	7層	赤褐色土	5YR4/6	粘土主体、南部浮石粒2%
	8層	黄い赤褐色土	5YR4/4	粘土主体、暗褐色土10%、南部浮石粒1%
	9層	暗褐色土	7.5YR3/3	南部浮石粒1%
	10層	褐色土	7.5YR4/3	南部浮石粒～中粒2%、炭化物粒1%

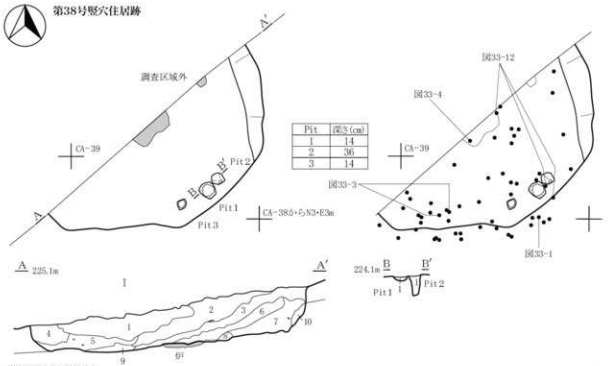
図12　第36号竪穴住居跡



Pit	深さ(cm)
1	21
2	36

第37号竪穴住居跡堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/3	褐色土粒10%混ぜ、暗褐色土5%、南部浮石粒1%
2層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～人粒6%、暗褐色土10%、褐色土1%
3層	暗褐色土	7.5YR3/4	黒褐色土1%、南部浮石粒1%
Pit1 1層	暗褐色土	10YR3/4	褐色土3%、南部浮石粒～中粒1%以下
Pit2 1層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土3%、南部浮石粒1%
炉 1層	黒褐色土	7.5YR2/2	黒褐色土10%、黄褐色土3%、南部浮石粒3%、暗赤褐色焼土3%、炭化物粒1%
2層	暗褐色土	7.5YR3/3	黒褐色土20%、暗赤褐色焼土10%層上部に濃集、南部浮石粒3%
3層	暗赤褐色土	5YR3/3	焼土主体、南部浮石粒3%



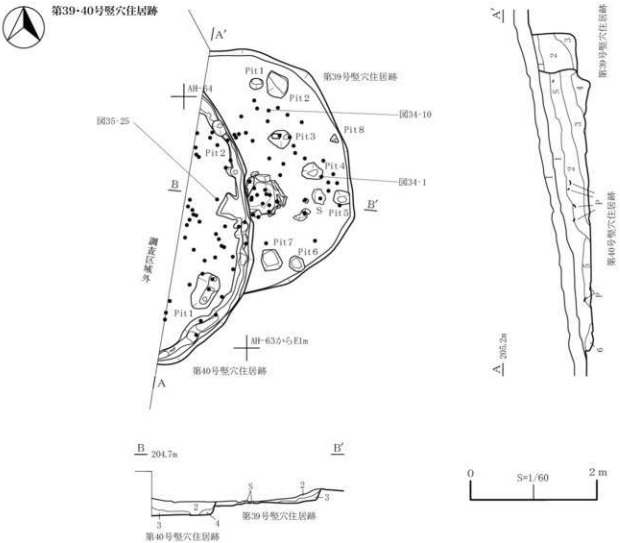
Pit	深さ(cm)
1	14
2	36
3	14

第38号竪穴住居跡堆積土

1層	黄褐色土	10YR5/8	褐色土40%、黒褐色土5%、南部浮石粒～中粒3%
2層	暗褐色土	10YR3/4	褐色土20%、黄褐色土5%、南部浮石粒～中粒3%
3層	褐色土	10YR4/6	暗褐色土10%、黄褐色土3%、南部浮石粒～中粒3%
4層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土20%、南部浮石粒～中粒10%、褐色土5%
5層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土3%、南部浮石粒～中粒1%、黄褐色土1%、炭化物粒1%
6層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土20%、南部浮石粒～中粒7%、黄褐色土5%
7層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土20%、黒褐色土10%、南部浮石粒～中粒2%
8層	暗褐色土	10YR3/4	暗褐色土20%、南部浮石粒1%以下
9層	暗褐色土	10YR3/4	褐色土40%、南部浮石粒1%以下
10層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土5%、褐色土粒3%混ぜ、南部浮石粒3%

Pit1 1層	褐色土	10YR4/6	暗褐色土5%、南部浮石粒3%
Pit2 1層	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土10%、褐色土5%、南部浮石粒5%
炉 1層	暗赤褐色土	5YR3/6	焼土主体、南部浮石粒～中粒5%

図13　第37・38号竪穴住居跡



第39号竪穴住居跡堆積土

1層	黒褐色土	10YR3/2	南部浮石粒～中粒7%、炭化物粒～中粒5%
2層	黒褐色土	10YR2/2	黒褐色土30%、南部浮石粒～中粒7%、炭化物粒～中粒5%
3層	黒褐色土	10YR2/2	褐色土40%、南部浮石粒～中粒15%、炭化物粒～中粒5%

第40号竪穴住居跡堆積土

1層	黒色土	10YR2/1	黒褐色土30%、南部浮石粒～中粒10%、炭化物粒1%以下
2層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土30%、南部浮石粒～中粒5%、炭化物粒～中粒3%
3層	黒褐色土	10YR3/2	暗褐色土20%、南部浮石粒～中粒3%、炭化物粒～中粒3%
4層	黒褐色土	10YR3/1	褐色土30%、南部浮石粒～中粒5%、炭化物粒～中粒3%
5層	黒褐色土	10YR3/2	暗褐色土20%、南部浮石粒～中粒7%、炭化物粒3%
6層	暗褐色土	10YR3/3	黒褐色土30%、南部浮石粒～中粒5%、炭化物粒～中粒3%

図14　第39・40号竪穴住居跡（1）

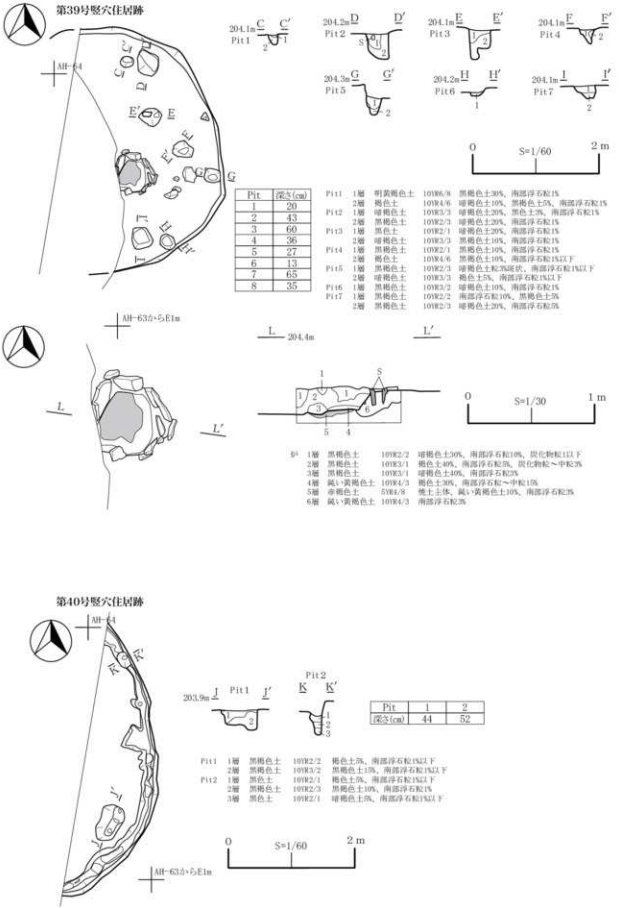
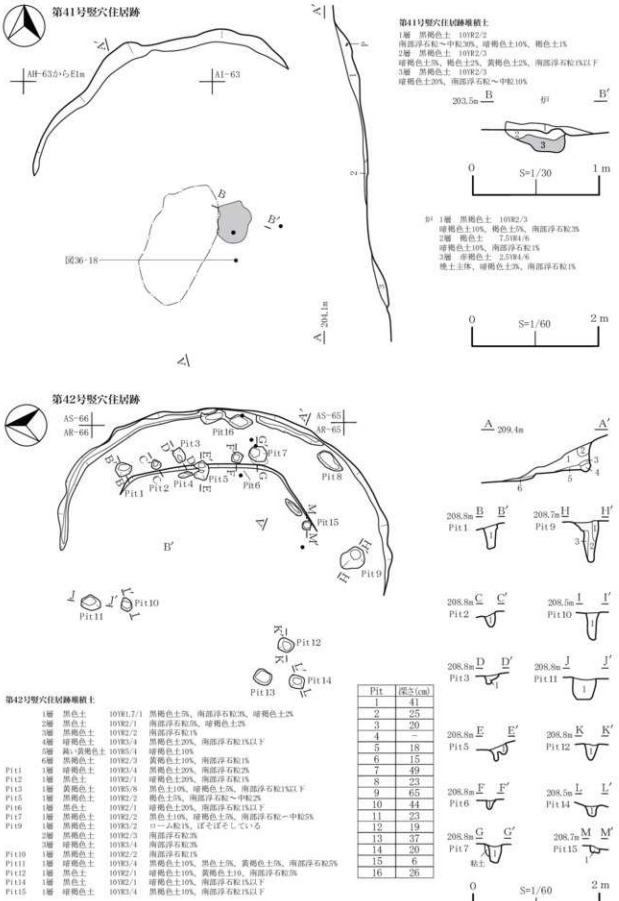


図15　第39・40号竪穴住居跡（２）



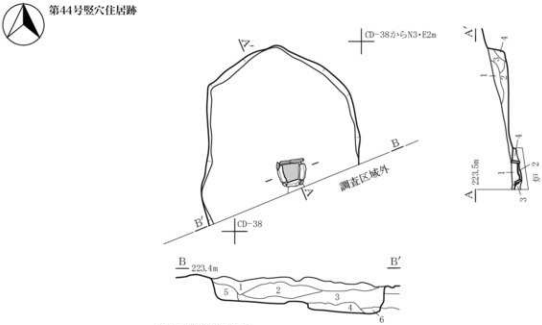
Pit	深さ(cm)
1	41
2	25
3	20
4	–
5	18
6	15
7	49
8	23
9	65
10	44
11	23
12	19
13	37
14	20
15	6
16	26

第42号竪穴住居跡堆積土

	1層	黒色土	10YR1.7/1 黒褐色土5%、南部浮石粒20%、暗褐色土2%
	2層	黒色土	10YR2/1 南部浮石粒20%、暗褐色土2%
	3層	黒褐色土	10YR2/2 南部浮石粒1%
	4層	暗褐色土	10YR3/4 黒褐色土20%、南部浮石粒1%以下
	5層	黒い黄褐色土	10YR5/4 暗褐色土10%
	6層	黒褐色土	10YR2/3 黄褐色土10%、南部浮石粒1%
Pit1	1層	暗褐色土	10YR3/4 黒褐色土20%、南部浮石粒2%
Pit2	1層	黒色土	10YR2/1 暗褐色土20%、南部浮石粒1%
Pit3	1層	黄褐色土	10YR5/8 黒色土10%、暗褐色土5%、南部浮石粒1%以下
Pit5	1層	黒褐色土	10YR2/2 褐色土5%、南部浮石粒～中粒2%
Pit6	1層	黒色土	10YR2/1 暗褐色土20%、南部浮石粒1%以下
Pit7	1層	黒褐色土	10YR2/2 黒色土10%、暗褐色土5%、南部浮石粒一中粒5%
Pit9	1層	黒褐色土	10YR3/2 ローム粒1%、ぼそぼそしている
	2層	黒褐色土	10YR2/3 南部浮石粒3%
	3層	暗褐色土	10YR3/4 南部浮石粒3%
Pit10	1層	黒褐色土	10YR2/2 南部浮石粒1%
Pit11	1層	暗褐色土	10YR3/4 黒褐色土10%、黒色土5%、黄褐色土5%、南部浮石粒5%
Pit12	1層	黒色土	10YR2/1 暗褐色土10%、黄褐色土10、南部浮石粒3%
Pit14	1層	黒色土	10YR2/1 暗褐色土10%、南部浮石粒1%以下
Pit15	1層	暗褐色土	10YR3/4 黒褐色土10%、南部浮石粒1%以下

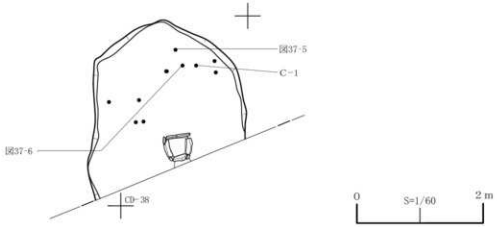
図16 第41・42号竪穴住居跡

第44号竪穴住居跡



第44号竪穴住居跡堆積土

1層	黒色土	10YR2/1	暗褐色土2%、褐色土2%、南部浮石粒1%以下
2層	黒色土	10YR2/1	暗褐色土3%、南部浮石粒1%以下
3層	黒色土	10YR2/1	暗褐色土3%、黒褐色土3%、南部浮石粒～中粒3%
4層	黒色土	10YR2/1	黒褐色土10%、黒色土3%、南部浮石粒1%
5層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土10%、南部浮石粒3%
6層	黒色土	10YR1.7/1	黒褐色土10%、南部浮石粒1%



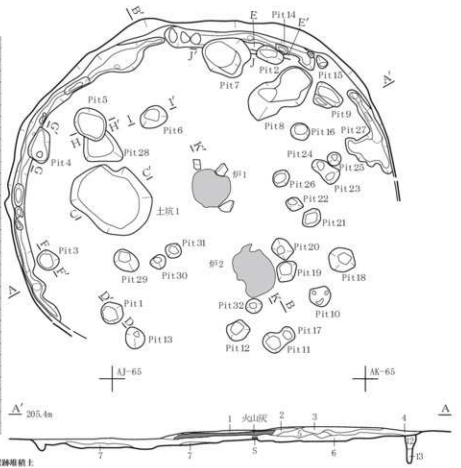
P1	1層	黒褐色土	7.5YR2/2	南部浮石粒～中粒3%、赤褐色焼土2%、炭化物粒～中粒2%、粘土粒1%
	2層	暗褐褐色土	7.5YR2/3	赤褐色焼土30%、南部浮石粒～中粒2%
	3層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒3%
	4層	黒色土	10YR1.7/1	南部浮石粒1%
	5層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒2%

0　S=1/30　1 m

図17　第44号竪穴住居跡

第45号竪穴住居跡

Pit	深さ(cm)
1	51
2	36
3	35
4	34
5	68
6	86
7	39
8	78
9	29
10	40
11	46
12	38
13	27
14	10
15	24
16	47
17	34
18	55
19	60
20	40
21	17
22	41
23	25
24	17
25	22
26	13
27	25
28	43
29	48
30	10
31	8
32	22
土坑	深さ(cm)
1	43



第45号竪穴住居跡堆積土

	1層	黒色土	10YR1.7/1	炭化物粒～中粒3%、灰黄褐色火山灰2%
	2層	黒色土	10YR2/1	灰黄褐色火山灰40%、粘土15%層中央に濃集、南部浮石粒1%均等
	3層	黒色土	10YR1.7/1	灰黄褐色火山灰2%、南部浮石粒1%、炭化物粒1%
	4層	黒色土	7.5YR2/1	南部浮石粒1%
	5層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒1%、炭化物粒1%
	6層	黒褐色土	10YR3/1	南部浮石粒～中粒3%
	7層	黒褐色土	10YR3/1	南部浮石粒20%、南部浮石粒～中粒10%
	8層	黒褐色土	10YR2/1	南部浮石粒1%、炭化物粒1%
	9層	黒褐色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒2%
	10層	黒褐色土	7.5YR3/2	赤褐色焼土30%、南部浮石粒1%、炭化物粒1%
	11層	黒色土	10YR1.7/1	南部浮石粒～中粒10%
	12層	黒褐色土	10YR3/1	南部浮石粒～中粒2%
	13層	黒褐色土	10YR3/2	南部浮石粒～中粒50%
土坑	1層	黒色土	10YR1.7/1	黒褐色土20%、南部浮石粒～中粒15%
Pit11	1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒3%
Pit12	1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒2%、炭化物粒1%
Pit13	1層	黒色土	10YR1.7/1	南部浮石粒～中粒3%
Pit14	1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒7%均等
Pit15	1層	黒色土	10YR2/1	黒色土10%層上部に濃集、南部浮石粒～中粒7%、炭化物粒1%
Pit16	1層	黒色土	10YR1.7/1	南部浮石粒～中粒3%、炭化物粒1%
	2層	黒褐色土	10YR2/2	黒色土10%層中央に濃集、南部浮石粒～中粒2%
	3層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒3%
Pit17	1層	黒色土	10YR1.7/1	南部浮石粒～中粒3%
	2層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒5%
炉2	1層	黒褐色土	10YR2/2	黒色土20%、暗赤褐色焼土1%、南部浮石粒～中粒1%
	2層	極暗褐色土	7.5YR2/3	赤褐色焼土15%層上部に濃集、南部浮石粒1%
	3層	赤褐色土	5YR4/8	焼土主体、褐色土20%、極暗褐色土2%、南部浮石粒1%
炉1	1層	黒色土	10YR1.7/1	黒褐色土10%、南部浮石粒1%以下
	2層	赤褐色土	5YR4/8	焼土（浮石）主体、明赤褐色焼土15%層左端に濃集、炭化物粒1%以下

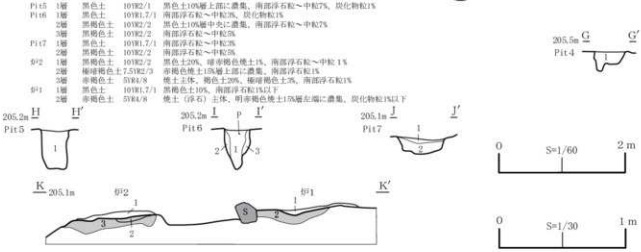


図18　第45号竪穴住居跡（1）

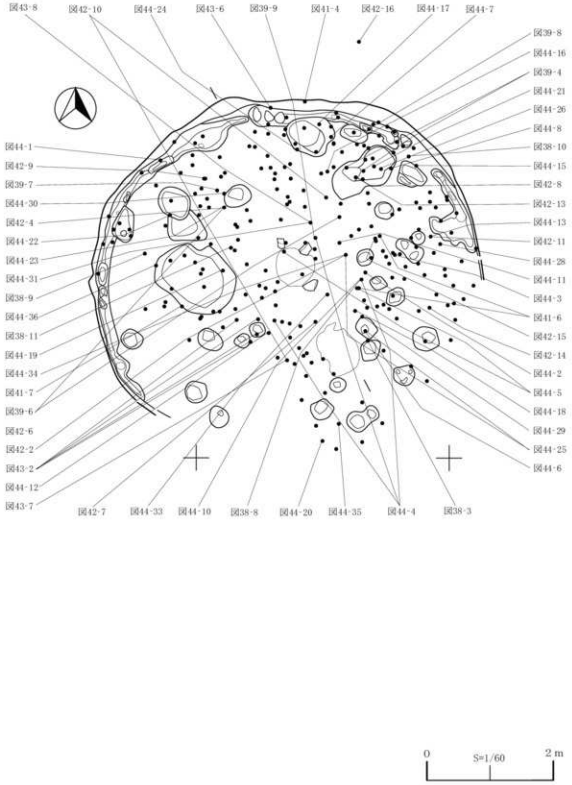
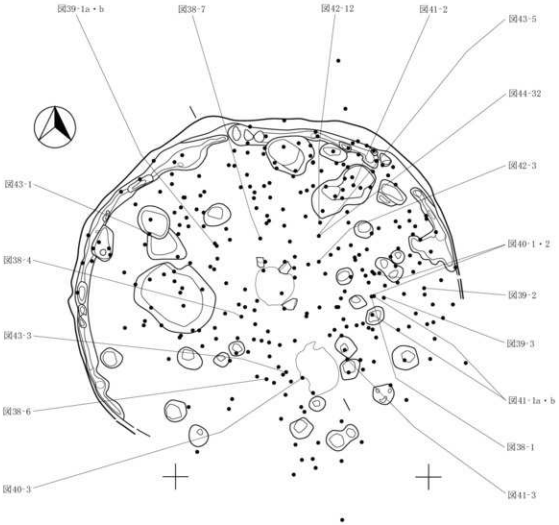


図19　第45号竪穴住居跡（２）



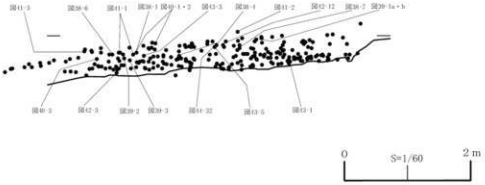
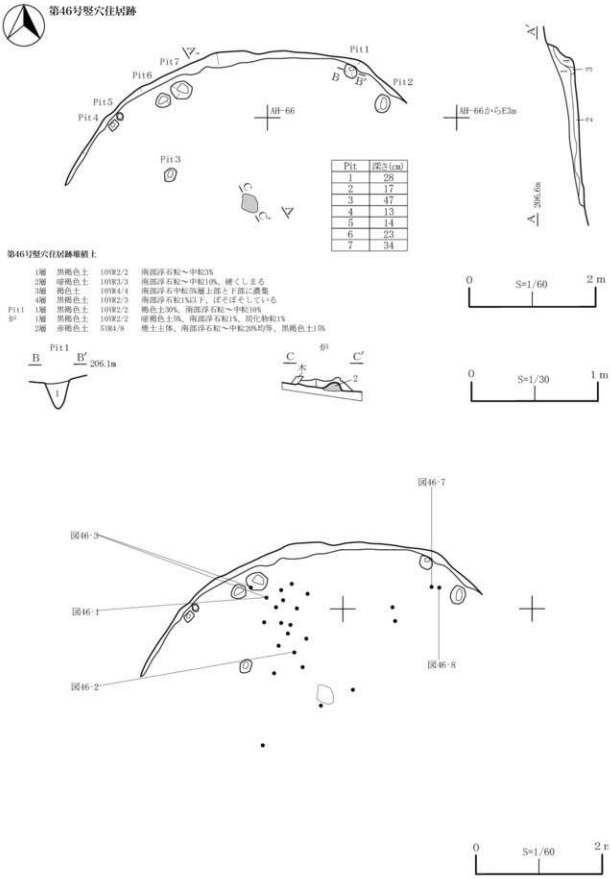


図20　第45号竪穴住居跡（3）

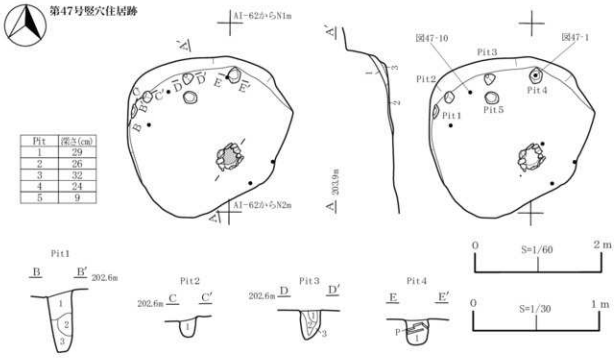


Pit	深さ(cm)
1	28
2	17
3	47
4	13
5	14
6	23
7	34

第46号竪穴住居跡堆積土

	1層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒3%。
	2層	暗褐色土	10YR3/3	南部浮石粒～中粒10%。硬くしまる。
	3層	褐色土	10YR4/4	南部浮石中粒3%堆土部と下部に濃集。
	4層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒1%以下。ぼそぼそしている。
Pit1	1層	黒褐色土	10YR2/2	褐色土30%。南部浮石粒～中粒10%。
炉	1層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土3%。南部浮石粒1%。焼化粒粒1%。
	2層	赤褐色土	5YR4/8	焼土主体。南部浮石粒～中粒20%均等。黒褐色土1%。

図21　第46号竪穴住居跡

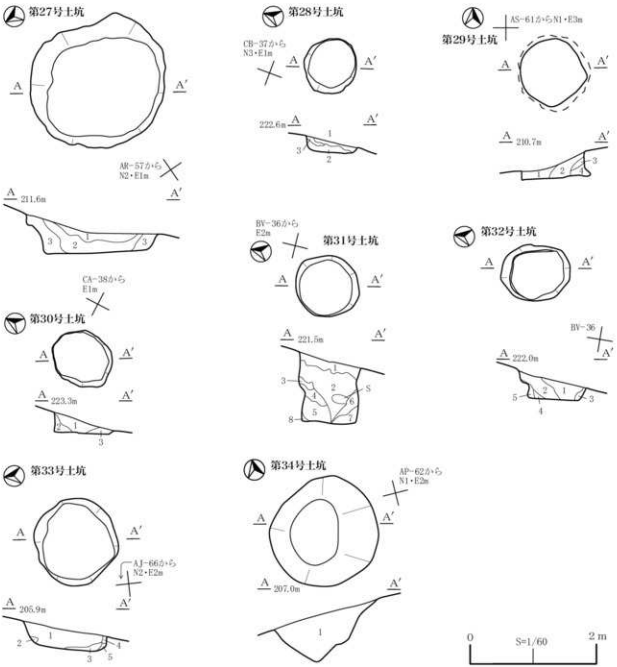


Pit	深さ(cm)
1	29
2	26
3	32
4	24
5	9

第47号竪穴住居跡堆積土

	1層	黒褐色土	7.5YR3/1	暗褐色土10%、南部浮石粒～中粒10%、炭化物粒～中粒1%均等
	2層	黒褐色土	7.5YR3/2	南部浮石粒～中粒10%、褐色土ブロック5%、炭化物粒～中粒1%
	3層	暗褐色土	7.5YR3/3	赤褐色地土35層下部に濃集、南部浮石粒1%
Pit1	1層	黒褐色土	7.5YR3/1	褐色土10%、南部浮石粒2%
	2層	褐色土	10YR4/4	黒褐色土30%、ローム粒2%、南部浮石粒1%
	3層	暗褐色土	10YR3/3	褐色土10%、ローム粒2%
Pit2	1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒3%
Pit3	1層	褐色土	7.5YR4/4	粘土主体、灰黄褐色土10%、南部浮石粒1%、ローム粒1%
	2層	黒褐色土	7.5YR3/1	ローム粒5%、南部浮石粒1%
	3層	褐色土	7.5YR4/6	南部浮石粒2%、ローム粒2%
Pit4	1層	灰黄褐色土	10YR5/2	粘土主体、褐炭色土20%、炭化物粒2%、ローム粒1%
ϕ^2	1層	黒褐色土	7.5YR3/1	黒色土10%、明赤褐色焼土3%、南部浮石粒～中粒2%
	2層	暗褐色	7.5YR3/3	明赤褐色焼土20%、南部浮石粒～中粒5%
	3層	暗赤褐色土	5YR3/3	焼土主体、暗褐色土5%、南部浮石粒1%、ローム粒1%

図22　第47号竪穴住居跡



第27号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒5%
2層	黒褐色土	10YR2/2	黒褐色土20%、南部浮石粒～中粒3%
3層	黒褐色土	10YR2/3	黒褐色土10%、南部浮石粒～中粒10%

第28号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒5%、暗褐色土ブロック混入
2層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒1%、暗褐色土ブロック混入
3層	黒褐色土	10YR2/3	黒褐色土5%、南部浮石粒3%

第29号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒～中粒5%
2層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土20%、南部浮石粒～中粒10%
3層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土30%、南部浮石粒～中粒3%
4層	褐色土	10YR4/6	黒褐色土15%、南部浮石中粒～大粒2%

第30号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒～中粒1%・大粒1%、暗褐色土10%
2層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土10%、褐色土10%、南部浮石粒3%
3層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒1%、黒褐色土5%、褐色土粒1%斑状

第31号土坑堆積土

1層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土20%、南部浮石粒20%・中粒～大粒3%
2層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土10%、南部浮石粒10%・中粒～大粒1%
3層	黒褐色土	7.5YR2/2	褐色土30%、南部浮石粒～中粒5%
4層	黒褐色土	10YR2/2	褐色土40%、南部浮石粒～中粒5%
5層	黒褐色土	10YR2/3	褐色土40%、明黄褐色土10%、南部浮石粒～中粒7%
6層	黒褐色土	10YR2/2	褐色土10%、南部浮石粒～中粒3%
7層	黒褐色土	10YR2/2	褐色土5%、南部浮石粒～中粒5%
8層	明黄褐色土	10YR6/6	黒褐色土5%、褐色土3%、南部浮石粒～中粒3%

第32号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒～中粒20%
2層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒20%、褐色土7%
3層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒～中粒3%
4層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒～中粒40%
5層	褐色土	7.5YR4/3	黒褐色土30%、南部浮石粒～中粒5%

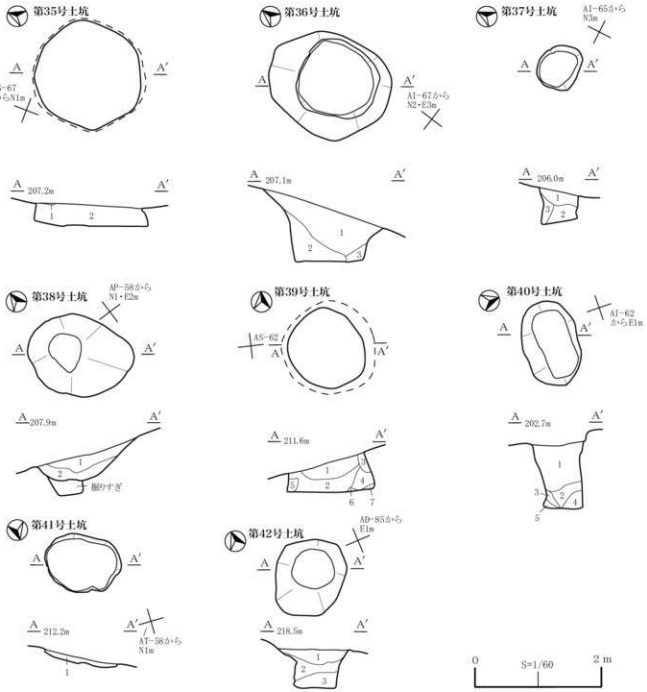
第33号土坑堆積土

1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒5%
2層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒20%
3層	黒色土	10YR2/1	暗褐色土5%、南部浮石粒～中粒3%
4層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒7%
5層	黒褐色土	10YR2/3	黒色土20%、南部浮石粒～中粒7%

第34号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR3/2	南部浮石粒10%

図23　第27～34号土坑



第35号土坑堆積土

1層	暗褐色土	10YR3/4	南部浮石粒との混合土
2層	黒色土	10YR3/1	南部浮石粒～中粒3%

第36号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/2	腐食した南部浮石粒～中粒15%
2層	黒褐色土	10YR2/3	所々に塊状の腐食した南部浮石粒が濃集
3層	黒褐色土	10YR3/1	腐食した南部浮石粒と黒褐色土の互層

第37号土坑堆積土

1層	黒色土	10YR2/1	腐食した南部浮石粒3%
2層	黒褐色土	10YR2/2	腐食した南部浮石粒5%
3層	黒褐色土	10YR2/3	腐食した南部浮石粒10%

第38号土坑堆積土

1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒～中粒7%
2層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒～中粒2%

第39号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土3%，褐色土粒1%斑状，南部浮石粒1%
2層	黒色土	10YR2/1	黒褐色土30%，南部浮石粒1%
3層	暗褐色土	10YR3/3	黒褐色土10%，南部浮石粒1%以下
4層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土10%，南部浮石粒1%
5層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土20%，南部浮石粒5%
6層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム土5%，暗褐色土1%
7層	黒色土	10YR1.7/1	暗褐色土10%，南部浮石粒3%

第40号土坑堆積土

1層	黒色土	7.5YR2/1	南部浮石粒～中粒15%
2層	黒褐色土	7.5YR3/2	南部浮石粒～中粒10%
3層	暗褐色土	7.5YR3/3	褐色土30%，南部浮石粒5%
4層	暗褐色土	7.5YR3/3	褐色土10%，南部浮石粒5%
5層	黒褐色土	7.5YR3/2	南部浮石粒3%

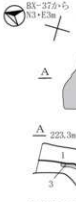
第41号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/2	黒褐色土5%，南部浮石粒1%

第42号土坑堆積土

1層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒7%
2層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒8%
3層	暗褐色度	10YR3/3	南部浮石粒15%

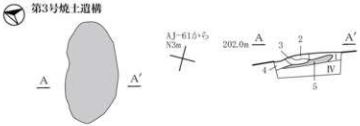
図24　第35～42号土坑



第2号焼土遺構

第2号焼土遺構堆積土

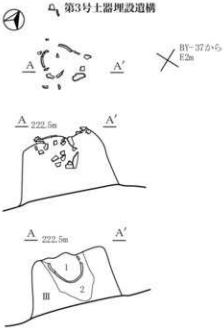
1層　褐色土　10YR4/4
暗褐色土20%、褐色土5%、南部浮石粒2%
2層　暗褐色土　10YR3/4
褐色土10%、南部浮石粒2%
3層　明赤褐色土　5YR5/8
焼土主体、南部浮石粒～中粒20%、褐色土10%
4層　暗褐色土　10YR3/4
褐色土30%、南部浮石粒～中粒20%、黒褐色土5%



第3号焼土遺構

第3号焼土遺構堆積土

1層　黒褐色土　10YR2/2
焼土10%、暗褐色土5%、黒色土1%、南部浮石粒～中粒1%
2層　黒褐色土　10YR2/2
焼土5%、暗褐色土5%、南部浮石粒～中粒2%
3層　暗褐色土　10YR2/3
焼土10%、黒褐色土3%、南部浮石粒～中粒2%
4層　黒褐色土　10YR2/2
暗褐色土7%、南部浮石粒～中粒1%、焼土1%、炭化物粒1%
5層　明赤褐色土　5YR5/6
焼土主体、黒褐色土30%層左側に濃集、南部浮石粒～中粒1%、炭化物粒1%以下



第3号土器埋設遺構

第5号土器埋設遺構

第3号土器埋設遺構

1層　黒褐色土　10YR2/3　南部浮石粒1%以下
2層　黒褐色土　10YR2/2　黒褐色土20%、南部浮石粒～中粒2%

第5号土器埋設遺構

1層　暗褐色土　7.5YR3/4　焼土30%層上面に濃集、褐色土10%、南部浮石中粒～大粒10%
2層　褐色土　10YR4/6　暗褐色土10%、焼土5%、南部浮石粒5%
3層　褐色土　7.5YR4/6　褐色土10%、南部浮石粒5%
4層　褐色土　10YR4/6　暗褐色土10%、南部浮石粒1%

第5号屋外炉

1層　黒褐色土　10YR2/3　暗褐色土10%、焼土7%、南部浮石粒～中粒5%
2層　黒褐色土　10YR2/3　黄褐色土40%、南部浮石粒～中粒3%
3層　橙色土　5YR6/8　焼土主体、黒褐色土10%、南部浮石粒～中粒5%

0　S=1/30　1m

図25　焼土遺構・土器埋設遺構・屋外炉

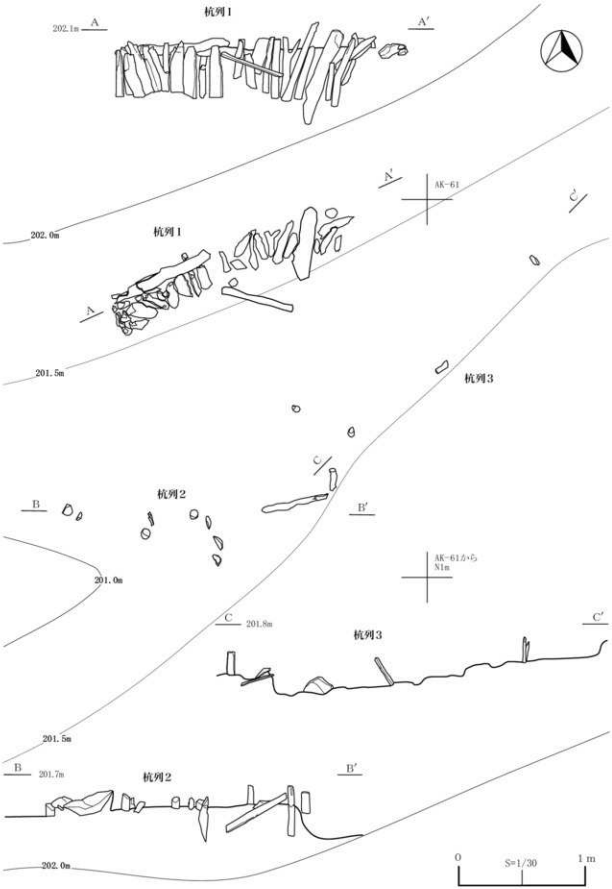

杭列1
202.1m
A
A′
202.0m
杭列1
A
A′
AK-61
C
201.5m
杭列3
C
B
杭列2
B′
201.0m
AK-61ふかう
N1m
C
201.8m
C′
杭列3
201.5m
B
201.7m
杭列2
B′
202.0m
0
S=1/30
1 m

図26　杭列

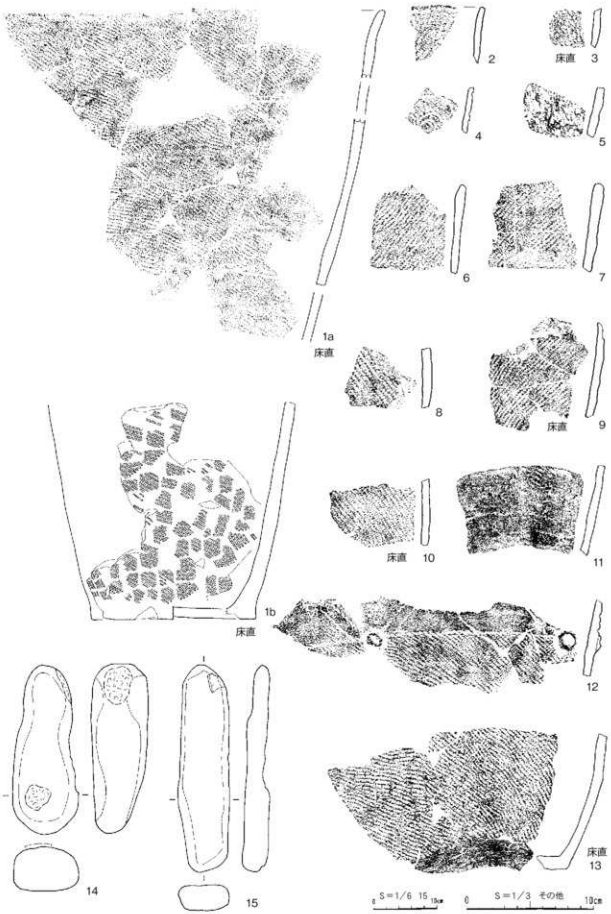


図27　第31号竪穴住居跡出土遺物

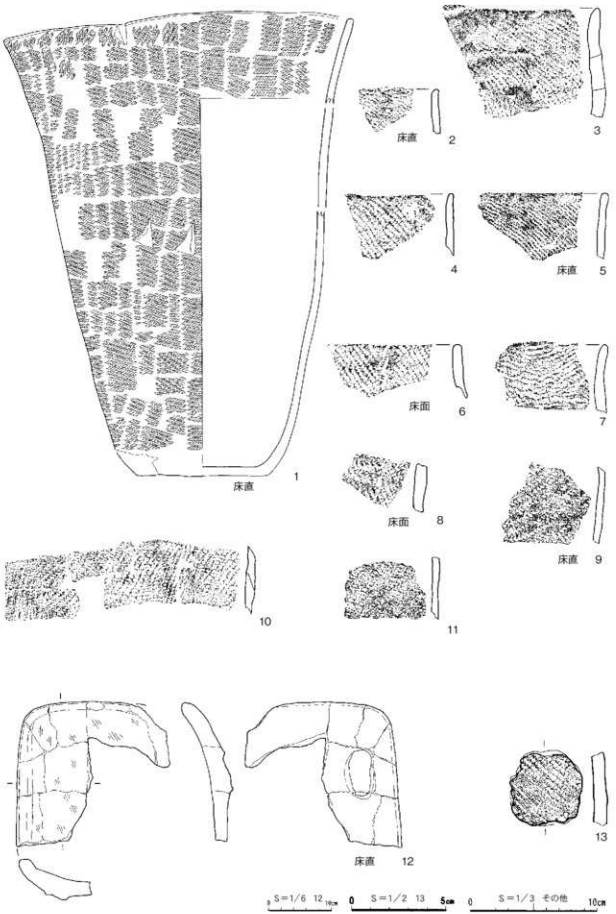


図28　第32号竪穴住居跡出土遺物

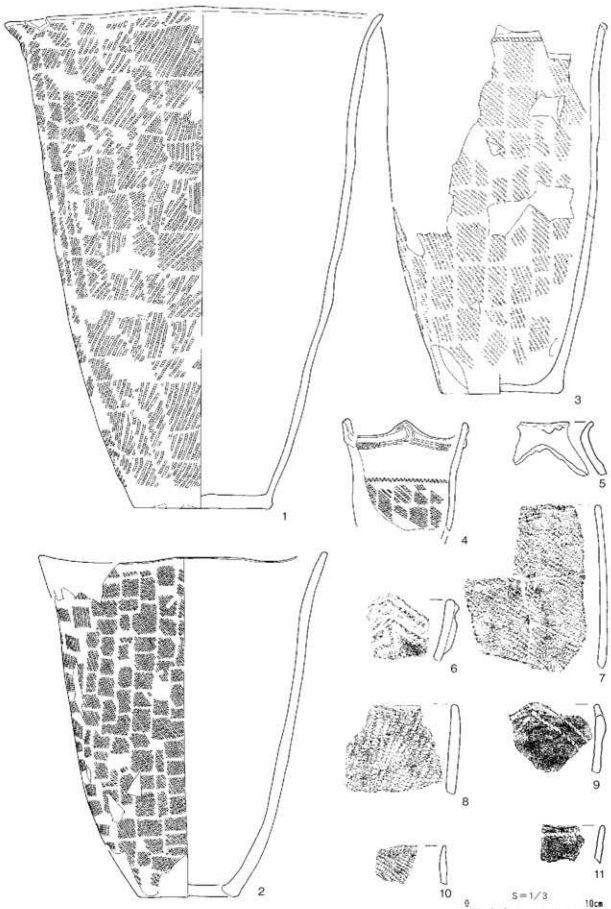


図29　第33号竪穴住居跡出土遺物（１）

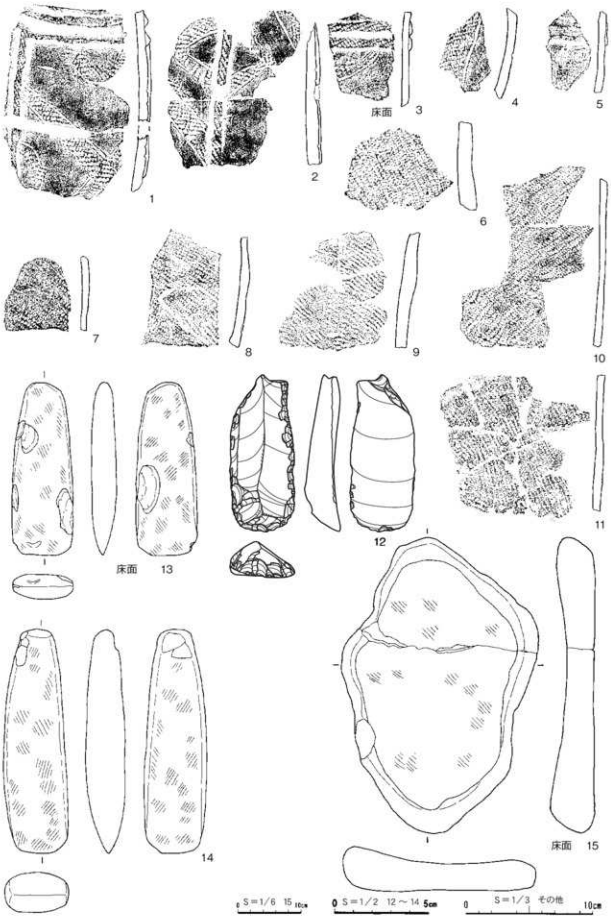


図30　第33号竪穴住居跡出土遺物（2）

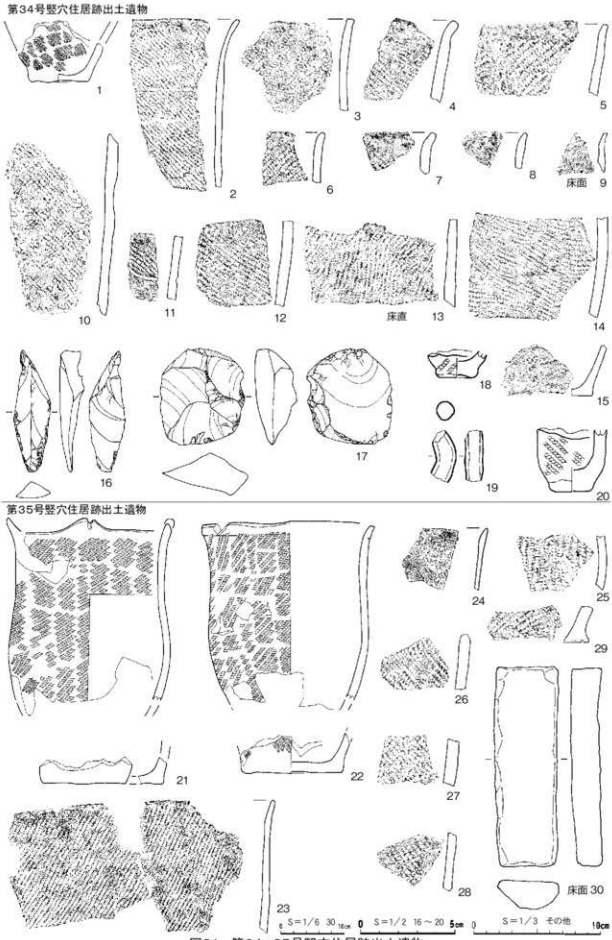


図31　第34・35号竪穴住居跡出土遺物

第36号竪穴住居跡出土遺物

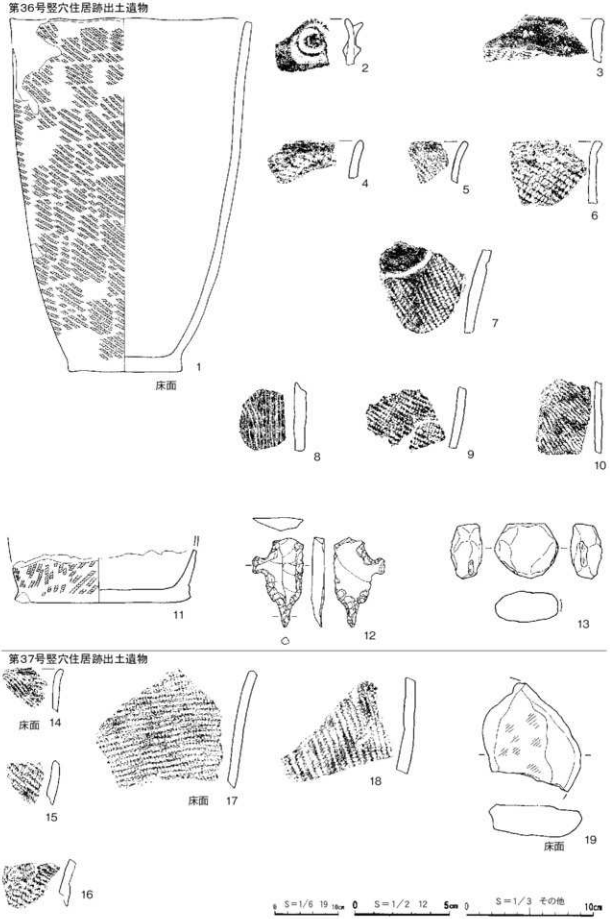


図32　第36・37号竪穴住居跡出土遺物

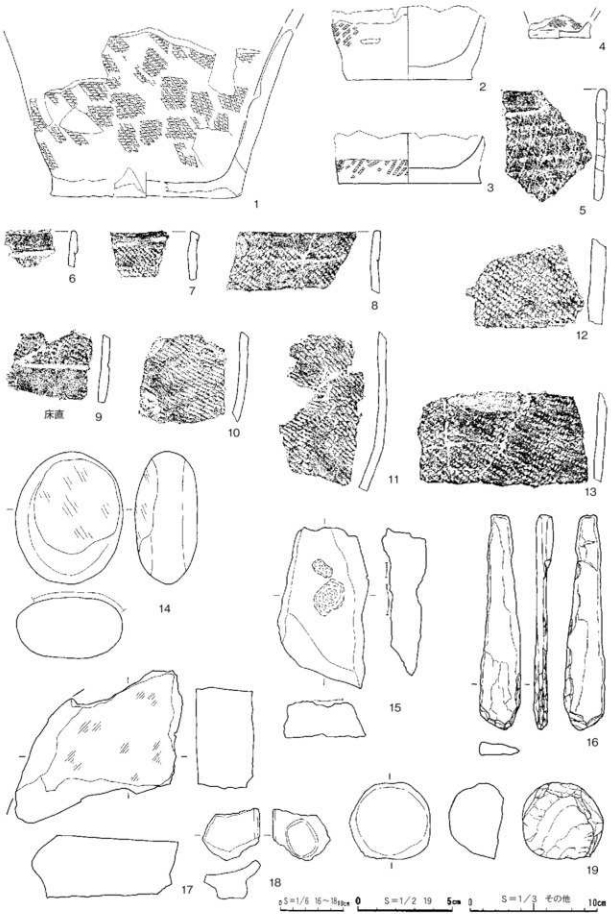


図33　第38号竪穴住居跡出土遺物

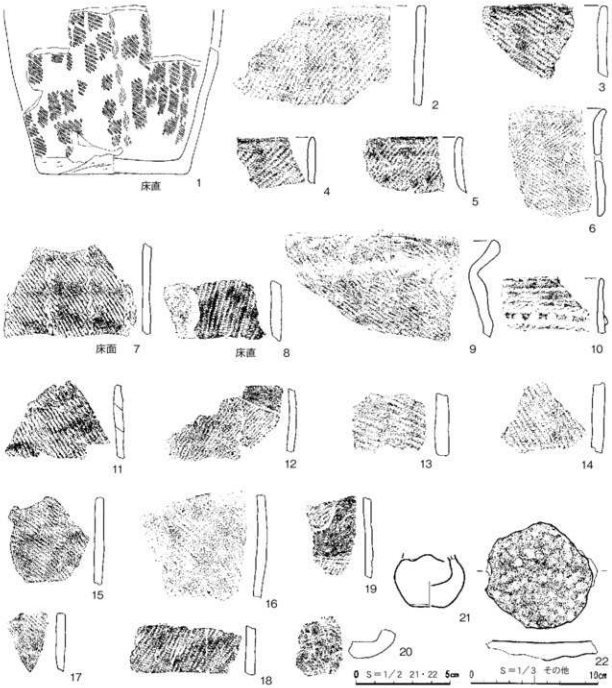


図34　第39号竪穴住居跡出土遺物

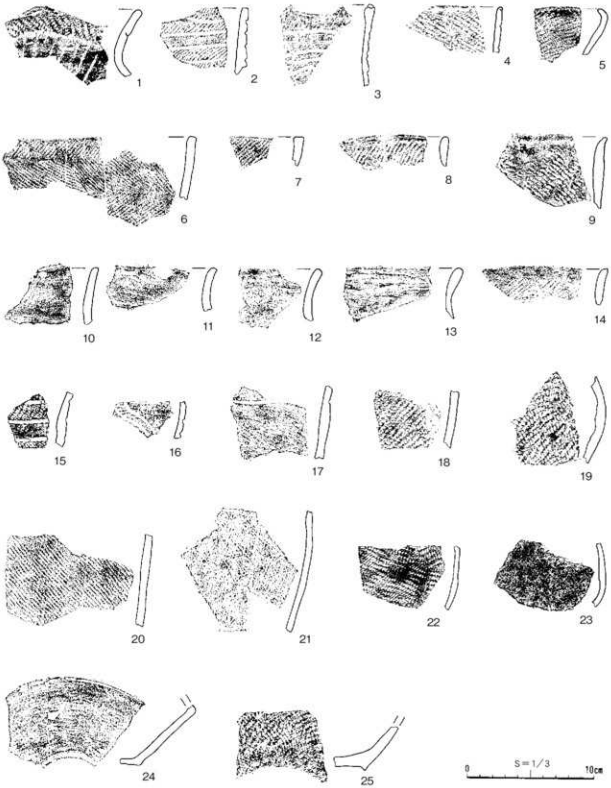


図35　第40号竪穴住居跡出土遺物

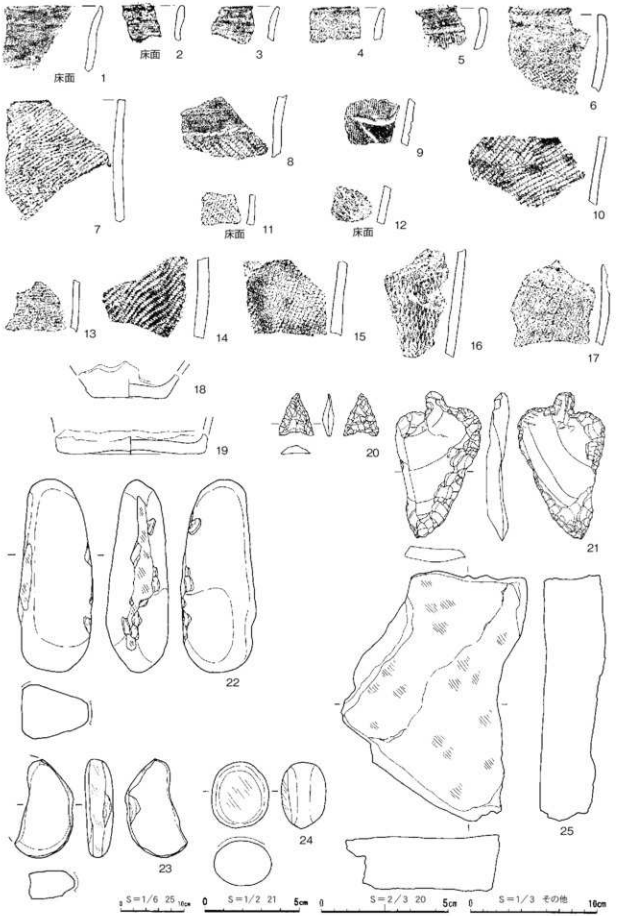


図36　第41号竪穴住居跡出土遺物

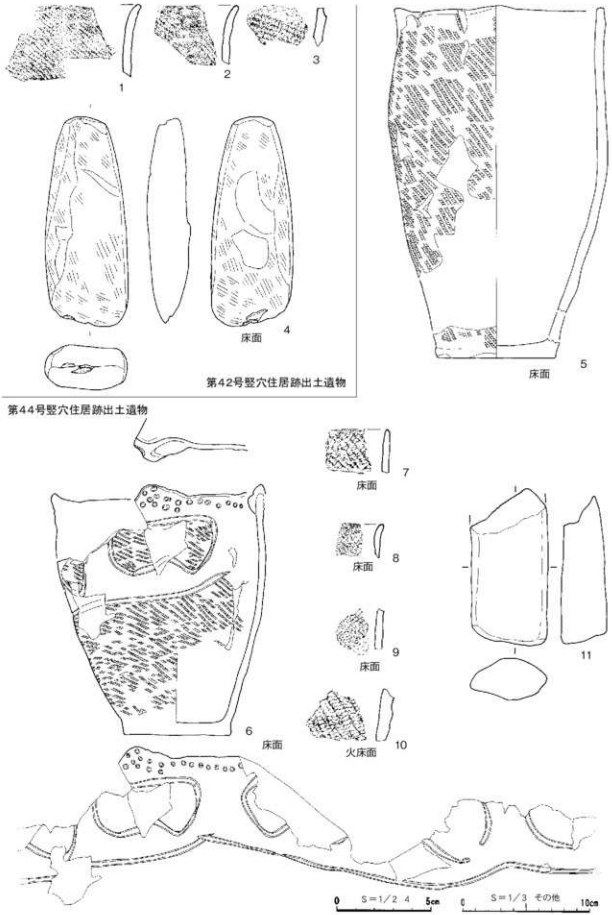


図37　第42・44号竪穴住居跡出土遺物

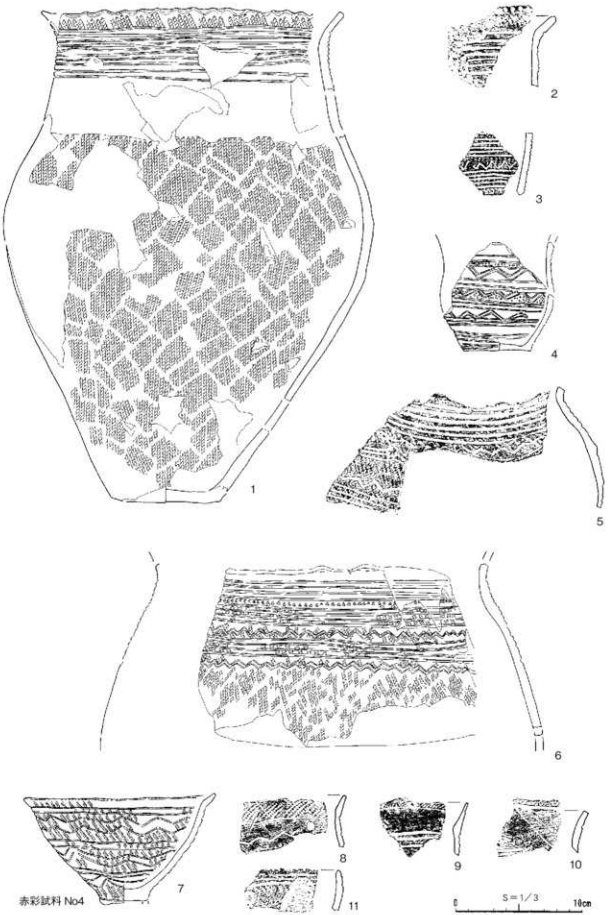


図38　第45号竪穴住居跡出土遺物（1）

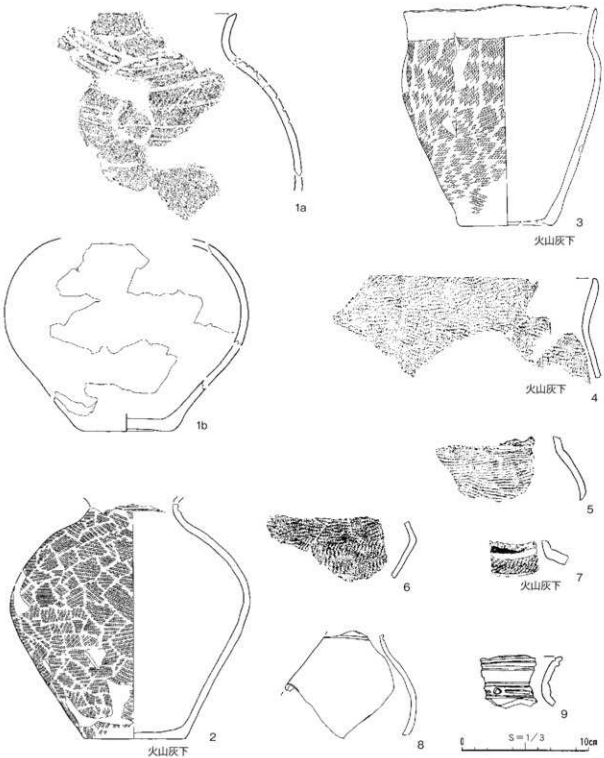


図39　第45号竪穴住居跡出土遺物（２）

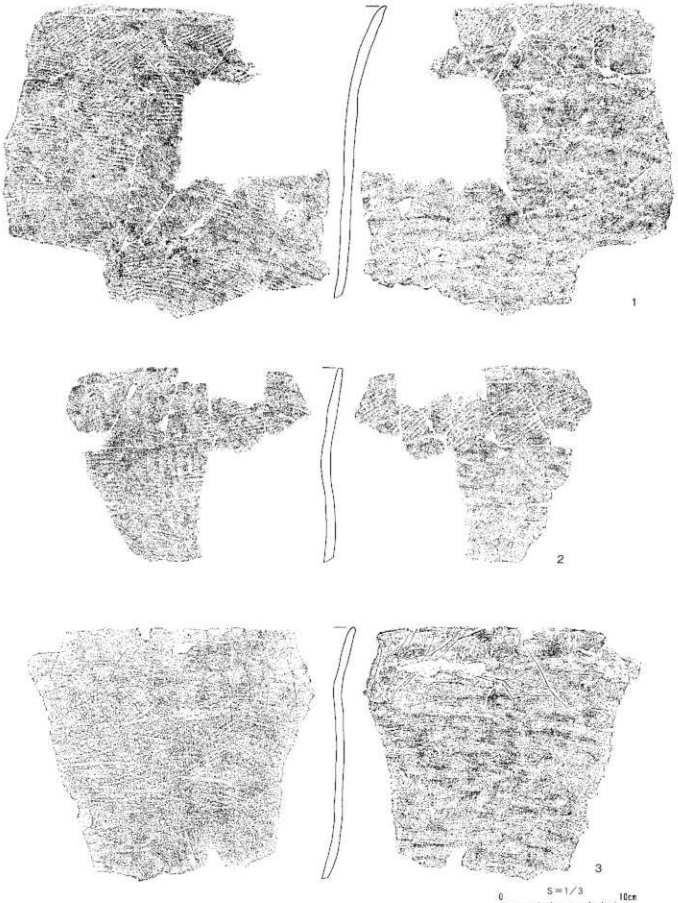


図40　第45号竪穴住居跡出土遺物（3）

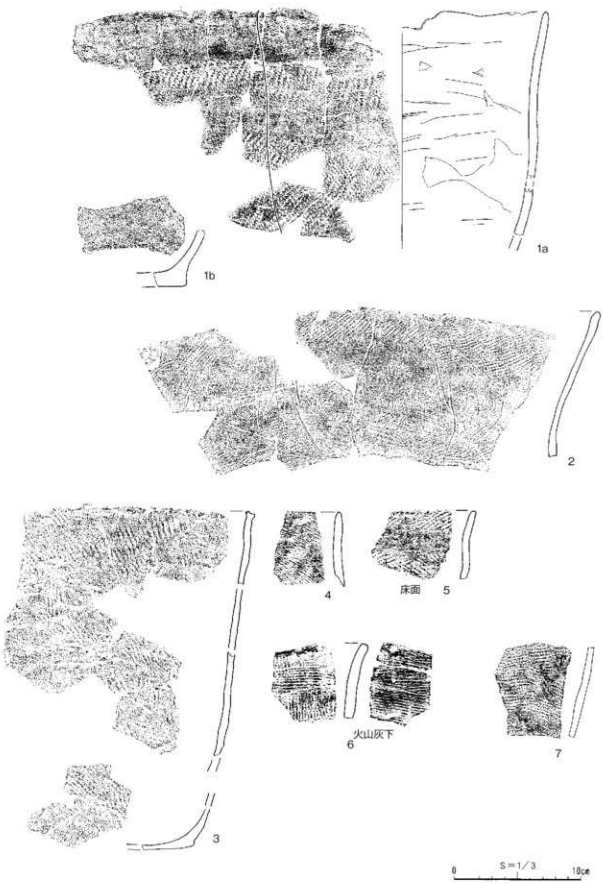


図41　第45号竪穴住居跡出土遺物（４）

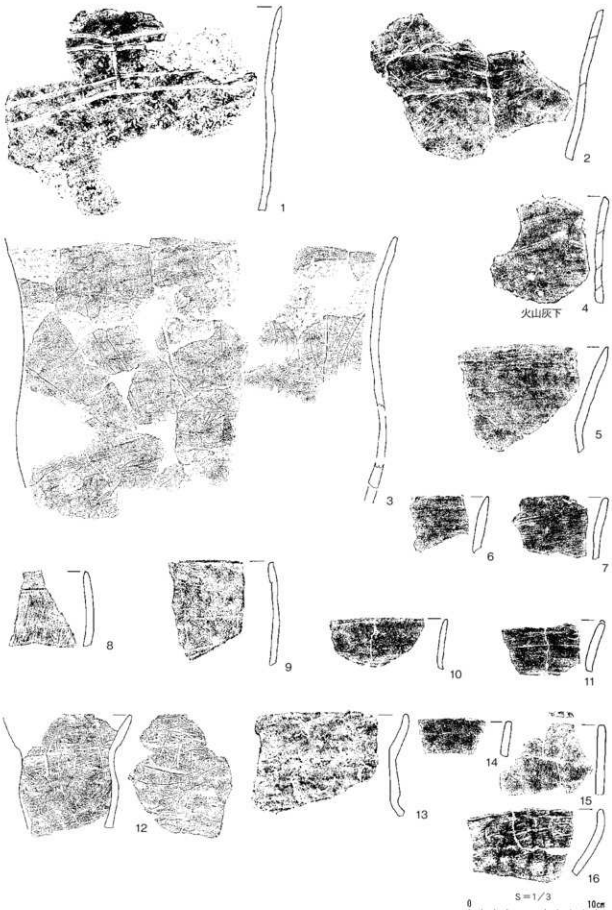


図42　第45号竪穴住居跡出土遺物（5）

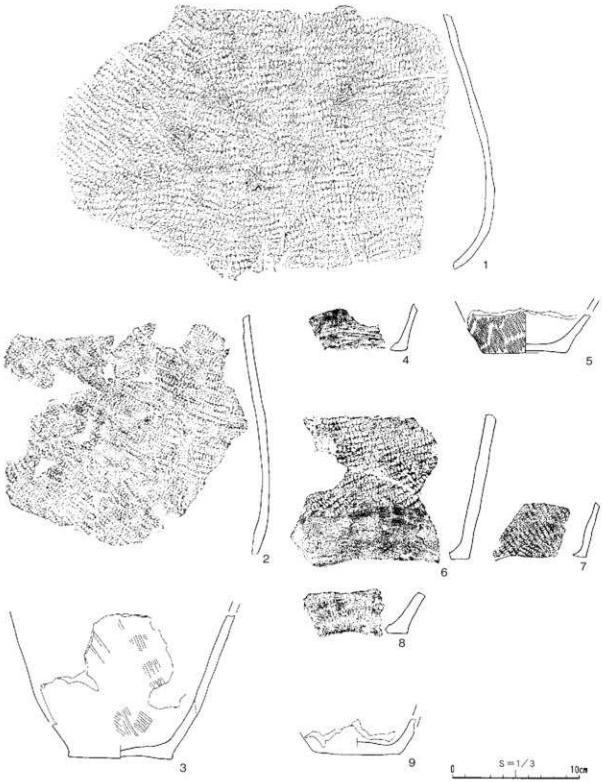


図43　第45号竪穴住居跡出土遺物（６）

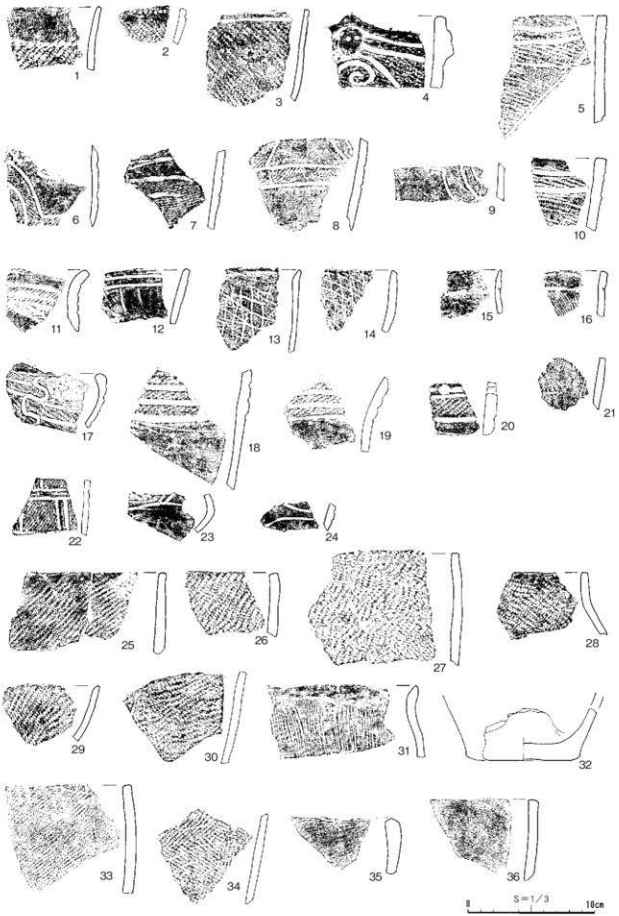


図44　第45号竪穴住居跡出土遺物（7）

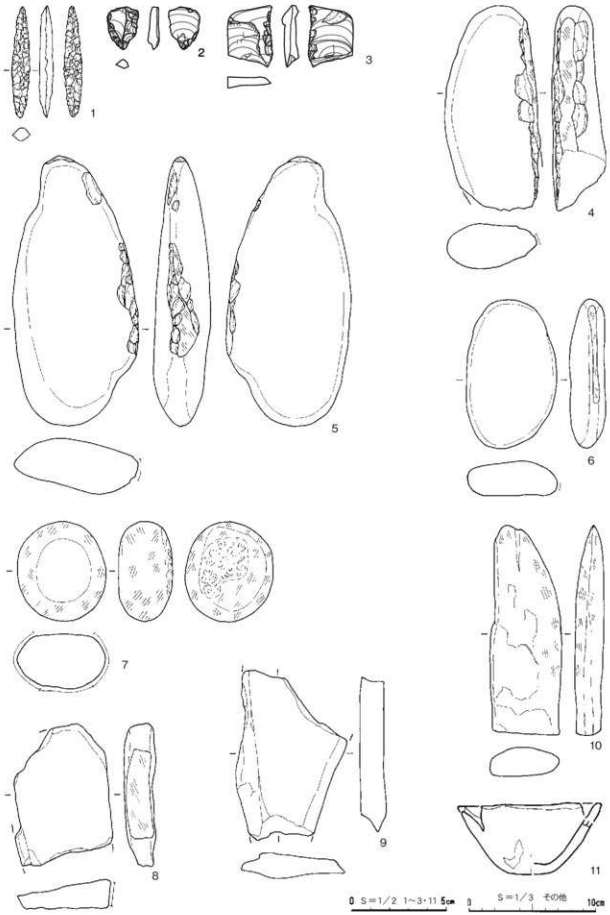


図45　第45号竪穴住居跡出土遺物（８）

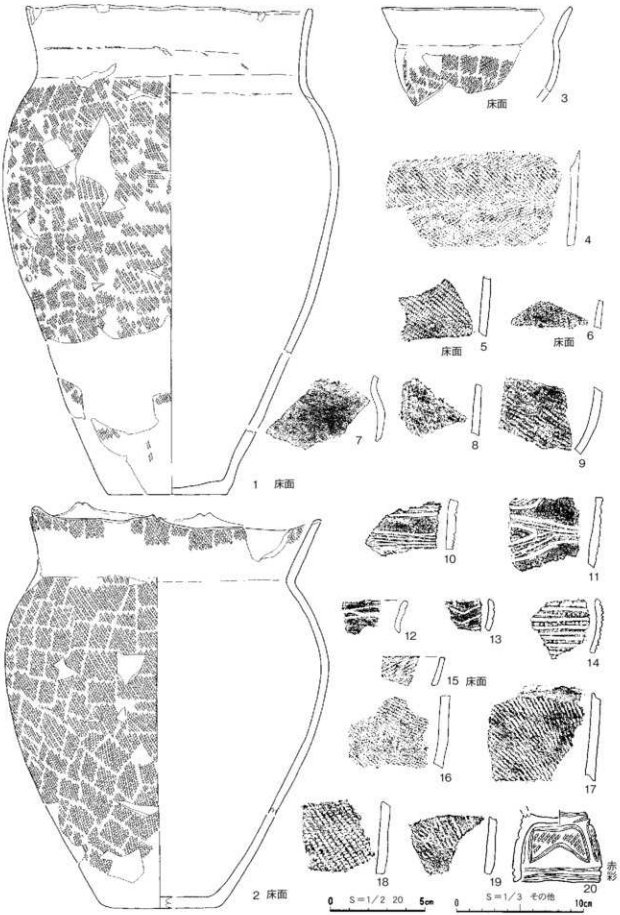


図46　第46号竪穴住居跡出土遺物

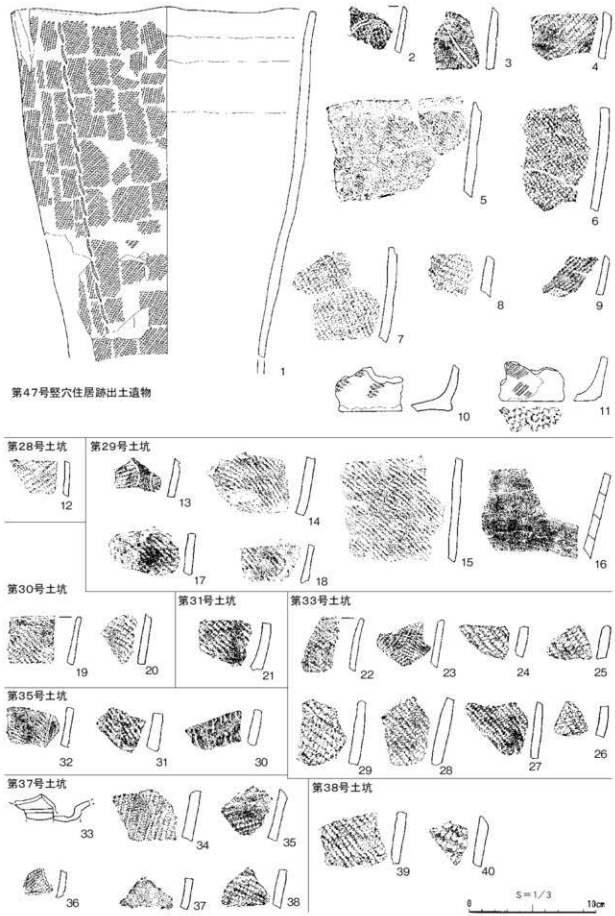
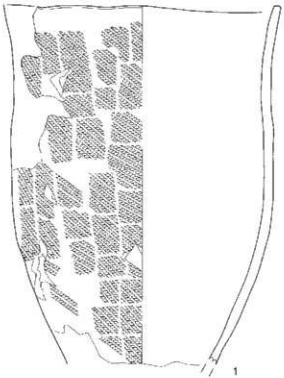
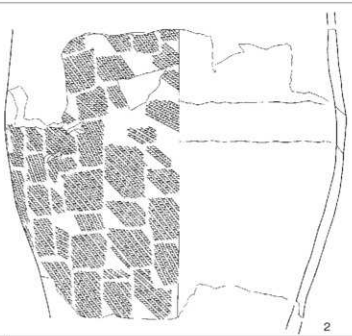


図47　第47号竪穴住居跡・土坑出土遺物

第3号土器埋設遺構



第5号土器埋設遺構



第5号屋外炉

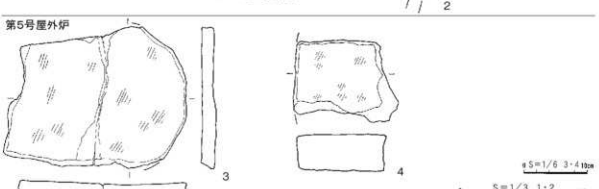


図48　土器埋設遺構・屋外炉出土遺物

第４節　遺構外出土遺物

南区（村道）

南区は、昨年度調査した田代遺跡の延長部分である。尾根上平坦地から下る急な斜面地に相当し、遺構・遺物の分布が比較的薄かった地区と接する。今年度の調査区でも同様で、遺物は北区に比べて少なく、比率としては１：５程度である。土器は主に縄文時代中期末～後期初頭の遺物が出土した。石器や土製品・石製品なども出土した数量は少ない。

１　土器（図 49・50、写真 31）

縄文時代

中期後半（49- 1～7）口縁部に刺突を施文するものである。６は無文だが、全体にミガキを施すことや口縁部器形・白っぽい胎土から中期後半の土器に相当する。

大木 10 式併行期（49- 8～19）49- 8は粘土粒を貼付けた周辺に刺突を施す。49- 9・11～17・19は磨消縄文である。49-10は胴部最大径の部分と考えられ、沈線で区画された内部に楕円形状の刺突文を施す。49-12は縄文原体を縦走・横走させている。

中期末～後期初頭（50- 1～16）この時期の地文縄文のみの土器を一括した。いずれも縄文原体を縦方向に施文する一群である。50- 1は口縁部が垂直に立ち上がり、胴部中央～下半にかけて膨らむ器形と考えられる。口端部は外側を向き、丸味を帯びる。口端から口縁にかけて無文でナデが施される。50- 2・3は緩やかに外反する器形で、口端はやや丸味を帯びる。50- 4・5・7・9はやや外側に傾く器形で、口端は三角形状を呈する。50- 8は非常に薄い器壁で、小型深鉢と考えられる。50- 6・10～13は口縁部が垂直もしくは内傾気味に立ち上がる器形である。縄文原体を施文した後、口端・口縁部をナデ等で仕上げる。口端は 50-11～13 が三角形状、50- 6・10 は平坦である。

後期初頭（49-20～24・27・28・34）深鉢形土器は、粘土紐を貼付けるもの（49-20～22・27）、縄文原体を押圧するもの（49-23・24）、折り返し口縁のもの（49-28）などがある。鉢形土器（49-34）は、底部から胴部にかけて底径が大きく、底部器壁が厚く深鉢形土器と同様の形状をしている。口縁部はやや波状になると思われ、折り返し口縁となる。このことから深鉢形土器の製作途中で鉢形土器に変更したものと考えられる。粘土紐を貼付ける一群は、八戸市牛ケ沢（3）遺跡第Ⅲ群土器に相当するものである。49-20は口縁部から縦位に粘土紐を貼付け、これを中心に直線状の沈線が施文される。49-21は波頂部に粘土紐を貼付ける。波頂部から垂下するもの、口縁部と胴部の文様帯区画に粘土紐を貼付け、その上部から刺突を施す。49-22は胴部片で、横位及び縦位に粘土紐を貼付け、その上部及び、器面と粘土紐の接する両側に円形刺突を施す。49-27はやや小径の深鉢形土器で、粘土紐を横位に巡らすものと思われる。その上部及び器面と粘土紐の接する上部に刺突を施す。49-23は口縁部の一部が三角形状をなし縄文原体を横位に押圧することで口縁部と胴部の文様帯を区分する。折り返し口縁（49-28）は、後期初頭から前葉にかけて見られる器形だが、胴部縄文原体から後期初頭とした。

後期前葉（49-25・26・29）49-25は沈線のみ施文される。49-26は同心円状に沈線が施文される一群である。沈線間には充填縄文が施文される。49-29は単軸絡条体が施文されることから、後期前葉に

相当する。

後期（49-30 ～ 33）49-30は土器の器形が屈曲する部分に把手を貼付けており、壺形土器と思われる。49-31は台付底部で、台部の断面形状は三角形状である。49-32は後期後半に相当する台付鉢と考えられる。49-33は手づくね土器で、鉢状の器形である。胎土から後期のものとした。

弥生時代（49-35・36）49-35は弥生時代後期の撚糸文を斜めに施文しており、上部は縄文原体を押圧する。49-36は無文土器であるが、口縁部にヘラミガキが顕著に観察されることから弥生時代とした。

2　剥片石器（図51-1～19、写真40）

石鏃5点、縦形石匙が1点、石錐3点、二次調整のある剥片8点、微小剥離痕のある剥片4点、両極加撃痕のある剥片3点、剥片19点、砕片1点が出土した。石鏃（1～5）は、1・2が凹基鏃、4が有茎鏃、3・5が平基鏃である。2は非常に薄い作りである。3はやや粗い作りで、基部が左右対称になっていない。6は3点が破損して接合した石匙で、同一グリッド内の出土である。摘み部は上端部の外側に偏って作り出されている。石錐（7～9）はすべて剥片の尖端を加工したものである。7・8は尖端の両側縁を両面から加工される。8は尖端の摩耗が顕著である。9は尖端付近の両面を加工する。二次調整のある剥片（10 ～ 17）は、一部連続して鈍角度の刃部が作り出されているもの（10・12・14・15）、一部連続して急角度の刃部が作り出されているもの（11・13・16）に分かれる。10・14は上部が欠損しているものの端部に刃部が作り出される。15は端部のごく一部に刃部を作り出されている。11・13は薄い剥片素材の側縁に二次調整を施される。17は剥片素材の幅が均一で一方の側縁に二次調整がなされており、石匙等の破損品の可能性がある。両極加撃痕のある剥片は1点を図示した（18）。剥片は縦長剥片1点を図示した（19）。（坂本）

3　礫石器（図51-22・23、52-1～5・9、写真40）

磨製石斧が1点、敲磨器が6点、石皿・台石類が4点出土した。図示しなかった磨製石斧は刃部の小破片で、全体の形状等は分からない。51-22・23、52-1～3・5は敲磨器で、敲打痕や摩耗痕、剥離痕等が遺されている。51-22は両面に摩耗痕がみられ、片面（正面図側）の摩耗した部分は黒色に変色している。51-23のくぼみ痕は敲打痕の集中によって生じたもので、52-2のくぼみ痕には同心円状の線条痕がみられる。52-3は石皿・台石類の破片を利用したものらしい。52-4・9は石皿・台石類である。52-4は敲打痕が遺された敲磨器に類するが、重量的に片手持ちでの使用は無理なので、据え置いて使用する台石として取り扱った。図示しなかった石皿・台石類2点は、小破片である。

石製品（図51-20・21・24、52-6～8・10 ～ 16）

円盤状石製品が1点、種別不明の石製品が3点、加工礫が13点出土した。52-13は円盤状石製品で、薄手の板状小礫の周縁部を円形に打ち欠いたものである。51-20・21・24は石製品の一種とみられる。51-20は研磨し石斧の形状に仕上げているが、非実用的な小型品で刃部等は作り出していない。51-21は小型・薄手の長楕円形に研磨され、装身具などの未製品かとも思われる。51-24は石棒の類の破片かと思われる。52-6～8・10～12・14～16は加工礫である。周縁等に剥離痕や擦過痕等が遺されているが、剥離痕は摩耗したものがかなりみられる。不均等な棒状や板状の形態が多い中で、52-16は薄手で比較的整った紡錘形に仕上がっている。図示しなかった加工礫4点は、いずれも小破片である。北区ではこの他、水晶の未加工礫が2点出土した。（工藤）

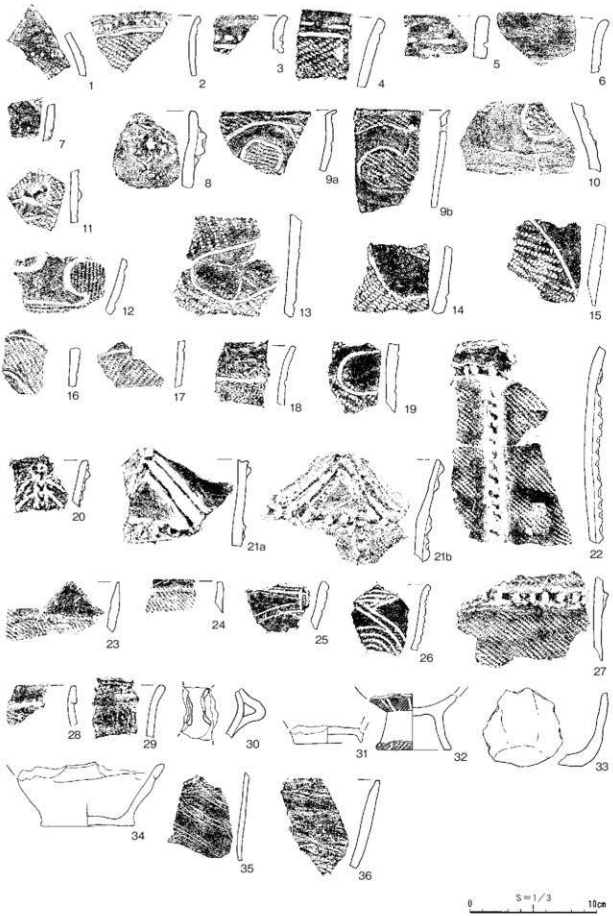


図49　遺構外出土土器（１）

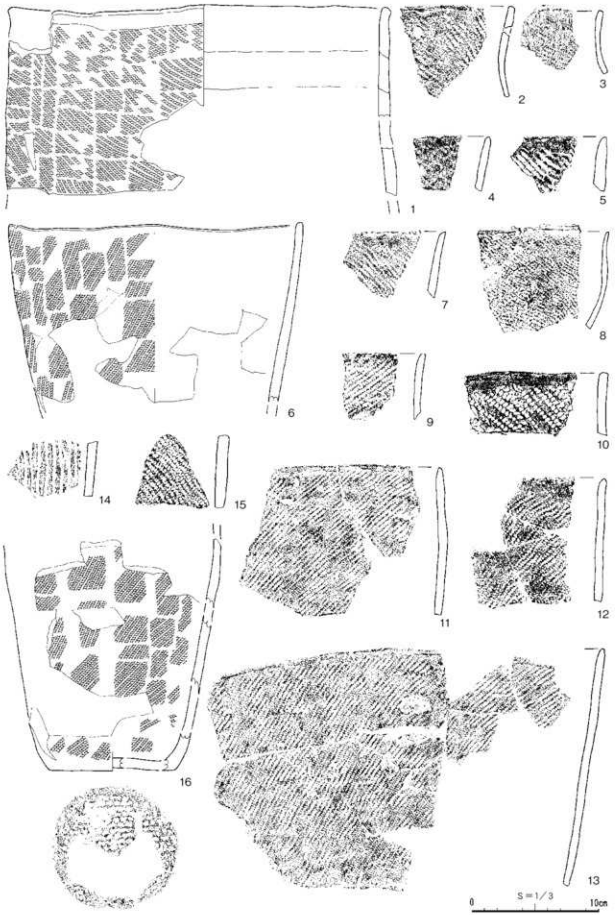


図50　遺構外出土土器（2）

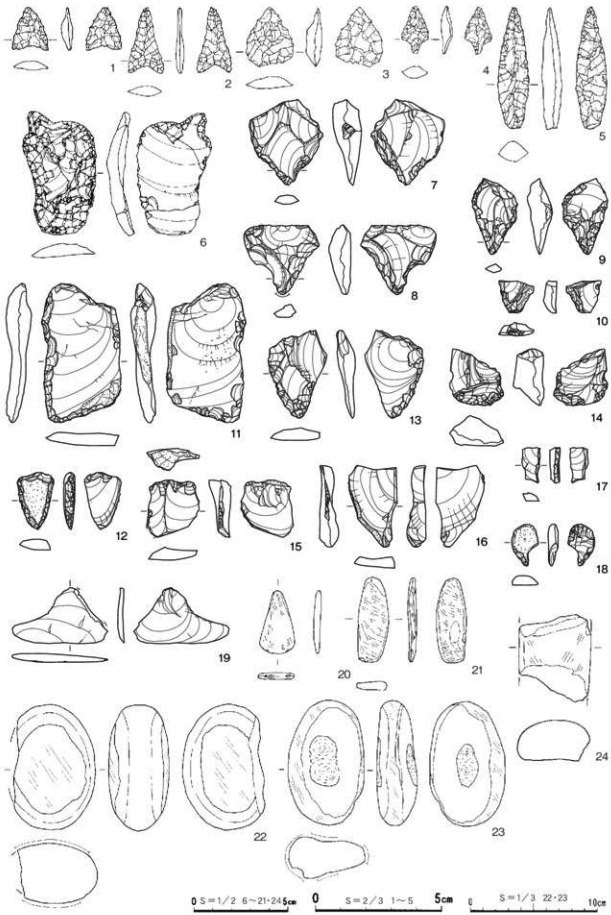


図51　遺構外出土石器（１）

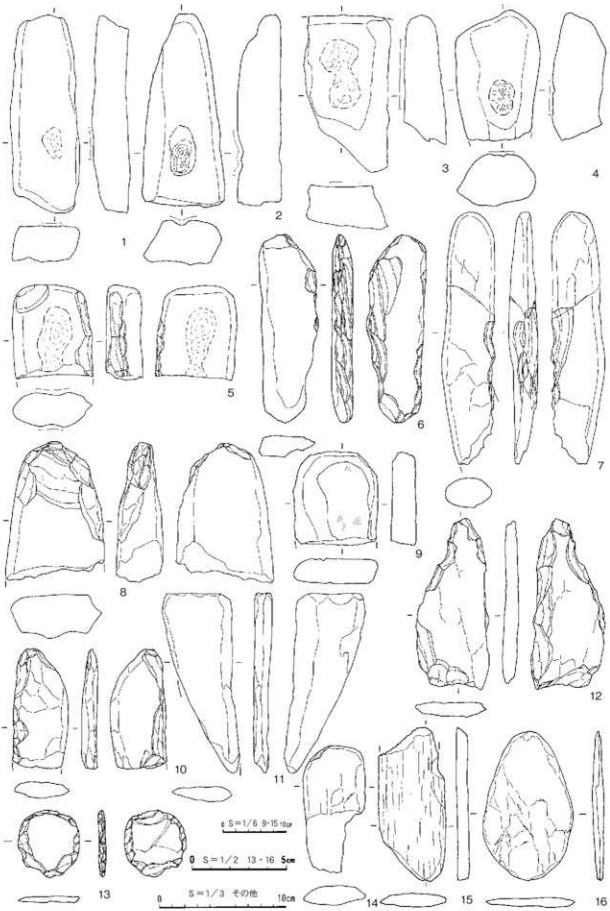


図52　遺構外出土石器（2）

４　土製品類（図 53、写真 44）

小型土器・ミニチュア土器（53- 1～12・17）　1は小型土器胴部～底部で、上端に欠損部との接合面がある。現存する器形は底部から上に向かってラッパ状に外反するが、上端外縁の形状から欠損部は内反していくものと思われる。ＬＲ縦縄文を施す。２～12は小型土器底部で、縄文を確認できたもの５点、無文のもの６点の出土である。縄文を確認できたもののうちＬＲ縦回転施文が５点、ＲＬ縦回転施文が１点である。これらの施文方向から縄文時代中期末～後期初頭のものである。17はミニチュアの壺型土器の頸部と思われる。口縁端部は欠損しているが外反していくものと思われる。

異形土製品（53-13・14）　いずれも全体の形状や用途が判然としないため、異形土製品として報告する。13は用途不明の土製品である。ラッパ状に開いた上部に長軸３～4mm 短軸 2mm 程の貫通孔が２箇所現存する。欠損部で類推できる箇所も含めると、少なくとも６箇所の貫通孔が存在したものと思われる。穿孔には棒状の道具を土製品本体の外側から刺し込んで使用したと考えられるが、その際ラッパ状部分の反対側まで差し入れてしまったと思われる箇所が２箇所確認できる。14は土偶の一部とも考えられるが詳細は不明である。表面を丁寧に磨いてある。

焼成粘土塊（53-15・16）　総数２点出土した。粘土を握り潰したようなヒビがあり、焼成は軟質である。

泥面子（53-18）　時代を特定できないが、モチーフから近代（20 世紀代か）のものと推測される。

（宮嶋）

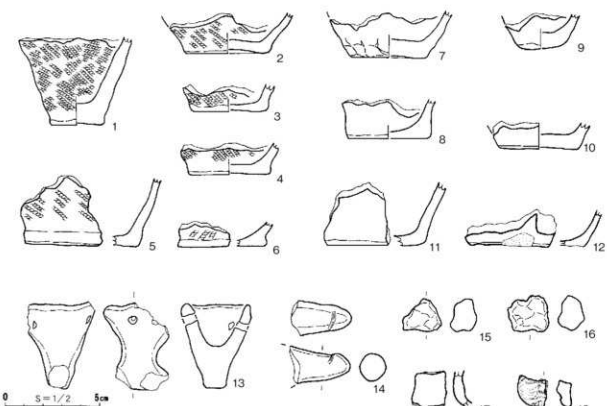


図53　遺構外出土土製品（１）

北区（沢）

北区は沢を中心とした斜面地で東側斜面は急な傾斜、西側斜面は緩やかな傾斜となる。ただ、西側斜面は、図3の沢基本層序で図示したとおり、斜面上部から沢の傾斜地にかけて削平され、とくに斜面上部の緩斜面地にかけて大きい。削平された土は沢の傾斜地や上部を埋めるのに使用されたようである。沢はもともと水の流れが見られる上に、上流にある家屋からの生活排水の捨て場としても利用され、常に水が流れている状態であったため、沢底を形成する礫層は露頭していた。遺物は主に沢の東側斜面際・緩傾斜地で多く出土し、主な時代は縄文時代中期末～後期初頭、後期前葉の土器である。

1　土器（図 54 ～ 71、写真 32 ～ 38）

縄文時代

早期中葉（54- 1～8）口縁部のみに文様を施文する鳥木沢式（54-1・2・4・5）と、胴部に文様を施文する物見台式（54-3・6・7）、型式を特定できないもの（54-8）に分けられる。54-1a・1b・1cは同一個体で、口縁形状はやや波状を呈し、波頂部に三角形状の突起部が三箇所つく。口縁部文様帯は貝殻腹縁を斜めにして密に施文する。胴部は無文になると思われる。内面は口縁部から胴部にかけて貝殻条痕文で隙間なく施文される。54-2・4は文様構成や器形・胎土から鳥木沢式に近いものと思われる。54-2の口端はほぼ平坦で、54-4の器形はやや内湾する。54-5も刺突文による文様帯区画があることや胴部に文様が見られないことから鳥木沢式と思われる。この土器片は内面に格子目状沈線を施文する。54-3・6・7は貝殻腹縁文・沈線・刺突で文様構成されたもので 54-6は内面に貝殻条痕文が横位に施文される。54-8は内外面とも無文で、外面にヘラ状工具によるミガキが確認される。器形から砲弾形よりも口径・胴径ともに大きくなると思われ、乳房状の底部に近いものと思われる。

中期後半（54- 9・10・24 ～ 26、55- 8）

54-24 ～ 26 は隆線文や弧状沈線文から榎林式に相当する。

54- 9・10 は刺突文を口縁部に巡らす一群で、最花式に相当する。54- 9は円形刺突を、54-10 は斜めに施文した刺突を施文する。

55- 8は折り返し口縁だが、折り返し部分の幅が厚く、折り返し部分の器厚も薄いことから、中期後半に相当する。

大木 10 式併行期（54-11 ～ 21・29）

口縁部に肥厚した楕円形状の突起がつくもの（54-11 ～ 13）は、縦位につくもの（54-11）と横位につくもの（54-12・13）がみられる。いずれも突起の内側に刺突文を列状に施文する。54-14・15・29 は刺突文を施文する一群で、54-14 は縦位に、54-15 は粘土粒の周辺に、54-29 は口縁部に刺突文を施文する。54-29 は口端が内傾し、ほぼ平坦となる。54-17・18 は縄文施文部分と無文部分の境に隆線文で区画する一群である。隆線文から大木 10 a 式併行期に相当するものと考えられる。

54-16・19 ～ 21 は、磨消縄文を施すもので、磨り消し後、稚拙な沈線文で施文される。54-16 は縦位・横位にJ字文が展開する文様構成と考えられ、どちらかといえば後期初頭に近いものである。

後期初頭（54-22・23、27・28、図 55- 1～7、55- 9 ～ 14）

粘土紐を貼付ける一群（54-27・28、55- 1～3）で、粘土紐の上部に縄文原体を施文するもの（54-27

・28)、粘土紐の上部に刺突文を施文するもの（55−１～３）が見られる。55−１は波状で、口縁部で、口縁部文様帯は縄文原体を三条に平行させ押圧する。波頂部から垂下する部分に縦位の粘土紐を貼付け、口縁部と胴部の文様帯区画にも横位の粘土紐を貼付ける。胴部は沈線と縄文原体で施文された文様構成で一部Ｊ字文が展開する。55−２・３は粘土紐の上部に刺突文が施文され、55−２は粘土紐を貼付けた部分にも刺突列が施文される。55−４ａ・４ｂは口縁部と口縁部文様帯区画に刺突列が２条施文される。刺突は右方向から左方向に向かって斜めに施文されており、工具により粘土の押し出された部分はめくれ上がっている。文様構成は円形文とこれを中心にした弧状文が展開している。縄文原体を押圧する一群（55−10・11・14）は口縁部（55−10・11）や文様帯区画（55−14）に施文しており、粘土紐を貼付ける一群や刺突列を施文する一群と同じく、八戸市牛ケ沢（３）遺跡第Ⅲ群土器に相当する。

折り返し口縁を有する一群（55−５～７）は折り返し部分が厚く、口端部も平坦に整形される。折り返し部分にも縄文原体の施文がみられることや、直線状の文様展開が推定されることから、六ヶ所村沖付（２）遺跡第Ⅲ群土器、青森市蛍沢遺跡出土の３群土器に相当する。

55−９は口縁部に浅い沈線文を施文するものである。55−12は口縁部の波頂部に粘土粒が貼付けられる。55−13は鉢形土器で口端は三角形状、口縁部はやや外傾する器形である。胴部は異条縄文を施文する。

中期末～後期初頭（55−15、図56～60）

55−15は手づくねによる土器で、器厚が非常に厚い。第39号竪穴住居跡の堆積土でも同様の破片が出土しており（34−20）、中期末～後期初頭の可能性が高い。図56～60は地文縄文のみを施文する一群で、おもに縄文原体を縦方向に施文する一群である。一部原体を別方向に回転させることによって文様を構成するものもみられる（56−１・５、57−１、58−２・５）。56−１の一部は口縁部から胴部下半にかけて、撚りの異なる原体を縦方向に施文している。56−５、57−１、58−２・５は、口縁部の周囲のみ同一原体を横方向に回転施文する。

器形は、全体の器形を見ると、底部から口縁部にかけて緩く外側に開き、口縁部に土器の最大径がくるものがほとんどである。56−２は口端が先細る形状で、口縁部付近の縄文施文では同一の原体を横方向に回転施文している。58−１は口端部に縄文原体が回転施文される。58−５は、口縁部がやや波状を呈し、胴部下半は無文である。胴部上半に最大径がくるものは58−４で、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口端は平坦である。胴部上半にのみ縄文原体が粗く施文される。胴部中央から下半にかけて最大径がくるものは59−１で、口縁部に横位に、胴部は縦位に施文された結節文がみられる。

口縁部が外反するもの（56−１～３、58−１・５、59−１）、口縁部の一部が内湾するもの（57−１、58−４、59−２）、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの（56−４・５、57−２～７、59−３・４）、口縁部が外傾するもの（58−２・３）などが見られる。このほか、57−５は外面を赤彩している。57−６は内面に沈線文が見られる。底部は輪積痕の観察できる個体が多く、ほとんど外傾接合している。縄文原体は縦位に施文される。底外面は網代痕の痕跡が残るもの（60−１・２・７・８）がみられる以外は無文である。

後期前葉（図61～65）波状口縁で沈線が施文されるもの（61−５～７）で、61−５は波頂部の直下に粘土粒を貼付けている。口縁部には円形文を組み合わせた文様が施文される。61−６・７は波頂部に沈線

により矢羽状文が施文される。以上の一群は後期初頭の要素を備えた十腰内Ⅰ群土器で古手に相当するものである。

61-４は沈線が二条単位で展開し、弧状を描くもので、三条単位のもの（61-13）、浅い沈線のもの（61-12）もみられる。61-８は波状口縁で口縁部が肥厚し、波頂部に粘土紐を貼付けるものである。61-９～11は円形文と長楕円形文を横位に巡らせ文様帯区画とする一群で、文様部分が肥厚するものである。胴部は61-９が無文、61-10・11が単軸絡条体を施文する。以上の一群は十腰内Ⅰ群土器でも、前段階の十腰内Ⅰａ群土器に相当するものである。

二条単位の沈線内にハケメ状沈線や縄文を充填させるもの（61-１～３・14・15、62-１～17）、61-１～３は口縁部分で強く外反する器形で、２～４条沈線で文様を施文し、その区画内に縄文を充填させる。いずれも胴部上半に文様が展開する。61-１は四単位構成の口縁部で、外反した口縁部が肥厚する。波頂部には棒状工具により押圧施文される。61-３は胴部中央に組み合わされた渦巻状文を施文する。ハケメ状沈線を施文するのは61-14である。渦巻状文が展開するのは61-15で沈線間に縄文を施文する。61-５は方形と長方形文の文様構成である。弧状文と横位直線文、これらを繋ぐ縦位直線文で構成されるものは62-10・11・15・16である。横位に展開する直線文を主体とする文様構成は62-１～４・６～９・12～14・17である。62-１・５は口端部に棒状工具による刺突文が押圧される。浅鉢形土器では、65-２～４が２条～３条単位沈線内に縄文を施文する。壺形土器では65-９が肩部から胴部上半にかけてハケメ状沈線を用い弧状の文様構成を展開する。胴部下半は無文である。口縁部は頸部に二条の粘土紐が貼付けられ、断面形は台形状である。65-９と同一個体ではないが、同様の器形や製作方法である65-７も同じ範囲に含める。以上の一群は十腰内Ⅰ群土器でも、後段階の十腰内Ⅰｂ群土器に相当するものである。

胴部に地文縄文のみ施文するものは、62-23・24、図63・64、65-１・８・10である。折り返し口縁に縄文原体を回転施文するものは63-２・４・５で、折り返し部分に施文した縄文原体の施文方向と胴部の施文方向が異なる。63-１・３は折り返し部分が無文で、胴部は縄文原体を縦に回転させている。器形や縄文原体の施文方向などから、後期前葉でもより後期初頭に近い時期のものと考えられる。

口縁部に二条沈線を横位に施文するもの（62-20～22）、一条沈線を横位に施文するもの（62-23）、縄文原体を横位に押圧するもの（65-１）、折り返し口縁をもつもの（62-24、64-４、65-10）、口縁部に無文部分のあるもの（64-７・９～11）は、口縁部と胴部の文様帯を区画する意図が見られる。胴部には単軸絡条体・単節縄文・ハケメ状沈線などが施文される。

口縁部から胴部にかけて全体に施文されるものもある（64-１～３・５・６・８）。64-１は、折り返し口縁の上から単軸絡条体の施文を行っており、文様帯の区画が意識されないこともあったものと思われる。口縁部に刺突文が施文される62-18・19、壺形土器65-５・６は後続する土器群に近いものと思われるが、以上の一群は十腰内Ⅰ群土器に相当するものである。

後期後半（66-１～19、67-７～12、68）

66-１～３は肥厚した山形突起と口縁部は横走する沈線と縄文原体を施文する磨消縄文の一群である。十腰内Ⅱ群土器に相当する。

66-５～８は同じく縄文原体と横走する沈線に磨消縄文が施される。66-10・11は無文の口縁部突起で全面に丁寧にミガキが施される。66-12・13は鉢形土器の破片と思われる。66-９・14・15は内湾す

る器形である。66-18・19は注口土器で66-18は胴部上半、66-19は注口部分である。外面は丁寧なミガキが施される。67-７～12、68-１～３は地文縄文のみを施文する一群で、口端はいずれも平坦面を作出する。口縁が内湾するものがほとんどで、67-11は外側に緩やかに開く器形である。地文縄文は異なる縄文原体を交互に横回転させて羽状縄文になるよう施文する。68-２・３は１つの縄文原体を施文している。67-12は口縁部に２個の突起がつく。台部は68-４～７である。沈線を施文するもの(68-５)、縄文を施文するもの(68-６)、内外面が丁寧に磨かれているもの(68-７)などがある。68-８～14は無文又は地文縄文のみ施文された底部の土器である。68-13を除くといずれの底外面にも高台がつく。以上の一群は後期後半に相当すると思われる。

66-17は瘤付の破片で、沈線間に細かい縄文原体が施文され、壷の頸部と思われる。十腰内Ⅴ群土器に相当する。

晩期(66-20～31、67-１～６)

67-４は鉢形土器で、文様構成は玉抱き三叉文が平行沈線化する文様構成であり、大洞BC式に相当する時期の土器である。

67-１は、口縁部に２個１組で突起がつく。口縁部の文様帯には横走する二条沈線間に刻目が密に施文される。胴部には単節の縄文原体が施文される。底部は上げ底状になる。67-５・６は鉢形土器で、口縁部が外側に屈曲する器形で、横走する沈線間に刻み目状に刺突が施文される。66-20～24は２条の沈線で施文された間に刺突文を施文するもので、66-20は横走する沈線に縦位の弧状沈線が施文される。文様構成からは大洞C１式に相当する。

67-２は注口土器で、全体に丁寧なミガキが施され、雲形文が施文される。67-３は67-２と同一個体の可能性がある。文様構成から、大洞BC式に相当する。

66-25は内外面とも丁寧に磨かれている。66-26は浅鉢形土器で、口端には棒状工具による刺突文、口縁部には半裁竹管状工具による横位押し引き文が施文される。66-27は浅鉢形土器で、内面に沈線が一条横位に施文される。66-28は鉢形土器で口縁部に沈線が横走し、地文縄文は縦走する。66-29は壷形土器の口縁部で、口端部に縄文原体が回転施文される。66-30は壷形土器で、胴部上半に主に横走する沈線と縄文原体の回転施文によって構成される文様で、文様部分が肥厚する。66-31は広口壷で、外面は丁寧に磨かれる。沈線施文による文様構成である。これらは文様構成から晩期後半に相当する。

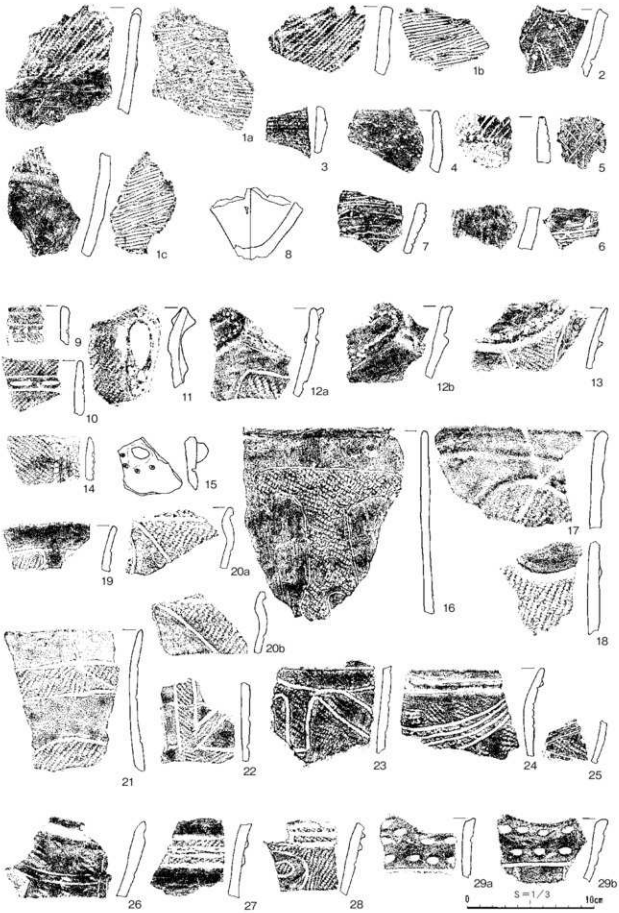


図54　遺構外出土土器（3）

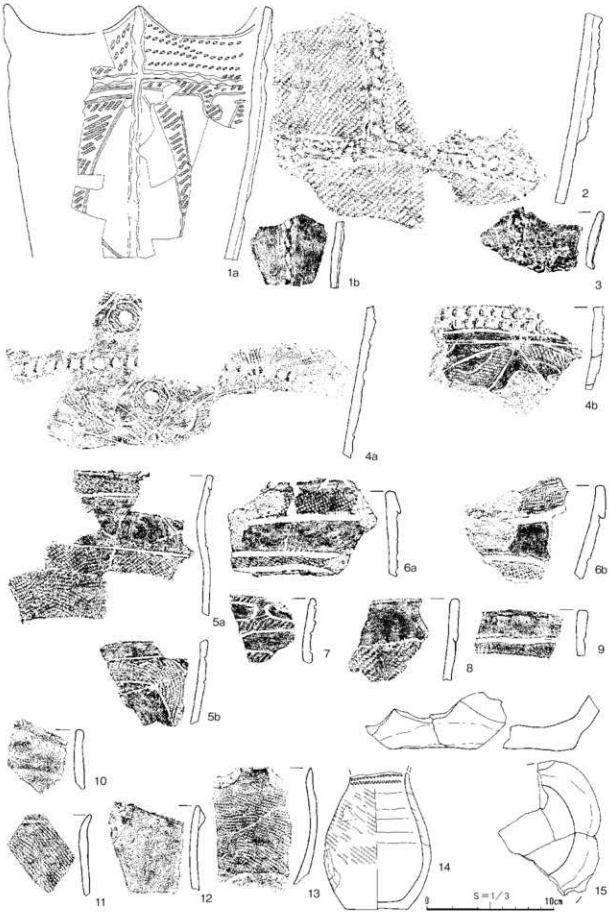


図55　遺構外出土土器（４）

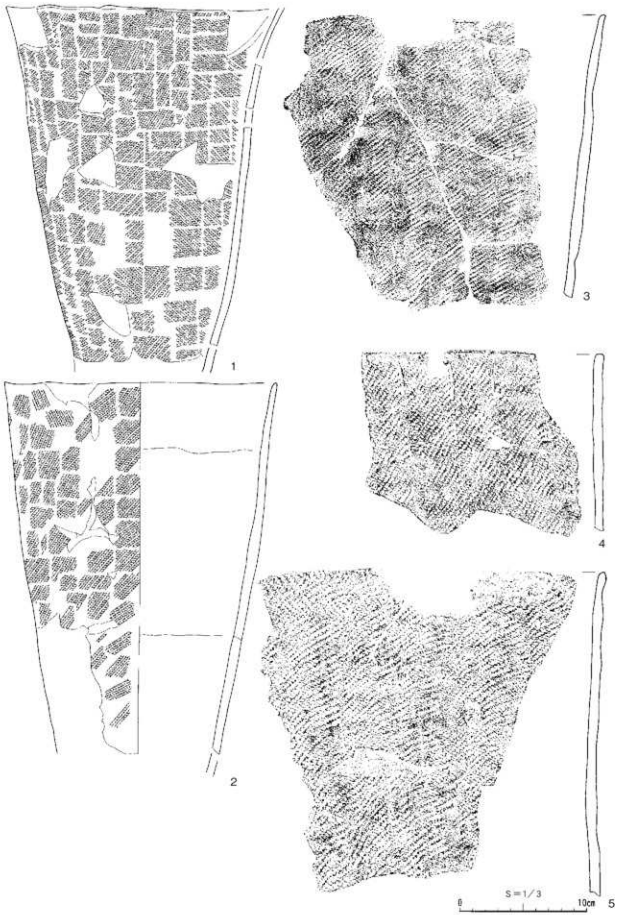


図56　遺構外出土土器（5）

図57　遺構外出土土器（６）

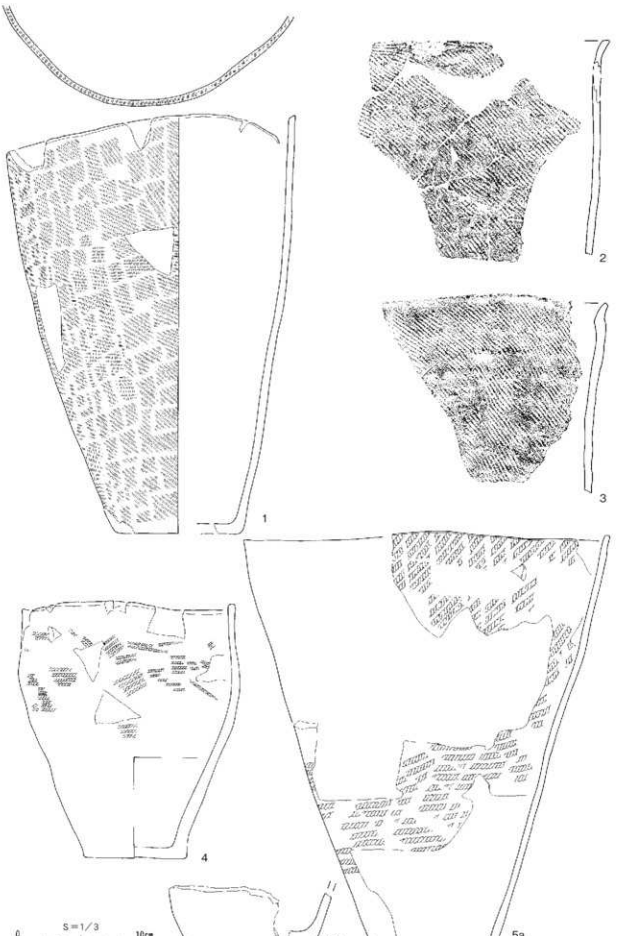


図58　遺構外出土土器（7）

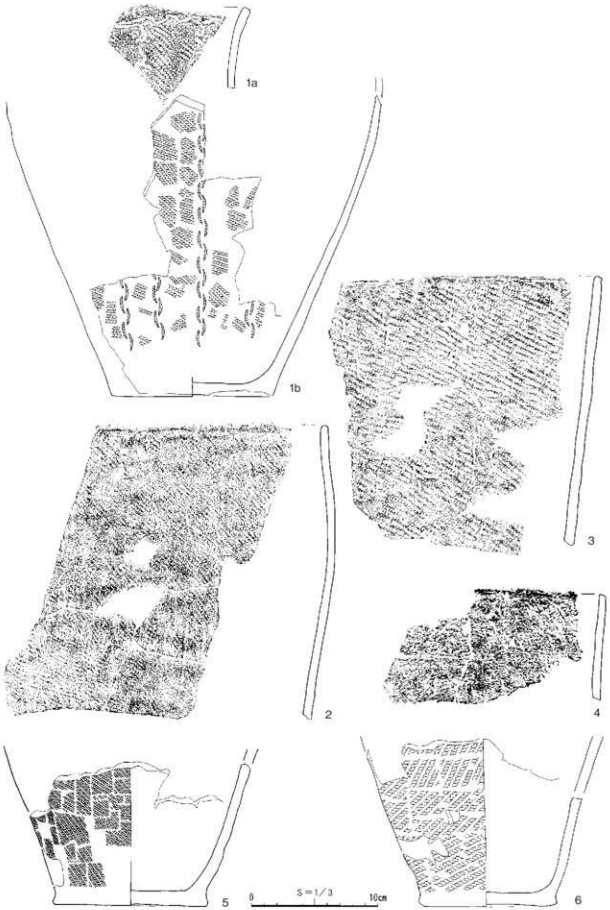


図59　遺構外出土土器（８）

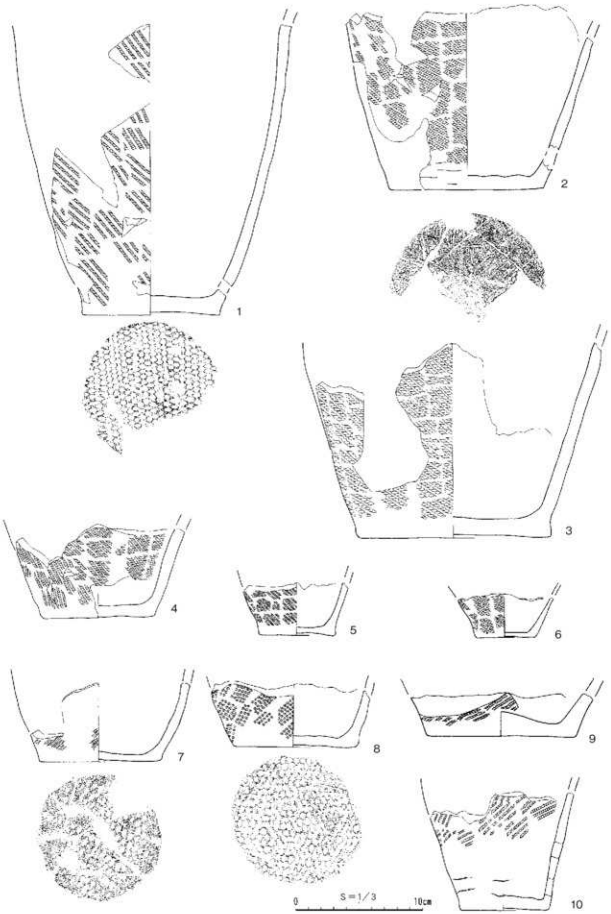


図60　遺構外出土土器（9）

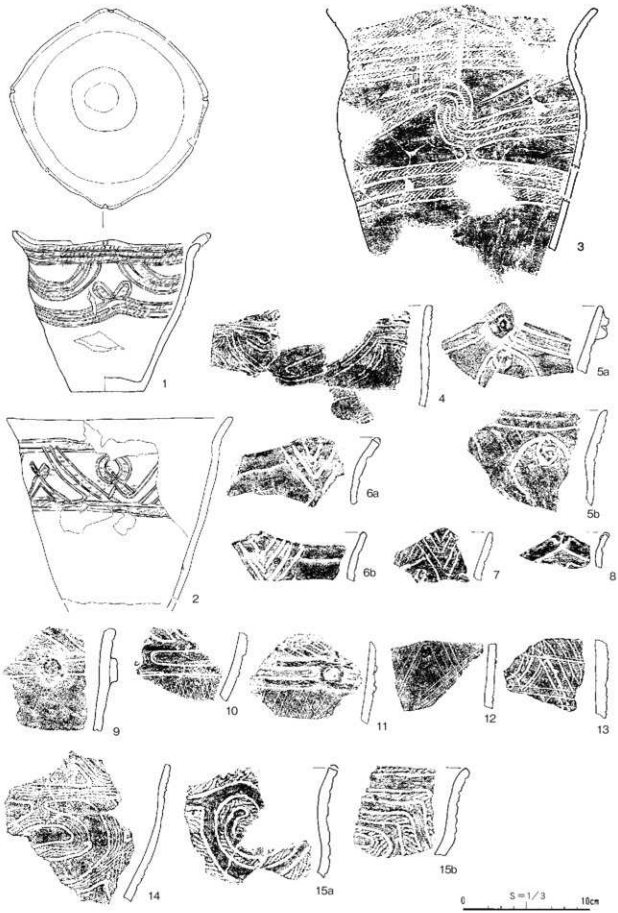


図61　遺構外出土土器（10）

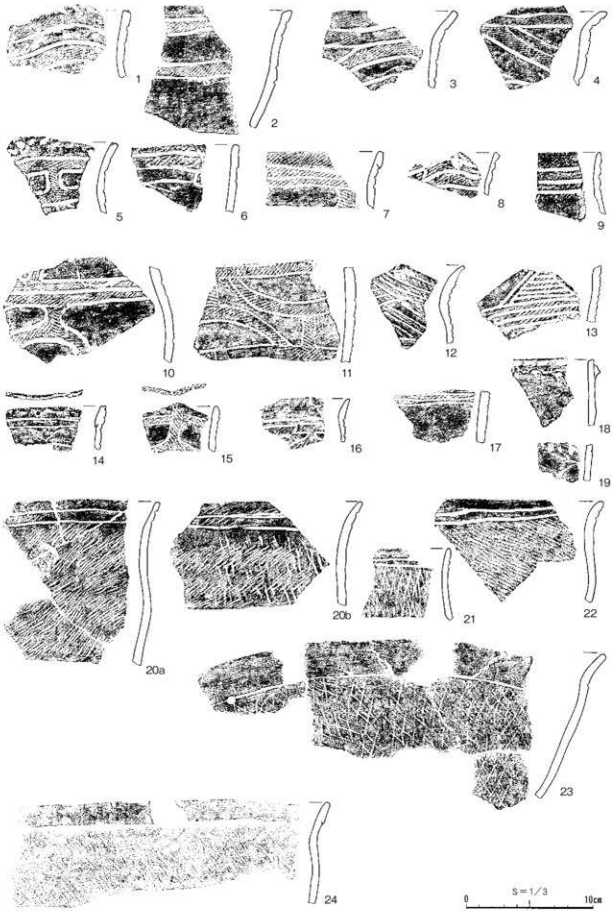


図62　遺構外出土土器（11）

図63　遺構外出土土器（12）

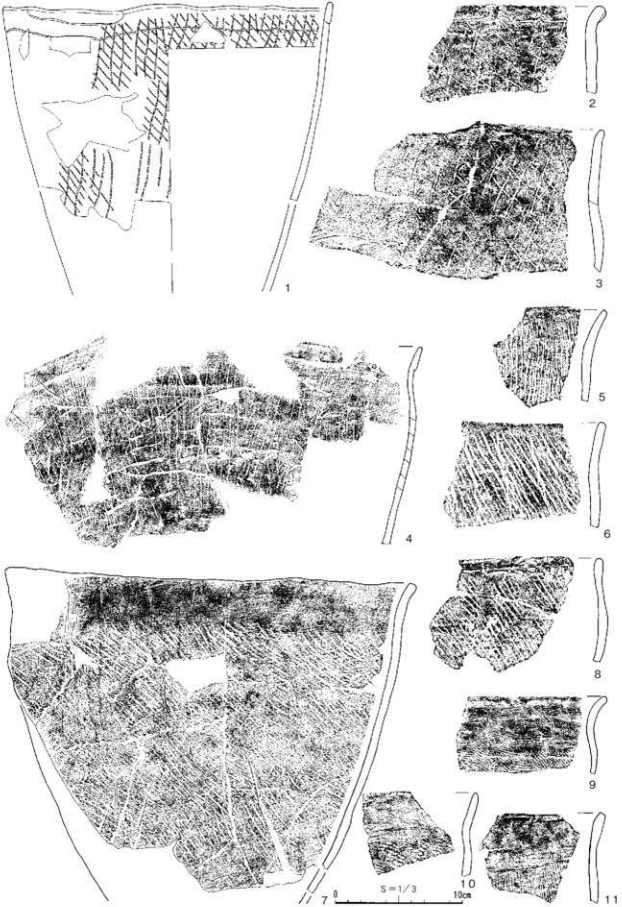


図64　遺構外出土土器（13）

図65　遺構外出土土器（14）

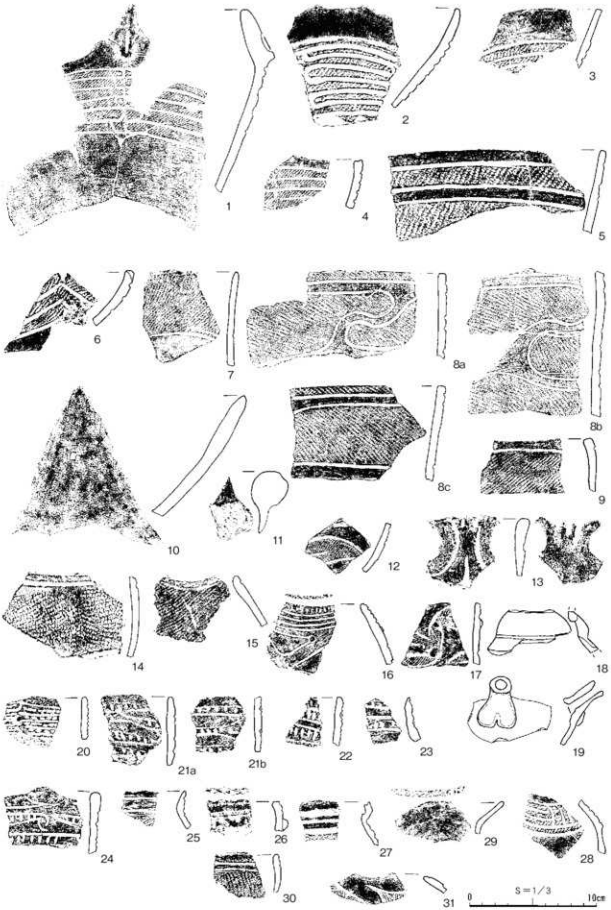


図66　遺構外出土土器（15）

図67　遺構外出土土器（16）

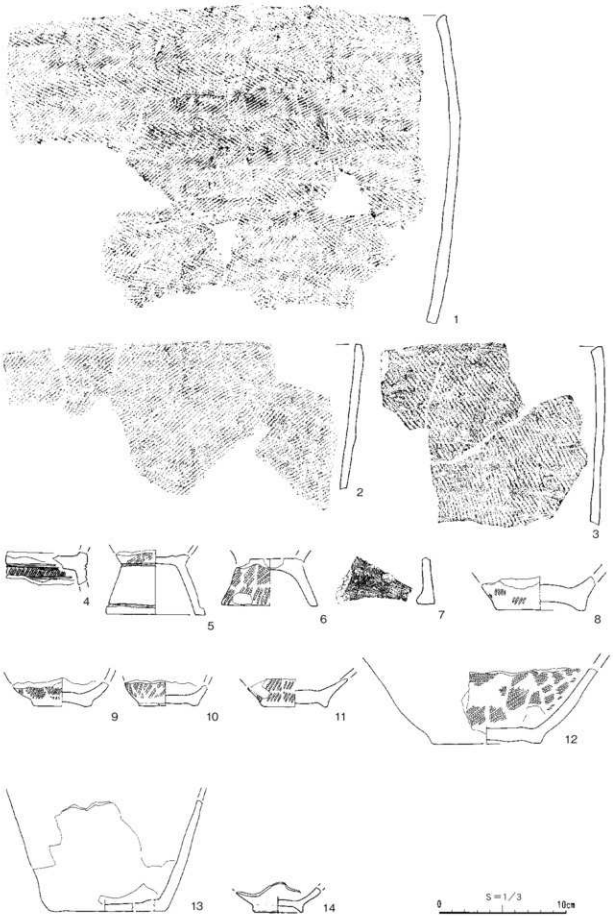


図68　遺構外出土土器（17）

弥生時代（図 69 ～ 71）

69-１は口縁部に刺突文が列状に施文され、頸部が丁寧に磨かれ無文である。口端は平坦に作出する。胴部は縄文原体を縦走させる。69-３は二条～三条一組で長楕円形状の文様、横位沈線文様を施文する。胴部には撚糸文を斜めに施文し縦走させる。69-４は五条一組単位の沈線を二組横走させる。地文縄文は単節縄文を斜めに施文する。口端にも縄文を施文する。69-５～７は横走沈線と山形沈線で構成される文様である。69-７は外面が赤彩する。69-８は沈線で区画された内部に刺突文を施文する。69-11 は口縁部に横走沈線が一条、口縁部と胴部文様帯区画に横走沈線が二条施文される。69-９・10 は、二条の沈線間に交互刺突文を施文する。沈線文は三角形文の文様構成をなす（66-10）。胴部は帯縄文が施文される（66-9）。69-12 は口縁部と胴部の区画に沈線文が一条施文されるものである。口縁部から胴部にかけて全面に施文するものは、69-14 ～ 16 である。69-14 は縄文を横走させるもので、69-14・16 は口端に縄文施文する。口縁部が無文の甕は 69-17・70-１～ 13 である。口縁部は外面にミガキやナデ調整が施される。内面にミガキが顕著なのは 70-８である。口端に刺突文を施文するもの（70-11 ～ 13）がある 70-14 ～ 17 は口縁部付近と胴部に縄文が施文されるもので、焼成が軟質のものである。器面は凹凸があり内外面の調整も粗い。70-18・19 は、内外面ともハケメ状工具を使用し縦及び横方向に調整する。縦方向の施文を先に行った後、横方向の施文を行う。胎土は白っぽくシルト質で、焼成は軟質である。第 45 号竪穴住居跡の堆積土から出土した 41-６と同一個体の可能性がある。70-20・21 は胴部片で、帯縄文を施文する。71-１は無文の甕で、外面にミガキが見られる。71-２は高坏か浅鉢で、口端部に沈線が施文される。71-４は平行沈線と無文部の文様構成で、内外面とも丁寧に磨かれている。71-３・５・６は「変形工字文Ｂ」である。71-７は把手で、壷・高坏等に取り付けられるものと思われる。頭部が上を向き、鼻はやや尖り気味、耳は半円状であるが全体の形状からクマを表したものと考えられる。粘土粒で耳・鼻、刺突で目、沈線で肩や体部が表現される。把手部分は縄文施文後、二条の沈線に沿って斜めに施文した刺突列が並ぶ。71-８は鉢形土器で、口縁部に一条の沈線と山形沈線が施文される。71-９～ 17 は高坏の脚部で、三条単位の沈線を主体として平行沈線・波状沈線が施文される。71-17 は一条の平行沈線と波状沈線内に縄文が施文される。71-18 は縄文施文後、内外面にミガキが施される。

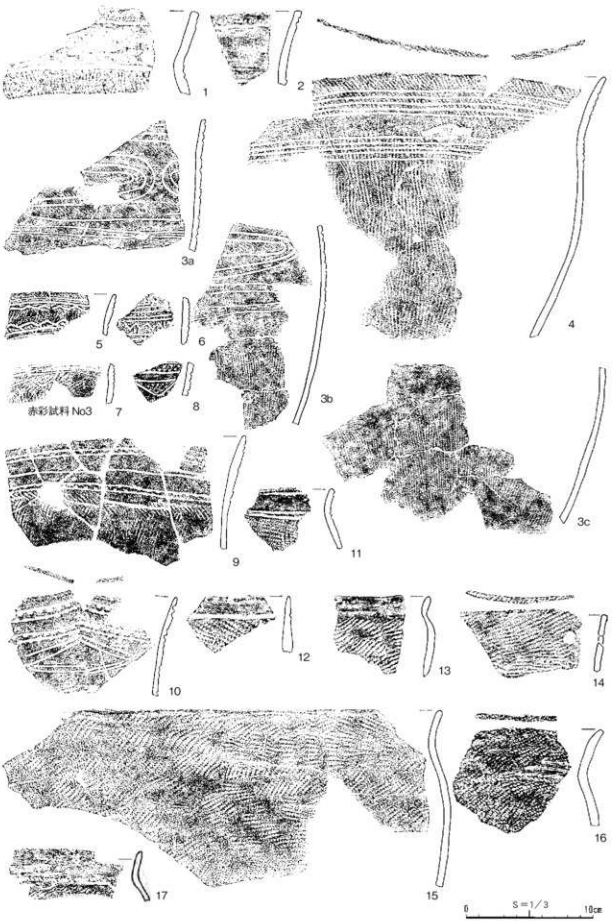


図69　遺構外出土土器（18）

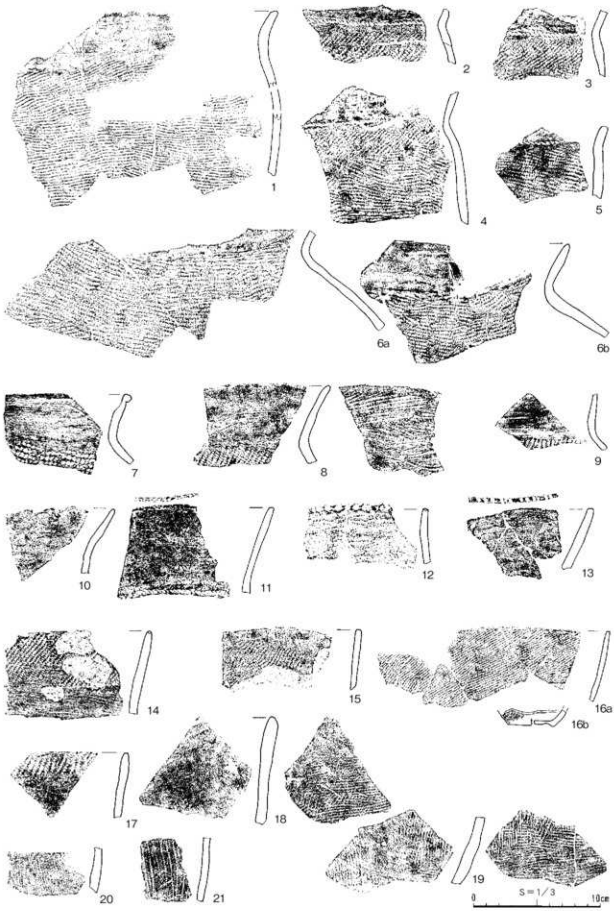


図70　遺構外出土土器（19）

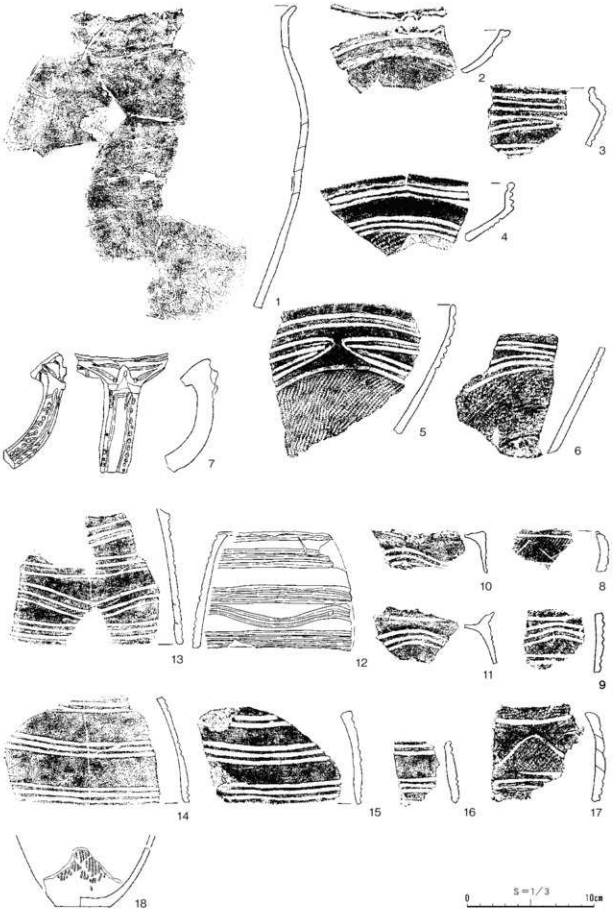


図71　遺構外出土土器（20）

２　剥片石器（図 72・73・74 －1～4、写真 41）

石鏃 18 点、石槍 1 点、石匙3点、石錐4点、二次調整のある剥片 23 点、微小剥離痕のある剥片 17 点、両極加撃痕のある剥片9点、剥片 106 点、砕片1点が出土した。石鏃（72-1～18）は、形状から凹基鏃（72- 1～5）、平基鏃（72- 6～8）、有茎鏃（72- 9～18）に分類される。72- 2は両側縁に刃こぼれ状の微細剥離痕がみられる。72- 4は先端が欠損している。72- 5は作りが粗く、左右非対称な形状である。72- 6・7は全面に加工が施されず、とくに 72- 6の裏面は周縁のみの加工である。有茎鏃でも基部の形状が異なり、かえしが直線的なもの（72-11）、茎部から基部にかけて丸味を帯びるもの（72-12～14）、基部先端からかえしまで連続しているもの（15～17）などに分かれる。72-18 は形状や加工から石鏃の未成品と考えられる。これ以外のものは先端が欠損したり、刃こぼれ状の剥離痕が多く見られることから少なくとも1回は使用されたものと思われる。

石槍（72-19）は横長剥片を用い両面加工している。断面形はやや左側縁が鈍角の刃部となっている。石匙（72-20～22）は、縦形2点、横形1点の出土である。縦形石匙はいずれも縦長剥片を用い、主に片面加工している。72-20 の摘み部は菱形状で刃部に比して大きいが、本来は刃部の幅長が大きかったものが使用により摩耗し、加工を繰り返したためと考えられる。72-21 の摘み部は長方形状で、刃部の加工はとくに下端を丁寧に行っている。72-22 は右側縁に刃部が長く加工されている。

石錐（72-23～26）は、摘み部を作り出したもの（72-23～25）、剥片の一端を加工したもの（72-26）に分けられる。72-23～25 は基部付近に全面加工を行い、基部から摘み部にかけても丁寧に加工している。72-26 は縦長剥片の尖端の周辺に加工を行っている。

二次調整のある剥片（72-27～31、73- 1～14、16～18）は、22 点を図示した。72-27～31、73- 1～11、73-16 は一部連続して急角度の刃部が作り出されているもの、73-12～14 は一部連続して鈍角度の刃部が作り出されているもの、73-17・18 は周縁を打ち欠いて剥片の形状を整えているものである。72-27～31 は側縁に二次調整を施すものである。72-26・28・30 は両面の側縁に刃部を形成する。72-29 は表皮を含む素材を使用している。72-31 は両面の一側縁に刃部を形成する。73- 1～11 は主に片面を加工するもので、一側縁を連続して加工する 73- 1・4・5・6・7・9・10・16、両側縁を連続して加工する 73- 3、一部を加工する 73- 2・11 などがある。73- 1・4・5・6は縦長剥片の打点の対辺に刃部を形成する。73-12～14 はいずれも片面加工で、下端に鈍角の刃部を形成する。73-17・18 は周縁から中心部に向かって打ち欠きしており、一部に細かい二次調整が施される。微小剥離痕のある剥片（73-15）は、1点を図示した。表皮を含む素材で、側縁の一部に痕跡が見られる。両極加撃痕のある剥片（74- 1～4）は4点を図示した。ほぼ方形状を呈し、74- 2は上下端部に微細剥離痕が顕著である。（坂本）

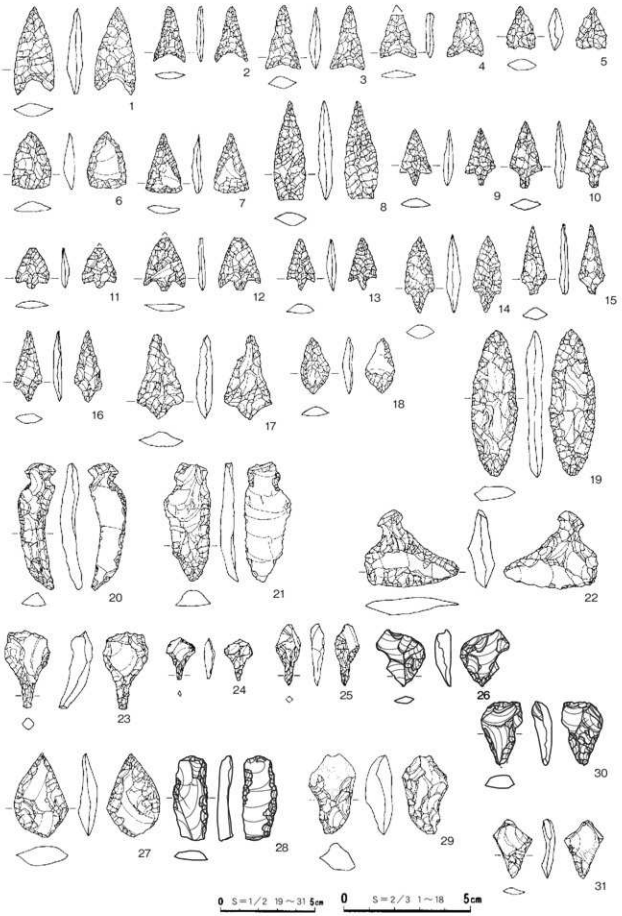


図72　遺構外出土石器（3）

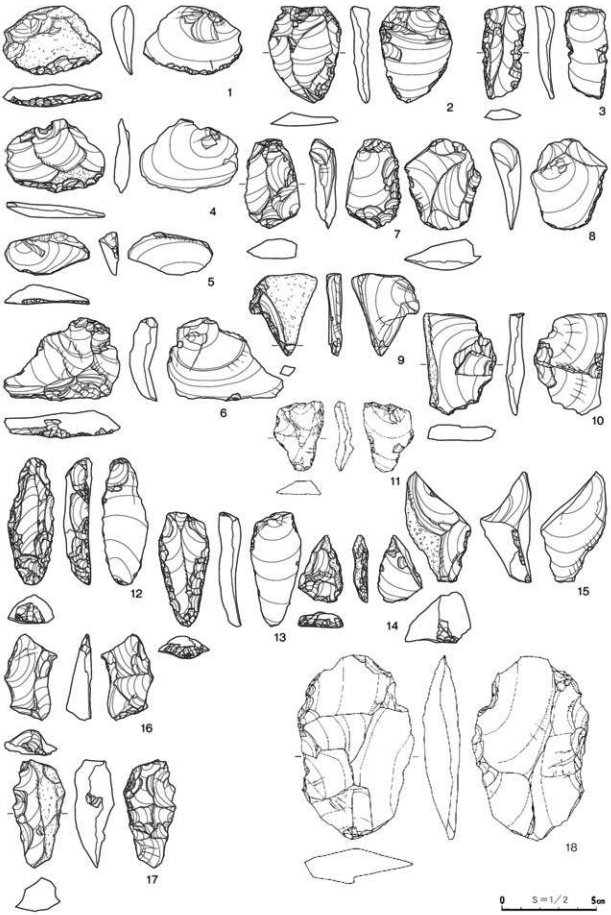


図73　遺構外出土石器（４）

3　磨石器（図74－5～12、図75・76・77・78、写真42～44）

磨製石斧が16点、石錘が3点、敲磨器が41点、石皿・台石類が13点、原材が1点出土した。74-5～12、75-1～6は磨製石斧である。74-7・8のような小型の石斧も含め、刃部の遺るものはすべて両刃の縦斧で、多少とも偏減りしたものが多い。74-6は偏減りを重ねたためか、刃先が尖り気味になっている。74-5・8・10・12の刃部には、刃こぼれ又は刃こぼれ状の微細な剥離痕がみられる。74-10は刃部に破砕したような著しい剥離痕がみられ、基部が折れているので、楔的な使い方をしたようである。同様に、基部を折損した75-1の刃部も破砕している。75-3・4は折れた基部側が遺ったものだが、75-4の基端部には敲打痕がみられる。75-5は折損した未製品又は再生品の類と思われるが、全面的に剥離痕と敲打痕が遺っており、剥離―敲打―研磨の作業工程が窺われる。75-6も片面（正面図側）に表皮を遺したまま、他の片面が全面的に剥離されて打製石斧に類するが、ここでは磨製石斧の未製品として取り扱った。この他、製品として使用された磨製石斧の中にも、整形のための剥離痕や敲打痕等の遺るものが多い。74-8は側縁部片側（正面図右側）が破砕した後、再整形のための剥離痕がみられる。75-7～9は石錘である。比較的扁平な小礫の短軸両端を打ち欠いて、糸掛け用の抉りを作り出している。75-8は抉り部分の剥離痕が一部摩耗している。75-10～13、76-1～12、77-1～10、78-1～5は敲磨器である。敲打痕、摩耗痕、擦過痕、研磨痕、剥離痕等が単独又は複合して遺されている。77-2・5・6、78-4等のくぼみ痕は敲打痕の集中によって生じたもので、77-7・9・10、78-1・2等のくぼみ痕の中心部等には同心円状の線条痕がみられる。77-9は破砕した側縁部にも摩耗した半円形の抉れ部分があり、そこにも線条痕がみられる。77-4のくぼみ痕の周辺部には敲打痕、中心部には同心円状の線条痕が遺る。礫の周縁部が使用されて摩耗痕・擦過痕が遺るものは、使用部分が面取りされた状態になったものが多く、76-10、77-1等のように摩耗痕・擦過痕の周囲に剥離痕を伴うものがある。75-11は磨製石斧の基部のような形態で、上端部とその近くに擦過痕がみられる。76-2の周縁部に遺る擦過痕は、敲打痕が複合したようにみえる。76-3・6は擦過痕や摩耗痕が遺る頁岩の小礫で、破損部分や摩耗痕の周囲に剥離痕が集中している。76-4・5は石錘に類した大きさと形態だが、周縁部に剥離痕や擦過痕がみられる。75-10は片面（正面図）が一部黒色に変色している。76-8は石皿・台石類の破片を利用したようである。78-1は周縁の一部に摩耗した剥離痕がみられる。78-7～14は石皿・台石類である。78-7・8は敲打痕や線条痕を伴うくぼみ痕が遺されて敲磨器に類するが、大きさと重量からみて台石とした。78-7は石皿等の破片を再利用したものかと思われる。78-9～14は比較的平たい大礫の片面に摩耗痕や擦過痕が遺された石皿の類である。78-11は周縁部が摩耗しており、78-13は周縁部に摩耗した剥離痕がみられ、いずれも整形したかのようである。78-6は頁岩の原材である。小礫だが、端部に大きな剥離痕がみられる。図示しなかった磨製石斧1点、敲磨器4点、石皿・台石類1点はいずれも小破片である。

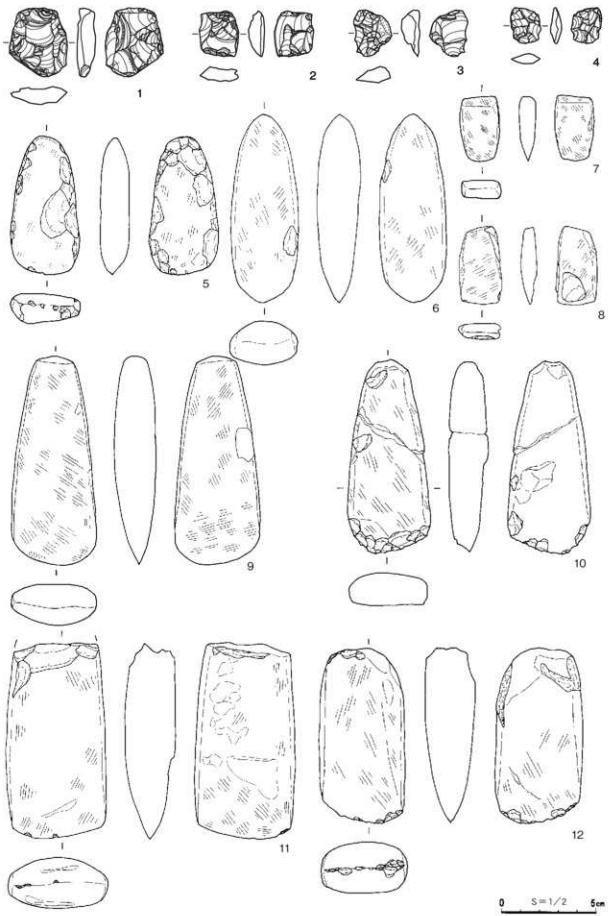


図74　遺構外出土石器（5）

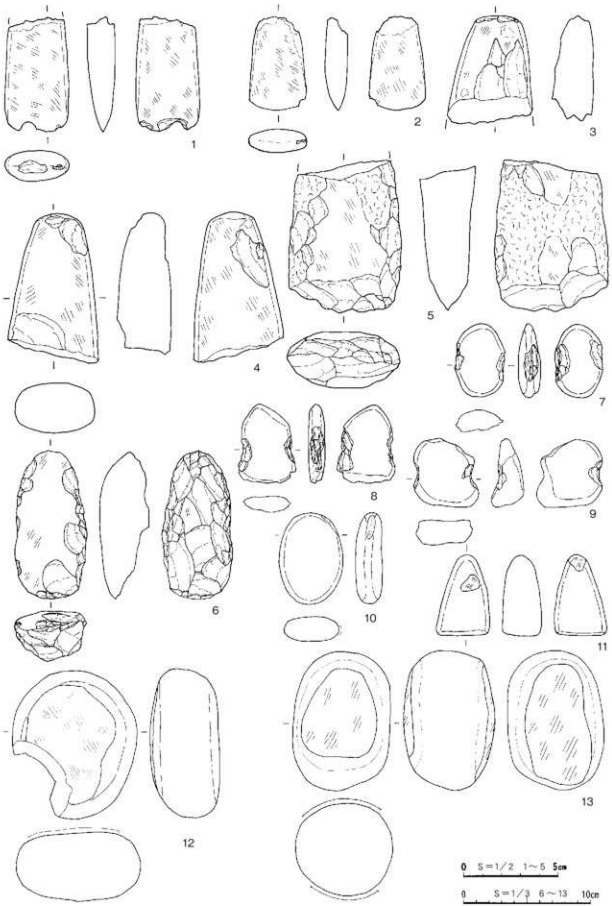


図75　遺構外出土石器（6）

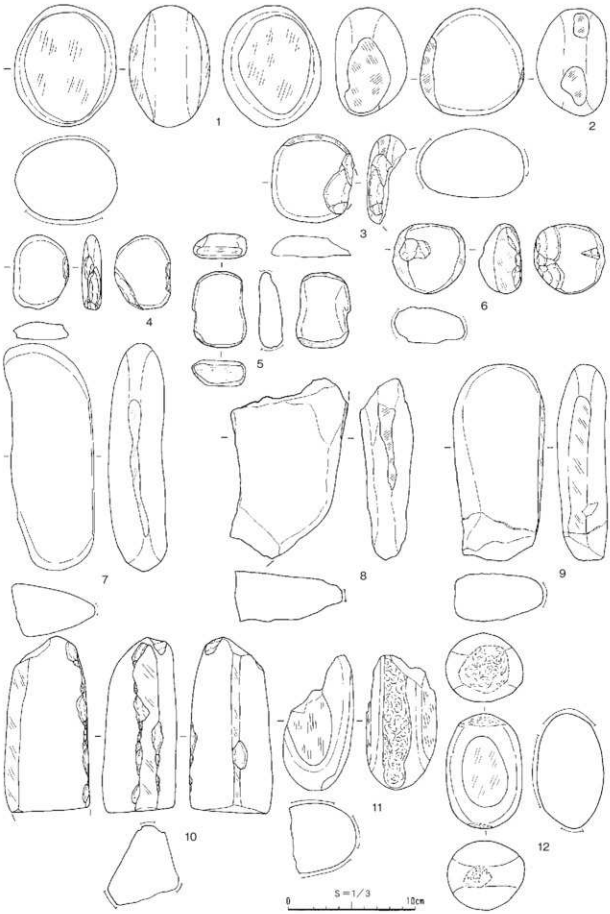


図76　遺構外出土石器（7）

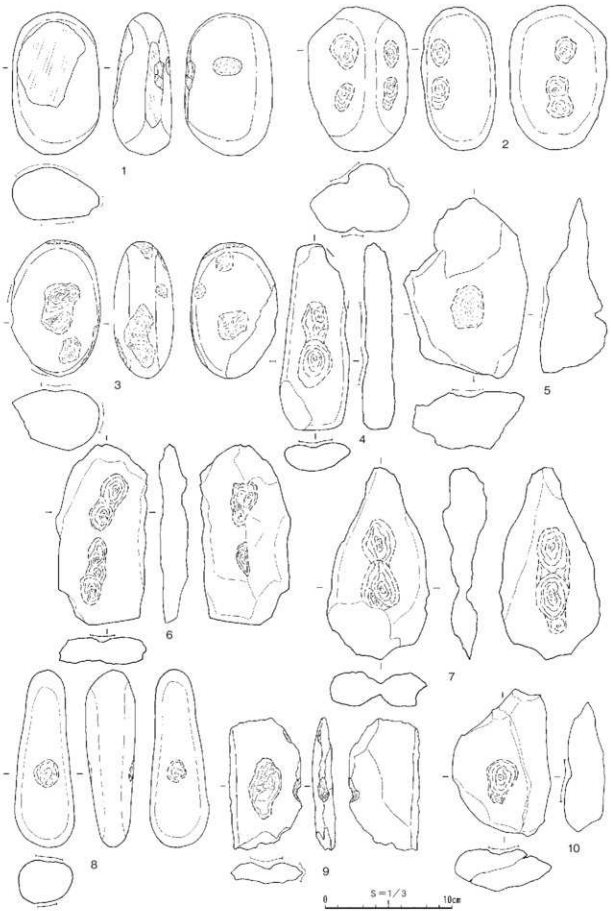


図77　遺構外出土石器（8）

図78　遺構外出土石器（9）

石製品（図 79・80・81、写真 43・44）

装身具が1点、円盤状石製品が3点、種別不明の石製品が6点、加工礫が 33 点出土した。81－8は装身具の一種とみられ、長径8㎜ほどの孔が両面から穿たれている。全体が楕円形に仕上げられており、短軸の一端が少し抉れているが、意識的に作り出したものかはっきりしない。79－1・2・9は円盤状石製品である。79－1・2は薄い板状の小礫を円形に打ち欠いたもので、79－2の周縁部には擦過痕もみられる。79－9は少し大きめの板状礫を擦って円形に仕上げたもので、周縁部には摩耗痕や擦過痕とともに一部剥離痕も遺されている。両面には刻線状の強い擦過痕が顕著で、線刻礫のようでもあるが図柄等は認めがたい。79－3～8は種別不明の石製品としたものである。79－3～5は厚手・円形の小礫で、周縁部は面取りされた状態まで擦られている。周縁部には摩耗痕・擦過痕が遺され、79－3・5では剥離痕もみられる。敲磨器の一種とすることも可能だが、これらの摩耗痕・擦過痕等は整形痕的な意味合いが強いので、石製品の類に含めた。79－6～8は全体形の不明な破損品だが同類と思われる。ただし、79－8はかなり薄手である。79-10 ～ 16、80－1～ 12、81－1～7は加工礫である。大半は不整形な棒状や板状の礫で、側縁部や端部に摩耗痕・擦過痕や剥離痕等がみられ、剥離痕は摩耗したものが多い。79-10 はかなり薄い板状の礫を方形に裁断したらしく、両面全体に研磨痕・擦過痕がみられる。側縁部が面取りされたように狭まって擦り切り具に類するが、実用的なものとは見なしがたい程薄手である。79-11・12・14・15 等も形態は整っていないが、同様に薄手である。79-12 は片面（正面図側）に少し擦過痕がみられる。79-13 は少し厚手で、石斧のような形状になっている。80－7も周縁部が打ち欠かれて、打製石斧のような形状である。80-10 は小型・棒状の類だが、尖端部がかなり摩耗しており、ドリルとしても使用できそうである。80-12 は大型の板状礫だが、側縁部（正面図右側）の一部が半円形に抉れてその部分が摩耗している。図示しなかった加工礫7点はいずれも小破片である。楕円状石製玉 (81-8) は中央部に直径 8㎜ 程の貫通孔を穿つ。穿孔には先端の丸い棒状の道具をキリの要領で回転させて使用し、この作業を製品の表裏から数回に分けて行ったものと思われる。石質はガス抜けや鉱物抜けによる多孔質の安山岩である。

（工藤）

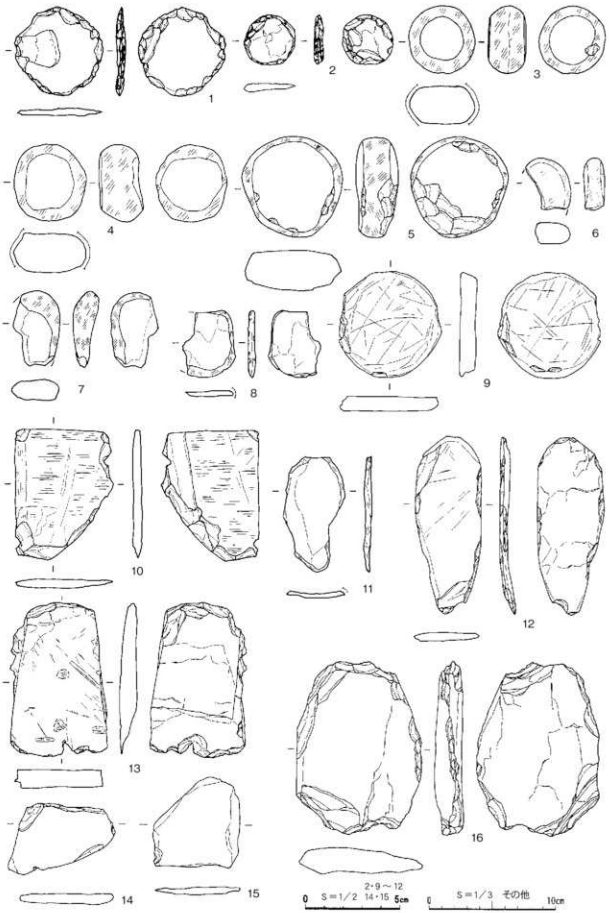


図79　遺構外出土石器（10）

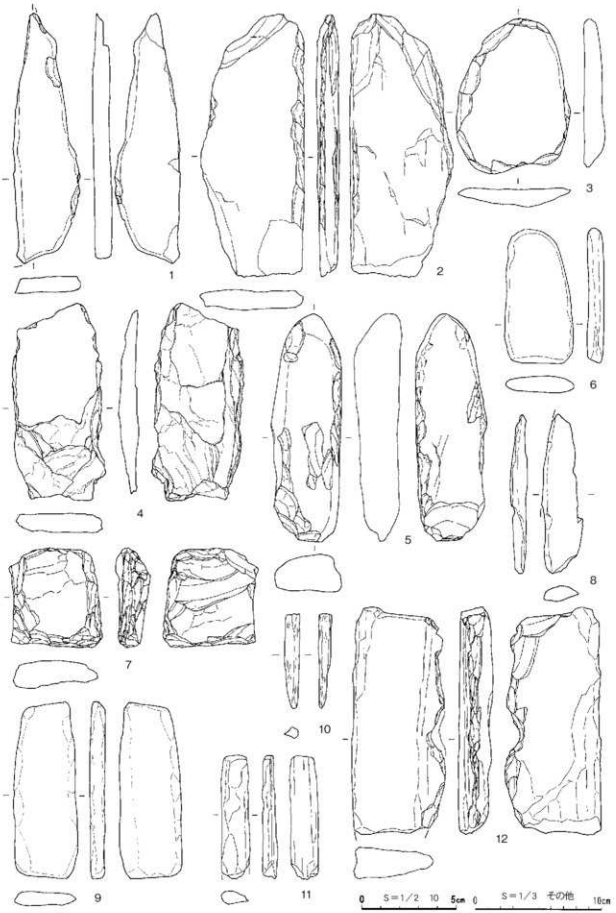


図80　遺構外出土石器（11）

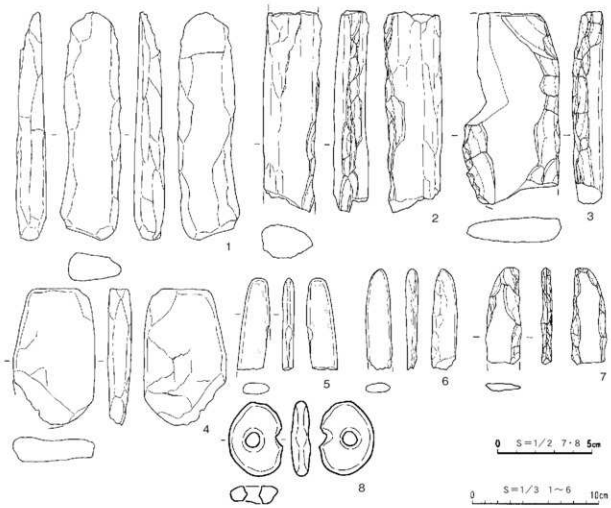


図81　遺構外出土石器（12）

4　土製品類（図 82、写真 45）

小型土器・ミニチュア土器（82-1 ～ 16・28）　1～4・8・9は小型土器底部で、縄文を確認できたものが4点、無文のものが2点の出土である。縄文を確認できたもののうち、ＬＲ縦回転施文が1点、ＲＬ縦回転施文が1点の他、ＬＲ横回転施文、ＬＲ斜回転施文が各1点である。 5は無文埦形の略完形小型土器で輪積痕が確認できる。10・12～16は小型土器の胴部である。10は小型の壷型土器の首部分で、沈線を施し外面を磨いてある。12は小型土器口縁部で、欠損のため定かではないが沈線による枠内にＬＲ縦縄文を施文するものと現存部から類推される。文様構成から縄文中期末の大木 10 式併行期のものである。14 では破断面のミガキが見られる。16 は高杯脚部の根元付近と思われる。脚部破断面に磨耗痕が見られることから、欠損後も何らかの形で使用されていたものと考える。 6・7・11・28はミニチュア土器胴部～底部で総数 4 点出土した。

円盤状土製品（82-17 ～ 23）　土器底部を利用したもの2点、土器胴部断片を利用したもの5点が出土した。文様別ではＬＲ縦回転施文が1点、ＬＲ横回転施文が1点、無文のものが1点のほか、22 ではＬＲ縄文を縦横斜回転混交で施文し、23 ではＲＬ縄文が表面中央を境に縦横回転二方向に施文され中央部には凹みが見られる。また、18・19 では素材となった土器の製作過程における網代痕が見られる。

土偶（82-24・25・29・30）土偶肩部、土偶脚部と思われる土製品がそれぞれ2点出土した。24 は頸部下から肩部、上腕部と思われる。頸部下前面に直径2㎜ 程の穿孔が7箇所確認でき、表面は丁寧に磨かれている。25 は頸部左下から左肩部、左胸部と思われる。肩部前後に直径2㎜ 深さ2～5㎜ 程の穿孔が四箇所ずつ、胸部隆起頂部に直径2㎜、深さ2㎜ 程の穿孔が一箇所確認できる。29 では胴部への取り付け箇所が湾曲しており、四肢動物の脚部かと思われる。30 では内部空洞で、底面は舟形を呈している。

土製装飾品（82-26）　直径約2㎜ の貫通孔を穿つ勾玉状土製玉が1点出土した。

三角形土板（82-27）　三つの脚部をもち、表面中央から各脚部に向けてわずかに丸みを帯びながら内反する三角形の板状の土板である。三脚のうち一脚を欠損するが、現存すればほぼ二等辺三角形を呈すると予想される。一般に土偶から派生したものとも言われるが本遺物からはその用途が判然としない。

泥面子（82-31・32）　総数 2 点出土した。南区出土遺物同様、時代を特定できないが、モチーフから近代（20 世紀代か）のものと推測される。　（宮嶋）

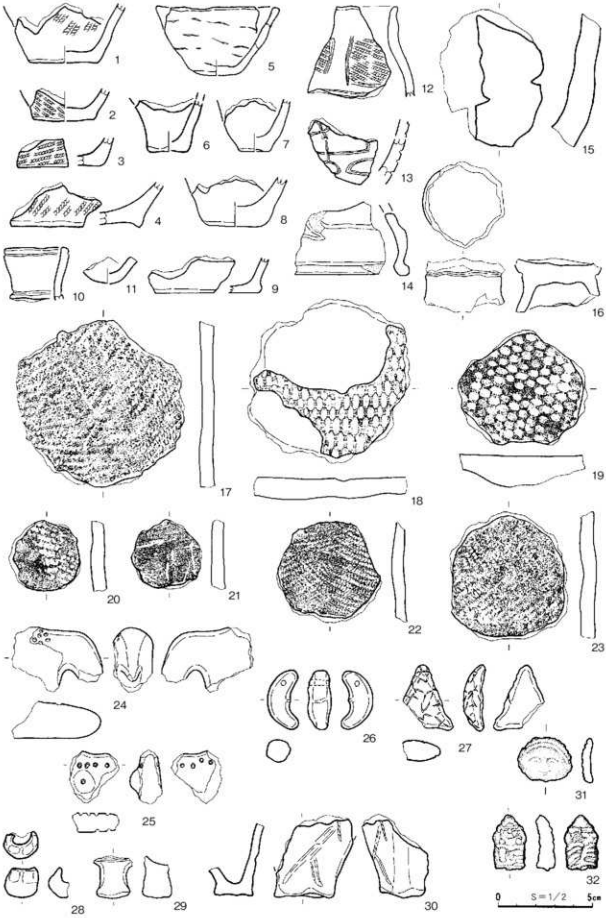


図82　遺構外出土土製品（2）

第４章　理化学的分析

第１節　田代遺跡の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴　正敏

田代遺跡より採集された、火山灰サンプル（3 試料）について、以下の観察を行った。これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。

ガラスの形態及び共存鉱物（表1）より、試料 1,2 及び 3 の 3 試料は、十和田二の倉テフラ、十和田南部テフラ及び十和田中掫テフラ起源のガラスよりなる。これら 3 試料には、暗褐色の苦鉄質ガラス（スコリアガラス）のほか、発泡度が普通の軽石ガラスが認められる。ホルンブレンドが認められないことより、十和田八戸テフラの混入は無いものと考えられる。また、褐色ガラスが含まれないことより、十和田 a テフラの混入も無いと判断した。これら試料のうち、試料 2 について EPMA 分析を行った（表2）。表2から明らかなように、９成分の含有量について、既存の十和田二の倉テフラ、十和田南部テフラ及び十和田中掫テフラ起源のガラス組成と良く一致する。Hayakawa（1985）によれば、十和田二の倉テフラは、K, J, I 及び H の 4 ユニットに分けられ、K が最も古いユニットで、I, J 及びHユニットの順で新しい。表２に示した髙木（2005）のデータは、K ユニットのガラスデータである。なお、十和田bテフラガラスは見いだせなかった。

(参考文献)

青木かおり・新井房夫(2000)、三陸沖海底コア KH94-3, LM- 8の後期更新世テフラ層序. 第四紀研究、第 39 巻、第 2 号、107-120.

髙木幸典(2005)、十和田カルデラ起源テフラの岩石学的研究. ―カルデラ形成期以後の火山ガラス化学組成を中心に―. 弘前大学修士論文, pp.104.

Hayakawa, Y.(1985),Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol.60, 507-592.

Machida, H.(1999),Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress. 第四紀研究、第 38 巻、第 3 号、194-201.

町田　洋・新井房夫(2003)、新編火山灰アトラス　―日本列島とその周辺―. 東京大学出版会、pp.336.

柴　正敏・重松直樹・佐々木　実(2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成（１). 弘前大学理工学部研究報告、第３巻、第1号、11-19.

柴　正敏・中道哲郎・佐々木　実(2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化　―宇樽部の一露頭を例として―. 弘前大学理工学部研究報告、第４巻、第1号、11-17.

柴　正敏・佐々木　実(2006)、十和田火山噴出物のガラス組成変化、月刊地球、第 28 巻、第 5 号、322-325.

表１　田代遺跡火山灰試料一覧

試料No.	採取場所	層　位	ガラス及び鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	S145	1層直下	スコリアガラス，ガラス（pm），斜長石，斜方輝石，単斜輝石，鉄鉱	To-Nk，To-Nb，To-Cu	軽石・岩片（径 1.0～4.0mm）
2 ＊	S145	2層直上	スコリアガラス，ガラス（pm），斜長石，斜方輝石，単斜輝石，鉄鉱	To-Nk，To-Nb，To-Cu	軽石・岩片（径 1.0～4.0mm）
3	S145	2層	スコリアガラス，ガラス（pm），斜長石，石英，斜方輝石，単斜輝石，鉄鉱	To-Nk，To-Nb，To-Cu	軽石・岩片（径 1.0～4.0mm），粘土化

pm ＝ 軽石型、To-Nk ＝ 十和田二の倉テフラ、To-Nb= 十和田南部テフラ、To-Cu= 十和田中掘テフラ、＊＝ＥＰＭＡ分析を行った試料

表２　田代遺跡、火山ガラスのＥＰＭＡデータ

十和田中掘テフラ

		SiO2	TiO2	Al2O3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	n	Total	EPMA
試料番号2	最小	75.16	0.42	13.14	2.53	0.02	0.58	2.27	3.14	1.23			
S145	最大	75.70	0.54	13.87	2.88	0.13	0.68	2.67	3.44	1.41			
2層直上	平均	75.45	0.48	13.57	2.70	0.09	0.61	2.50	3.27	1.33	11	102.56	WDS
	標準偏差	0.200	0.036	0.191	0.106	0.032	0.027	0.119	0.086	0.047			
青木・新井（2000）		75.36	0.43	13.65	2.35	0.11	0.52	2.35	4.01	1.22	11	98.38	WDS
柴ほか（2001）		75.59	0.40	13.27	2.45	0.09	0.51	2.70	3.68	1.31	13	98.22	WDS

十和田南部テフラ

		SiO2	TiO2	Al2O3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	n	Total	EPMA
試料番号2	最小	73.82	0.45	12.21	2.85	0.07	0.57	2.25	3.20	1.28			
S145	最大	74.48	0.57	14.07	4.01	0.18	1.57	3.07	3.77	1.35			
2層直上	平均	74.12	0.52	13.41	3.39	0.11	0.86	2.84	3.43	1.33	5	103.34	WDS
	標準偏差	0.237	0.053	0.706	0.436	0.044	0.402	0.343	0.234	0.027			
青木・新井（2000）		74.98	0.47	13.41	2.75	0.06	0.6	2.7	3.81	1.23	5	101.98	WDS
柴ほか（2001）		74.33	0.49	13.63	2.84	0.14	0.64	3.06	3.45	1.42	10	96.15	WDS

十和田二の倉テフラ

		SiO2	TiO2	Al2O3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	n	Total	EPMA
試料番号2	最小	59.55	0.94	14.91	8.51	0.12	2.26	6.16	3.47	0.63			
S145	最大	61.62	1.20	17.23	9.21	0.13	2.59	7.13	3.62	0.69			
2層直上	平均	60.58	1.07	16.07	8.86	0.13	2.43	6.65	3.55	0.66	2	104.18	WDS
	標準偏差	1.464	0.183	1.638	0.492	0.009	0.235	0.685	0.105	0.044			
高木（2005）		59.97	0.93	16.69	7.28	0.14	2.50	8.39	3.53	0.57	20	89.40	WDS
To-Nk(K)													

測定値は無水で100%になるように再計算した。FeO* 全鉄を FeO として計算した。 nは分析の点数を表す。
WDSは、波長分散型EPMAを表す。
To-Nk（K）は4つに分けられるこの倉テフラ（H. I. J. K）の最も下位（最も古い）もの。
使用したEPMAは弘前大学機器分析センター所属の日本電子製 JXA－ 8800RL（照射電流は 10 nA）。

第２節　土器付着・床面赤色顔料の材質分析

藤根　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

八戸市田代遺跡では、赤彩された縄文時代中期末および弥生時代中期の土器が出土した。また、また、縄文時代中期末の住居床面からも赤色物が検出された。

ここでは、これら赤色顔料について蛍光Ｘ線分析による顔料分析を行った。

２．試料と方法

試料は、土器付着赤色顔料および土壌中の赤色物の４試料である（表１）。

採取試料は、予め実体顕微鏡を用いて産出状況の写真を撮影した（図版１）。いずれの試料も典型的に付着する部分にセロハンテープを押し付け、2mm 角程度を採取した。なお、いずれの試料も、赤色物の形態を観察するために光学顕微鏡観察を行った。

蛍光Ｘ線分析は、㈱堀場製作所製Ｘ線分析顕微鏡 XGT-5000Type Ⅱを用いた。測定条件は、Ｘ線導管径 100 μm、電圧 50KV、電流自動設定、測定時間 500sec である。定量計算は、標準試料を用いない FP 法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

表１．分析試料とその詳細

分析No.	種類	付着位置	遺　構	層位	図No.	時期
1	赤色物	床面	S136	床面	図 12	縄文時代中期末
2	土器付着赤色顔料	土器外面	沢	底面	57-5	縄文時代中期末
3	土器付着赤色顔料	土器外面	トレンチ 16 AK-67	Ⅱ層	69-7	弥生時代中期
4	土器付着赤色顔料	土器外面	S145	確認面Ⅱ層	38-7	弥生時代中期

３．結果および考察

分析No.１は、鉄（Fe_2O_3）が約 90.38% 検出された。なお、その他赤色に関係する水銀 Hg は検出されなかった（図１）。イオウ（SO_3）が若干高く検出されているがセロハンテープ由来の成分でもある。なお、光学顕微鏡観察では、少ないものパイプ状ベンガラ（岡田、1997）が確認された（図版 1-1c）。

この赤色物は、床面から検出された赤色物であるが、赤彩土器の材料と同じ赤色顔料である。

分析No.２は、鉄（Fe_2O_3）が約 62.85% 検出された。なお、その他赤色に関係する水銀 Hg は検出されなかった（図１）。なお、光学顕微鏡観察では、粒子状赤色物からなり、パイプ状ベンガラは確認されなかったが、鉄が高いことからベンガラと考えられる（図版 1-2c）。

分析No.３は、鉄（Fe_2O_3）が約 65.24% 検出された。なお、その他赤色に関係する水銀 Hg は検出されなかった（図１）。なお、光学顕微鏡観察では、パイプ状ベンガラが確認された（図版 1-3c）。

分析No.４は、鉄（Fe_2O_3）が約 74.05% 検出された。なお、その他赤色に関係する水銀 Hg は検出されなかった（図１）。なお、光学顕微鏡観察では、パイプ状ベンガラは確認された（図版 1-4c）。

赤色顔料としては、主にベンガラと水銀朱があるが、ベンガラは大きく鉄細菌系と非鉄細菌系に分かれ、千差万別の赤色をみせる。代表的な鉄細菌系のパイプ状ベンガラは、日本列島全域で縄文時代から使用されている（馬淵ほか、2003）。なお、分析No.２の土器付着赤色顔料は、パイプ状ベンガラが確認されなかったことから、非鉄細菌系のベンガラと思われる。

なお、現在のところ、赤色顔料としての水銀朱の最も古い時代の使用例は、岐阜県揖斐川町（旧徳

山村）の塚遺跡から出土した縄文時代中期有孔鍔付壺形土器の赤彩土器である（小村・藤根、2000）。

表２．分析結果（FP 法）と顔料の種類

分析No.	Al_2O_3	SiO_2	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO_2	Fe_2O_3	合計	顔料の種類
1	0.44	4.69	3.42	0.13	0.73	0.21	0.00	90.38	100.00	パイプ状ベンガラ
2	0.00	9.08	5.80	1.07	2.85	17.37	0.99	62.85	100.01	ベンガラ
3	0.00	11.70	7.74	2.78	4.89	7.48	0.16	65.24	99.99	パイプ状ベンガラ
4	0.58	12.56	9.92	0.17	2.33	0.30	0.09	74.05	100.00	パイプ状ベンガラ

４．おわりに

住居床面に見られた赤色物および土器に赤彩された赤色顔料、鉄細菌系の典型的なパイプ状ベンガラと非鉄細菌系と考えられるベンガラが確認された。これら赤色顔料は、いずれも鉄を主成分とした赤色顔料であった。

引用文献

小村美代子・藤根　久(2000) 有孔鍔付壺形土器の赤彩に用いられた水銀朱. 日本文化財科学会第 17 回大会研究発表要旨集、118-119.

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊 (2003) 文化財科学の事典. 朝倉書店、522p.

岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集、38-39.

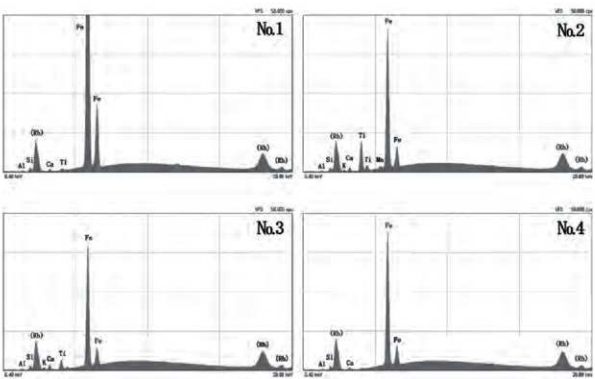
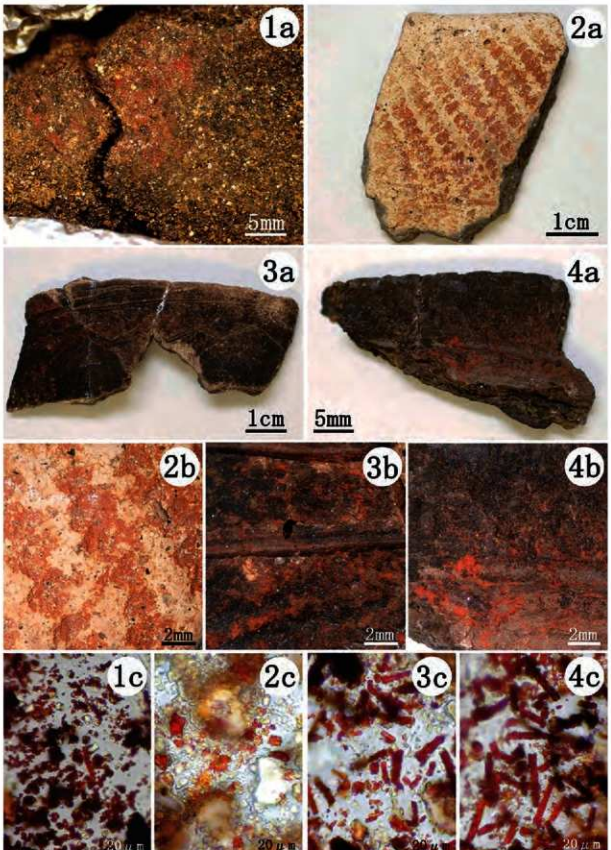


図１．各試料の蛍光Ｘ線スペクトル図

［元素記号］

Al：アルミニウム、Si：ケイ素、K：カリウム、Ca：カルシウム、Ti：チタン

Mn：マンガン、Fe：鉄、Rh：ロジウム（X管球由来の元素）



図版1　分析試料の産状と顕微鏡写真（番号は分析Noに対応）

1a. 土壌中の赤色物　2a. 土器付着赤色顔料　3a. 土器付着赤色顔料　4a. 土器付着赤色顔料
2b. 付着赤色顔料拡大　3b. 付着赤色顔料拡大　4b. 付着赤色顔料拡大
1c. パイプ状ベンガラ　2c. 赤色粒子　3c. パイプ状ベンガラ　4c. パイプ状ベンガラ

第３節　竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

ここでは縄文時代中期末の竪穴住居跡３軒（SI32・SI37・SI44）から出土炭化材７点の樹種同定結果を報告する。当遺跡は八戸市南郷区大字島守字番屋に所在し、標高約 200 mの丘陵上に立地し、谷に面する緩斜地に形成された集落跡である。

２．試料と方法

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、横断面の特徴から識別可能な分類群はこの段階で同定を決定する。それ以外は、次に材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で材組織を拡大し観察を行ない同定する。

走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を5mm 角以下の大きさに整え、直径1cm の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-5900LV 型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

３．結果

同定結果、SI32（２点）・SI37（３点）・SI44（１点）の住居跡３軒から出土した炭化材６試料は、すべて落葉広葉樹のクリであった。

各試料には複数の小破片が含まれていたが、クリ以外は検出されなかった。同一であったものが割れた可能性が高いのであろう。通し番号１と５には、樹芯部を含む破片が含まれていた。

表１ 05 年田代遺跡竪穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧

通し番号	遺構名	番号	出土地	層位	形状	樹種	時期
1	SI32	C1	AT63	３層	破片	クリ	縄文時代中期末
2	SI32	C2	AT63	２層	角材片	クリ	縄文時代中期末
3	SI37	C1	CB39	２層	破片	クリ	縄文時代中期末
4	SI37	C2	CB39	２層	角材片	クリ	縄文時代中期末
5	SI37	C3	CB39	２層	角材片	クリ	縄文時代中期末
6	SI44	C1	CD38	床面	角材片	クリ	縄文時代中期末

以下に記載する材組織の特徴からクリと同定した。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版１　1a-1c(SI37 C3)　2a(SI32 樹芯を含む破片）　3a(SI32 樹芯を含まない破片）　4a(SI44)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

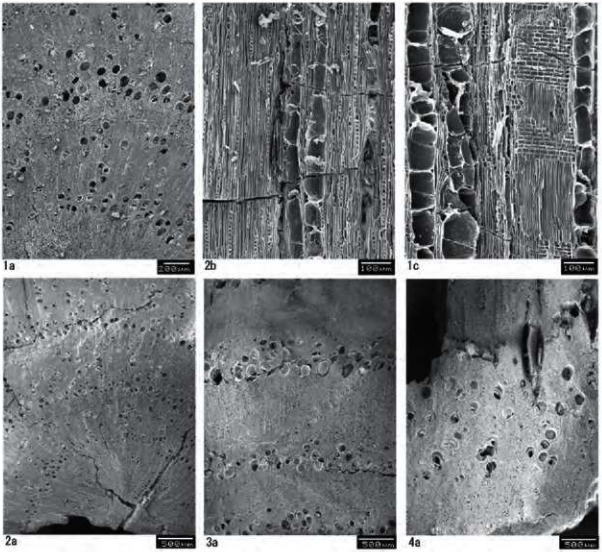
クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、

材は粘りがあり耐朽性にすぐれ非常に丈夫である。

4．考察

縄文時代中期の住居跡からは、ほとんどがクリといっていいほどにクリの炭化材が多く検出されることが広く知られている。当遺跡の平成16年度（2004年）発掘調査においても、縄文時代中期の竪穴住居跡の多くからクリが優占出土している（植田、2006）。今回の調査でも、やはりクリが多い結果であった。当遺跡においても、住居建築材にはクリが強く選択利用されていたことが確認されたと言える。

引用文献
植田弥生（2006）竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定，『田代遺跡』：181-184，青森県教育委員会．



図版1　05年田代遺跡竪穴住居跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

1a-1c：クリ（SI37 C3）　2a：クリ（SI32 C1 樹芯部を含む破片）
3a：クリ（SI32 C1 樹芯部を含ない破片）　4a：クリ（SI44）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

第４節　田代遺跡から出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

田代遺跡は、八戸市南郷区大字島守字番屋に所在し、階上岳から連なる北側丘陵上（標高 200m）に立地する。本遺跡は、縄文時代中期末～後期初頭、弥生時代中期を中心とする集落跡であり、遺構としては、縄文時代中期末～後期初頭、弥生時代中期の竪穴住居跡、縄文時代の土坑、焼土遺構、土器埋没遺構などや遺物としては、土器、石器、土製品類が検出されている。ここでは、縄文時代中期末の竪穴住居址（SI36）から出土した炭化種実を検討し、利用植物を明らかにすることを試みた。

２．試料と方法

炭化種実の検討は、SI36（出土地 BW36）の１層から出土した１試料（番号 7）について行った。炭化種実は抽出済みであり、チャック袋に複数個が乾燥保存されていた。同定･計数は肉眼および実体顕微鏡で行った。

３．出土した炭化種実

同定されたのは、木本２分類群であり、オニグルミ炭化核とクリ炭化子葉であった。オニグルミは破片が３個、クリは概ね完形が１個、1/2 片位の破片が７個、1/2 片未満の破片が 97 個であった。

４．形態記載

(1) オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　炭化核

破片３個の長径は、各 12、14、22mm であった。後２者は、縫合線部が認められる。最大の破片は、表面は起伏がありごつごつする。オニグルミ核は、本来表面に浅い溝状の彫紋があるが、ひび割れて劣化しており、彫紋は不鮮明である。なお、破片３個を合わせても完形１個分に満たない。

(2) クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　炭化子葉

概ね完形のもが１個含まれていた。これは、長さ 16mm、幅 19mm 程度であった。その他は、大きく欠損しており、長さ･幅は不明であるが、外形は三角状卵形～広卵形と推定される。表面には縦方向にやや深い皺があり、断面は平凸レンズ状である。全体としては、完形換算で 20 個分前後に相当すると推定される。なお、径 5mm 以下の微細な炭化子葉片が少し含まれていたが、同定･計数が困難であった。これらもおそらくクリと思われる。

５．考察

縄文時代中期末の竪穴住居址（SI36）では、オニグルミ、クリが食用にされていたと考えられる。オニグルミ核は、破片であることから、人が叩き割った利用後の残滓と推定される。クリは、食用部位の子葉であり、住居内に蓄えられていたものと推定される。本遺跡では、吉川（2006）により、利用植物としてオニグルミ、ブナ科、キイチゴ属、ウルシ、トチノキ、ニワトコ属、ムギ類、ササゲ属が報告されている。また、青森県埋蔵文化財調査センターによってクリ・クルミも分類されている。これらの結果を見ると、ある程度まとまって堅果類を出土した住居址は、クルミが多産するか、クルミとクリが多産し、トチノキを少量伴っている。今回分析した SI36 は、クリが多く、オニグルミが少量であり、トチノキは含まれていなかった。また、検討したのが僅か１棟の住居址であり、オニグルミ、クリ以外の利用植物を推定するには至らなかった。

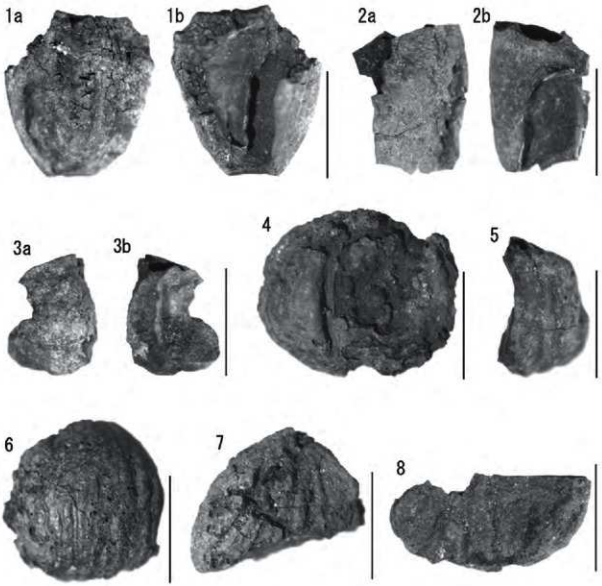
6. おわりに

縄文時代中期末の竪穴住居址（SI36）では、オニグルミとクリが食用にされていたと考えられた。

参考・引用文献

青森県教育委員会（2005）平成17年度八戸市田代遺跡発掘調査概要―県道八戸・大野線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―.

吉川純子（2006）田代遺跡より出土した炭化種実. 青森県埋蔵文化財調査報告書　第413集，田代遺跡―県道八戸大野線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告―，185-195, 青森県教育委員会.



図版1　出土した炭化種実（スケールは1cm）

1～3. オニグルミ、炭化核、SI36/BW-36/1層

4～8. クリ、炭化子葉、SI36/BW-36/1層

第５章　まとめ

第１節　縄文時代

縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡について

今回縄文時代中期末～後期初頭と考えられる遺構は、南区の竪穴住居跡６軒（ＳＩ 34 ～ 38・44）、土坑３基（ＳＫ 29・30・31）、土器埋設遺構２基（ＳＲ３・５）、北区の竪穴住居跡７軒（ＳＩ 31 ～ 33・39・41・42・47）、土坑２基（ＳＫ 33・35）、屋外炉１基である。南区と北区ではそれぞれ小支谷を囲んだ斜面上に位置しており、集落の様相が若干異なるものと考えられる。とくに南区は、今回調査した西側を調査済みであり、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡が 29 軒検出されている。今回報告した6軒と併せて 34 軒の竪穴住居跡が検出された。これらの成果を踏まえて集落の様相を述べていきたい。

南区（今回報告分）

南に面した斜面地で尾根上平坦地から急な傾斜が続き、その後緩やかな傾斜地となる。今回調査した標高 221 ～ 225 mに立地する竪穴住居跡はこの急な斜面地に当たる。南区の竪穴住居跡は、全体を把握できなかったものもあるが、竪穴住居跡の規模が 2.04 ～ 4.1 mと小型のものである。炉は、複式炉２軒、地床炉３軒、確認できなかったもの１軒である。複式炉は石組部と前庭部の二部構成のものである。竪穴住居跡の時期は、縄文時代中期末～後期初頭に相当するものが３軒、大木 10 式併行期に相当するのが２軒である。

北区（今回報告分）

西に面した東側斜面地の標高 209 ～ 212 mに竪穴住居跡４軒（ＳＩ 31 ～ 33・42）、標高 207 mに屋外炉１基、東に面した西側斜面地の標高 202 ～ 205 mに竪穴住居跡３軒（ＳＩ 39・41・47）、標高 205 ～ 207 mに土坑２基（ＳＫ 33･35）が立地している。竪穴住居跡の規模は 2.68 ～ 5.48 mで、小型のもの、中型のものが混在する。内訳は３m以下が１軒、３～４mが３軒、４～５mが２軒、５m以上が１軒である。主柱穴は五本柱穴のものがＳＩ 32・42 である。壁柱穴が検出されたものはＳＩ 33・39・47、他は不明である。炉は、複式炉２軒、石囲炉３軒、地床炉１軒、炉が検出されなかったもの１軒である。複式炉は燃焼部・石組部・前庭部の三部構成のもの１基、石組部・前庭部の二部構成のもの１基である。竪穴住居跡の時期は、大木 10 式併行期が２軒、縄文時代中期末～後期初頭が４軒、縄文時代後期初頭が１軒である。

竪穴住居跡からみた変化

八戸周辺の住居跡を集成した文献（小山 2004）によると、長軸線上にみられる施設をＡ～Ｄ類に分類し、時期別の特徴を述べている。Ｃ類－床面内に浅い掘り込み、若しくは段を有するもの－１類　単独の掘り込みのもの、２類　溝やピット、炉などと組み合わされ複合的になるもの（本類には炉の前庭部も含まれる。）、Ｄ類－小穴が２個並ぶもの、小穴間に溝が施されるもの、埋設土器が設置される

ものなどがある。中期末葉～後期初頭にかけてC２群・D群が主体を占め、後期初頭に至るまでD群が主体を占める。これらのC・D群は岩手県北部でこの時期一般的にみられる形態であり、この地方からの影響を受けて成立したものとされる。

また炉については、「前段階でほとんど姿を消した地床炉が再び増え始め、後期初頭になると主体を占めるようになる。」、「床面内に掘り込みを持ち、他の施設と連結するものが多く見られる。」ことから、これらの属性を有する住居跡はより新しい傾向を示す可能性がある。

縄文時代中期末～後期初頭の土器（大木 10 式併行期と後期初頭の地文縄文土器）

集落内での変遷過程についてはまだ不明な点が多い。そこで、今回、この点を少しでも明らかにするため、土器を再検討する試みを行った。併せて竪穴住居跡の変遷も考えていきたい。

本遺跡での抽出方法

本遺跡の竪穴住居跡から出土した炉体土器・床面及び床面直上土器で、復元実測されているものを参考とした。破片資料では文様構成が分かるものも含めた。また、参照資料として、文様施文の行われるものも掲載することとする。

器形Ⅰ　胴部中央若しくは下部が変化する器形。胴部上半から口縁部にかけてはほぼ直立する器形。器形1は、変化点の形状から、A　丸味を帯び膨らむもの、B　屈曲するものに分けられる。さらに、口縁部の形態から、a　ほぼ直立するもの、b　短く外傾するものに分けられる。

器形Ⅱ　底部から胴部中央にかけてわずかに膨らみ、口縁部が外反する器形。

器形Ⅲ　口縁部がやや内湾する器形。胴部の変化点はほとんどみられず、ほぼ垂直に立ち上がる器形。

器形Ⅳ　底部から口縁部にかけて緩やかに広がり、口縁部が外反する器形。

本遺跡出土の文様構成を持つ土器について

『田代遺跡』のまとめで述べたが、文様構成から、これらの土器を大まかに大木 10 式併行期新相段階に位置付けた。これらの土器 10 個体は２つの文様構成に区分できると考えられる。

１　方形区画文またはこれに類するもの、２　波頂文を有するもので、１はＳＩ６・７・19・27・44 で、２はＳＩ１・２・12・16・26 である。方形区画文がより後出の様相を持つと考えられており、２を1の前段階の属性と捉えることが出来る。

共伴土器について

①ＳＩ４４の床面出土土器（37-５・６、図 85）37-５の器形は胴部中央にわずかに膨らみを持たせた突起部を持つ土器で、ＩＡａ類である。文様構成は、口縁部に刺突文を巡らせたもので、後期初頭に盛行する刺突文の様相を含む。文様構成はＪ字文が退化し、横位に磨消文様帯が延びるもので、所々に縦位の磨消文様帯もつく。「Ｊ」と同じく右に描かれる弧状と反転して左に描かれる弧状が交互に配される。文様構成は２類に相当する。37-６は胴部中央にやや膨らみをもつ器形ＩＡａ類で、一部わずかな波状口縁となる。波状部分以外の口縁部はほぼ垂直である。

		器形Ⅰ	器形Ⅰ	器形Ⅰ	器形Ⅰ	器形Ⅱ	器形Ⅲ	器形Ⅳ	文様構成	出土層位別表示
		A	A	B	B					床面・炉体－●
		a	b	a	b					床直－○
南区	SI1	●							●	堆積土－△
	SI2								△ミニチュア	器形Ⅰ
	SI3						●			
	SI4					●	○			
	SI6	●							△	
	SI7	△							△	
	SI12								○	器形Ⅱ
	SI16		○							
	SI19			○		△△			△	
	SI21				△●		●			
	SI26	○○○				○		○	●	
	SI27		△						△	器形Ⅲ
	SI35		△△							
	SI36							●		
	SI44	●							●	
	SR3					●				
	SR5	●								
北区	SI31								△	器形Ⅳ
	SI32							●		
	SI33					△		△△	△	

表　各遺構の器形別対応表

②ＳＩ２７の堆積土出土土器（05 年 88- ４・５、図 84）ＳＩ 27 は住居跡廃絶に当たって住居跡全体を高舘火山灰相当層が混在する土で埋め戻し、その上部の窪地から出土した遺物である。88- ４・5は隣接した地点で出土しており、今回は共伴遺物として扱うこととする。88- 4は口縁部が外反する器形で、胴部下半は欠損するが、やや膨らみを持った器形であり、ＩＡｂ類である。平口縁で、口縁部の一部に半円形の刺突列がつく。文様帯の上部にも刺突列が巡る。文様帯はＪ字文が退化し横位に磨消文様帯が延びるもので、二段構成になっている。文様構成は２類に相当する。88- 5は胴部中央が大きく膨らむ器形で、口縁部も強く外反し、ＩＡｂ類である。

器形からみた他遺跡の共伴土器事例について

ここで、八戸地域、岩手県北部地域の竪穴住居跡から出土した土器で共伴関係を持つ例を見ると、韮窪遺跡第 13 号住居跡（図 84）、同遺跡第 14 号住居跡（図 84）の遺物は地文縄文のみの施文された土器（以下、「粗製土器」とする。）との共伴事例である。粗製土器は基本的には器形に大きな違いが見られない。文様が施文される土器（以下、「精製土器」とする。）と粗製土器の共伴関係の事例を見ると、上蛇沢遺跡第３号住居跡（図 84）のようにほぼ同じような器形を示す事例もある。しかし、精製土器と粗製土器が同様の器形を持たない例として、大木 10 式併行期では、野場遺跡第 121 号住居跡、一戸町仁昌寺Ⅱ遺跡第 28 号住居跡などが挙げられる。後期初頭では、丹後谷地遺跡第５号住居跡などが挙げられる。

ただ、粗製土器の中期末から後期初頭の流れをみると、胴部中央から下半にかけて変化する器形Ⅰからその変化が小さくなる器形Ⅱ、底部から口縁部にかけて胴部に全く変化点が見られない器形Ⅳへと変化する大きな流れがあると思われる。器形Ⅲについては、口縁部が直立する若しくはやや内湾す

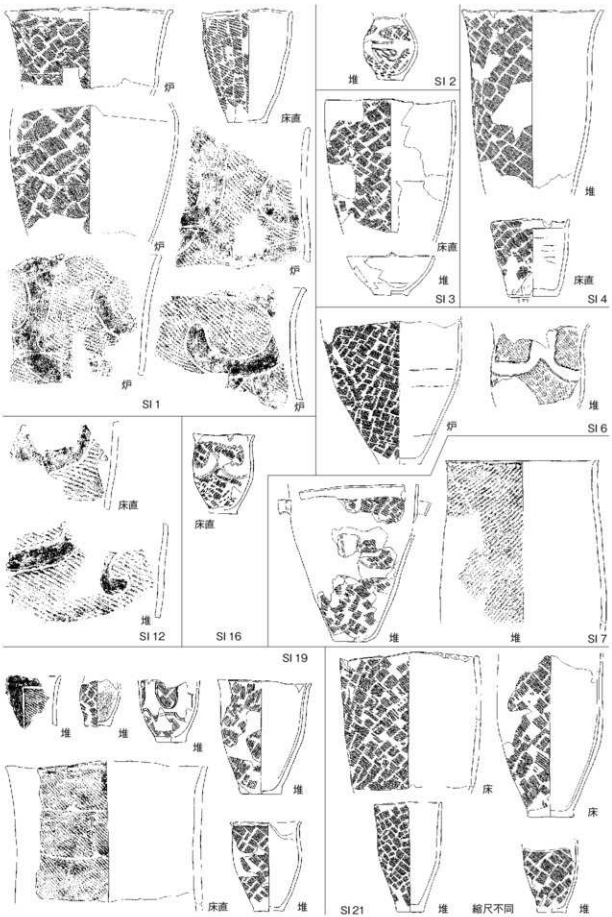


図83　SI 1～21出土土器（413集所収）

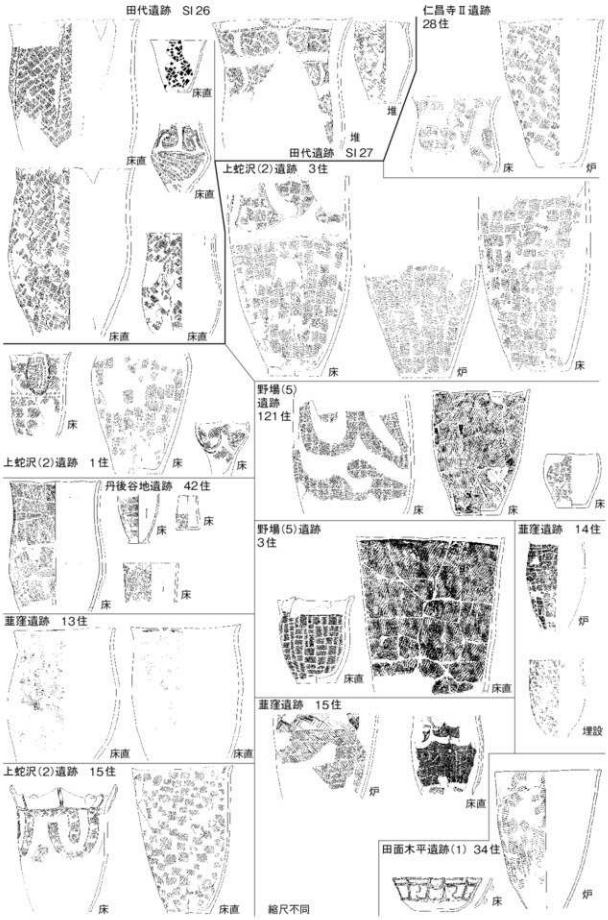


図84　SI 26・27（413集所収）、他遺跡の出土土器

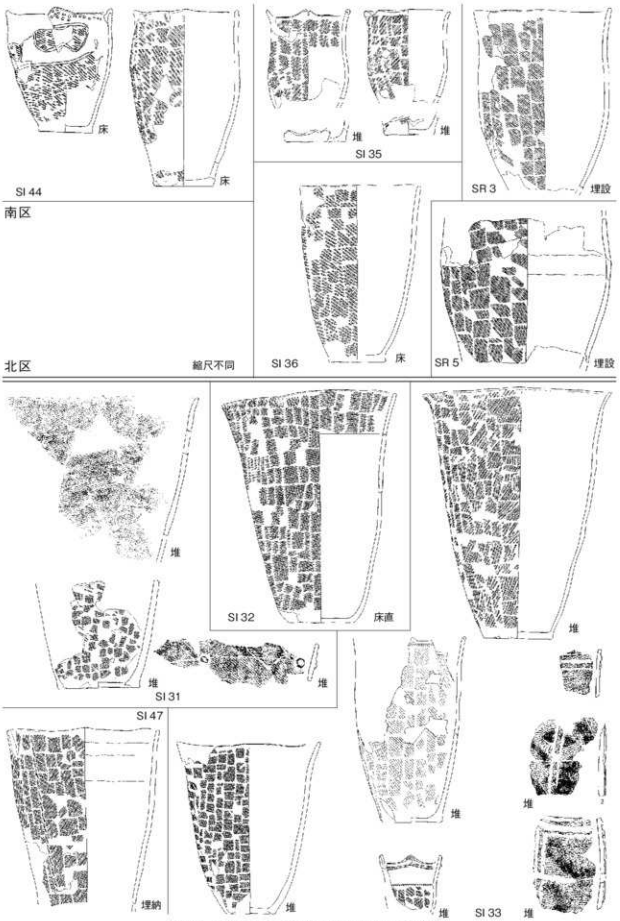


図85　SI 31～47、SR 3・5出土土器（今回報告）

る器形であり、器形1と同じく、大木 10 式併行期にみられる口縁部から胴部上半が直立する土器の影響を受けて製作された土器と考えられる。

この器形変化は精製土器にはみられず、寧ろ、後期初頭にかけて器形が変化し、多様化する。

各段階の集落変遷

これらの土器の器形及び、文様構成の違い、炉の形態から、ＳＩ 44 床面出土土器・炉の形態を基準として、１期　ＳＩ 44 よりも前に廃絶されたもの、２期　ＳＩ 44 と同時期のもの、３・４期　ＳＩ 44 より後に構築されたもの、５　不明なものに分類した。新旧関係から基準となる竪穴住居跡よりも古い（新しい）段階となるものは1段階前後に区分した。ただし、直前の段階になるとは限らないので、各段階の基準とは別の項目を設けた。

１期　器形Ⅰで、複式炉のもの。

　　Ａ　波頭文を持つ土器が床面から出土したもの。－ＳＩ１・12・16

　　新旧関係からこの段階にきたもの。－ＳＩ 10・22

　　Ｂ　波頭文を持つ土器が堆積土中から出土したもの。－ＳＩ２・26

　　新旧関係からこの段階にきたもの。－ＳＩ 28・30

２期　　Ｃ　方形文を持つ土器が床面から出土したもの、炉に共通性があるもの。－ＳＩ 44・20・21

　　新旧関係からこの段階にきたもの。－ＳＩ 18

３期　　Ｄ　方形文を持つ土器が堆積土中から出土したもの。－ＳＩ 27・６・７・19

４期　器形Ⅱ・Ⅳで、地床炉のもの。－ＳＩ３・４・11・17・29・35・36・37・38

５　　不明なもの。－ＳＩ５・８・13・14・15・23・24・34

概ね１～３期は大木 10 式併行期、４期は後期初頭に近い時期と考えられる。集落跡の変遷をみると、大木 10 式併行期では、尾根上平坦地と沢際の緩斜面地に集落跡が作られ、後期初頭になると、急な斜面地に集落跡が形成される傾向にある。この時期に北区でも集落跡が形成されており、集落跡が点在するようになった可能性もある。ただ、北区と南区では炉の形態（石囲炉と地床炉）に違いがあり、これが時間差であるのか、集団差であるのかはさらに今後の検討が必要である。

剥片石器

総数 271 点が出土した。珪質頁岩の割合が大部分を占める。石質の詳細は表1を参照して頂きたい。

今回の調査では、縄文時代と弥生時代の遺物が混在して出土したが、剥片石器の形態から時期を分類するのは難しいため、形状や機能で分類することとする。

１　石鏃　上端が三角形状の両面加工された器厚の薄いもの。下端の形状から、「凹基鏃」・「有茎鏃」・「平基鏃」に分類される。合計 24 点出土した。

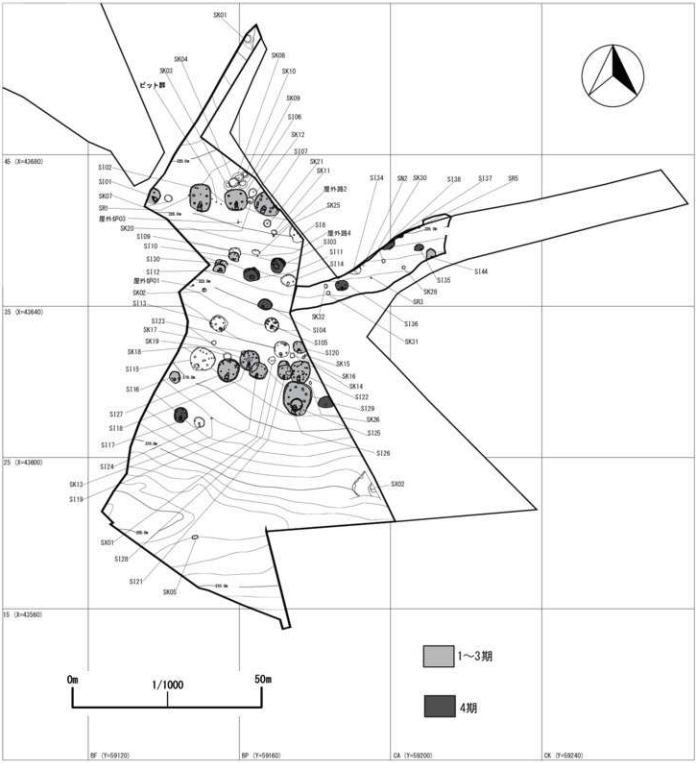


図86　南区の時期別遺構配置

「凹基鏃」－第41号竪穴住居跡から1点、遺構外の南区から2点、北区から5点の計8点出土している。茎部がなく、かえし部分が弧状を呈するもので、72-1のようにきつい弧状を描くもの（72-2）、中心部で屈曲し、三角形状になるもの（72-3～5）、緩やかな弧状を描くもの（36-20、51-1・2）などがある。

「有茎鏃」－遺構外の南区から1点、北区から9点の計10点出土である。茎部を有するもので、かえしの部分が弧状になるもの（51-4、72-12～14）、かえしの部分が直線的なもの（72-9～11）、かえしがなく基部と茎部が一体化しているもの（72-15～17）が挙げられる。

「平基鏃」－遺構外の南区から1点、北区から3点の計4点の出土である。かえし部分がやや外側にカーブするもの（72-6・7）、石鏃の長さに対してかえしの幅が狭いもの（51-5、72-8）に大別される。

未成品は2点出土した。定形化した石鏃とは異なりやや不整形な三角形を呈し、器厚も厚い51-3、素材剥片の一部を薄くしすぎて裏面の調整剥離加工が出来なかったと思われる72-18が挙げられる。

2　石槍　長さが5㎝以上で両端が尖頭状の両面加工された石器を「石槍」とした。遺構外から1点出土し、石質は珪質頁岩である。

3　石匙　摘み部を有し、主に片面周縁加工で調整されているもの。形状から「縦形」と「横形」に分類される。合計5点出土した。南区から出土したものは同一グリッド内で三片に分かれていたものを接合した。

「縦形」－第41号竪穴住居跡から1点、遺構外の南区から1点、北区から2点の出土である。片面全面加工されているもの（51-6）、片面の両側縁に調整剥離痕が施されるもの（72-21）、片面の一側縁に調整剥離痕が施されるもの（36-21・72-20）が見られる。

「横形」－遺構外の北区から1点出土した。片面の周縁を加工している。

4　石錐　先端部に摩耗等の痕跡があるもの。形状や加工方法から、「棒状」・「摘み部を有するもの」・「剥片を使用するもの」に分類される。合計10点出土した。

「棒状」－第45号竪穴住居跡から1点出土している。両端とも摩耗した痕跡は見られない。

「摘み部を有するもの」－第36号竪穴住居跡から1点（32-12）、遺構外の北区から3点の計4点出土している。32-12は横形石匙の破損品を石錐に転用したもので、尖端部と摘み部には新たに調整加工を行い、その境界を明瞭にしている。遺構外の北区から出土した72-23～25は、尖端部と摘み部が連続して調整されており、その境界はやや不明瞭である。ただし、摘み部の周縁にも調整加工が行われているため、「摘み部」を意識していることが窺える。

「剥片を使用するもの」－第45号竪穴住居跡から1点、遺構外の南区から3点、北区から1点の計5点出土している。縦長剥片で三角形状のものを使用している。これらの剥片は、摘み部を有しないものの、両側縁の形状を整えたり、調整加工を行い使用し易いようにしている。尖端部は必ずしも全面加工していないが、51-8のように尖端が摩耗しているものもある。

5　二次調整のある剥片　調整剥離が加えられているもの。定形石器の破損品を含む。刃部の角

や加工方法から、「剥片の一部に急角度の刃部が作り出されているもの」・「剥片の一部に鈍角度の刃部が作り出されているもの」・「剥片を周辺から中心に向かって打ち欠き、形状を整えているもの」に分類される。これらは便宜上、削器・掻器・石器未成品と呼称する。合計 35 点出土し、このうち 34 点を図示した。「削器」は 23 点、「掻器」は8点、「石器未成品」は3点、「石器片」は1点である。

6　**両極加撃痕のある剥片**　打点が複数存在する剥片。合計 13 点出土し、内訳は、第 45 号竪穴住居跡から1点、遺構外の南区から3点、北区から9点である。このうち5点を図示した。

7　**微小剥離痕のある剥片**　剥片の縁辺に調整加工以外の剥離が連続的に見られる剥片。合計 25 点出土し、内訳は、第 32 号竪穴住居跡から1点、第 36 号竪穴住居跡から1点、第 45 号竪穴住居跡から2点、遺構外の南区から4点、北区から 17 点出土した。このうち1点を図示した。

8　**剥片・砕片**　調整加工、微小剥離がなく、最大幅・厚が1㎝より大きいものを剥片、小さい物を砕片とした。剥片は合計 156 点出土し、内訳は、竪穴住居跡から 31 点（ＳＩ 33 －1点、ＳＩ 34 －2点、ＳＩ 36 －7点、ＳＩ 38 －2点、ＳＩ 41 －1点、ＳＩ 45 － 17 点、ＳＩ 46 －1点）、遺構外の南区から 19 点、北区から 106 点である。このうち1点を図示した。砕片は、合計2点出土し、遺構外の南区から 1 点、北区から1点である。

弥生時代の剥片石器の様相

文献（杉山 2006）によると、八戸市田向冷水遺跡弥生時代の集落跡では石鏃とスクレーパーの割合が高い。石鏃はとくに有茎鏃が主体を占める。スクレーパーは、一側縁に連続的な剥離を施し、刃部を形成するものである。（坂本）

礫石器

礫石器は、遺構内外から併せて、磨製石斧が 20 点、石錘が3点、敲磨器が 52 点、石皿･台石類が 21 点、原材が3点、総数 99 点出土した（下表参照）。

分　類	遺　構　内	遺構外南区	遺構外北区	出土点数
磨製石斧	4 点（SI-33・42・45）	1 点	15 点	20 点
石錘			3 点	3 点
敲磨器	11 点（SI-31・36・38・41・45）	6 点	35 点	52 点
石皿・台石類	8 点(SI-32・33・37・38・41、屋外炉5)	4 点	9 点	21 点
原材	2 点（SI-35・38）		1 点	3 点

出土した礫石器はすべて縄文時代ないし弥生時代のものであるが、その所産時期を推定できるのは竪穴住居跡の床面や床面直上から出土したもの、炉石に利用されたもの等に限られる。概ね当該遺構の使用時期に近い時期のものとみなせば、以下のとおりである。

・縄文時代中期末大木10式併行期

第42号竪穴住居跡の床面から出土した磨製石斧（完形品）

・縄文時代中期末～後期初頭

第32号竪穴住居跡の床面直上から出土した石皿（破損品の一部）、第37号竪穴住居跡の床面から出土した石皿（破損品の一部）、第41号竪穴住居跡の床面から出土した敲磨器（完形品）

・縄文時代後期初頭

第33号竪穴住居跡の床面から出土した磨製石斧（完形品）と石皿（略完形品）

・縄文時代後期初頭以降

第5号屋外炉の炉石として使用された石皿（破損品の一部）

・弥生時代前期

第45号竪穴住居跡の床面から出土した敲磨器（破損品の一部）

石皿・台石類は遺構内から出土したものの割合（約38%）が多く、磨製石斧や敲磨器（約20%）に比べてほぼ2倍の比率となっている。特に、竪穴住居跡の床面ないし床面直上から出土した石皿が目立っており、重量があるため破損品も含めて遺構内（屋内）に放置されることが多かったらしい。石皿・台石類と敲磨器は一般的にセットで使用されるものと考えられているが、発掘例では遺構外（屋外）に放置あるいは廃棄されている例が多いので、屋内以上に屋外で頻繁に使用されていた様子がうかがわれる。磨製石斧は通常屋外で使用されるので、屋内から出土した使用痕のある完形品は保管品がそのまま放置されたもののようである。

石製品

石製品は、遺構内外から併せて、装身具が1点、円盤状石製品が4点、加工礫が54点、その他の石製品が9点、総数68点出土した（下表参照）。

分　類	遺　構　内	遺構外南区	遺構外北区	出土点数
装身具	―	―	1点	1点
円盤状石製品	―	1点	3点	4点
加工礫	8点（SI-31・35・38・44・45）	13点	33点	54点
その他の石製品	―	3点	6点	9点

出土した石製品はすべて縄文時代ないし弥生時代のものであるが、礫石器と同様、その所産時期を推定できるのは、以下のとおり竪穴住居跡から出土したものに限られる。

・縄文時代中期末大木10式併行期

第44号竪穴住居跡の炉石として使用された加工礫（破損品の一部）

・縄文時代中期末～後期初頭

第35号竪穴住居跡の床面から出土した加工礫（完形品）

・弥生時代前期

第45号竪穴住居跡の床面から出土した加工礫（破損品の一部）

遺構内から出土したのは、出土点数の多い加工礫だけである。加工礫として分類した石製品は、手

ごろな礫の周縁部等に加工・整形痕とみられる剥離痕や敲打痕、擦過痕、摩耗痕等が遺されたものを便宜的に一括したが、大きさや形態は様々である。したがって、実用性に乏しい点では共通するが、一定の用途で括られるようなものではない。また、主に粘板岩や千枚岩等、剥離の発達した（薄く剥ぎ取り易い）属性の岩石を利用しているが、剥離痕は剥離面の摩耗したものがかなりあり、擦過痕や摩耗痕は必ずしも明瞭な痕跡を留めないものも多くあって、製品としての判別は相当難しいところがある。

分類	剥片石器									礫石器											
器種／石質	石鏃	石槍	石匙	石錐	二次調整のある剥片	微小剥離痕	両極加撃痕	剥片	砕片	磨斧	石錘	敲磨器	石皿・台石	原材	装身具	円盤状	加工礫	その他	炉石	計
流紋岩												1							3	4
安山岩												4			1					5
玄武岩										1										1
ひん岩										1							1			2
粗粒玄武岩										4		6						1		11
花崗岩												1								1
花崗閃緑岩												2	2						6	10
閃緑岩												1	1							2
斑レイ岩																			3	3
泥岩												1								1
頁岩					1	2	1	1	1		5	1	11	1	2		12	4	4	46
粘板岩												1	3	1		4	22	1	2	34
砂岩											1	1	16	14			5	2	9	48
凝灰岩													2	2			1		1	6
緑色凝灰岩									1		1									2
緑色細粒凝灰岩											5									5
チャート													1						7	8
珪質頁岩	14	1	5	9	33	22	8	141	2					1						236
凝灰質珪質頁岩								1												1
千枚岩																	5			5
片岩																	5		3	8
緑色片岩										1									1	2
片麻岩												1					3			4
ホルンフェルス										1								1		2
石英	9					1	2	7				1								20
玉髄							2					1								3
瑪瑙								1												1
鉄石英	1					1		3												5
方解石								1												1
圧砕岩質変質岩																			1	1
計	24	1	5	10	35	25	13	156	2	20	3	52	21	3	1	4	54	9	40	478

表　石器の種類別石質

炉石

本遺跡では、縄文時代中期末～後期初頭、弥生時代の炉に礫を用いているが、いずれも階上岳周辺で採取可能な礫を用いている。とくに砂岩は本報告や『田代遺跡』での報告でも最も多くの個数が出土しており、炉石に使用される頻度が高いことが分かった。また、縄文時代と弥生時代の炉石を比較しても炉石の選択に大きな違いがみられないことが分かった。（工藤）

土製品

本報告書では、田代遺跡から出土した土製品類を以下のように分類した。

小型土器・ミニチュア土器、円盤状土製品、土製装飾品、土偶、三角形土板、異形土製品、焼成粘土塊、泥面子

小型土器・ミニチュア土器…出土総数 43 点のうち 35 点を図示した。図示したものでは遺構内から 5 点 (SI34 から 2 点、SI39 炉内、SI45、46 から各々 1 点)、遺構外から 30 点 (北区 17 点、南区 13 点) が出土した。略完形 2 点、口縁部 1 点、胴部 4 点、胴～底部 6 点、底部 19 点、脚部 2 点、頸部 1 点である。このうち 4 点 (45-11、46-20、82-10・16) は形状等から弥生時代のものと判断した。82-11 も表面の仕上げや焼成硬度の面から弥生時代の遺物である可能性を残す。

円盤状土製品…遺構内から 2 点 (SI32 から 1 点、SI39 から 1 点)、遺構外 (北区) から 7 点の計 9 点が出土した。全てほぼ円形状で、周辺を打ち欠いて作られている。このうち中心に凹みがあり穿孔しようとしたと思われるものが 1 点である。

土製装飾品…遺構内 (SI34) から 1 点、遺構外 (北区) から 1 点の計 2 点が出土した。

土偶…遺構外 (北区) から 4 点が出土した。肩部 2 点、脚部 2 点である。

三角形土板…遺構外 (北区) から 1 点が出土した。

異形土製品…遺構外 (南区) から 2 点が出土した。

焼成粘土塊…遺構外 (南区) から 2 点が出土した。

泥面子…遺構外から 3 点 (北区から 2 点、南区から 1 点) が出土した。

本報告書では 8 種類 58 点の土製品類を図示したが、そのうち小型土器・ミニチュア土器類が約 60% を占める。また遺構外からの出土が多く、遺構内からの出土は 8 点 (約 14%) にとどまる。出土地点で特徴的なのは円盤状土製品で、今回の発掘では遺構内外を問わず全て北区での出土となる。　(宮嶋)

第２節　弥生時代

土器

今回の調査では弥生時代前期～後期にかけての遺物が出土した。遺構に伴う共伴事例もみられる。甕・壺・高坏・鉢などの器種が出土した。以下、器種設定を行いそれぞれの属性について述べる。

弥生時代２期

甕　最も多く出土した器種で、粗製のものが多い。口縁部は、ほぼ垂直またはやや外反しながら立ち上がる。胴部は縄文原体を施文する。頸部に沈線を一条施文するものもある (69-12)　また、頸部に縄文原体を押圧する例もみられる (69-16)。口縁部に沈線一条、頸部に沈線二条を施すものもある (69-11)。口縁部外面は丁寧に磨かれ、内面にも一部ミガキが入る。口縁端部には回転施文が施される。口縁部にまで縄文原体が施文されるものもある。46- 2は五波状となる。

壺　胴部上半に最大径がみられる。39- 1 a の頸部には列点文状の結節沈線が施文される。胴部上半に平行沈線が5条施文され、充填縄文が施される。39- 2は頸部に沈線が施文される。縄文原体は胴部

上半と下半で方向を違えて施文する。39- 9は、口縁部には平行沈線が二条施され、内面にも一条施文される。頸部に粘土を貼付けて隆帯とし、これに沈線を施文する。これは砂沢式にも使用される手法でありやや古くなる可能性がある。

高坏　71- 2～4が出土した。71- 2は口端部に長い沈線文を施文し、脚部の出土が多い。脚部は、1類　2～3条一組の沈線が平行文や波状文を構成するもの、2類　波状文等、沈線で区画された文様帯に磨消縄文が施されるもの、に分類される。1類は遺構外北区から8点出土した（71- 9～16）。脚部の上部に波状文が構成されるもの（71- 9～11）、脚部の下部に波状文が構成されるもの（71-12・13）、平行沈線のみ施文されるもの（71-14～16）に分かれる。2類はSI 46から出土したミニチュア土器（46-20）と遺構外北区から出土した71-17の2点が出土した。46-20は、垂下文4類（須藤1998）が上下に反転したような文様構成、71-17は波状文の文様構成である。ともに磨消縄文であり、文様構成などからも山王Ⅲ層式土器の影響が窺える。

鉢　粗製鉢（46- 3）と精製鉢（71- 5・6）が見られる。46- 3は口縁部が外反するもので胴部はやや丸味を帯びる。71- 5は「変形工字文C型」（須藤1998）が施文されるものである。

弥生時代4期

主にSI 45の火山灰層上部から出土した土器である。甕・壷・鉢などの器種が出土した。

甕　長頸甕が主体である。頸部に多条の平行沈線が施文され、口縁部は口縁部と頸部の間に刺突列が施文されるものもある（69- 1・2）。小型甕は山形沈線と2～3条単位の平行沈線が交互に施文される土器で、山形沈線と平行沈線間に刺突文を施すものもある（38- 4）。

壷　短頸壷が出土した。肩部から胴部上半にかけて多条化した平行沈線と山形沈線が交互に施文される。38- 6は平行沈線間に三角形状の刺突列を施す。

高坏　脚部を欠損する赤彩された高坏が1点出土した（38- 7）。口縁部は短く屈曲し、文様構成は二条の平行沈線文と二条の山形沈線文が胴部全体に施文される。赤彩は外面全体に及ぶ。

鉢　平行沈線と山形沈線を施す鉢が1点出土した。

弥生時代5期

主にSI 45の火山灰層上部から出土した土器である。

甕　長頸壷と外反口縁の甕が見られ、外反口縁は恵山3、4期の甕と類似する（須藤1998）。69-4は口縁部が緩やかに外反する器形で5条一組の平行沈線文が二組施文される。40- 1～3、41- 1～3、42- 1～3は地文縄文のみ施文される緩い外反土器であり、中には無文のものもある。一番の特徴はとにかく作りが粗雑であることが挙げられる。器厚も一定せず、ミガキ、ナデ、ケズリなどの調整や縄文原体による施文も精緻に行われず部分的である。胎土に砂粒や礫が混入し、焼成はいずれも軟質である。口縁部には縄文原体を回転施文させているが、口頸部には縄文原体を施文しない例や施文後に磨り消す例もみられる。

弥生時代6期

甕　三条沈線が施文される。口縁部には三角形文と交互刺突文が施文される。撚糸文が施文される

土器片で、69－９・10は、胴部の帯縄文や口縁部の三角形文、交互刺突文から天王山式土器の要素を持つ可能性が高い。口縁部の文様帯は幾何学文や平行文が施文されていて、胴部には帯縄文が施文される。これらは後北Ｂ・Ｃ１型式と類似しており、これら２つの土器型式が折衷したものと思われる。

竪穴住居跡

今回の調査では、北区から弥生時代と考えられる竪穴住居跡が３軒検出された。以下に住居跡の属性をまとめる。

竪穴住居跡の平面形は円形（ＳＩ45）、楕円形（ＳＩ46）、平面形が不明なもの（ＳＩ40）である。ＳＩ45は主柱穴が多く検出されたことから、建替えや拡張の可能性も考えられる。

規模　4.4ｍ（ＳＩ40）～6.42ｍ（ＳＩ45）の範疇に収まる中型の竪穴住居跡である。

主柱穴　ＳＩ45の主柱穴は四本で、竪穴住居跡中心の石組炉を囲うように配置される。壁溝内に掘り込まれたピット状の掘りこみが壁柱穴と考えられる。ＳＩ45は柱穴配置から別の主柱穴配置も想定されるが、これも４本柱穴となる。

ＳＩ46ではPit１を除き、壁柱穴のみが検出された。

壁溝　ＳＩ40・45で検出された。ＳＩ40は、検出部分すべてで壁溝が確認された。ＳＩ45でも検出された壁際に沿って検出されたが、住居跡南側では検出されなかった。壁溝内には底面からさらに掘りこんだピットが間隔をあけて検出された。

炉　ＳＩ45から石組炉と地床炉各１基、ＳＩ46から地床炉１基、ＳＩ40からは検出されなかった。ＳＩ45の石組炉は竪穴住居跡の中心に位置し、火床面は円形に拡がる。火床面の周囲には３点の礫がまばらに設置される。この礫は床面を掘り込んで据えられているが、燃焼部には構築前の掘り込み等は確認されなかった。火床面の中央は窪んでいるが、これは使用によって生じたものと考えられる。ＳＩ45の地床炉は、竪穴住居跡主軸上の南側に位置する。この地床炉は住居跡中央に位置する石組炉に近接する。火床面は、地床炉よりも規模がやや大きく、長方形状を呈する。火床面はやや起伏があるが、これは植物の攪乱によるものと思われる。ＳＩ46の地床炉は竪穴住居跡中央付近に位置するもので、平面形は方形状を呈する。火床面の上部には植物が根を下ろしており、炉石等の掘り方は確認されなかった。

遺物出土状況　ＳＩ45は堆積土上位に肉眼観察で十和田ｂ降下火山灰（理化学的分析では十和田ｂとされていない。）と考えられる二次堆積層がみられることから、攪拌された縄文時代の土器を除いて弥生時代の土器からは火山灰の上層と下層で層位的違いがみられるものと考えた。火山灰層を挟んで下層からは弥生時代前期末を中心とした遺物が出土し、上層からは弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺物が出土している。ＳＩ46は竪穴住居跡内の床面から完形の甕が２個体出土した。形状から弥生時代前期末の土器と考えられる。ＳＩ40では堆積土から土器片が出土したのみである。

弥生時代前期の竪穴住居跡

小田川や永嶋（小田川2003・永嶋2002）らによる弥生時代前期の集落跡の様相が論考されている。これによると、規模は概ね６～７ｍ前後の範疇で収まり、最小のもので４ｍ前後であると指摘されている（前掲小田川）。また、永嶋（前掲永嶋）は、竪穴住居跡の基本構造を「壁周溝・４本主柱穴・

密な壁柱穴・石囲炉（土器埋設）」を挙げている。これらはＳＩ45に共通する属性であり、当該期の範疇に収まる竪穴住居跡であるといえる。

炉跡は、「石囲炉が圧倒的に多く、およそ50～80㎝の範疇に収まり、大半のものは床面を浅い皿状に掘り込み火床面が作られており、掘り方は不整な円形及び楕円形である。」と指摘される（小田川前掲）。また、炉石に円礫でなく角礫が使用される点も指摘されている。炉石は、掘り方の縁辺に置かれるものが多いとされるが、本遺跡のＳＩ45では使用された角礫は各々掘り方を有している。この角礫は連続的な配置となっていないため、抜き取りが行われたものと思われる。ＳＩ45に見られる石囲炉とそれに近接する地床炉について、船場（船場2006）は、八戸市田向冷水遺跡の考察のなかでいくつかの竪穴住居跡を例に挙げ、八戸地域の炉の特徴として述べている。

本遺跡における集落跡の様相

弥生時代の竪穴住居跡が立地する台地は、東南に面した緩斜面地で、姉市沢の谷（図1・2参照）に面した舌状台地である。ＳＩ40が調査区域外に延びていることを考えると、台地の先端に向かって集落跡が拡がる可能性がある。本遺跡で弥生時代の遺構が検出されたのは北区の西側斜面のみであること、南区や北区東側斜面から出土した弥生時代の遺物数が少なく、北区西側斜面からの出土数が圧倒的に多いこと、西側斜面地の上部は急な斜面地であり、試掘調査でも遺構が確認できなかったことなどから、この集落跡は沢に面した西側緩斜面地という限定された区域に集落跡を形成していたものと考えられる。

本遺跡の周辺は山に囲まれ、水を得られる平地も少ないことから、弥生時代の水田稲作を生業として営んだ集団とは考えにくい。寧ろ、縄文時代から受け継がれた狩猟や採集を中心とした生業が行われた可能性が高いと思われる。（坂本）

引用・参考文献

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002『仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書400集

小田川哲彦 2003「第4章まとめ」『楯館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第342集　青森県教育委員会

小田川哲彦ほか 1995『上蛇沢（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第177集　青森県教育委員会

小保内裕之 2004「八戸市松ヶ崎遺跡出土の縄文時代中期後半の土器について」『第2回　東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題一資料集一』海峡土器編年研究会

小山浩平 2004「第6章まとめ」『長久保（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第367集　青森県教育委員会

北林八洲晴ほか 1984『盆窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第84集　青森県教育委員会

工藤竹久ほか 1986『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　－丹後谷地遺跡－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集

工藤竹久ほか 1988『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－田面木平遺跡（1）－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集

佐藤　剛 2000「北海道」『東日本弥生時代後期の土器編年　（第二分冊）』第9回　東日本埋蔵文化財研究会

佐藤智生 2003「第7章まとめと考察」『畑内遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書第345集　青森県教育委員会

杉山陽亮ほか 2006「第Ⅳ章　考察」『田向冷水遺跡Ⅱ　第一分冊　本文編』八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集　八戸市教育委員会

須藤　隆 1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』纂修堂

茅野嘉雄 2005「第7章」『米山（2）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第391集　青森県教育委員会

永嶋　豊 2000「東北地方北部の青木畑式土器」『研究紀要　第5号』青森県埋蔵文化財調査センター

永嶋　豊 2002「東北地方北部の初期弥生集落－亀ケ岡集落からの系譜－」『月刊文化財11』文化庁文化財部

中村哲也・斉藤慶吏 2006「第6章　考察」『新田遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第410集　青森県教育委員会

畠山　昇ほか 1993『野場（5）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集　青森県教育委員会

船場昌子ほか 2006「第Ⅳ章　考察」『田向冷水遺跡Ⅱ　第一分冊　本文編』八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集　八戸市教育委員会

土器（1）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
27	1a	北	S131	AS-60	14	1・床直	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		22
27	1b	北	S131	AS-60	13	1・床直	－	(13.4)	(34.0)	深鉢	胴～底	LR縦	縄文中期末～後期初頭		22
27	2	北	S131	AS-61	3	1	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		22
27	3	北	S131	AS-60	24	1・床直	－	－	－	深鉢	胴	LR多条縦	縄文中期末～後期初頭		22
27	4	北	S131	AS-60	6	1	－	－	－	深鉢	胴	LR多条縦	縄文中期末～後期初頭		22
27	5	北	S131	AS-60	7	1	－	－	－	深鉢	胴	無文	縄文中期末～後期初頭	内外面摩耗あり	－
27	6	北	S131	AS-60	8	1	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
27	7	北	S131	AS-61	3	1	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
27	8	北	S131	AS-61	5	1	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
27	9	北	S131	AS-60	65	床直	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		22
27	10	北	S131	AS-60	67	床直	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		22
27	11	北	S131	AS-61	28	1	－	－	－	深鉢	胴	L縦	縄文中期末～後期初頭		22
27	12	北	S131	AS-60	19	1	－	－	－	深鉢	胴	LR押圧　LR縦，円形刺突，ボタン状突起	縄文後期初頭		22
27	13	北	S131	AS-60	21	1・床直	－	－	－	深鉢	胴～底	LR縦	縄文中期末～後期初頭	内面炭化物	22
28	1	北	S132	AT-62	28	床直	27.7	10.4	36.9	深鉢	完形	口縁の一部LR横，その他LR縦	縄文中期末～後期初頭		22
28	2	北	S132	AT-63	18	床直	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭		22
28	3	北	S132	AT-63	1	2	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		22
28	4	北	S132	AT-63	7	2	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
28	5	北	S132	AT-63	19	床直	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭		22
28	6	北	S132	AT-63	34	床面	－	－	(4.2)	深鉢	口縁	LR縦，結節文	縄文中期末～後期初頭		22
28	7	北	S132	AT-63	13	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL斜・縦，結節	縄文中期末～後期初頭		22
28	8	北	S132	AT-62	34	床面	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭	炭化物付着	22
28	9	北	S132	AT-62	27	床直	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		22
28	10	北	S132	AT-62	12	2	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	－
28	11	北	S132	AT-62	10	2	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		22
29	1	北	S133	AR-59	44	2	27.4	10.7	39.7	深鉢	完形	RL縦，内面ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭		22
29	2	北	S133	AR-59	29	5	(22.8)	－	27.3	深鉢	口縁～底	やや波状，LR縦，内面ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭		22
29	3	北	S133	AR-57	～	堆積土	－	9.4	(29.1)	深鉢	口縁～底	L縦回，L押圧，内面ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	22
29	4	北	S133	AR-59	7・10	2	(10.0)	－	(8.6)	深鉢	口縁～胴	口縁LR横，LR縦，LR押圧	縄文後期初頭		22
29	5	北	S133	AR-59	26	6	－	－	－	壺	口縁	無文	縄文中期末～後期初頭		22
29	6	北	S133	AR-59	11	2	－	－	－	深鉢	口縁	波状，粘土貼付，LR回	縄文後期初頭		23
29	7	北	S133	AR-59	43	5	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR横，LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
29	8	北	S133	AR-59	8	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		23
29	9	北	S133	AR-59	13	2	－	－	－	深鉢	口縁	LR押圧	縄文後期初頭		23
29	10	北	S133	AR-59	13	2	－	－	－	深鉢	口縁	LR・L縦	縄文後期初頭		－
29	11	北	S133	AR-59	43	5	－	－	－	深鉢	口縁	L押圧	縄文後期初頭		23
30	1	北	S133	AR-57	～	堆積土	－	－	－	深鉢	胴	粘土紐貼付，沈線，LR縦・斜	縄文後期初頭		23
30	2	北	S133	AR-59	42	5	－	－	－	深鉢	胴	粘土紐貼付，沈線，LR縦・斜	縄文後期初頭		23
30	3	北	S133	AR-59	45	床面	－	－	－	深鉢	胴	粘土紐貼付，沈線，LR横・縦	縄文後期初頭		23
30	4	北	S133	AR-57	～	堆積土	－	－	－	深鉢	胴	LR縦，沈線	縄文中期末～後期初頭		－
30	5	北	S133	AR-59	18	5	－	－	－	深鉢	胴	無文，粘土貼付	縄文後期初頭		－
30	6	北	S133	AR-57	～	堆積土	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		23
30	7	北	S133	AR-59	43	5	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
30	8	北	S133	AR-59	32	2	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
30	9	北	S133	AR-59	35	2	－	－	－	深鉢	胴	L縦	縄文中期末～後期初頭		－
30	10	北	S133	AR-58	1	2	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
30	11	北	S133	AR-59	43	5	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	1	南	S134	BX-37	52	2	－	4.5	(4.7)	深鉢	胴～底	LR縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	2	南	S134	BX-37	10	2	－	－	－	深鉢	口縁～胴	L縦，結節文，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	23
31	3	南	S134	BX-37	45	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	4	南	S134	BX-37	7	2	－	－	－	深鉢	口縁	波状，LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
31	5	南	S134	BX-37	24	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	6	南	S134	－	－	1	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
31	7	南	S134	BX-37	5	2	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	8	南	S134	BX-37	7	2	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
31	9	南	S134	BX-37	61	床面	－	－	－	深鉢	胴	沈線，L縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	10	南	S134	BX-37	10	2	－	－	－	深鉢	胴	LR縦，結節文	縄文中期末～後期初頭		－
31	11	南	S134	BX-37	54	2	－	－	－	深鉢	胴	L縦，沈線	縄文大木10式併行期	外面炭化物付着	－
31	12	南	S134	BX-37	35	2	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
31	13	南	S134	BX-37	59	床直	－	－	－	深鉢	胴	RL縦・斜	縄文中期末～後期初頭		23
31	14	南	S134	BX-37	22	2	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
31	15	南	S134	BX-37	50	2	－	－	－	深鉢	胴～底	RL縦	縄文中期末～後期初頭		23

土器（2）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P.番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
31	21	南	S135	CB-38	7	3	(13.0)	－	(14.4)	深鉢	口縁～底	四波状，波頂部刺突，RL 縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	22	南	S135	CB-38	5	1	－	8.2	(3.0)	深鉢	口縁～底	口縁粘土整形，RL 縦，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	23
31	23	南	S135	CB-38	10	3	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL 縦	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	－
31	24	南	S135	CB-38	12	3	－	－	－	深鉢	口縁	L 縦，結節（L）縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	25	南	S135	CB-38	8	3	－	－	－	深鉢	胴	RL 斜	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	－
31	26	南	S135	CB-38	14	3	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		23
31	27	南	S135	CB-38	1	2	－	－	－	深鉢	胴	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		－
31	28	南	S135	CB-38	4	3	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
31	29	南	S135	CB-38	9	3	－	－	－	深鉢	胴～底	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		23
32	1	南	S136	BW-36	12	床面	(19.0)	9.0	28.0	深鉢	略完形	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		23
32	2	南	S136	BW-36	24	1	－	－	－	深鉢	口縁	波状，内外面粘土貼付	縄文後期初頭		23
32	3	南	S136	BV-36	29	1	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦，沈線	縄文中期後半		23
32	4	南	S136	BW-36	16	1	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		23
32	5	南	S136	BW-36	14	1	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		23
32	6	南	S136	BW-36	6	1	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		23
32	7	南	S136	BV-36	35	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦，沈線	縄文大木 10 式併行期		23
32	8	南	S136	BV-36	28	1	－	－	－	深鉢	胴	条痕（縦）	縄文中期末～後期初頭		－
32	9	南	S136	BV-36	35	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
32	10	南	S136	BW-36	44	2	－	－	－	深鉢	胴	L 縦	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	23
32	11	南	S136	BV-36	26・31・40	1	－	13.5	(4.0)	深鉢	底	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		23
32	14	南	S137	－	－	床面	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		24
32	15	南	S137	CB-39	－	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		24
32	16	南	S137	CB-39	5	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		24
32	17	南	S137	－	－	床面	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	24
32	18	南	S137	CB-39	2	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
33	1	南	S138	CA-39	8	1	－	(15.0)	(13.4)	深鉢	胴～底	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		24
33	2	南	S138	CA-39	3・6・7	2	－	9.9	(5.9)	深鉢	底	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		24
33	3	南	S138	CA-39	15・24	3	11.3	－	(4.2)	深鉢	底	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		24
33	4	南	S138	CA-39	4	2	－	4.8	(1.8)	深鉢	底	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
33	5	南	S138	CA-39	21	3	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁，単節 5 類（R）縦	縄文後期初頭	編繊痕	24
33	6	南	S138	CA-39	23	1	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁	縄文後期初頭	外面炭化物付着	24
33	7	南	S138	CA-39	26	1	－	－	－	深鉢	口縁	粘土貼付，LR 縦	縄文後期初頭		24
33	8	南	S138	－	－	3	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁，LR 縦	縄文中期末～後期初頭		24
33	9	南	S138	CA-38	32	床直	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦，沈線	縄文大木 10 式併行期		24
33	10	南	S138	CA-39	15	3	－	－	－	深鉢	胴	L 縦	縄文中期末～後期初頭		24
33	11	南	S138	CA-39	10	4	－	－	－	深鉢	胴	L 縦，結節文	縄文中期末～後期初頭		－
33	12	南	S138	CA-38	29	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		24
33	13	南	S138	CA-39	27	3	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		24
34	1	北	S139	AH-63	13	床直	－	12.0	(13.0)	深鉢	胴～底	LR 縦，底部ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭	外面一部炭化	24
34	2	北	S139	AH-63	7	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦，結節文（R）	縄文中期末～後期初頭		24
34	3	北	S139	AH-63	5	2	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		24
34	4	北	S139	AH-63	15	3	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		－
34	5	北	S139	AH-63	12	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		24
34	6	北	S139	AH-63	7	2	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR・RL 横，補修孔	縄文後期後半		24
34	7	北	S139	AH-63	13	床直	－	－	－	深鉢	胴	L 縦，結節文	縄文中期末～後期初頭		24
34	8	北	S139	AH-63	13	床直	－	－	－	深鉢	胴	RL 斜，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭	34-18 と同一	－
34	9	北	S139	AH-63	1	2	－	－	－	甕	口縁	LR 縦，ユビナデ痕，内面ミガキ	弥生時代 2 期	外面炭化物付着	24
34	10	北	S139	AH-63	3	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL 押圧，RL 縦→粘土貼付，刻目	縄文後期初頭		24
34	11	北	S139 炉	AH-63	7	2	－	－	－	深鉢	胴	L 縦	縄文中期末～後期初頭		－
34	12	北	S139 炉	AH-63	3	3	－	－	－	深鉢	胴	沈線，LR 横	縄文中期末～後期初頭	34-19 と同一	24
34	13	北	S139 炉	AH-63	7	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
34	14	北	S139 炉	AH-63	6	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
34	15	北	S139	AH-63	15	3	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
34	16	北	S139 炉	AH-63	6	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
34	17	北	S139	AH-63	20	3	－	－	－	深鉢	胴	R 縦	縄文中期末～後期初頭		24
34	18	北	S139	AH-63	19	3	－	－	－	深鉢	胴	RL 縦，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭	34-8 と同一	24
34	19	北	S139	AH-63	52	3	－	－	－	深鉢	胴	LR 横，沈線	縄文大木 10 式併行期	34-12 と同一	24
34	20	北	S139	AH-63	4	2	－	－	－	皿	底	無文，手づくね	縄文中期末～後期初頭		－
35	1	北	S140	AH-63	37	2	－	－	－	深鉢	口縁	波状，折り返し口縁，RL 横，単節 1 (L) 縦	縄文後期前葉		25
35	2	北	S140	AH-63	50	1	－	－	－	深鉢	口縁	L 横→沈線	縄文後期前葉		25

土器（3）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
35	3	北	SI40	AH-63	51	2	－	－	－	深鉢	口縁	波状，LR横→沈線	縄文後期前葉		－
35	4	北	SI40	AH-63	49	2	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦，細い沈線	縄文中期末～後期初頭	工具痕か	－
35	5	北	SI40	AH-63～64	－	2	－	－	－	鉢	口縁	LR横	弥生時代		25
35	6	北	SI40	AH-63	40	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL横・縦	縄文土器内西群		25
35	7	北	SI40	AH-63～64	－	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文後期後半		－
35	8	北	SI40	AH-63～64	－	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
35	9	北	SI40	－	－	堆積土	－	－	－	深鉢	口縁	L縦	縄文中期末～後期初頭		25
35	10	北	SI40	AH-63	41	2	－	－	－	壺	口縁	無文	弥生時代		－
35	11	北	SI40	AH-63	62	2	－	－	－	壺	口縁	無文	弥生時代		25
35	12	北	SI40	AH-63	46	2	－	－	－	壺	口縁	無文	縄文後期		25
35	13	北	SI40	AH-63	34	3	－	－	－	壺	口縁	無文	弥生時代		25
35	14	北	SI40	AH-63～64	－	2	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		25
35	15	北	SI40	AH-63	60	4	－	－	－	深鉢	胴	LR横	縄文後期前葉		25
35	16	北	SI40	AH-63	22	1	－	－	－	深鉢	胴	L斜，沈線	縄文後期前葉		25
35	17	北	SI40	AH-63	59	4	－	－	－	壺	胴	沈線	縄文後期前葉		25
35	18	北	SI40	AH-63	43	2	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		25
35	19	北	SI40	AH-63	53	2	－	－	－	壺	胴	LR横	縄文中期末～後期初頭		25
35	20	北	SI40	－	－	堆積土	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		25
35	21	北	SI40	AH-63	61	1	－	－	－	深鉢	胴	単節5類(R)	縄文後期前葉		25
35	22	北	SI40	AH-63	61	1	－	－	－	深鉢	胴	LR横・斜	弥生時代		25
35	23	北	SI40	AH-63	41	2	－	－	－	壺	胴	無文	弥生時代		25
35	24	北	SI40	AH-63	56	未直	－	－	－	壺	胴～底	屈曲部に沈線一条，外面ミガキ	弥生時代		25
35	25	北	SI40	AH-63	38	2	－	－	－	壺	底	LR横	縄文後期		－
36	1	北	SI41	－	－	床面	－	－	－	壺	口縁	無文	縄文後期		25
36	2	北	SI41	A1-62	2	床面	－	－	－	壺	口縁	無文，外面一部ミガキ	縄文後期		25
36	3	北	SI41 ※1	A1-62	1	火床面	－	－	－	壺	口縁	無文	縄文後期		25
36	4	北	SI41	AH-63	16	1	－	－	－	壺	口縁	RL横	縄文後期		－
36	5	北	SI41	AH-63	24	1	－	－	－	壺	口縁	ミガキ，条痕	縄文中期末～後期初頭		25
36	6	北	SI41	AH-63	24	1	－	－	－	壺	口縁	口縁LR回，胴LR横	弥生時代		25
36	7	北	SI41	A1-63	34	1	－	－	－	深鉢	口縁	L横→L押圧	弥生時代	金雲母混入	25
36	8	北	SI41	A1-63	35	1	－	－	－	深鉢	胴	RL押圧，RL横	縄文後期初頭		25
36	9	北	SI41	A1-63	39	1	－	－	－	深鉢	胴	LR斜→ミガキ→沈線	縄文中期末～後期初頭		25
36	10	北	SI41	A1-63	38	1	－	－	－	深鉢	胴	LR横	縄文中期末～後期初頭		－
36	11	北	SI41	A1-62	2	床面	－	－	－	深鉢	胴	単節5類(R)	縄文中期末～後期初頭		25
36	12	北	SI41	－	－	床面	－	－	－	深鉢	口縁	RL横	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	－
36	13	北	SI41	AH-62	6	1	－	－	－	深鉢	胴	LR斜	縄文中期末～後期初頭		25
36	14	北	SI41	AH-62	8	1	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
36	15	北	SI41	AH-62	10	1	－	－	－	深鉢	胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
36	16	北	SI41	A1-63	37	1	－	－	－	深鉢	胴	反撚L，LR横	縄文中期末～後期初頭		25
36	17	北	SI41	A1-63	33	1	－	－	－	深鉢	胴	単節5類(R) 縦	縄文後期前葉		－
36	18	北	SI41	AH-63	17	1	－	6.0	(2.9)	深鉢	底	ミガキ	縄文中期末～後期初頭		25
36	19	北	SI41 ※1	A1-62	1	火床面	－	11.7	(1.9)	深鉢	底	無文	縄文中期末～後期初頭		－
37	1	北	SI42	AH-65	1	1	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭		25
37	2	北	SI42	AH-65	3	1	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭		25
37	3	北	SI42	AH-65	2	1	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		25
37	5	南	SI44	CD-38	3	床面	15.5	9.4	(27.9)	深鉢	口縁～底	LR縦	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	26
37	6	南	SI44	CD-38	2	床面	(15.5)	8.5	19.9	深鉢	略完形	LR縦→沈線，刺突	縄文大木10式併行期		26
37	7	南	SI44	CD-38	2	床面	－	－	－	深鉢	口縁	RL横	縄文中期末～後期初頭		26
37	8	南	SI44	CD-38	－	床面	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
37	9	南	SI44	CD-38	3	床面	－	－	－	深鉢	胴	LR・RL横	縄文中期末～後期初頭		－
37	10	南	SI44 ※1	－	－	火床面	－	－	－	深鉢	胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		26
38	1	北	SI45	AJ-65	45	Ⅲ	(26.6)	(8.6)	39.1	壺	略完形	口縁RL横，波状，沈線，刺突，無ミガキ，胴RL斜	弥生時代4期		26
38	2	北	SI45	AJ-65	－	堆積土	－	－	－	壺	口縁	口縁RL横→沈線，刻目文	弥生時代4期		26
38	3	北	SI45	AJ-65	33	Ⅲ	－	－	－	壺	胴	RL斜→沈線，爪形刺突文，内面ミガキ	弥生時代4期		26
38	4	北	SI45	AJ-65	9	Ⅲ	－	5.4	(8.6)	壺	胴～底	外面ヘラミガキ後，右上刺突	弥生時代4期	黒色・赤色塗彩	26
38	5	北	SI45	AJ-65	－	堆積土	－	－	－	壺	口縁胴～胴	RL横→沈線，胴部コブ状突起，内面ミガキ	弥生時代4期	外面炭化物付着	26
38	6	北	SI45	AJ-65	21	Ⅲ	－	－	(14.2)	壺	胴	RL斜	弥生時代4期		26
38	7	北	SI45	AJ-66	76	Ⅲ	15.2	(3.8)	(8.7)	高坏	口縁～底	RL横→沈線，口端縄文，ミガキ，内面ヘラミガキ	弥生時代4期	赤色試料№4	26
38	8	北	SI45	AJ-65	38	Ⅲ	－	－	－	壺	口縁	口端部LR回，補修孔，LR横→ミガキ→沈線	弥生時代4期		26
38	9	北	SI45	AJ-65	43	Ⅲ	－	－	－	壺	口縁	LR横→ミガキ→沈線	弥生時代4期		26

土器（4）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
38	10	北	S145	AJ-66	180	火山灰下6	－	－	－	甕	口縁	口端LR回，LR斜→沈線→ミガキ	弥生時代4期		26
38	11	北	S145	AJ-65	240	火山灰下6	－	－	－	鉢	口縁	口端刻目文，RL横→沈線	弥生時代4期		26
39	1a	北	S145	AJ-66	75	Ⅲ	－	－	－	壺	口縁～胴	沈線，列点文，LR横	弥生時代2期		26
39	1b	北	S145	AJ-66	75	Ⅲ	－	7.4	(14.8)	壺	口縁～底	摩耗により不明。	弥生時代2期		26
39	2	北	S145	AK-65	58	Ⅲ	－	7.9	(18.5)	壺	胴～底	頸部に一条の沈線，胴上LR横・縦・斜，胴中LR斜，胴下半LR横，内面ヘラミガキ	弥生時代2期		26
39	3	北	S145	AJ-65	205	火山灰下6	15.2	(7.6)	17.5	甕	口縁～底	口縁ヘラミガキ，胴LR横，内面ミガキ	弥生時代2期		26
39	4	北	S145	AJ-66	165	火山灰下6	－	－	－	甕	口縁～胴	LR斜，内面ミガキ	弥生時代2期	外面炭化物付着	26
39	5	北	S145	AJ-65	－	堆積土	－	－	－	甕	口縁刻～胴	L押圧，L斜，内面指頭圧痕	弥生時代2期		－
39	6	北	S145	AJ-66	90	Ⅲ	－	－	－	壺	口縁刻～胴	LR斜・横	弥生時代2期		26
39	7	北	S145	AJ-66	136	火山灰下6	－	－	－	壺	口縁～肩	LR横→沈線	弥生時代2期		－
39	8	北	S145	AJ-66	100	Ⅲ	－	－	－	壺	胴	沈線，外面ミガキ，内面ヘラナデ	弥生時代2期	外面炭化物付着	26
39	9	北	S145	AJ-65	16	Ⅲ	－	－	－	壺	口縁	沈線，刺突	弥生時代2期		26
40	1	北	S145	AJ-65	45	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁～胴	口縁LR横，胴LR斜，内面口縁LR横，胴部ヘラナデ（横）	弥生時代5期	外面炭化物付着，粘土砂粒混入	27
40	2	北	S145	AJ-65	43	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁～胴	口端平坦面作出，LR斜，内面LR横，内面ヘラナデ	弥生時代5期	外面炭化物付着	－
40	3	北	S145	AJ-65	23	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁～胴	LR横→口縁ヘラミガキ（横）による磨消，胴部一部ヘラナデ内面ヘラナデ	弥生時代5期	外面炭化物付着	27
41	1 a+b	北	S145	AJ-65	46・45	Ⅲ	(23.2)	(4.0)	－	甕	口縁～底	やや波状，口端平坦面作出，口縁部無文・やや肥厚し内溝，胴LR横，内面ヘラナデ（横）	弥生時代5期	金雲母混入	27
41	2	北	S145	AJ-66	95	Ⅲ	(33.4)	－	(11.7)	甕	口縁	異条縄文LR横，口頸部ヘラナデ（横）→胴部附加条LR＋LR斜，内面ヘラナデ	弥生時代5期		27
41	3	北	S145	AJ-65	33	Ⅲ	－	－	－	甕	胴～底	口端棒状工具を斜めに押圧，RL横，底外面木葉痕，内面ヘラケズリ	弥生時代5期	外面炭化物付着，粘土砂粒混入	27
41	4	北	S145	AJ-66	80	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	附加条LR＋L斜	弥生時代5期		27
41	5	北	S145 炉1付近		－	床面	－	－	－	甕	口縁	LR・RL横	弥生時代5期		27
41	6	北	S145	AJ-65	155・190・202	火山灰土・火山灰下	－	－	－	甕	口縁	内外面条痕文	弥生時代2期		27
41	7	北	S145	AJ-65	110	Ⅲ	－	－	－	甕	胴	異条縄文LR斜	弥生時代5期		27
42	1	北	S145	AJ-65	5	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	浅い沈線，胴部LR横，内面ヘラナデ	弥生時代5期		27
42	2	北	S145	AJ-65	194	火山灰上	－	－	－	甕	胴	外面ヘラナデ，内面ヘラナデ	弥生時代5期		－
42	3	北	S145	AJ-65	40	Ⅲ	(31.0)	－	(19.8)	甕	口縁～胴	無文，ヘラナデ（横），内面ヘラナデ	弥生時代5期		27
42	4	北	S145	AJ-66	138	火山灰下6	－	－	－	甕	口縁	無文，ヘラナデ	弥生時代5期		27
42	5	北	S145	AJ-65	－	堆積土	－	－	－	甕	口縁	無文	弥生時代5期		27
42	6	北	S145	AJ-65	8	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	無文	弥生時代5期		－
42	7	北	S145	AJ-65	35	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	内外面ミガキ	弥生時代5期		－
42	8	北	S145	AJ-66	94	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	内外面ヘラナデ	弥生時代5期	内外面炭化物付着	27
42	9	北	S145	AJ-66	69	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁～胴	ケズリ，内面折り返し口縁	弥生時代5期		－
42	10	北	S145	AJ-66	21・22・87	火山灰上	－	－	－	甕	口縁	無文	弥生時代5期		－
42	11	北	S145	AJ-65	48	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	口端部突起，無文，外面ミガキ	弥生時代5期		－
42	12	北	S145	AJ-66	89	Ⅲ	(10.2)	－	(9.0)	甕	口縁～胴	ハケメ幅1cmのヘラ状工具で横ナデ（整形），一一部ヘラミガキ	弥生時代5期		27

土器（5）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
42	13	北	SI45	AJ-66	94	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	無文	弥生時代5期		27
42	14	北	SI45	AJ-65	49	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	内外面ミガキ	弥生時代5期		－
42	15	北	SI45	AJ-65	42	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	口端刻目文，ナデ	弥生時代5期		－
42	16	北	SI45	AJ-66	102	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	外面ミガキ	弥生時代5期		－
43	1	北	SI45	AJ-65	114	Ⅲ	－	－	(20.3)	甕	胴	LR斜，内面ヘラナデ	弥生時代5期		28
43	2	北	SI45	AJ-65	8・10・228・232	Ⅲ	－	－	－	甕	胴	RL斜，結節文	弥生時代5期	外面炭化物付着	－
43	3	北	SI45	AJ-65	22	Ⅲ	－	8.4	(11.2)	甕	胴～底	外面ヘラ，ハケメ状工具，底外面木葉痕，内面ヘラナデ	弥生時代5期		28
43	4	北	SI45	AJ-65	16	Ⅲ	－	－	－	甕	底	外面ヘラ痕，内面ミガキ	弥生時代5期		28
43	5	北	SI45	AJ-66	90	Ⅲ	－	6.6	(3.5)	甕	底	RL斜，底内外面ミガキ	弥生時代5期		－
43	6	北	SI45	AJ-66	73	Ⅲ	－	－	－	甕	胴～底	底部付近LR斜・横→ミガキ，内面ミガキ	弥生時代5期		－
43	7	北	SI45	AJ-66	21	火山灰上	－	－	－	甕	底	RL横	弥生時代5期		28
43	8	北	SI45	AJ-66	89	Ⅲ	－	－	－	甕	底	外面ナデ→ミガキ，内面ナデ	弥生時代5期		28
43	9	北	SI45 炉2付近	－	－	床面	－	7.0	(2.8)	甕	底	無文，内外面ミガキ	弥生時代5期		－
44	1	北	SI45	A1-66	124	火山灰下6	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→RL押圧	縄文中期後半		28
44	2	北	SI45	AJ-65	195	火山灰上	－	－	－	深鉢	胴	刺突，LR縦	縄文最花式	金雲母混入	28
44	3	北	SI45	AJ-65	43	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	RL横→沈線	縄文中期後半	外面炭化物付着	－
44	4	北	SI45	AJ-65	16	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	波状，LR斜→沈線，ボタン状貼付	縄文後期初頭		28
44	5	北	SI45	AJ-65	13	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	口端平坦，RL斜→沈線	縄文後期初頭	44-10・16と同一	28
44	6	北	SI45	AJ-65	211	火山灰下6	－	－	－	深鉢	胴	LR横・斜→沈線	縄文後期初頭		－
44	7	北	SI45	AJ-66	161	火山灰下6	－	－	－	深鉢	胴	LR横・斜→沈線	縄文後期初頭		－
44	8	北	SI45	AJ-66	181	火山灰下6	－	－	－	深鉢	胴	LR横→沈線	縄文後期初頭		28
44	9	北	SI45 炉1付近	－	－	床面	－	－	－	深鉢	胴	L斜→沈線	縄文後期初頭		28
44	10	北	SI45	AJ-65	38	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR斜め→沈線	縄文後期初頭	44-5・16と同一	28
44	11	北	SI45	AJ-65	40	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，L横・斜→沈線	縄文十腰内Ⅰ群		28
44	12	北	SI45	AJ-65	227	火山灰下6	－	－	－	深鉢	口縁	沈線二条，ヘラナデ痕	縄文十腰内Ⅰ群		28
44	13	北	SI45	AJ-65	48	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	単節5類(R)縦	縄文後期前葉		28
44	14	北	SI45 P1129	－	－	－	－	－	－	深鉢	口縁	単節5類(R)縦	縄文後期前葉		28
44	15	北	SI45	AJ-66	103	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁	縄文後期初頭		28
44	16	北	SI45	AJ-66	164	火山灰下6	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁，LR縦	縄文後期初頭	44-5・10と同一	28
44	17	北	SI45	AJ-66	158	火山灰下6	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL横→沈線，内面ミガキ	縄文十腰内Ⅱ群		28
44	18	北	SI45	AJ-65	34	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	LR→沈線，内外面ミガキ	縄文十腰内Ⅱ群		28
44	19	北	SI45	AJ-65	239	火山灰下6	－	－	－	深鉢	胴	LR横→沈線，内外面ミガキ	縄文十腰内Ⅱ群		－
44	20	北	SI45	AJ-65	50	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	補修孔	縄文後期後半		28
44	21	北	SI45	AJ-66	168	火山灰下6	－	－	－	深鉢	胴	条痕文	縄文後期前葉		－
44	22	北	SI45	A1-66	114	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	LR横→沈線	縄文後期後半		28
44	23	北	SI45	AJ-66	138	火山灰下6	－	－	－	鉢	胴	沈線，外面ミガキ	縄文晩期前半		28
44	24	北	SI45	AJ-66	157	火山灰下6	－	－	－	鉢	胴	沈線，外面ミガキ	縄文晩期前半		28
44	25	北	SI45	AJ-65	41・194・211	火山灰下6	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		28
44	26	北	SI45	AJ-66	95	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横	縄文中期末～後期初頭		28

土器（6）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P 番	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
44	27	北	S145	AK-65	54	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR 横	縄文中期末～後期初頭		－
44	28	北	S145	AK-65	54	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		28
44	29	北	S145	AJ-65	210	火山灰下6	－	－	－	深鉢	口縁	LR 横	縄文中期末～後期初頭		－
44	30	北	S145	AJ-66	137	火山灰下6	－	－	－	深鉢	胴	RL 縦，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭		28
44	31	北	S145	AJ-66	89	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	条痕	縄文後期前葉		28
44	32	北	S145	AJ-66	90	Ⅲ	－	(9.0)	(4.1)	深鉢	胴～底	無文，内外面ヘラナデ	縄文後期		－
44	33	北	S145	AJ-65	36	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 横	縄文後期後半		28
44	34	北	S145	AJ-65	194	火山灰上	－	－	－	深鉢	胴	RL・LR 横，輪積痕	縄文後期後半		28
44	35	北	S145	AJ-65	29	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	無文，ミガキ	縄文後期後半		28
44	36	北	S145	AI-65	111	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	無文，ミガキ	縄文後期後半		－
46	1	北	S146	AG-66	2	床面	(22.0)	(9.4)	(38.5)	甕	口縁～底	口縁部に浅く縄で施文，底外面RL横，五波状，内面ヘラケズリ，ヘラナデ	弥生時代2期		29
46	2	北	S146	AG-65	14	床面	23.0	9.6	31.9	甕	口縁～底	波頂部刺突，口縁～胴上五波状，RL横，胴上～胴下ヘラケズリ，胴下半RL斜，内面口縁～胴上ヘラナデ	弥生時代2期		29
46	3	北	S146	－	1・2	床面	(15.2)	－	(7.8)	鉢	口縁	LR 横→ミガキ，内面ヘラ痕	弥生時代2期	外面炭化物付着	29
46	4	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	甕	胴	RL・LR 横	弥生中期前半	金雲母混入	29
46	5	北	S146	－	－	床面	－	－	－	甕	胴	RL 横	弥生中期前半		29
46	6	北	S146	－	－	床面	－	－	－	甕	胴	RL 斜	弥生中期前半		－
46	7	北	S146	AH-66	18	2	－	－	－	甕	胴	内外面ミガキ	弥生中期前半		－
46	8	北	S146	AH-66	19	2	－	－	－	甕	胴	内外面ミガキ	弥生中期前半		－
46	9	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	甕	胴	LR 斜→ミガキ	弥生中期前半		29
46	10	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	沈線，内外面ミガキ	縄文十腰内1群		29
46	11	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	沈線，ミガキ，内外面ミガキ	縄文十腰内1群		29
46	12	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	鉢	口縁	口縁短土貼付，沈線	縄文晩期前半		－
46	13	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	鉢	胴	ミガキ，沈線	縄文晩期前半		－
46	14	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	鉢	胴	RL 斜→ミガキ，沈線	縄文晩期後半		29
46	15	北	S146	－	－	床面	－	－	－	深鉢	口縁	LR 横	縄文中期末～後期初頭		29
46	16	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	RL 横	縄文中期末～後期初頭	金雲母混入	29
46	17	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	L 縦	縄文中期末～後期初頭		－
46	18	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
46	19	北	S146	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	L 斜	弥生時代2期		29
47	1	北	S147 P114	－	－	1	(24.2)	－	(27.5)	深鉢	口縁～胴	波状，三波状?，RL 縦	縄文中期末～後期初頭		29
47	2	北	S147 P114	－	－	1	－	－	－	深鉢	口縁	RL 斜→沈線	縄文中期後半		29
47	3	北	S147	AI-62	－	1	－	－	－	深鉢	胴	RL 縦，沈線	縄文大木 10式併行期		－
47	4	北	S147	AI-62	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 横	縄文中期末～後期初頭		29
47	5	北	S147	AI-62	3	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		29
47	6	北	S147	AI-62	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		29
47	7	北	S147	AI-62	1	3	－	－	－	深鉢	胴	RL 斜	縄文中期末～後期初頭		－
47	8	北	S147	AI-62	－	1	－	－	－	深鉢	胴	RL 斜・横	縄文中期末～後期初頭		－
47	9	北	S147	AI-62	－	1	－	－	－	深鉢	胴	RL 縦・斜	縄文中期末～後期初頭		－
47	10	北	S147	AI-62	1	3	－	－	－	深鉢	底	L 縦	縄文中期末～後期初頭		29
47	11	北	S147	AI-62	－	1	－	－	－	深鉢	底	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		－
47	12	南	SK28	CB-37	1	2	－	－	－	深鉢	胴	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	13	北	SK29	AT-61	2	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 横→沈線，ミガキ	縄文大木 10式併行期		－
47	14	北	SK29	AT-61	2	2	－	－	－	深鉢	胴	L 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	15	北	SK29	AT-61	2	2	－	－	－	深鉢	胴	L 縦	縄文中期末～後期初頭	内面炭化物付着	30
47	16	北	SK29	AT-61	1	1	－	－	－	深鉢	胴	無文，輪積痕	縄文中期末～後期初頭		30
47	17	北	SK29	AT-61	－	1	－	－	－	深鉢	胴	L 縦	縄文中期末～後期初頭	内外面炭化物付着	30
47	18	北	SK29	AT-61	2	2	－	－	－	深鉢	胴	L 縦	縄文中期末～後期初頭	内面炭化物付着	30
47	19	南	SK30	BY-38	1	1	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭		30
47	20	南	SK30	CA-38	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	21	南	SK31	BV-35	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭	内面炭化物付着	30
47	22	北	SK33	AJ-66	－	1	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	23	北	SK33	AJ-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR・RL 横	縄文中期末～後期初頭		30
47	24	北	SK33	AJ-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	25	北	SK33	AJ-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	26	北	SK33	AJ-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
47	27	北	SK33	AJ-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	28	北	SK33	AJ-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
47	29	北	SK33	AJ-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30

土器（7）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
47	30	北	SK35	AG-67	－	2	－	－	－	深鉢	胴	摩耗，単節 1 類 (R) 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	31	北	SK35	AG-67	－	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	32	北	SK35	AG-67	－	2	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦，沈線	縄文中期末～後期初頭		30
47	33	北	SK37	AH-66	－	1	－	－	－	台付	胴～底	外面ミガキ，沈線，高台付	縄文中期末～後期初頭		30
47	34	北	SK37	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	粗，斜	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	30
47	35	北	SK37	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 斜	縄文中期末～後期初頭		－
47	36	北	SK37	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR，沈線	縄文中期末～後期初頭		－
47	37	北	SK37	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	無文	縄文中期末～後期初頭		－
47	38	北	SK37	AH-66	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭		30
47	39	北	SK38	AQ-58	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
47	40	北	SK38	AQ-58	－	1	－	－	－	深鉢	胴	LR	縄文中期末～後期初頭		30
48	1	南	SK3	BY-36	－	2	(22.1)	－	(28.3)	深鉢	口縁～胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
48	2	南	SK5	－	－	－	－	－	(22.8)	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		30
49	1	南	－	BX-37	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦→刺突，内外面ミガキ	縄文最花式	外面炭化物付着	31
49	2	南	－	BT-35	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	刺突，LR 縦→沈線	縄文最花式		31
49	3	南	－	CD-39	526	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	LR?→刺突，沈線	縄文最花式		31
49	4	南	－	BX-37	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦→沈線，刺突	縄文最花式		－
49	5	南	－	BT-35	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	刺突，ミガキ	縄文最花式		－
49	6	南	－	BU-35	469	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	沈線，ミガキ	縄文中期後半		－
49	7	南	－	CA-37	33	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	刺突	縄文中期後半		31
49	8	南	－	CD-38	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	ボタン状粘土貼付→刺突	縄文大木 10 式併行期		31
49	9a	南	－	CA-37	42	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦→沈線	縄文大木 10 式併行期	外面炭化物付着	31
49	9b	南	－	CA-37	148	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	補修孔，LR 縦→沈線	縄文大木 10 式併行期	外面炭化物付着	31
49	10	南	－	CC-40	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	隆線文，刺突	縄文大木 10 式併行期		31
49	11	南	－	CA-37	148	Ⅳ	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦→粘土貼付→沈線	縄文大木 10 式併行期		31
49	12	南	－	BX-37	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	LR 斜→沈線	縄文大木 10 式併行期		31
49	13	南	－	BW-35	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	沈線→RL 横・縦→ミガキ	縄文大木 10 式併行期		－
49	14	南	－	BY-37	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	RL 斜→沈線	縄文大木 10 式併行期		－
49	15	南	－	BW-36	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	沈線→LR 斜	縄文大木 10 式併行期		－
49	16	南	－	CA-37	543	Ⅳ	－	－	－	深鉢	胴	RL 斜→沈線	縄文大木 10 式併行期		－
49	17	南	－	CA-37	251	Ⅳ	－	－	－	深鉢	胴	LR 横→沈線	縄文大木 10 式併行期		31
49	18	南	－	BY-37	400	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	RLR 横→沈線	縄文大木 10 式併行期		－
49	19	南	－	BW-37	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 横→沈線	縄文大木 10 式併行期		－
49	20	南	－	BX-36	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR，粘土紐貼付→沈線，刺突	縄文後期初頭		31
49	21a	南	－	BT-34	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，粘土紐貼付→刺突	縄文後期初頭		31
49	21b	南	－	CD-39	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，粘土紐貼付→刺突，LR 縦	縄文後期初頭		31
49	22	南	－	BT-35	277	Ⅳ	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦→粘土紐貼付→刺突	縄文後期初頭		31
49	23	南	－	BU-35	509	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁突起，L 縦→L 押圧	縄文後期初頭	49-24 と同一	31
49	24	南	－	BT-35	498	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	L 縦→L 押圧，内面ミガキ	縄文後期初頭	49-23 と同一	31
49	25	南	－	BY-36	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	沈線	縄文後期前葉		－
49	26	南	－	BX-37	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	L 横・斜→沈線	縄文後期前葉		31
49	27	南	－	BT-35	489・490	Ⅳ	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦→粘土紐貼付→刺突	縄文後期初頭		－
49	28	南	－	BU-35	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し，LR 縦	縄文後期初頭		－
49	29	南	－	BX-37	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	単節 5 類 (R) 縦	縄文後期前葉		－
49	30	南	－	CD-38	407	Ⅳ	－	－	－	深鉢	把手	粘土貼付	縄文後期		31
49	31	南	－	CA-36	－	Ⅲ	－	5.4	(1.4)	深鉢	底	無文，台付	縄文後期		－
49	32	南	－	CB-38	－	Ⅲ	－	5.7	(4.5)	台付	台部	LR 横→沈線，ミガキ	縄文後期後半		31
49	33	南	－	CB-37	14	Ⅲ	－	－	－	鉢	胴～底	無文，手つくね	縄文後期		31
49	34	南	－	CB-38	5	Ⅲ	(12.4)	7.4	5.1	鉢	胴～底	折り返し口縁，無文，内面ヘラナデ	縄文後期初頭		31
49	35	南	－	BY-37	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁～胴	単節 1 類 (L) 斜・押圧	弥生時代 6 期		31
49	36	南	－	BX-36	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	内外面ミガキ	弥生時代		－
50	1	南	－	BY-37	77	Ⅲ	30.1	－	(14.5)	深鉢	口縁～胴	LR 縦，輪積痕あり	縄文中期末～後期初頭		31
50	2	南	－	CC-38	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	補修孔，LR 縦	縄文中期末～後期初頭		31
50	3	南	－	CC-40	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		31
50	4	南	－	CC-38	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	無文	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	31
50	5	南	－	BV-36	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	L 縦	縄文中期末～後期初頭		－
50	6	南	－	BV-36	373	Ⅳ	(23.2)	－	(14.0)	深鉢	口縁～胴	四波状?，RL 縦，内面ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭		31
50	7	南	－	BX-37	209	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭		－
50	8	南	－	BY-37	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	L 斜	縄文中期末～後期初頭		－
50	9	南	－	BW-36	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		－
50	10	南	－	BX-37	205	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		－
50	11	南	－	BV-36	362	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		－
50	12	南	－	BW-36	328	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		－
50	13	南	－	BW-36	361	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL 縦	縄文中期末～後期初頭		31

土器（8）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
50	14	南	－	BT-36	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	単節Ⅰ類 (R) 縦	縄文中期末～後期初頭		31
50	15	南	－	CD-39	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦	縄文中期末～後期初頭		31
50	16	南	－	BV-36	373	Ⅳ	－	10.0	(18.4)	深鉢	胴～底	RL 縦	縄文中期末～後期初頭	底外面網代痕	31
54	1a	北	－	AK-61	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，粘土貼付→貝殻腹縁圧痕，内面貝殻条痕文	縄文早期中葉		32
54	1b	北	－	AJ-61	－	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁突起，腹縁突起，内面貝殻条痕文	縄文早期中葉		32
54	1c	北	－	AJ-55	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	胴	腹縁圧痕文，内面貝殻条痕文	縄文早期中葉		－
54	2	北	－	AJ-65	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，貝殻腹縁文，刺突，条痕文	縄文早期中葉		32
54	3	北	－	AL-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	刺突，貝殻腹縁圧痕文	縄文早期中葉		32
54	4	北	試掘トレンチ15	AJ-63	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，口端貝殻腹縁圧痕，刺突	縄文早期中葉		32
54	5	北	－	AJ-65	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	貝殻腹縁文，刺突，内面沈線	縄文早期中葉		32
54	6	北	－	AK-63	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	ミガキ，内面貝殻条痕文	縄文早期中葉		－
54	7	北	－	AI-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	貝殻腹縁圧痕文，刺突	縄文早期中葉		32
54	8	北	試掘	－	7	Ⅲ	－	－	－	深鉢	底	尖底、外面ミガキ	縄文早期中葉	内面黒色	32
54	9	北	試掘トレンチ16	AK-66	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し，RL?，刺突	縄文最末式		32
54	10	北	－	AI-62	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，LR 横→沈線	縄文最末式		－
54	11	北	－	AH-61	490	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦，口縁部内外面粘土貼付→刺突	縄文大木 10 式併行期	外面炭化物付着	32
54	12a	北	－	AH-62	521	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，内外面粘土貼付→刺突，RL 横，沈線	縄文大木 10 式併行期		32
54	12b	北	－	AI-62	294	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，頂部粘土貼付→刺突	縄文大木 10 式併行期		32
54	13	北	－	AH-61	175	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，粘土紐貼付→刺突，LR 縦→沈線	縄文大木 10 式併行期		32
54	14	北	－	AI-63	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦→刺突	縄文大木 10 式併行期		32
54	15	北	試掘トレンチ16	AK-66・AL-65	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 縦，底外面	縄文大木 10 式併行期	外面炭化物付着	32
54	16	北	－	AI-61	798	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	補修孔，沈線→LR 縦，ミガキ	縄文大木 10 式併行期		32
54	17	北	－	AH-60	702	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	隆線，RL 縦	縄文大木 10 式併行期		32
54	18	北	－	AI-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	隆線文，RL 縦→ミガキ	縄文大木 10 式併行期		32
54	19	北	－	AH-61	716	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦→沈線，内外面ミガキ	縄文大木 10 式併行期		32
54	20a	北	－	AH-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 横→沈線	縄文大木 10 式併行期		－
54	20b	北	－	AH-60	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	胴	LR 横→沈線	縄文大木 10 式併行期		32
54	21	北	－	AH-60	623	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 縦→沈線，内面ミガキ	縄文大木 10 式併行期		32
54	22	北	－	AH-66	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	LR 横・縦→沈線，ミガキ	縄文大木 10 式併行期		32
54	23	北	－	AM-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	LR 縦→沈線	縄文後期初頭		32
54	24	北	－	AK-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁粘土紐貼付→沈線，LR 縦→ミガキ，沈線	縄文後期初頭	外面炭化物付着	32
54	25	北	試底	－	－	－	－	－	－	深鉢	胴	貝殻腹縁圧痕文，沈線，刺突	縄文後期初頭		32
54	26	北	－	AJ-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	LR 多条縦→沈線→ミガキ	縄文後期初頭	外面炭化物付着	32
54	27	北	－	AK-61	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	粘土紐貼付→LR 横	縄文後期初頭		－
54	28	北	－	AO-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	粘土貼付→RL 横，RL 斜→沈線	縄文後期初頭		32
54	29a	北	－	AK-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁突起，刺突，沈線	縄文大木 10 式併行期	金雲母混入	32
54	29b	北	試底	－	－	－	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，刺突，沈線	縄文大木 10 式併行期		32
55	1a	北	試掘トレンチ15	AI-63	－	Ⅲ	(21.0)	－	(20.0)	深鉢	口縁～胴	渡状，	縄文後期初頭		33
55	1b	北	－	AI-61	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	粘土貼付→刺突	縄文後期初頭		33
55	2	北	－	AI-61	590	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	粘土貼付→刺突	縄文後期初頭		33
55	3	北	－	AH-63	28	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，粘土貼付→円形文	縄文後期初頭		33
55	4a	北	－	AI-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	刺突，コブ状突起，RL 斜・横→沈線→ミガキ，内面ミガキ	縄文後期初頭	外面炭化物付着	33
55	4b	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	輪積痕	縄文後期初頭		33
55	5a	北	－	AN-56	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	折り返し口縁，LR 横→ミガキ→沈線	縄文後期初頭		33
55	5b	北	－	AH-63	24	Ⅱ	－	－	－	深鉢	胴	RL 斜→沈線，ミガキ	縄文後期初頭		－
55	6a	北	－	AI-61	426	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁，LR 横→沈線	縄文後期初頭		33
55	6b	北	－	AH-61	201	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁，LR 斜→沈線	縄文後期初頭		33
55	7	北	－	AI-60	627	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	渡状，沈線→一部粘土貼付→LR 横	縄文後期初頭	外面炭化物付着	33
55	8	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し，RLR 縦	縄文後期初頭		－
55	9	北	－	AH-60	624	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	RL 斜→沈線	縄文後期初頭		33
55	10	北	－	AI-61	595	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR 押圧	縄文後期初頭		33
55	11	北	試掘トレンチ9	AQ-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	L 縦→L 押圧，内面ミガキ	縄文後期初頭		33

土器（9）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
55	12	北	－	AI-61	804	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	波状、波頂部粘土帯貼付	縄文後期初頭		－
55	13	北	－	AI-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
55	14	北	－	AI-62	331	Ⅱ	－	5.0	(10.9)	壺	口縁～底	L縦，押圧，胴下半ヘラミガキ	縄文後期初頭	内面輪積痕	33
55	15	北	－	AH-63	10	Ⅱ	－	－	－	皿	底	手づくね	縄文中期末～後期初頭		－
56	1	北	－	AK-59	－	Ⅰ	(22.0)	－	(28.0)	深鉢	口縁～胴	RL縦，一部LR縦	縄文中期末～後期初頭		33
56	2	北	－	AH-61	777	Ⅳ	(21.6)	－	(29.4)	深鉢	口縁～胴	口縁LR横，口縁・胴LR縦	縄文中期末～後期初頭	金雲母多量混入	33
56	3	北	－	AH-61	777	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	－
56	4	北	－	AH-63	6	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL縦，結節文	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	－
56	5	北	－	AH-63	9	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL縦	縄文中期末～後期初頭		33
57	1	北	試掘トレンチ15	AJ-63	74	Ⅱ・Ⅲ	(34.4)	－	(43.7)	深鉢	口縁～胴	やや波状，口縁如意横，胴RL縦	縄文中期末～後期初頭		33
57	2	北	－	AH-63	29	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦，結節文，補修孔	縄文中期末～後期初頭		－
57	3a	北	試掘トレンチ15	AJ-63	56	Ⅱ・Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR縦	縄文中期末～後期初頭		33
57	3b	北	試掘トレンチ15	AJ-63	64	Ⅱ・Ⅲ	－	(9.6)	(15.1)	深鉢	胴～底	LR縦，輪積痕	縄文中期末～後期初頭		33
57	4a	北	－	AQ-56	13	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	RL縦	縄文中期末～後期初頭		33
57	4b	北	－	AQ-56	11	Ⅲ	－	11.0	(12.1)	深鉢	胴～底	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
57	5	北	沉底	－	－	－	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文中期末～後期初頭	赤彩試料№2	－
57	6	北	－	AH-63	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	L横・縦，内面ハケメ	縄文中期末～後期初頭		－
57	7	北	－	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，RL縦，結節文	縄文中期末～後期初頭		－
58	1	北	－	AH-61	782	Ⅳ	(23.0)	(10.0)	33.0	深鉢	略完形	口唇L横，L縦，外面一部ヘラナデ，内面ヘラミガキ	縄文中期末～後期初頭		34
58	2	北	－	AI-61	566	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR多条縦，結節文	縄文中期末～後期初頭		34
58	3	北	－	AI-61	793	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR縦，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭		34
58	4	北	－	AH-61	780	Ⅳ	(16.9)	8.4	20.2	深鉢	略完形	LR斜，ミガキ，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭		34
58	5a	北	－	AI-61	428	Ⅱ	(29.6)	－	(32.5)	深鉢	口縁～底	口縁～胴中LR横，胴LR斜，内面ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭		34
58	5b	北	－	AI-61	428	Ⅱ	－	(10.0)	－	深鉢	底	LR斜，内面ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭		－
59	1a+b	北	－	AM-60	－	Ⅰ	－	(12.4)	(23.9)	深鉢	口縁～底	LR縦，結節，内面ミガキ	縄文中期末～後期初頭		34
59	2	北	試掘トレンチ15	AI-63	38	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR縦，結節文	縄文中期末～後期初頭		－
59	3	北	－	AN-61	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR縦，結節文	縄文中期末～後期初頭		34
59	4	北	－	AN-56	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	平筋5類(R)横	縄文中期末～後期初頭	金雲母混入	34
59	5	北	試掘トレンチ16	AL-59	－	Ⅲ	－	(12.2)	(11.3)	深鉢	胴～底	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
59	6	北	－	AI-61	432	Ⅱ	－	10.8	(13.3)	深鉢	胴～底	RL縦	縄文中期末～後期初頭		34
60	1	北	試掘トレンチ16	AK-66	60	Ⅱ	－	(10.8)	(23.0)	深鉢	胴～底	LR多条(縦)	縄文中期末～後期初頭		34
60	2	北	－	AP-57	－	Ⅲ	－	(12.2)	(14.6)	深鉢	胴～底	LR縦，胴下ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭		34
60	3	北	－	AI-61	448	Ⅱ	－	(15.0)	(15.4)	深鉢	胴～底	LR縦	縄文中期末～後期初頭		34
60	4	北	－	AH-61	771	Ⅳ	－	(9.0)	(7.1)	深鉢	胴～底	LR縦	縄文中期末～後期初頭		－
60	5	北	試掘	－	5	Ⅲ	－	(6.1)	(4.2)	深鉢	胴～底	LR縦	縄文中期末～後期初頭	外面炭化物付着	－
60	6	北	－	AJ-61	－	Ⅳ	－	4.8	(3.5)	深鉢	胴～底	LR縦，内面・底外面ミガキ	縄文中期末～後期初頭		－
60	7	北	－	AH-61	779	Ⅳ	－	(9.7)	(6.2)	深鉢	胴～底	RL縦，底外面	縄文中期末～後期初頭		－
60	8	北	－	AH-61	520	Ⅲ	－	(9.8)	(4.1)		胴～底	RL縦	縄文中期末～後期初頭		－
60	9	北	－	AI-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴～底	RL縦→ミガキ	縄文中期末～後期初頭		－
60	10	北	－	AI-61	565	Ⅲ	－	(7.0)	(9.2)	深鉢	胴～底	外面ミガキ，LR横・斜，内面ヘラナデ	縄文中期末～後期初頭	輪積痕	－
61	1	北	－	AI-61	640	Ⅲ	13.5	5.3	12.0	深鉢	口縁～底	四波状，L横→沈線，胴外面ミガキ，内面ミガキ	縄文十撚内Ⅰ群		34
61	2	北	－	AH-61	512	Ⅲ	(17.8)	－	(14.5)	深鉢	口縁～胴	外面胴ヘラミガキ，沈線，L横・斜，内面ミガキ，L横	縄文十撚内Ⅰ群	黒色顔料付着	34
61	3	北	－	AH-61	508	Ⅲ	(21.6)	－	(19.2)	深鉢	口縁～胴	波状，口縁刻目，L横→ミガキ，沈線，内面ミガキ	縄文十撚内Ⅰ群	外面炭化物付着	34
61	4	北	－	AJ-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	沈線→ミガキ	縄文十撚内Ⅰ群		34
61	5a	北	－	AI-61	418	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，ボタン状突起→沈線，刺突	縄文十撚内Ⅰ群		34
61	5b	北	－	AI-61	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，沈線	縄文十撚内Ⅰ群		34
61	6a	北	－	AH-61	194	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁→沈線	縄文十撚内Ⅰ群		34
61	6b	北	－	AH-61	199	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁→沈線，内外面ミガキ	縄文十撚内Ⅰ群		34

土器（10）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
61	7	北	－	A1-62	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，折り返し，沈線	縄文早期ⅠⅡ群		34
61	8	北	－	AH-63	1	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，頂部に粘土磨貼付，沈線，内外面ミガキ	縄文早期ⅠⅡ群		34
61	9	北	－	A1-60	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	胴	L斜，ボタン状貼付→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		34
61	10	北	－	AJ-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	沈線，ミガキ，胴単節5類(R)縦	縄文早期ⅠⅡ群		34
61	11	北	－	AN-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	粘土貼付→沈線，単節5類(R)縦	縄文早期ⅠⅡ群		34
61	12	北	－	AK-61	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	ハケメ状沈線	縄文早期ⅠⅡ群		－
61	13	北	－	AH-60	759	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	沈線	縄文早期ⅠⅡ群		34
61	14	北	－	AJ-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	ハケメ状沈線	縄文早期ⅠⅡ群		34
61	15a	北	－	A1-61	562	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	L横・斜→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		34
61	15b	北	－	A1-61	573	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	L横・斜→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		34
62	1	北	－	AJ-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，頂部沈線，LR横→ミガキ，沈線	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	2	北	－	AH-61	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	L横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	3	北	－	AH-61	684	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→沈線，内外面ミガキ	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	4	北	－	AJ-65	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	L横・斜→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	5	北	－	AJ-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，頂部沈線，LR横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	6	北	－	AK-65	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	L横→沈線，ミガキ	縄文早期ⅠⅡ群		－
62	7	北	－	AK-62	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁→L横→沈線，ミガキ	縄文早期ⅠⅡ群	62-10と同一	35
62	8	北	－	AH-66	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，L横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		－
62	9	北	－	A1-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		－
62	10	北	－	AK-62	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	L横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群	62-7と同一	35
62	11	北	－	A1-61	586	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	沈線→LR横・斜	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	12	北	－	AH-61	198	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，LR，横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	13	北	－	AH-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	胴	L横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	14	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	口端粘土貼付→刺突，口縁沈線，内面折り返し口縁	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	15	北	－	A1-59	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	口唇LR回転，波状，LR横・縦→ミガキ，沈線，頂部内面LR押圧	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	16	北	－	AJ-65	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	沈線，L横	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	17	北	－	A1-60	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	胴	LR横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		－
62	18	北	試掘	－	1	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	粘土貼付→刺突	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	19	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	爪形刺突文	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	20a	北	－	A1-62	764	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	L横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群	外面炭化物付着	35
62	20b	北	－	AH-61	177	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	単節1類(L)縦→L横→沈線	縄文早期ⅠⅡ群	外面炭化物付着	35
62	21	北	－	A1-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	単節5類(R)縦→沈線	縄文早期ⅠⅡ群		－
62	22	北	－	AH-63	1	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦→沈線，内外面ミガキ	縄文早期ⅠⅡ群		35
62	23	北	－	AH-61	676	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	補修孔，単節5類(R)縦→沈線，内面ヘラナデ	縄文後期前葉		35
62	24	北	－	AH-61	199・227	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁，単節1類(R)縦	縄文後期初頭～後期前葉		35
63	1	北	試掘トレンチ15	AJ-63	69	Ⅱ・Ⅲ	(24.4)	－	(28.8)	深鉢	口縁～胴	口縁ナデ，LR縦・斜，結節回転文	縄文後期初頭～後期前葉		35
63	2	北	－	A1-61	567	Ⅲ	14.8	6.6	14.8	深鉢	口縁～底	外面折り返し口縁，LR横，LR押圧，LR斜，ヘラナデ，内面ミガキ	縄文後期初頭～後期前葉		35
63	3	北	－	AJ-55	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	LR縦	縄文後期初頭～後期前葉		35
63	4	北	－	A1-61	797	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	折り返し口縁→LRL横，胴LRL縦	縄文後期初頭～後期前葉		35
63	5	北	－	AH-61	782	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁，LR横，胴部LR縦	縄文後期初頭～後期前葉		35
63	6	北	－	AH-61	525	Ⅲ	(28.4)	－	(24.0)	深鉢	口縁～胴	やや波状，内外面ヘラミガキ，輪積痕あり	縄文後期初頭～後期前葉		35
63	7	北	－	AH-61	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁→ミガキ，口唇部指圧痕，内面ハケメ	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	1	北	－	A1-61	593	Ⅲ	(26.0)	－	(22.8)	深鉢	口縁～胴	外面折り返し口縁，やや波状，単節5類(R)縦，内面ヘラミガキ	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	2	北	－	AJ-61	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁粘土貼付→単節5類(R)縦	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	3	北	－	AJ-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	単節5類(R)	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	4	北	－	AH-61	197	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	折り返し口縁，波状，単1類(R)縦，内面ミガキ	縄文後期初頭～後期前葉	外面炭化物付着，輪積痕	35
64	5	北	－	AJ-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	単1類(R)縦	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	6	北	－	AL-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	単節1類(R)斜，結節文	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	7	北	－	AH-61	515	Ⅲ	32.6	－	(24.6)	深鉢	口縁～胴	単節1類(R)斜	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	8	北	－	A1-61	462	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	単節1類(R)縦	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	9	北	－	AH-61	724	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	L斜，・縦→ミガキ，内面ケズリ→ミガキ	縄文後期初頭～後期前葉		35

土器（11）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
64	10	北	－	AH-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	LR斜，外面ミガキ，内面ナデ→ミガキ	縄文後期初頭～後期前葉		35
64	11	北	－	AH-62	96	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	条痕，内外面ミガキ	縄文後期初頭～後期前葉		35
65	1	北	－	AH-61	684	Ⅲ	27.4	－	(25.2)	深鉢	口縁	やや波状，単軸絡条体（L）縦，内面ヘラナデ	縄文後期初頭～後期前葉	外面炭化物付着	36
65	2	北	－	AH-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→沈線	縄文十撫内Ⅰ群		36
65	3	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	浅鉢	口縁～胴	波状，口端刻目，LR横→沈線，ミガキ	縄文十撫内Ⅰ群		36
65	4	北	試掘トレンチ17	AG-68	－	Ⅱ	－	－	－	浅鉢	底	L横→沈線，ミガキ	縄文十撫内Ⅰ群		－
65	5	北	－	AI-60	－	Ⅱ	－	－	－	壺・甕棺	口縁	無文	縄文十撫内Ⅰ群		36
65	6a	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	(10.0)	－	(7.0)	壺・甕棺	口縁～胴	沈線，外面ミガキ，内面ヘラナデ	縄文十撫内Ⅰ群		36
65	6b	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	(4.6)	(5.7)	壺・甕棺	胴～底	外面ミガキ	縄文十撫内Ⅰ群		－
65	7	北	－	AH-61	685	Ⅲ	－	－	－	壺	口縁	粘土貼付	縄文十撫内Ⅰ群		36
65	8	北	－	AH-61	718	Ⅲ	－	－	－	壺	口縁	単節5類(R)，内外面ミガキ	縄文後期前葉		36
65	9a	北	－	AI-61	449	Ⅱ	－	－	(9.2)	壺	胴	沈線	縄文十撫内Ⅰ群		36
65	9b	北	－	AI-61	246	Ⅱ	－	－	－	壺	胴～胴	粘土貼付，沈線	縄文十撫内Ⅰ群		36
65	9c	北	－	AI-61	653	Ⅲ	－	－	－	壺	胴	沈線	縄文十撫内Ⅰ群		－
65	10a b	北	－	AH-61	171・498	Ⅱ・Ⅲ	－	－	－	壺	胴	単節5類(R)縦	縄文後期前葉		36
65	10c	北	－	AH-61	169	Ⅱ	－	－	－	壺	胴	単節5類(R)縦	縄文後期前葉		36
66	1	北	－	AH-60	272・273・711	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	口縁突起，LR横→沈線，内外面ミガキ	縄文十撫内Ⅱ群		36
66	2	北	－	AH-61	258	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→沈線，内外面ミガキ	縄文十撫内Ⅱ群		36
66	3	北	－	AJ-60	－	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→沈線，内外面ミガキ	縄文十撫内Ⅱ群		36
66	4	北	－	AJ-66	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→沈線，内外面ミガキ	縄文十撫内Ⅱ群		36
66	5	北	－	AQ-57	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→沈線，ミガキ，内面ミガキ	縄文十撫内Ⅱ群	金雲母混入。	36
66	6	北	－	AI-60	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	波状，LR横→沈線，内外面ミガキ	縄文十撫内Ⅱ群		36
66	7	北	－	AH-60	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横→沈線	縄文後期前半		36
66	8a	北	－	AH-60	759	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	RL横・斜→沈線，内外面ミガキ	縄文後期後半	外面炭化物付着	36
66	8b	北	－	AH-60	759	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	RL横→沈線，内外面ミガキ	縄文後期後半		36
66	8c	北	－	AH-63	42	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	RL横→沈線，内外面ミガキ	縄文後期後半		36
66	9	北	－	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横，沈線→ミガキ，内面ミガキ	縄文後期後半	外面炭化物付着	36
66	10	北	－	AH-61	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	突起，内外面ミガキ	縄文後期後半		36
66	11	北	－	AJ-65	－	Ⅳ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁突起，ミガキ	縄文後期後半		36
66	12	北	－	AI-61	－	Ⅱ	－	－	－	鉢	胴	LR横→沈線，ミガキ	縄文後期後半		－
66	13	北	－	AH-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁突起，LR斜・縦→沈線，ミガキ	縄文後期後半		36
66	14	北	－	AN-63	－	Ⅱ	－	－	－	壺	胴	LR横・斜，沈線	縄文後期後半		36
66	15	北	－	AQ-55	－	Ⅱ	－	－	－	壺	胴	LR横→沈線	縄文後期後半		－
66	16	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	壺	口縁	口端刻，回転，刻目，沈線，コブ状突起，RL縦	縄文十撫内Ⅲ群		36
66	17	北	－	AH-63	17	Ⅱ	－	－	－	壺	胴	LR横→沈線，コブ状突起	縄文十撫内Ⅴ群		36
66	18	北	－	AH-63	－	Ⅱ	－	－	－	注口土器	口縁胴～胴	ミガキ	縄文後期後半		36
66	19	北	試掘	AG-65	－	Ⅱ	－	－	－	注口土器	胴	ミガキ，注口下粘土貼付	縄文後期後半		36
66	20	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	沈線，刺突	縄文晩期後半		36
66	21a	北	－	AH-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	沈線，刺突	縄文晩期後半		36
66	21b	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	胴	沈線，刺突	縄文晩期後半		36
66	22	北	－	AI-61	438	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	刺突，沈線	縄文晩期後半		－
66	23	北	－	AI-61	462	Ⅱ	－	－	－	深鉢	胴	沈線，刺突	縄文晩期後半		36
66	24	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁突起，沈線，刺突	縄文晩期後半		36
66	25	北	－	AH-66	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横，沈線，ミガキ	縄文晩期後半		36
66	26	北	試掘トレンチ14	AJ-61	－	Ⅲ	－	－	－	浅鉢	口縁	口端刺突，竹管文，粘土貼付	縄文晩期後半		36
66	27	北	－	AK-61	－	Ⅰ	－	－	－	浅鉢	口縁～胴	口端沈線，沈線，ミガキ，胴部横，内面沈線	縄文晩期後半		36
66	28	北	－	AL-62	－	Ⅱ	－	－	－	鉢	口縁	RL斜→沈線，内面ミガキ	縄文晩期後半		36

土器（12）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
66	29	北	－	A1-62	360	Ⅱ	－	－	－	壺	口縁	口端上回転，無文	縄文晩期後半		－
66	30	北	－	A1-62	－	Ⅱ	－	－	－	壺	胴	LR横→沈線，内外面ミガキ	縄文晩期後半		－
66	31	北	－	AH-61	536	Ⅲ	－	－	－	壺	口縁	沈線，ミガキ	縄文晩期後半		36
67	1	北	－	AH-60	276	Ⅱ	(20.2)	6.2	(22.2)	深鉢	口縁～底	波状突起，突起先端刺突文，胴 RL横，底目文→沈線	縄文大洞C1式	内面炭化	37
67	2	北	－	－	－	Ⅲ	－	－	－	注口土器	胴	沈線	縄文大洞B C式		37
67	3	北	－	A1-60	－	Ⅰ	－	－	－	鉢	胴	沈線	縄文晩期前半		－
67	4	北	－	A0-56	－	Ⅲ	－	－	－	深鉢	口縁	補修孔，口縁突起，LR横→沈線→ミガキ，内面ミガキ	縄文大洞B C式	外面炭化物付着	37
67	5	北	－	AK-63	－	Ⅱ	－	－	－	台付鉢	口縁～底	口縁沈線，ミガキ，胴LR横，両面ミガキ	縄文大洞C1式		37
67	6	北	－	AQ-55	－	Ⅱ	－	－	－	浅鉢	口縁～胴	口縁突起，LR横→沈線，内面ミガキ	縄文大洞C1式	炭化物付着	37
67	7	北	－	AH-60	276	Ⅱ	(30.4)	－	(11.9)	深鉢	口縁～胴	RL・LR横	縄文後期後半	外面炭化物付着	37
67	8	北	－	A1-60	－	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	RL・LR横，内面ミガキ	縄文後期後半		37
67	9	北	－	A1-62	288	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	LR・RL横，内面ミガキ	縄文後期後半		－
67	10	北	－	AH-60	276	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁	RL・LR横	縄文後期後半	外面炭化物付着	37
67	11	北	－	AH-62	128	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL・LR横	縄文後期後半		－
67	12	北	－	AJ-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	口縁突起，RL・LR横	縄文後期後半		37
68	1	北	－	A1-63	278	Ⅱ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL・LR横	縄文後期後半	外面炭化物付着（ふきこぼれ痕）	37
68	2	北	－	A1-60	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁	LR横，内面ミガキ	縄文後期後半	外面炭化物付着	37
68	3	北	－	AL-59	－	Ⅰ	－	－	－	深鉢	口縁～胴	RL横，内面ミガキ	縄文後期後半		－
68	4	北	－	AJ-65	－	Ⅰ・Ⅲ	－	(6.4)	－	台付	底	LR横→沈線，台付	縄文後期後半		－
68	5	北	－	A0-57	－	Ⅱ	－	7.6	(5.1)	台付	台部	LR横，沈線	縄文後期後半		37
68	6	北	試掘トレンチ18	AK-67	16	Ⅱ	－	(7.6)	(3.7)	台付	台部	LR横，内面ミガキ	縄文後期後半		37
68	7	北	試掘トレンチ14	AJ-61	－	Ⅲ	－	－	－	台付	台部	無文	縄文後期後半		37
68	8	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅱ	－	(7.0)	(2.7)	深鉢	底	LR横	縄文後期後半		－
68	9	北	試掘	－	111	Ⅲ	－	4.6	(2.2)	深鉢	胴～底	LR横	縄文後期後半		－
68	10	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	4.6	(2.0)	深鉢	底	LR横	縄文後期後半		－
68	11	北	－	A1-60	－	Ⅰ	－	(5.0)	(2.2)	深鉢	底	LR横	縄文後期後半		－
68	12	北	試掘トレンチ20	A P-59	－	Ⅲ	－	(8.4)	(5.6)	深鉢	胴～底	LR斜・横	縄文後期後半	内部を削出高台にする	－
68	13	北	－	AJ-66	252	火山灰下6	－	(9.0)	(8.7)	深鉢	胴～底	無文，ミガキ	縄文後期後半		－
68	14	北	－	AH-63	32	Ⅱ	－	－	－	深鉢	底	無文，高台付	縄文後期後半		－
69	1	北	－	AH-60	－	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	RL斜→刺突，沈線，内外面ミガキ	弥生時代4期		37
69	2	北	－	AG-61	138	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	刺突，沈線，内外面ミガキ	弥生時代4期		37
69	3a	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	甕	胴	RL横→沈線	弥生時代4期		37
69	3b	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	甕	胴	RL斜→ミガキ，沈線，内面ナデ	弥生時代4期	内外面炭化物付着	37
69	3c	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	甕	胴	RL斜，内面ナデ	弥生時代4期	内面炭化物付着	37
69	4	北	－	AJ-66	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁～胴	口端RL回，胴RL斜→沈線，口縁RL横→沈線，内面ミガキ	弥生時代4期		37
69	5	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	RL斜・横→沈線	弥生時代4期		37
69	6	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	RL斜→沈線	弥生時代4期		37
69	7	北	試掘トレンチ16	AJ-67	10	Ⅱ	－	－	(3.1)	甕	胴	LR横→沈線	弥生時代4期	赤色試料No.3	－
69	8	北	－	AJ-66	－	Ⅰ	－	－	－	甕	胴	沈線，刺突	弥生時代4期		37
69	9	北	－	A1-65	－	Ⅰ	－	－	－	甕	口縁	口縁沈線，刺突，胴RL横・縦	弥生時代6期		37
69	10	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	波状，口端RL回転，口縁RL横→沈線，ミガキ→刺突	弥生時代6期		37
69	11	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	LR斜→沈線	弥生時代2期	内外面炭化物付着	37
69	12	北	－	AG-61	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	LR横位→沈線	弥生時代2期		37
69	13	北	－	AH-60	759	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	L横	弥生時代2期		37
69	14	北	－	AH-61	536	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	口端LR回転，LR斜，補修孔	弥生時代2期	外面炭化物付着	37
69	15	北	－	AH-61	228	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	LR横・斜，内面ミガキ	弥生時代2期	外面炭化物付着	37

土器（13）

図版	番号	地区	出土区	グリッド	P番	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器種	部位	文様	時期	備考	写真図版
69	16	北	－	AL-59	－	I	－	－	－	甕	口縁	口端LR回転,LR押圧,LR横，内面ミガキ	弥生時代2期		37
69	17	北	－	AK-61	－	I	－	－	－	甕	口縁	LR押圧,LR横	弥生時代2期		－
70	1	北	－	AH-61	513	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁～胴	L斜→L押圧，内外面ミガキ	弥生時代2期		38
70	2	北	試掘トレンチ13	AH-61	－	Ⅲ	－	－	－	甕	胴	LR横→LR押圧	弥生時代2期	外面炭化物付着	38
70	3	北	－	AG-61	－	Ⅲ	－	－	－	甕	胴	LR押圧,LR横位	弥生時代2期		38
70	4	北	－	AH-60	626	Ⅲ	－	－	－	甕	胴	LR押圧,LR斜	弥生時代2期		38
70	5	北	－	AI-60	631	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁肩～胴	LR斜,LR押圧	弥生時代2期	外面炭化物付着	－
70	6a	北	－	AG-61	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁肩～胴	LR斜	弥生時代2期		38
70	6b	北	－	AG-61	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	LR斜，内外面ミガキ	弥生時代2期		38
70	7	北	－	AH-63	32	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	LR斜，外面ミガキ	弥生時代2期		38
70	8	北	試掘トレンチ21	AH-63	－	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	LR斜→ミガキ，内面ナデ→ミガキ	弥生時代4期		－
70	9	北	－	AK-62	－	I	－	－	－	甕	口縁～胴	RL斜→内外面ミガキ	弥生時代4期		38
70	10	北	－	AJ-66	252	火山灰下6	－	－	－	甕	口縁	波状,LR横，ミガキ	弥生時代4期		38
70	11	北	－	AH-62	68	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	LR押圧，口端LR回転	弥生時代2期		－
70	12	北	－	AI-61	744	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	口端刻目文，内外面ミガキ	弥生時代2期		38
70	13	北	－	AJ-66	253	火山灰上	－	－	－	甕	口縁	口端刻目，無文	弥生時代2期		38
70	14	北	－	AJ-66	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	LR横→ヘラナデ，内面ヘラナデ	弥生時代5期	外面炭化物付着	38
70	15	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	甕	口縁	LR横	弥生時代	外面炭化物付着	38
70	16a	北	－	AH-60	－	I	－	－	－	甕	口縁	LR横，内面ミガキ	弥生時代		38
70	16b	北	－	AH-60	－	I	－	－	－	甕	底	LR横，内面ミガキ	弥生時代		38
70	17	北	－	AK-66	－	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	LR横	弥生時代5期		－
70	18	北	－	AH-61	520	Ⅲ	－	－	－	甕	口縁	外面条痕？内面条痕	弥生時代2期	41-6と同一か	－
70	19	北	－	AI-61	430	Ⅱ	－	－	－	甕	胴	条痕→ミガキ，内面条痕	弥生時代2期	41-6と同一か	38
70	20	北	－	AJ-64	－	I	－	－	－	甕	胴	RL縦	弥生時代6期		－
70	21	北	－	AJ-66	－	Ⅱ	－	－	－	甕	胴	RL斜	弥生時代6期		－
71	1	北	－	AJ-66	252	火山灰下6	－	－	－	甕	口縁	ミガキ，輪積痕	弥生時代	金雲母混入，外面炭化物付着	38
71	2	北	－	AJ-65	－	Ⅲ	－	－	－	高坏	口縁	口端沈線，突起，沈線，内外面ミガキ	弥生時代2期		38
71	3	北	－	AL-59	－	I	－	－	－	高坏	口縁	沈線，ミガキ	弥生時代2期		－
71	4	北	－	AH-63	21	Ⅱ	－	－	－	高坏	口縁～胴	LR横→沈線→内外面ミガキ	弥生時代2期		38
71	5	北	－	AI-60	－	I	－	－	－	高坏	口縁～胴	LR横→沈線→ミガキ，内面ミガキ	弥生時代2期		38
71	6	北	－	AL-59	－	I	－	－	－	高坏	胴	LR横・斜→沈線	弥生時代2期	金雲母混入。	38
71	7	北	試掘トレンチ16	AK-67	－	Ⅱ	－	－	－	高坏	口縁	把手，クマ形,RL回転→刺突，沈線	弥生時代4期		38
71	8	北	－	AK-61	－	Ⅱ	－	－	－	鉢	口縁	LR横→沈線	弥生時代4期		38
71	9	北	沢底	－	－	－	－	－	－	高坏	台部	沈線，ミガキ	弥生時代2期		38
71	10	北	試掘トレンチ14	AI-61	－	Ⅱ	－	－	－	高坏	台部	沈線	弥生時代2期		－
71	11	北	沢底	－	－	－	－	－	－	高坏	台部	沈線	弥生時代2期		38
71	12	北	－	AH-63	21	Ⅱ	(12.6)	8.6	(9.2)	高坏	台部	外面沈線，ミガキ，内面ミガキ	弥生時代2期	トレンチ18，21接合	38
71	13	北	－	AK-60	－	I	－	－	－	高坏	台部	沈線，内外面ミガキ	弥生時代2期		38
71	14	北	－	AI-60	－	Ⅱ	－	－	－	高坏	台部	沈線，内外面ミガキ	弥生時代2期		38
71	15	北	－	AH-60	－	Ⅱ	－	－	－	高坏	台部	沈線，内外面ミガキ	弥生時代2期	金雲母混入。	－
71	16	北	－	AJ-65	－	Ⅲ	－	－	－	高坏	台部	沈線，ミガキ	弥生時代2期		38
71	17	北	－	AN-59	－	Ⅱ	－	－	－	高坏	台部	LR横→ミガキ→沈線	弥生時代2期	内面輪積痕	38
71	18	北	試掘トレンチ16	AK-67	37	Ⅱ	－	4.3	(4.7)	甕	胴～底	LR斜	弥生時代		38

剥片石器（1）

図版	番号	区	遺構名	器種	石材	S番	グリット	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考	写真図版
30	12	北	S133	二次調整のある剥片	珪質頁岩	1	AR-59	2	82.9	34.5	19.1	42.7	掻器、縦長剥片使用、片面周縁調整。	39
31	16	南	S134	二次調整のある剥片	珪質頁岩	14	BX-37	2	65	19	9	8.9	削器、縦長剥片使用。	39
31	17	南	S134	二次調整のある剥片	珪質頁岩	11	BX-37	2	51	45	23	39.7	片面調整。石器未成品。	39
32	12	南	S136	石錐	珪質頁岩	1	BY-36	Ⅰ	47	27	7	7.1	横形石匙から石錐に加工。摘部あり。	39
36	20	北	S141	石鏃	珪質頁岩	－	AI-62	床面	77	14	4	0.6	凹基鏃、両面加工。	39
36	21	北	S141	石匙	珪質頁岩	－	AI-62	床面	77	45	9	28	縦形、両面周縁加工。	39
45	1	北	S145	石錐	珪質頁岩	26	AJ-66	火山灰2	59	10	7	3.9	両面加工。	40
45	2	北	S145	石錐	珪質頁岩	20	AJ-65	火山灰上1	22.6	16.6	6	1.9	縦長剥片使用。片面加工。尖端加工。	40
45	3	北	S145	二次調整のある剥片	珪質頁岩	19	AJ-65	火山灰上1	(32.7)	23.9	8.9	6.9	削器、両面の一側面使用。	40
51	1	南	－	石鏃	珪質頁岩	－	CB-36	Ⅰ	17	15	4	0.7	凹基鏃、両面加工。	40
51	2	南	－	石鏃	石英	67	BY-36	Ⅳ	26	14	4	0.9	凹基鏃、両面加工。	40
51	3	南	－	石鏃	珪質頁岩	21	BC-38	Ⅲ	24	19	5	2.1	両面加工。	40
51	4	南	－	石鏃	石英	35	BY-36	Ⅳ	19	11	5	0.4	有茎鏃、両面加工。	40
51	5	南	－	石鏃	珪質頁岩	－	CD-39	Ⅲ	49	13	8	3.8	平基鏃、両面加工。	40
51	6	南	－	石匙	珪質頁岩	－	BW-35	Ⅰ	65	40	7	24.5	縦形、3点に破損して出土。片面加工。	40
51	7	南	－	石錐	珪質頁岩	－	BY-36	Ⅲ	45.4	39.2	15.3	18.1	横長剥片使用。尖端加工。	40
51	8	南	－	石錐	頁岩	－	BX-37	Ⅲ	36.9	40	11.8	13.7	横長剥片使用。両面尖端加工。	40
51	9	南	－	石錐	珪質頁岩	25	BT-35	Ⅲ	40.2	24.2	13.4	8.9	縦長剥片使用。両面尖端加工。	40
51	10	南	－	二次調整のある剥片	珪質頁岩	－	BU-35	Ⅰ	(17.1)	18.5	7.2	1.9	掻器、両面一側縁調整。	40
51	11	南	－	二次調整のある剥片	珪質頁岩	－	BY-37	Ⅲ	73.6	42.2	13.6	37.6	削器、縦長剥片使用、片面周縁調整。	40
51	12	南	－	二次調整のある剥片	珪質頁岩	－	BU-35	Ⅲ	3	19.5	6.1	4.2	掻器、片面周縁調整。	40
51	13	南	－	二次調整のある剥片	珪質頁岩	30	CA-37	Ⅳ	46.4	31.2	10.1	10.1	削器、両面一部調整。	40
51	14	南	－	二次調整のある剥片	珪質頁岩	－	BX-36	Ⅲ	(30.1)	28.7	16.3	10.4	掻器、両面一側縁調整。	40
51	15	南	－	二次調整のある剥片	珪質頁岩	－	CB-37	Ⅰ	30.3	27.9	11.8	7	掻器、片面一側縁調整。	40
51	16	南	－	二次調整のある剥片	珪質頁岩	62	BW-36	Ⅳ	43.2	26	10.2	8.1	削器、片面一側縁調整。	40
51	17	南	－	二次調整のある剥片	珪質頁岩	－	BX-37	Ⅲ	(18.8)	9.8	5.4	1	石器断片、縦長剥片使用、一側縁調整。	40
51	18	南	－	両極加撃痕のある剥片	玉髄	－	BS-35	Ⅲ	22.2	14.2	5.4	1.6		40
51	19	南	－	剥片	珪質頁岩	－	BW-36	Ⅲ	29.8	50.7	4.8	3.5	縦長剥片。	40
72	1	北	－	石鏃	珪質頁岩	－	AJ-62	Ⅰ	35	16	5	2.1	凹基鏃、両面加工。	41
72	2	北	沢	石鏃	珪質頁岩	－	－	沢底	22	14	3	0.3	凹基鏃、両面加工。	41
72	3	北	－	石鏃	珪質頁岩	83	AI-61	Ⅳ	25	14	5	0.8	凹基鏃、両面加工。	41
72	4	北	－	石鏃	珪質頁岩	－	AO-64	Ⅲ	(17)	15	3	0.7	尖端欠損、凹基鏃、両面加工。	41
72	5	北	沢	石鏃	石英	－	－	沢底	17	12	4	0.8	凹基鏃、両面加工。	41
72	6	北	沢	石鏃	珪質頁岩	－	－	沢底	23	16	4	1	平基鏃、片面周縁加工。	41
72	7	北	－	石鏃	珪質頁岩	－	CA-38	Ⅳ	24	15	3	0.9	平基鏃、両面周縁加工。	41
72	8	北	－	石鏃	石英	－	AO-60	－	39	13	6	2.2	平基鏃、両面加工。	41
72	9	北	－	石鏃	石英	－	AH-61	Ⅰ	23	12	3	1	有茎鏃、両面加工。	41
72	10	北	試掘トレンチ16	石鏃	珪質頁岩	－	－	Ⅲ	27	13	4	0.8	有茎鏃、両面加工。	41
72	11	北	－	石鏃	珪質頁岩	13	AJ-66	Ⅲ	(16)	14	3	0.5	尖端欠損、有茎鏃、両面加工。	41
72	12	北	－	石鏃	珪質頁岩	81	AH-61	Ⅳ	(22)	17	3	0.7	尖端欠損、有茎鏃、両面加工。	41
72	13	北	沢	石鏃	石英	－	－	沢底	21	11	4	0.4	有茎鏃、両面加工。	41
72	14	北	－	石鏃	石英	－	AI-61	Ⅱ	30	12	5	1.2	有茎鏃、両面加工。	41
72	15	北	－	石鏃	珪質頁岩	－	AJ-65	Ⅰ	27	10	5	0.3	有茎鏃、やや粗い両面加工。	41
72	16	北	沢	石鏃	鉄石英	－	－	沢底	28	12	4	0.8	有茎鏃、やや粗い両面加工。	41
72	17	北	－	石鏃	石英	7	AJ-65	Ⅲ	34	19	6	2.5	有茎鏃、両面加工。	41
72	18	北	－	石鏃	石英	－	AH-63	Ⅱ	22	12	4	0.7	未成品、片面一部加工。	41
72	19	北	－	石槍	珪質頁岩	－	AH-61	Ⅳ	77	25	8	16.6	両面加工。	41
72	20	北	－	石匙	珪質頁岩	－	AL-62	Ⅱ	67	20	7	8.3	縦形、両面周縁加工。	41
72	21	北	－	石匙	珪質頁岩	－	AQ-56	Ⅲ	62	25	8	11.1	縦形、片面周縁加工。	41
72	22	北	－	石匙	珪質頁岩	－	AL-62	Ⅱ	41	50	10	16.1	横形、両面周縁加工。	41
72	23	北	－	石錐	珪質頁岩	－	AI-61	Ⅳ	41	24	6	7	摘部を有する。両面尖端加工。	41
72	24	北	－	石錐	珪質頁岩	13	AJ-65	Ⅲ	22	15	6	1	摘部を有する。両面尖端加工。	41
72	25	北	－	石錐	珪質頁岩	－	AJ-62	Ⅰ	32	13	3	1.6	摘部を有する。両面尖端加工。	41
72	26	北	－	石錐	珪質頁岩	－	AK-66	Ⅲ	30	26.1	8.5	4.2	縦長剥片使用。片面尖端加工。	41

剥片石器（2）

図版	番号	区	遺構名	器種	石材	S番	グリット	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考	写真図版
72	27	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AJ-66	II	45	29	10	8.5	削器，両面周縁調整。	41
72	28	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AQ-56	III	(45.1)	18.4	8.3	7.2	削器，両面側縁調整。	41
72	29	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ16	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AK-66	I	43	25	24	13.3	削器，自然面あり，両面調整。	41
72	30	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ16	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AM-63	II	33.7	21.8	10.6	5.4	削器，両面下端調整。	41
72	31	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ16	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AK-66, AL-65	II	31	21	3	2.8	削器，両面一部調整。	41
73	1	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ13	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AH-61	III	36.5	52.3	12	19.1	削器，両面下端調整。	41
73	2	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	6	AJ-65	III	51.2	38.5	10.2	16.2	削器，両面一部調整。	41
73	3	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ16	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AK-62	II	49.1	23.1	10.2	9.4	削器，両面一部調整。	41
73	4	北	—	二次調整のある剥片	頁岩	—	AJ-65	I	39	51.9	8.4	9.9	削器，両面下端調整。	41
73	5	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AJ-61	IV	22.8	44.9	10.5	8	削器，片面下端調整。	41
73	6	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AI-60	I	44.1	61.5	14.8	26.3	削器，片面下端調整。	41
73	7	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	4	AH-63	II	47.5	29.3	14.4	16.4	削器，片面周縁調整。	41
73	8	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ11	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AO-56	I	48.3	40.4	16.3	18.2	削器，片面周縁調整。	41
73	9	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AK～AL-62	I	43.6	35.8	8.2	10	削器，自然面あり，片面側縁調整。	41
73	10	北	沢	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	—	沢底	54.1	38.5	9.9	17.1	削器，横長剥片使用，片面下端調整。	41
73	11	北	試掘区域	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AK-77	VI	37	27	8	7.2	削器，両面一部調整。	41
73	12	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AK-61	II	67.3	24.3	15.4	21.9	掻器，片面一部調整。	41
73	13	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ18	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AH-62	—	60.7	26.8	11.9	15.2	掻器，片面周縁調整。	41
73	14	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AL-59	—	35.6	23.7	8.3	6.4	掻器，片面下端調整。	41
73	15	北	沢	微小剥離痕のある剥片	珪質頁岩	—	—	沢底	58.5	34.8	26.9	28.4	一側縁に剥離痕あり。	41
73	16	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ16	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AL-62	II	45.6	27.7	13.4	10.4	削器，周縁打ち欠き。片面下端調整。	41
73	17	北	—	二次調整のある剥片	珪質頁岩	—	AJ-66	I	57.3	27.6	21	23.4	石器未成品，周縁打ち欠き。	41
73	18	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ17	二次調整のある剥片	頁岩	1	AN-67	IV	97	62	23	101	石器未成品，周縁打ち欠き。	41
74	1	北	—	両極加撃痕のある剥片	珪質頁岩	—	AI-65	I	36.6	30.8	9.8	10.9		41
74	2	北	試掘ﾄﾚﾝﾁ16	両極加撃痕のある剥片	珪質頁岩	—	AL-62	II	24.3	21	8.6	3.7		41
74	3	北	—	両極加撃痕のある剥片	玉髄	—	AP-57	II	24.8	20.3	9.8	3.5		41
74	4	北	—	両極加撃痕のある剥片	頁岩	—	AH-62	II	19.2	16.3	6	0.8		41

礫石器・石製品（1）

図版番号	番号	遺構名	グリッド	層位	種類	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	取上番号	備考	写真図版
27	14	SI-31	AS-60	1	敲磨器	花崗閃緑岩	134.0	52.5	35.0	415.7	S-1	敲打痕	39
27	15	SI-31	AS-60	1	加工礫	片岩	327.0	81.0	44.0	1707.6	S-2	剥離痕・擦過痕	39
28	12	SI-32	AT-63	床直 2	石皿	凝灰岩	(229.0)	(246.0)	(80.0)	(1385.2)	S-24 S-9	脚付き，縁出し，摩耗痕・擦過痕，2点接合	39
30	13	SI-33	AR-59	床面	磨製石斧	ひん岩	92.0	42.0	13.0	68.4	S-26	両刃・刃こぼれ，剥離痕・研磨痕	39
30	14	SI-33	AR-59	2	磨製石斧	ホルンフェルス	118.0	33.0	21.0	165.7	S-6	両刃・やや偏刃，剥離痕・研磨痕	39
30	15	SI-33	炉の付近	床面	石皿	砂岩	467.0	305.0	71.0	12.0	床石-1	摩耗痕	39
31	30	SI-35	CB-38	床面	加工礫	片岩	316.0	101.0	49.0	2570.1	S-2	剥離痕（摩耗）	39
32	13	SI-36	BW-36	1	敲磨器	石英	43.0	50.0	24.0	67.6	S-14	擦過痕	39
32	19	SI-37	-	床面	石皿	砂岩	(173.0)	(156.0)	(51.0)	(1565.1)	-	摩耗痕	39
33	14	SI-38	CA-39	3	敲磨器	安山岩	105.0	84.0	53.0	646.2	S-8	擦過痕	39
33	15	SI-38	CA-39	3	敲磨器	頁岩	128.0	82.0	29.0	330.4	S-4	くぼみ（敲打痕）	39
33	16	SI-38	CA-39	3	加工礫	頁岩	338.0	64.0	23.0	580.8	S-14	剥離痕・擦過痕	39
33	17	SI-38	CA-39	2	石皿	花崗閃緑岩	(242.0)	(258.0)	(98.0)	(7392.1)	S-2	摩耗痕・擦過痕	39
33	18	SI-38	CA-39	3	石皿	凝灰岩	(82.0)	(91.0)	(61.0)	(236.2)	S-9	脚付き	39
33	19	SI-38	CA-39	3	原材	頁岩	41.0	43.0	29.0	67.1	S-12	剥離痕	39
36	22	SI-41	-	床面	敲磨器	砂岩	153.0	59.0	43.0	545.3	-	擦過痕・剥離痕	39
36	23	SI-41	AH-62	1	敲磨器	安山岩	(78.0)	(48.0)	(22.0)	(91.4)	S-1	擦過痕・剥離痕	39
36	24	SI-41	AI-62	1	敲磨器	玉髄	52.0	45.0	35.0	117.4	S-4	擦過痕（黒褐色に変色）	39
36	25	SI-41	AI-63	1	石皿	砂岩	(398.0)	(294.0)	(103.0)	(14.3)	S-5	摩耗痕	39
37	4	SI-42・43	AR-65	床面	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	110.0	44.0	24.0	174.5	S-2	両刃・偏刃，剥離痕・研磨痕	39
37	11	SI-44 炉	-	-	加工礫	片岩	(124.0)	(62.0)	(33.0)	(389.3)	炉石-6	擦過痕	39
45	4	SI-45	-	床面	敲磨器	砂岩	(161.0)	76.0	36.0	(578.0)	-	擦過痕・剥離痕	40

礫石器・石製品（2）

図版番号	番号	遺構名	グリッド	層位	種類	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	取上番号	備考	写真図版
45	5	SI-45	AJ-55	Ⅰ	敲磨器	頁岩	2140.0	99.0	45.0	1173.6	－	摩耗痕・搬過痕・剥離痕	40
45	6	SI-45	AJ-65	火山灰Ⅲ	敲磨器	砂岩	117.0	72.0	27.0	353.2	S-23	搬過痕	40
45	7	SI-45	AJ-65	火山灰Ⅱ	敲磨器	砂岩	79.0	70.0	43.0	354.3	S-18	敲打痕・摩耗痕・搬過痕	40
45	8	SI-45	－	床面	加工礫	砂岩	(113.0)	(78.0)	(23.0)	(259.9)	－	研磨痕	40
45	9	SI-45	AJ-65	火山灰Ⅲ	加工礫	千枚岩	(134.0)	(89.0)	(20.0)	(280.4)	S-22	搬過痕（？）	40
45	10	SI-45	AJ-65	火山灰Ⅱ	加工礫	砂岩	166.0	57.0	23.0	323.3	S-18	搬過痕・敲打痕（？）	40
48	3	屋外SI-5	AP-58	Ⅰ	石皿	砂岩	(224.0)	(293.0)	(29.0)	(2771.8)	S-1	摩耗痕・搬過痕、２点接合	40
		SI-33	AR-59	5							S-17		
48	4	屋外SI-5	AP-58	Ⅰ	石皿	砂岩	(129.0)	(165.0)	(58.0)	(2130.1)	S-3	摩耗痕	40
51	20	南区	CB-39	Ⅰ	石製品	頁岩	33.0	19.0	0.4	3.4	－	研磨痕・搬過痕	40
51	21	南区	CB-38	Ⅳ	石製品	頁岩	45.0	16.0	0.5	6.9	S-37	研磨痕・搬過痕	40
51	22	南区	BV-36	Ⅳ	敲磨器	砂岩	100.0	(65.0)	47.0	(448.9)	S-46	摩耗痕（黒色に変色）	40
51	23	南区	CA-36	Ⅲ	敲磨器	砂岩	99.0	60.0	32.0	238.3	－	搬過痕・くぼみ（敲打痕）	40
51	24	南区	BV-36	Ⅳ	石製品	粗粒玄武岩	(46.0)	(38.0)	(21.0)	(61.6)	S-45	石棒（？）、研磨痕	40
52	1	南区	CD-40	Ⅰ	敲磨器	砂岩	156.0	55.0	29.0	419.1	－	敲打痕	40
52	2	南区	BW-36	Ⅲ	敲磨器	砂岩	(153.0)	(65.0)	(35.0)	(503.2)	S-15	くぼみ（錐先痕）	40
52	3	南区	BV-36	Ⅲ	敲磨器	砂岩	125.0	69.0	34.0	419.8	－	敲打痕	40
52	4	南区	BV-35	Ⅳ	台石	砂岩	(208.0)	(134.0)	(83.0)	(3191.4)	S-50	敲打痕（一部くぼみ）	40
52	5	南区	BW-36	Ⅲ	敲磨器	凝灰岩	(75.0)	(64.0)	(27.0)	(206.2)	－	くぼみ（敲打痕）・剥離痕	40
52	6	南区	BT-35	Ⅲ	加工礫	粘板岩	148.0	47.0	17.0	160.5	－	剥離痕	40
52	7	南区	CC-38	Ⅰ	加工礫	粘板岩	(198.0)	(43.0)	(23.0)	(232.2)	－	剥離痕・搬過痕	40
52	8	南区	BX-37	Ⅲ	加工礫	片岩	(111.0)	(78.0)	(34.0)	(360.5)	－	剥離痕	40
52	9	南区	BV-36	Ⅲ	石皿	頁岩	(149.0)	(134.0)	(41.0)	(1519.9)	－	摩耗痕	40
52	10	南区	BV-36	Ⅲ	加工礫	粘板岩	(95.0)	(45.0)	(13.0)	(75.9)	S-19	剥離痕（摩耗）	40
52	11	南区	CA-37	Ⅲ	加工礫	ひん岩	(141.0)	(63.0)	(12.0)	(114.1)	S-7	剥離痕（摩耗）	40
52	12	南区	CB-38	Ⅲ	加工礫	粘板岩	135.0	59.0	12.0	109.7	－	剥離痕	40
52	13	南区	BX-37	Ⅲ	円盤状石製品	粘板岩	35.0	33.0	0.4	5.7	－	剥離痕	40
52	14	南区	BW-36	Ⅳ	加工礫	粘板岩	(100.0)	(49.0)	(16.0)	(83.0)	S-64	剥離痕（摩耗）・搬過痕	40
52	15	南区	BW-36	Ⅲ	加工礫	粘板岩	(244.0)	(106.0)	(22.0)	(815.3)	S-16	剥離痕（摩耗）・搬過痕	40
52	16	南区	BT-35	Ⅳ	加工礫	粘板岩	79.0	48.0	0.6	27.2	S-38	摩耗痕・搬過痕	40
74	5	北区	AI-65	Ⅱ	磨製石斧	玄武岩	73.0	37.0	16.0	63.1	－	両刃・やや偏刃、剥離痕・研磨痕	42
74	6	北区	AJ-66	Ⅳ	磨製石斧	粗粒玄武岩	100.0	36.0	23.0	121.8	－	両刃、剥離痕・研磨痕	42
74	7	北区	AJ-64	Ⅰ	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	35.0	21.0	10.0	12.4	－	両刃、研磨痕	42
74	8	北区	AR-56	Ⅲ	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	(42.0)	(22.0)	(9.0)	(12.6)	－	両刃・やや偏刃・片ばね、剥離痕・研磨痕	42
74	9	北区	AR-54	Ⅱ	磨製石斧	緑色片岩	110.0	45.0	22.0	178.0	－	両刃・偏刃、研磨痕	42
74	10	北区	AN-56	Ⅲ	磨製石斧	頁岩	103.0	44.0	21.0	140.4	－	剥離痕・研磨痕	42
74	11	北区	AP-57	Ⅱ	磨製石斧	頁岩	(104.0)	53.0	(27.0)	(271.5)	－	両刃、剥離痕・敲打痕・研磨痕	42
74	12	北区	AQ-56	Ⅲ	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	93.0	46.0	27.0	203.7	－	両刃・偏刃、敲打痕・剥離痕・研磨痕	42
75	1	北区	AH-61	Ⅲ	磨製石斧	頁岩	(61.0)	(34.0)	(16.0)	(57.3)	S-27	両刃・刃部破砕、剥離痕・研磨痕	42
75	2	北区	AI-61	Ⅲ	磨製石斧	緑色凝灰岩	(50.0)	31.0	(12.0)	(27.2)	S-37	両刃・刃こぼれ、研磨痕	42
75	3	北区	BL-65	Ⅱ	磨製石斧	粗粒玄武岩	(57.0)	(45.0)	(22.0)	(83.9)	－	剥離痕・研磨痕	42
75	4	北区	AG-65	Ⅱ	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	(80.0)	(48.0)	(27.0)	(174.0)	－	敲打痕・剥離痕・研磨痕	42
75	5	北区	AJ-65	Ⅲ	磨製石斧	砂岩	(81.0)	(60.0)	(30.0)	(247.8)	S-1	未製品、剥離痕・敲打痕	42
75	6	北区	AK-59	Ⅲ	磨製石斧	粗粒玄武岩	117.0	56.0	40.0	321.1	－	未製品、剥離痕・搬過痕	42
75	7	北区	AJ-66	Ⅲ	石錘	粘板岩	58.0	49.0	18.0	49.5	S-12	抉入剥離痕	42
75	8	北区	AJ-66	Ⅲ	石錘	頁岩	62.0	46.0	13.0	52.3	S-12	抉入剥離痕（一部摩耗）	42
75	9	北区	AJ-66	Ⅲ	石錘	砂岩	(54.0)	(52.0)	(21.0)	(86.4)	S-12	抉入剥離痕	42
75	10	北区	AH-66	Ⅲ	敲磨器	粗粒玄武岩	73.0	50.0	19.0	133.1	－	搬過痕	42
75	11	北区	AJ-63	Ⅱ	敲磨器	粗粒玄武岩	64.0	42.0	31.0	109.6	S-6	搬過痕	42
75	12	北区	AI-64	Ⅱ	敲磨器	安山岩	118.0	99.0	54.0	(750.3)	－	摩耗痕	42
75	13	北区	AP-59	Ⅲ	敲磨器	頁岩	110.0	77.0	73.0	908.1	－	研磨痕	42
76	1	北区	AH-61	Ⅲ	敲磨器	流紋岩	96.0	79.0	64.0	648.2	S-59	摩耗痕	42
76	2	北区	AI-61	Ⅲ	敲磨器	泥岩	85.0	83.0	54.0	685.0	S-40	搬過痕	42
76	3	北区	AH-60	Ⅲ	敲磨器	頁岩	70.0	(65.0)	(17.0)	(166.3)	S-76	搬過痕・剥離痕	42

礫石器・石製品（3）

図版番号	番号	遺構名	グリッド	層位	種類	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	取上番号	備考	写真図版
76	4	北区	AJ-66	Ⅲ	敲磨器	頁岩	59.0	45.0	14.0	59.1	S-12	剥離痕・擦過痕	42
76	5	北区	AJ-66	Ⅲ	敲磨器	粘板岩	60.0	43.0	20.0	78.3	S-12	擦過痕	42
76	6	北区	AJ-65	Ⅲ	敲磨器	頁岩	55.5	56.5	35.0	168.9	S-16	摩耗痕・擦過痕・剥離痕	42
76	7	北区	AI-61	Ⅲ	敲磨器	砂岩	180.0	70.0	47.0	767.9	S-36	摩耗痕	42
76	8	北区	BP-63	Ⅲ	敲磨器	頁岩	(142.0)	(92.0)	(40.0)	(667.9)	－	摩耗痕・擦過痕	42
76	9	北区	AI-69	Ⅳ	敲磨器	砂岩	(155.0)	(72.0)	(38.0)	(693.4)	S-80	摩耗痕	42
76	10	北区	BP-63	Ⅲ	敲磨器	砂岩	(138.0)	(66.0)	(63.0)	(698.5)	－	摩耗痕・擦過痕・剥離痕	42
76	11	北区	AH-61	Ⅲ	敲磨器	砂岩	(106.0)	(56.0)	(56.0)	(356.4)	S-62	擦過痕・敲打痕	42
76	12	北区	AQ-57	Ⅲ	敲磨器	砂岩	91.0	61.0	54.0	407.6	S-17	敲打痕・擦過痕	42
77	1	北区	AH-66	Ⅲ	敲磨器	閃緑岩	113.0	69.0	41.0	541.4	－	敲打痕・研磨痕・擦過痕・剥離痕	42
77	2	北区	AI-61	Ⅲ	敲磨器	凝灰岩	114.0	78.0	54.0	603.3	S-38	〈ぼみ（敲打痕）	42
77	3	北区	AK-65	Ⅲ	敲磨器	粗粒玄武岩	(108.0)	(69.5)	(58.0)	(518.0)	S-10	敲打痕（一部〈ぼみ）	42
77	4	北区	AJ-67	Ⅱ	敲磨器	チャート	147.0	55.0	22.0	(251.6)	S-1	敲打痕・〈ぼみ（線条痕・敲打痕）	42
77	5	北区	AH-61	Ⅲ	敲磨器	頁岩	142.0	97.0	46.0	698.6	S-24	〈ぼみ（敲打痕）	42
77	6	北区	AO-57	Ⅱ	敲磨器	粘板岩	143.0	72.0	21.0	342.1	－	〈ぼみ（敲打痕）	42
77	7	北区	AH-61	Ⅱ	敲磨器	頁岩	(151.0)	(81.0)	(27.0)	(395.0)	－	〈ぼみ（線条痕）	42
77	8	－	AJ-66	Ⅳ	敲磨器	粗粒玄武岩	140.0	47.0	34.0	369.8	－	敲打痕	42
77	9	北区	AJ-65	Ⅲ	敲磨器	片麻岩	(104.0)	(56.0)	(18.0)	(128.9)	S-4	〈ぼみ（線条痕）・摩耗痕（線条痕）	42
77	10	北区	BP-60	Ⅲ	敲磨器	頁岩	116.0	77.0	33.0	301.7	－	〈ぼみ（線条痕）	42
78	1	北区	AH-61	Ⅲ	敲磨器	砂岩	(155.0)	63.0	26.0	(329.7)	S-21	〈ぼみ（線条痕）・剥離痕（摩耗）	43
78	2	北区	AO-57	Ⅲ	敲磨器	粘板岩	(99.0)	(42.0)	(17.0)	(117.6)	－	〈ぼみ（線条痕）・敲打痕	43
78	3	北区	AI-62	Ⅲ	敲磨器	粗粒玄武岩	72.0	37.0	19.0	76.3	S-47	敲打痕	43
78	4	北区	AQ-57	Ⅲ	敲磨器	花崗岩	(79.0)	(76.0)	(44.0)	(304.4)	－	〈ぼみ（敲打痕）	43
78	5	北区	AG-65	Ⅱ	敲磨器	頁岩	(80.0)	(54.0)	(28.0)	(176.4)	－	剥離痕・擦過痕	43
78	6	北区	AK-62	Ⅰ	原材	頁岩	45.0	31.0	21.0	40.7	－	剥離痕	43
78	7	北区	AP-56	Ⅲ	台石	花崗閃緑岩	174.0	111.0	99.0	1856.0	S-1	敲打痕	43
78	8	北区	AH-63	Ⅱ	台石	閃緑岩	275.0	154.0	118.0	5598.8	S-2	〈ぼみ（線条痕）・敲打痕	43
78	9	北区	AH-60	Ⅳ	石皿	砂岩	273.0	201.0	54.0	3912.9	S-79	摩耗痕・擦過痕	43
78	10	北区	AK-60	Ⅱ	石皿	砂岩	(367.0)	(173.0)	(25.0)	(2095.6)	－	摩耗痕・擦過痕	43
78	11	北区	AJ-61	Ⅲ	石皿	粘板岩	(264.0)	(150.0)	(43.0)	(2384.6)	－	摩耗痕	43
78	12	北区	AP-56	Ⅲ	石皿	砂岩	(240.0)	(146.0)	(44.0)	(2183.3)	ﾋﾟｯﾄ14	摩耗痕、4点接合	43
78	13	北区	AO-61	Ⅲ	石皿	砂岩	(144.0)	173.0	33.0	(1313.9)	－	摩耗痕・剥離痕（摩耗）	43
78	14	北区	AP-56	Ⅲ	石皿	砂岩	(180.0)	(153.0)	(31.0)	(896.5)	S-7～9	摩耗痕、3点接合	43
79	1	北区	AK-60	Ⅰ	円盤状石製品	粘板岩	70.0	69.0	6.0	48.1	－	剥離痕	43
79	2	北区	AQ-55	Ⅱ	円盤状石製品	粘板岩	27.0	27.0	4.0	5.1	－	剥離痕・擦過痕	43
79	3	北区	AK-66	Ⅰ	石製品	頁岩	54.0	52.0	30.0	126.2	－	摩耗痕・擦過痕・剥離痕	43
79	4	北区	AK-59	Ⅱ	石製品	頁岩	61.0	56.0	35.0	219.5	－	摩耗痕・擦過痕	43
79	5	北区	AG-61	Ⅲ	石製品	ホルンフェルス	80.0	79.0	32.0	369.6	－	摩耗痕・擦過痕・剥離痕	43
79	6	北区	AI-62	Ⅱ	石製品	砂岩	(41.0)	(36.0)	(17.0)	(31.4)	－	摩耗痕・擦過痕	43
79	7	北区	AH-63	Ⅱ	石製品	砂岩	(60.0)	(37.0)	(16.0)	(47.8)	－	摩耗痕・擦過痕	43
79	8	北区	AD-55	Ⅲ	石製品	粘板岩	(53.0)	(42.0)	(5.0)	(19.2)	－	摩耗痕・擦過痕	43
79	9	北区	AN-60	Ⅰ	円盤状石製品	粘板岩	56.0	54.0	9.0	50.5	－	剥離痕・摩耗痕・擦過痕・線刻（？）	43
79	10	北区	AI-68	Ⅰ	加工礫	千枚岩	69.0	52.0	5.0	30.7	－	敲痕、研磨痕・擦過痕	43
79	11	北区	AI-61	Ⅰ	加工礫	粘板岩	61.0	33.0	4.0	9.9	－	擦過痕	43
79	12	北区	AQ-55	Ⅱ	加工礫	粘板岩	94.0	35.0	5.0	21.5	－	剥離痕・摩耗痕・擦過痕	43
79	13	北区	AP-60	Ⅲ	加工礫	粘板岩	122.0	76.0	9.0	200.9	－	剥離痕・擦過痕	43
79	14	北区	AH-61	Ⅱ	加工礫	粘板岩	38.0	57.0	6.0	16.1	－	剥離痕	43
79	15	北区	AH-61	Ⅲ	加工礫	粘板岩	48.0	46.0	4.0	14.7	S-715	剥離痕（一部摩耗）	43
79	16	北区	AQ-57	Ⅲ	加工礫	粘板岩	136.0	98.0	21.0	365.0	S-28	剥離痕	43
80	1	北区	AK-62	Ⅱ	加工礫	粘板岩	(197.0)	(53.0)	(14.0)	(219.7)	－	剥離痕・擦過痕	44
80	2	北区	AI-68	Ⅰ	加工礫	千枚岩	(208.0)	82.0	16.0	(442.7)	－	剥離痕	44
80	3	北区	AH-61	Ⅲ	加工礫	砂岩	123.0	90.0	15.0	212.2	S-68	剥離痕（摩耗）・擦過痕	44
80	4	北区	AH-61	Ⅱ	加工礫	粘板岩	155.0	74.0	15.0	213.5	－	剥離痕	44
80	5	北区	AI-68	Ⅰ	加工礫	粘板岩	180.0	57.0	30.0	540.9	－	剥離痕・敲打痕	44

礫石器・石製品（4）

図版番号	番号	遺構名	グリッド	層位	種類	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	取上番号	備考	写真図版
80	6	北区	AI-71	表採	加工礫	千枚岩	106.0	54.0	13.0	124.0	－	剥離痕（摩耗）・擦過痕	44
80	7	北区	AH-62	Ⅱ	加工礫	頁岩	79.0	75.0	22.0	193.9	S-18	剥離痕	44
80	8	北区	AK-62	Ⅱ	加工礫	粘板岩	(125.0)	(33.0)	(12.0)	(50.2)	－	剥離痕（摩耗）	44
80	9	北区	AQ-57	Ⅱ	加工礫	頁岩	139.0	50.0	12.0	147.6	－	剥離痕（摩耗）	44
80	10	北区	AJ-61	Ⅲ	加工礫	頁岩	50.0	8.0	6.0	4.1	－	摩耗痕・擦過痕	44
80	11	北区	AJ-66	Ⅱ	加工礫	片麻岩	(98.0)	(22.0)	(12.0)	(36.1)	－	剥離痕（摩耗）・摩耗痕	44
80	12	北区	AI-68	Ⅰ	加工礫	片麻岩	(179.0)	75.0	25.0	(489.0)	－	剥離痕・摩耗痕（線条痕）	44
81	1	北区	AJ-66	Ⅱ	加工礫	片麻岩	(179.0)	48.0	22.0	(270.2)	－	剥離痕（摩耗）	44
81	2	北区	AH-61	Ⅲ	加工礫	頁岩	(159.0)	(47.0)	(27.0)	(257.8)	S-29	剥離痕（一部摩耗）	44
81	3	北区	AS-58	Ⅲ	加工礫	砂岩	(151.0)	(77.0)	20.0	(361.2)	－	剥離痕	44
81	4	北区	AI-68	Ⅰ	加工礫	千枚岩	(107.0)	(65.0)	(19.0)	(199.1)	－	剥離痕（摩耗）	44
81	5	北区	AK-65	Ⅲ	加工礫	頁岩	(72.0)	(26.0)	(9.0)	(21.5)	S-10	擦過痕	44
81	6	北区	AK-62	Ⅱ	加工礫	粘板岩	(80.0)	(21.0)	(8.0)	(26.1)	－	剥離痕（摩耗）・擦過痕	44
81	7	北区	AG-60	Ⅲ	加工礫	片岩	(51.0)	(19.0)	(4.0)	(8.5)	S-619	剥離痕	44
81	8	北区	AH-61	Ⅱ	装身具	安山岩	39.5	29.0	10.0	8.0	C-2	両面から穿孔（長径約38mm）、研磨痕	44

土製品

図版番号	番号	種別	遺構名	取上番号	グリッド	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
28	13	円盤状土製品	SI32	P-16	AT-63	床直	40.0	38.0	8.0	12.9	LR縦	44
31	19	土製装飾品	SI34		BX-37	床面	27.5	13.5	10.0	3.4	土製環断片	44
34	22	円盤状土製品	SI39	S-13	AH-63	2	56.5	60.0	10.5	27.3		44
53	13	異形土製品	南区		BU-36	Ⅲ	46.5	34.0	35.5	26.0		44
53	14	異形土製品	南区		CA-36	Ⅲ	20.5	32.0	19.0	9.0		44
53	15	焼成粘土塊	南区	P-221	BX-37	Ⅳ	17.0	20.5	14.0	3.2		44
53	16	焼成粘土塊	南区		BY-37	Ⅲ	19.0	22.0	14.0	3.9		44
53	18	泥面子	南区		BX-37	Ⅲ	16.5	16.0	8.0	1.5	20世紀代か	44
82	17	円盤状土製品	北区		AI-55	Ⅱ	89.0	89.5	8.0	65.7	LR横	45
82	18	円盤状土製品	北区		AL-63	Ⅱ	87.5	87.0	12.0	86.6	綱代痕	45
82	19	円盤状土製品	北区	S-71	AH-61	Ⅳ	61.0	68.0	17.5	58.7	綱代痕	45
82	20	円盤状土製品	北区		AG-66	Ⅰ	37.0	38.0	9.0	12.8	LR縦	45
82	21	円盤状土製品	北区	P-741	AI-61	Ⅲ	37.0	37.5	8.0	10.3	無文	45
82	22	円盤状土製品	北区		AJ-65	Ⅲ	53.0	56.5	8.0	21.0	LR縦横斜交	45
82	23	円盤状土製品	北区		AH-60	Ⅱ	68.5	62.0	9.0	40.3	RL横→LR横　中央に回	45
82	24	土偶脚部	北区		AJ-62	Ⅱ	34.5	48.5	21.0	26.9		45
82	25	土偶脚部	北区		AJ-66	Ⅱ	28.0	26.5	17.0	8.4		45
82	26	土製装飾品	北区		AK-66	Ⅲ	31.5	17.0	12.5	5.7	勾玉形土製玉	45
82	27	三角形土板	北区		AI-62	Ⅱ	35.0	27.0	11.0	6.0		45
82	29	土偶脚部	北区	C-2	AI-62	Ⅱ	22.5	21.0	16.0	6.0		45
82	30	土偶脚部	北区	P-524	AH-61	Ⅲ	44.0	42.5	35.0	22.2		45
82	31	泥面子	北区		AK-77	Ⅱ直上	23.5	29.0	6.5	3.2	20世紀代か	45
82	32	泥面子	北区		AJ-59	Ⅰ	29.0	18.0	10.0	4.3	20世紀代か	45

ミニチュア土器（1）

図版番号	番号	遺構名	取上番号	グリッド	層位	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	重量(g)	部位	文様、調整	備考	写真図版
31	18	SI34	P-32	BX-37	2	－	20.0	(15.0)	5.8	底	RL縦		44
31	20	SI34	P-8	BX-37	2	－	20.0	(34.0)	18.2	胴～底	LR縦		44
34	21	SI39-炉	P-3	AH-63	3	－	16.0	(28.0)	18.3	胴～底	無文、外面ミガキ		44
45	11	SI45		AJ-65	火山灰下6	(76.0)	22.0	38.0	49.4	略完形	無文、内面ヘラナデ		44

ミニチュア土器（2）

図版番号	番号	遺構名	取上番号	グリッド	層位	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	重量(g)	部位	文様、調整	備考	写真図版
46	20	SI46	C-1	AH-66	2	－	46.0	(37.0)	36.5	高杯脚部	沈線、LR横、外面ミガキ、内面ヘラナデ	縄文部束彩　スス付着	44
53	1	南区			Ⅳ～Ⅴ	－	28.0	46.0	67.9	胴～底	LR縦	上部内反	44
53	2	南区		BX-37	Ⅲ	－	44.0	(21.5)	26.1	底	LR縦、内面ヘラナデ		44
53	3	南区	P-109	CA-37	Ⅲ	－	40.0	(14.5)	21.5	底	LR縦、内面ヘラナデ		44
53	4	南区	P-32	CA-37	Ⅲ	－	44.0	(17.0)	29.6	底	LR縦、外面ヘラナデ		44
53	5	南区		CA-37	Ⅲ	－	－	(37.0)	14.7	底	LR縦、内面ヘラナデ		44
53	6	南区	P-205	BX-37	Ⅳ	－	－	(13.5)	4.5	底	RL縦、外面ヘラナデ、内面ヘラナデ		44
53	7	南区	P-272	BT-35	Ⅳ	－	40.0	(24.0)	38.2	底	無文、外面指圧痕、内面ヘラナデ	内外面貼り付け	44
53	8	南区		BX-36	Ⅲ	－	44.0	(21.0)	28.3	底	無文、内面ヘラナデ		44
53	9	南区		BX-37	Ⅲ	－	22.0	(19.0)	14.6	底	無文、内面指圧痕		44
53	10	南区	P-168	BY-38	Ⅳ	－	42.0	(14.5)	25.8	底	無文、内面ヘラナデ		44
53	11	南区		BY-37	Ⅲ	－	－	(33.5)	13.3	底	無文、内面ヘラナデ		44
53	12	南区		BO-35	Ⅲ	－	－	(20.0)	7.8	底	無文		44
53	17	南区	P-183	BY-37	Ⅳ	－	－	－	2.6	胴部	無文、外面ミガキ		44
82	1	北区		AK-63	Ⅱ	－	36.0	(32.0)	30.1	底	RL縦、内面ヘラナデ		45
82	2	北区		AJ-61	Ⅳ	－	34.0	(17.0)	8.8	底	LR縦、内面ヘラナデ		45
82	3	北区		AH-60	Ⅲ	－	－	(15.0)	6.6	底	LR斜		45
82	4	北区		AH-61	下	－	－	(24.0)	14.6	底	LR横		45
82	5	北区	C-3	AH-61	Ⅲ	(66.0)	26.0	37.0	30.0	略完形	無文、外面ユビナデ、内面ヘラナデ	輪積痕	45
82	6	北区		AH-63	Ⅱ	－	20.0	(29.0)	15.9	胴～底	無文、内面指圧痕		45
82	7	北区		AK-65	Ⅰ	－	16.0	(28.0)	11.7	胴～底	無文		45
82	8	北区		AI-61	Ⅲ	－	32.0	(27.0)	33.0	底	無文、外面ヘラナデ、内面ヘラナデ		45
82	9	北区		AI-60	Ⅲ	－	－	(20.0)	6.5	底	無文、内面ヘラナデ		45
82	10	北区		AK-61	Ⅰ	34.0	－	(29.0)	17.4	頸	沈線、外面ミガキ、内面ヘラナデ	彩	45
82	11	北区		AK-61	Ⅱ	－	－	(14.0)	6.8	底	無文、外面ヘラナデミガキ指圧痕	底面丸底	45
82	12	北区	C-3	AH-61	Ⅲ	－	－	－	30.0	口縁	沈線、LR縦	沈線枠内に縄文	45
82	13	北区		AK-60	上	－	－	－	9.9	胴部	沈線		45
82	14	北区		AK-59	Ⅲ	－	－	－	14.8	胴部片	沈線、外面ミガキ、内面ヘラナデ		45
82	15	北区	P-18	AH-63	Ⅱ	－	－	－	67.0	胴部	無文		45
82	16	北区		AJ-65	Ⅲ	－	－	－	34.2	高杯脚部付近	無文	脚部破断面磨耗	45
82	28	北区	P-341	AI-62	Ⅱ	－	－	－	3.4	胴～底			45

南区　調査区　全景

北区　調査区　全景

写真１　調査区全景

南区　遺物検出状況（W→）

南区　遺構完掘状況（E→）

北区　遺物出土状況（S→）

北区　遺構完掘状況（S→）

北区　遺物出土状況（S→）

写真２　調査開始前の状況、検出前の状況

基本層序　上部（E→）

基本層序　下部（E→）

粗掘作業風景（S→）

粗掘作業風景（W→）

粗掘作業風景（N→）

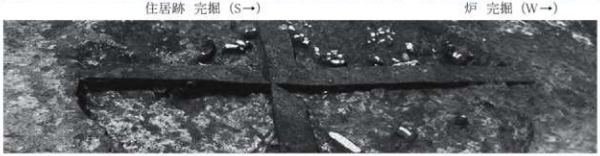
沢底　検出状況（W→）

空撮前清掃作業（S→）

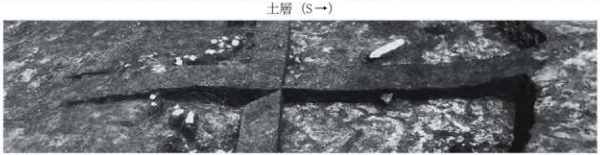
写真３　基本層序、作業風景

住居跡　完掘（S→）

炉　完掘（W→）

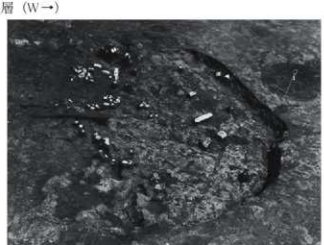


土層（S→）



土層（W→）

炉　被熱範囲（W→）

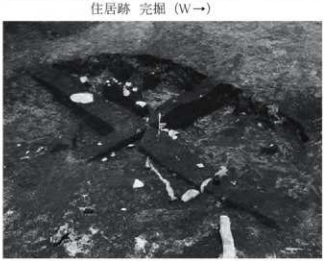


遺物出土状況（W→）

写真４　第31号竪穴住居跡

住居跡　完掘（W→）

炉　完掘（W→）


土層（NW→）

炉　被熱範囲（S→）

遺物出土状況（N→）

遺物出土状況（W→）

写真５　第32号竪穴住居跡

住居跡　完掘（S→）

遺物出土状況

遺物出土状況

土層（SE→）

炉　検出（S→）

石皿出土状況（SE→）

写真6　第33号竪穴住居跡

第34号竪穴住居跡　完掘（S→）

第35号竪穴住居跡　完掘（S→）

第35号竪穴住居跡　土層（S→）

遺物出土状況（S→）

第35号竪穴住居跡　炉　完掘（S→）

写真７　第34・35号竪穴住居跡

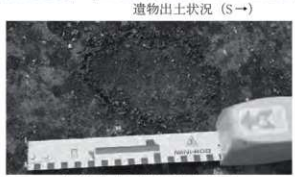
住居跡　完掘（S→）

遺物出土状況（S→）

土層（S→）

遺物出土状況（S→）

炉　完掘（S→）



床面出土赤色顔料　検出（S→）

炉　掘り方（W→）

写真８　第36号竪穴住居跡

第37号竪穴住居跡　完掘・土層（S→）

第38号竪穴住居跡　完掘・土層（S→）

第38号竪穴住居跡　遺物出土状況（S→）

写真９　第37・38号竪穴住居跡

住居跡　完掘（E→）

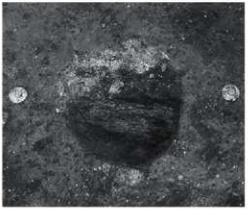
土層（E→）

土層（S→）

写真10　第39・40号竪穴住居跡

遺物出土状況（S→）

炉　完掘（S→）



Pit 1　土層（E→）

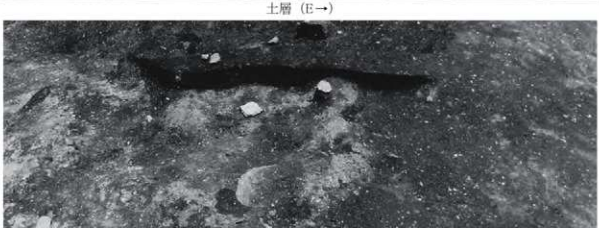
炉　被熱範囲（S→）

Pit 2　土層（E→）

写真11　第39号竪穴住居跡

住居跡　完掘（S→）

土層（E→）



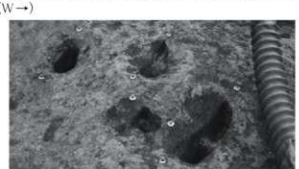
炉　土層（S→）

写真12　第41号竪穴住居跡

住居跡　完掘（N→）

土層（W→）

Pit 1　土層（S→）



Pit　土層（W→）

写真13　第42号竪穴住居跡

住居跡　完掘（E→）

床面遺物出土状況（W→）

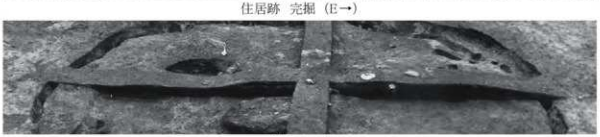
土層（E→）

炉　完掘（E→）

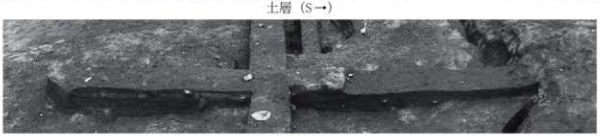
炉　被熱範囲（N→）

写真14　第44号竪穴住居跡

住居跡　完掘（E→）



土層（S→）

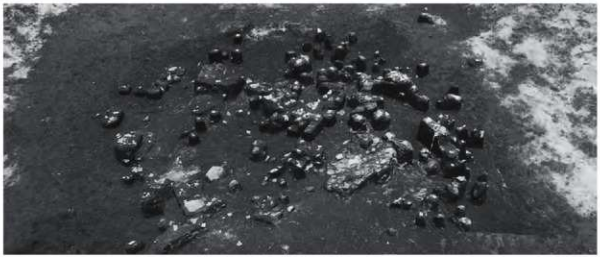


土層（E→）

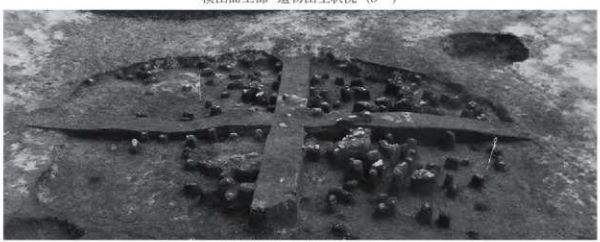
十和田ｂ降下火山灰　堆積状況（W→）

土坑1　土層（S→）

写真15　第45号竪穴住居跡（1）

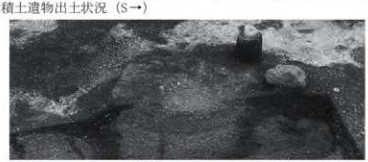


検出面上部　遺物出土状況（S→）

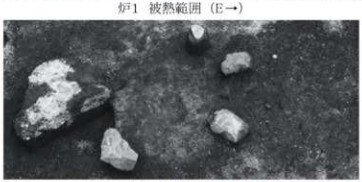


堆積土遺物出土状況（S→）

炉1・2　完掘（S→）



炉1　被熱範囲（E→）



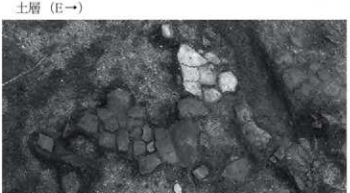
炉1　完掘（E→）

写真16　第45号竪穴住居跡（2）

住居跡　完掘（S→）

土層（E→）

床面遺物出土状況（N→）



床面遺物出土状況　アップ（E→）

炉　被熱範囲（N→）

写真17　第46号竪穴住居跡

住居跡 完掘（S→）

土層（E→）

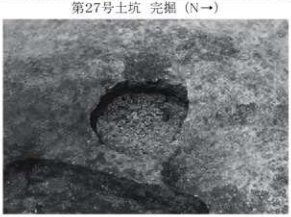
炉 完掘（S→）

Pit 4 遺物出土状況（S→）

写真18 第47号竪穴住居跡

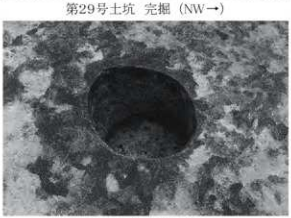
第27号土坑　完掘（N→）

第28号土坑　完掘（W→）

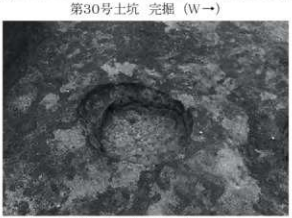


第29号土坑　完掘（NW→）

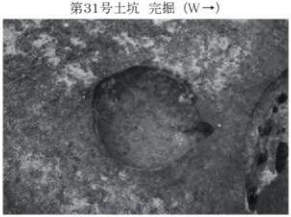
第30号土坑　完掘（W→）



第31号土坑　完掘（W→）



第32号土坑　完掘（W→）



第33号土坑　完掘（W→）

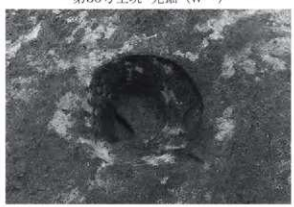
第34号土坑　土層（W→）

写真19　第27～34号土坑

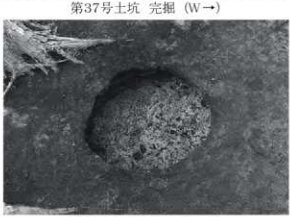
第35号土坑　完掘（S→）

第36号土坑　完掘（W→）

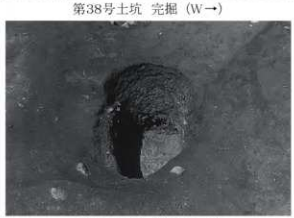
第37号土坑　完掘（W→）



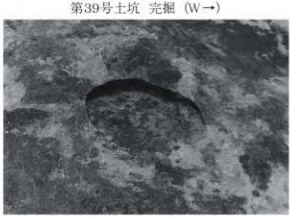
第38号土坑　完掘（W→）



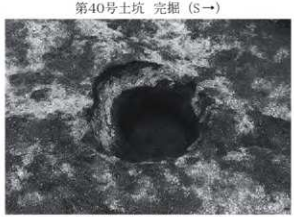
第39号土坑　完掘（W→）



第40号土坑　完掘（S→）



第41号土坑　完掘（E→）



第42号土坑　完掘（W→）

写真20　第35～42号土坑

第2号焼土遺構　検出（S→）

第3号焼土遺構　検出（W→）

第3号土器埋設遺構　検出（E→）

第5号土器埋設遺構　土層（E→）

第5号屋外炉　完掘（E→）

杭列　全体検出（S→）

杭列1　検出（E→）

写真21　焼土遺構、土器埋設遺構、屋外炉、杭列

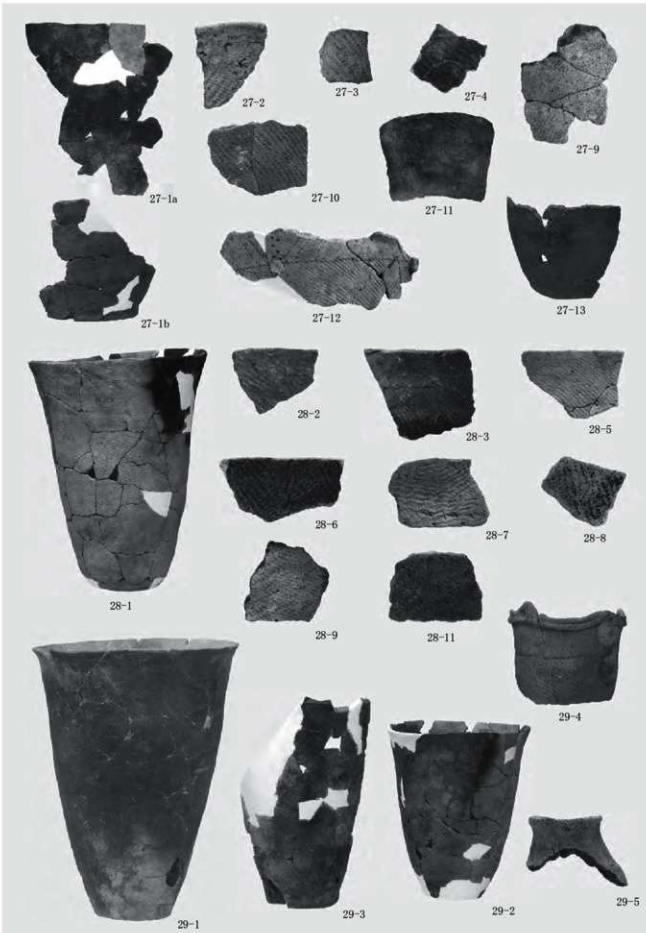


写真22　第31・32・33(1)号竪穴住居跡出土土器

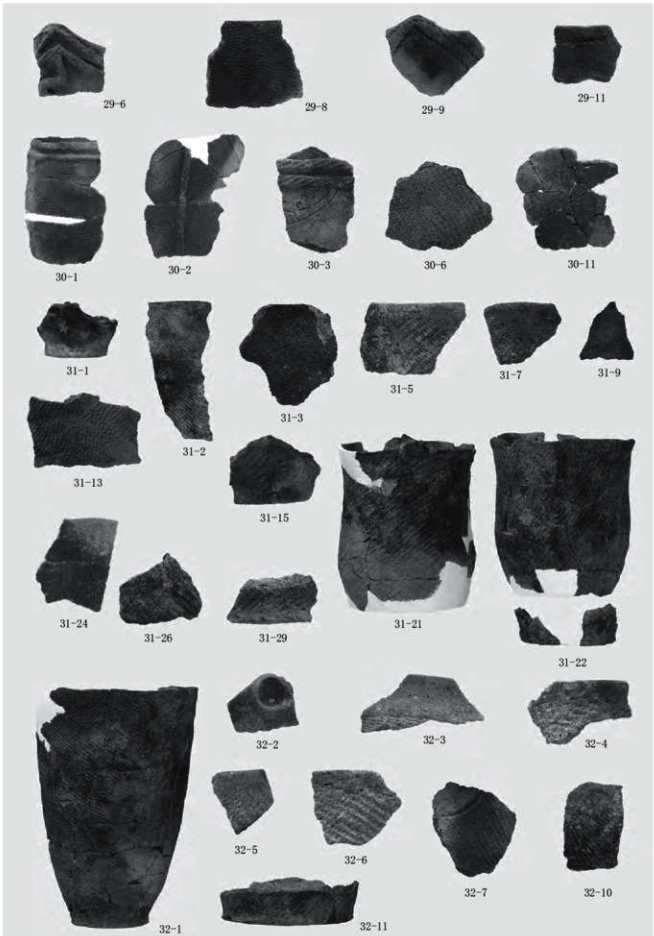


写真23　第33(2)・34～36号竪穴住居跡出土土器

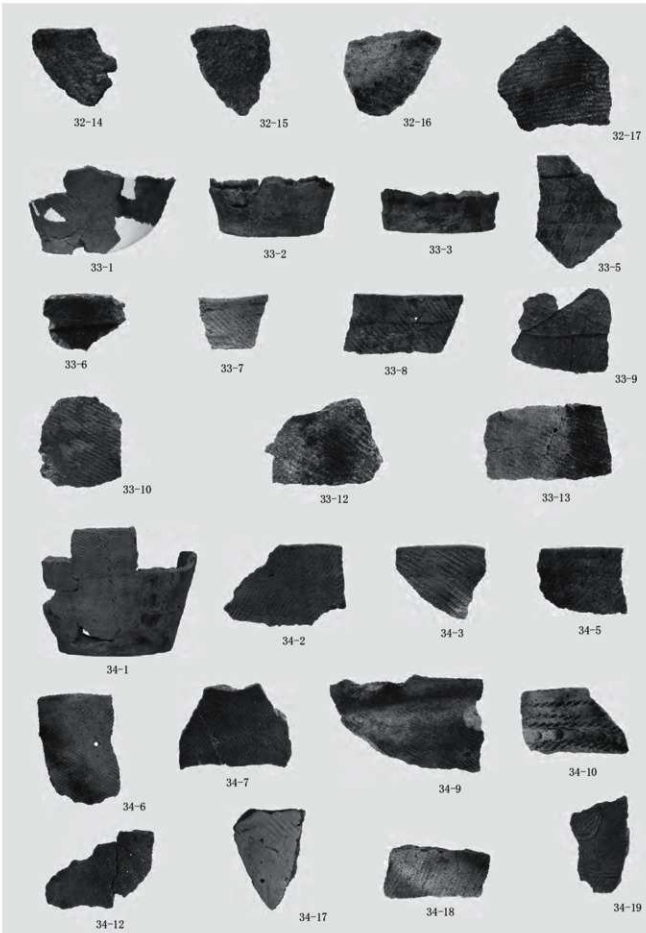


写真24　第37～39号竪穴住居跡出土土器

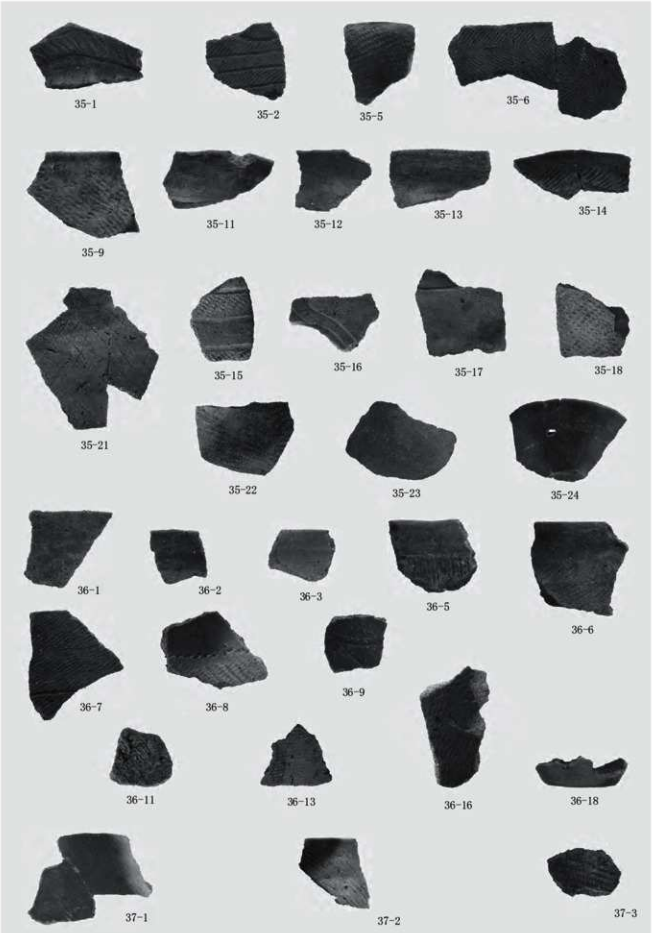


写真25　第40～42号竪穴住居跡出土土器

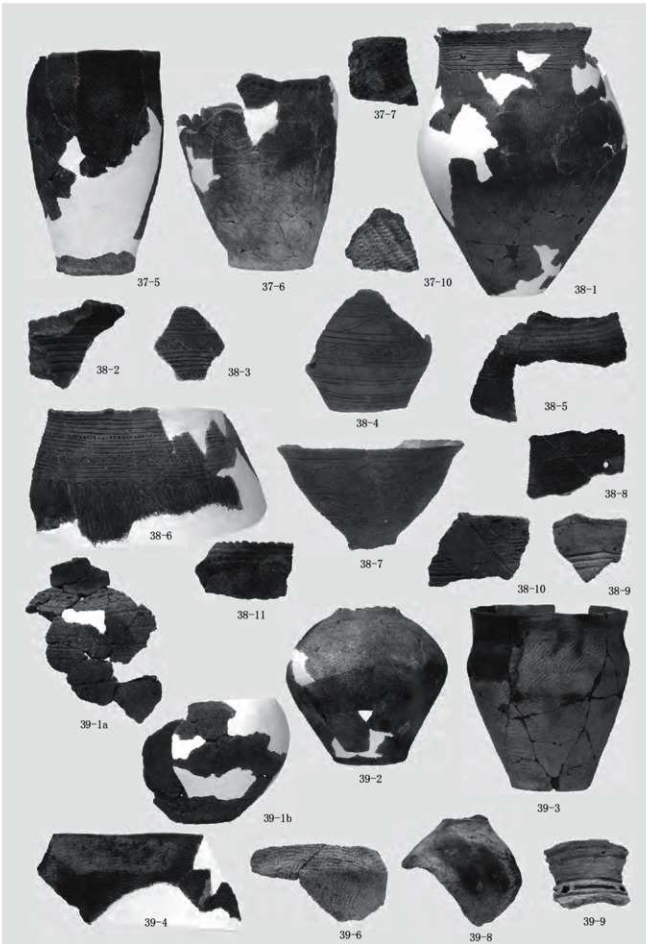


写真26　第44・45(1)号竪穴住居跡出土土器

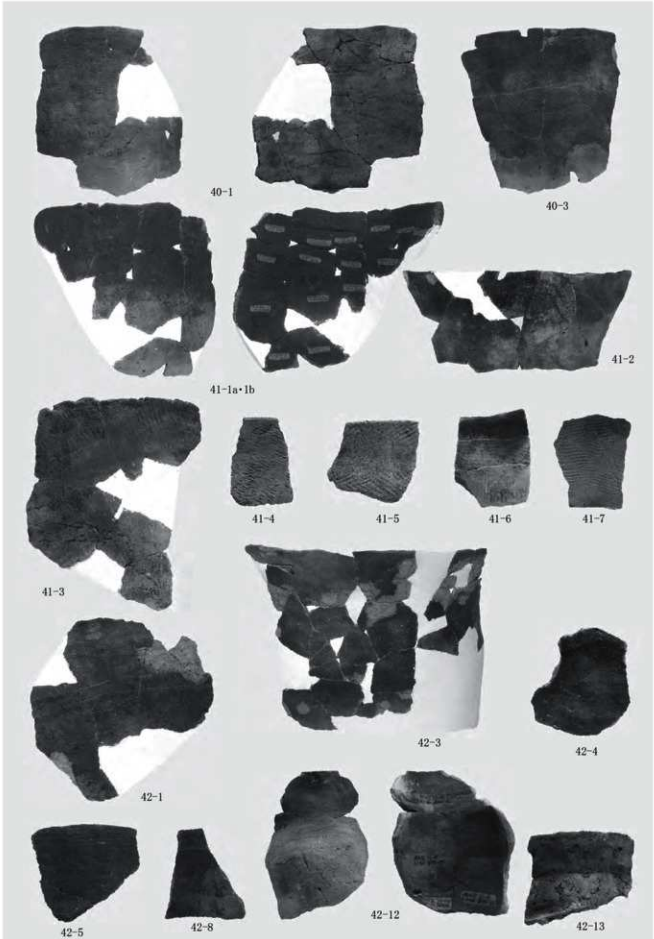


写真27　第45(2)号竪穴住居跡出土土器

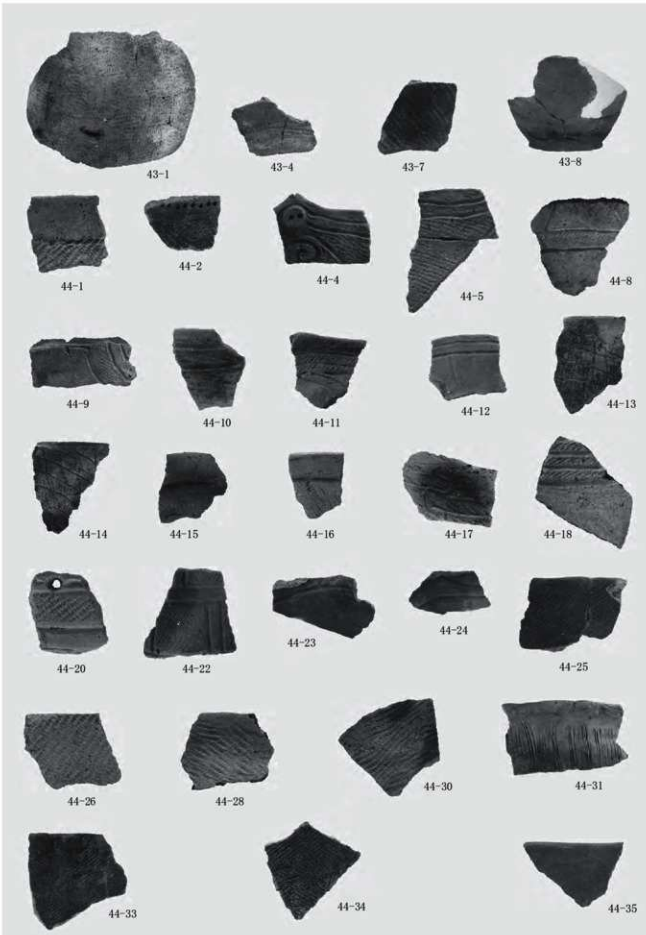


写真28　第45(3)号竪穴住居跡出土土器

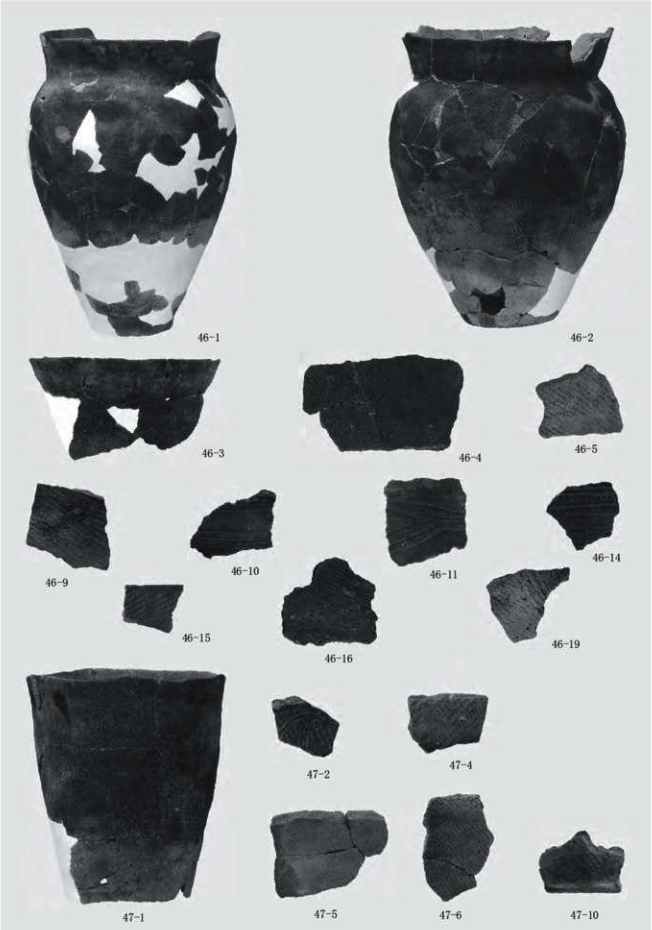


写真29　第46・47号竪穴住居跡出土土器

写真30　土坑・土器埋設遺構出土土器

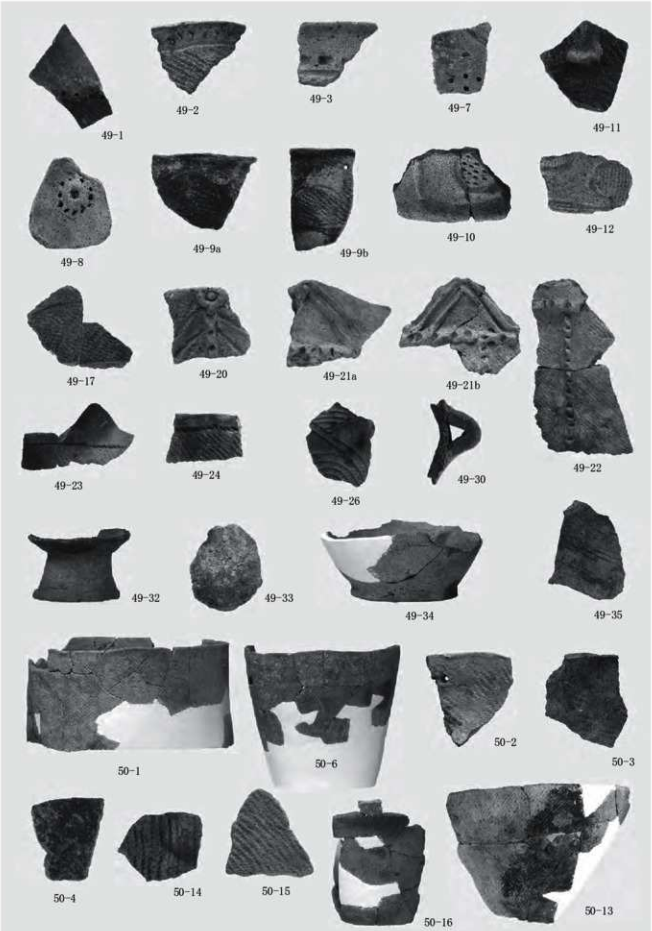


写真31　遺構外出土土器（南区）

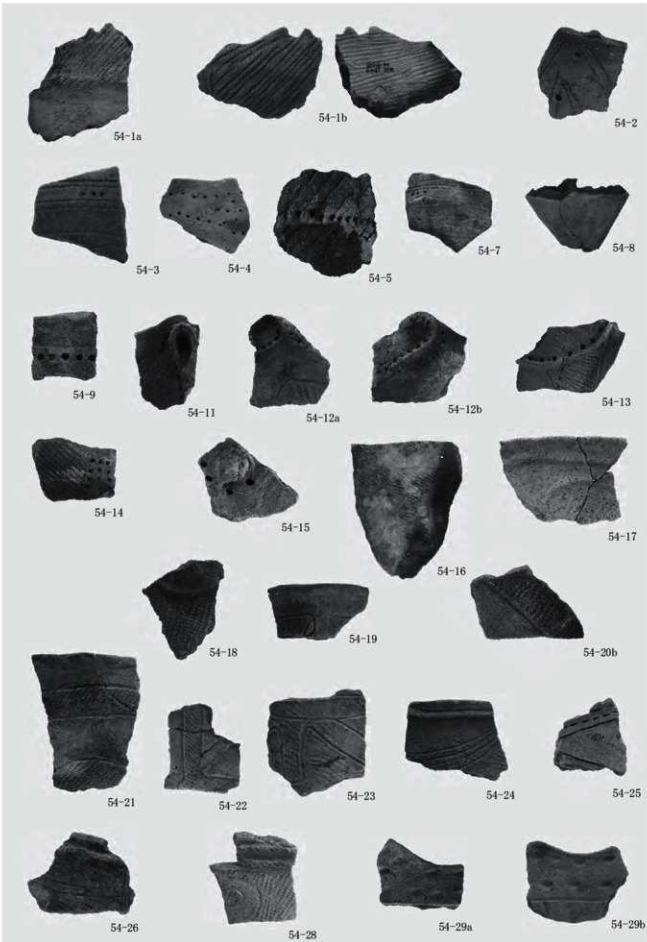


写真32　遺構外出土土器（北区１）

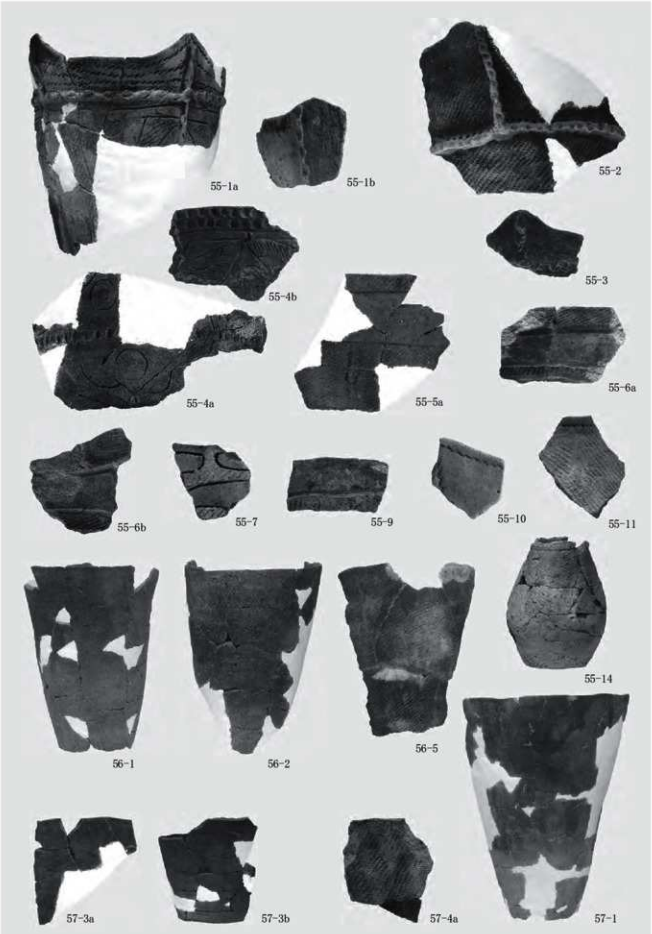


写真33　遺構外出土土器（北区２）

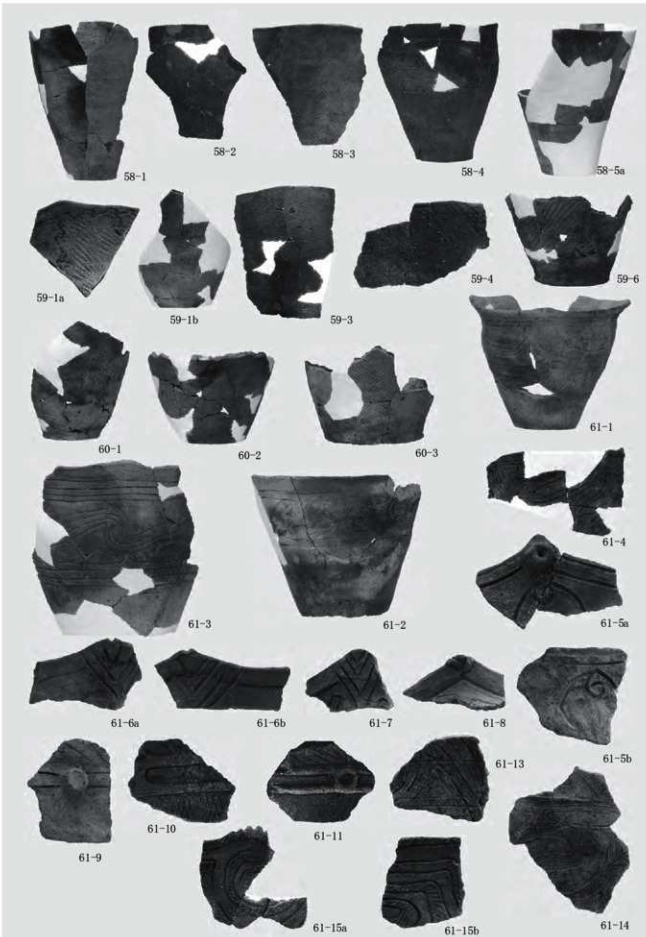


写真34　遺構外出土土器（北区３）

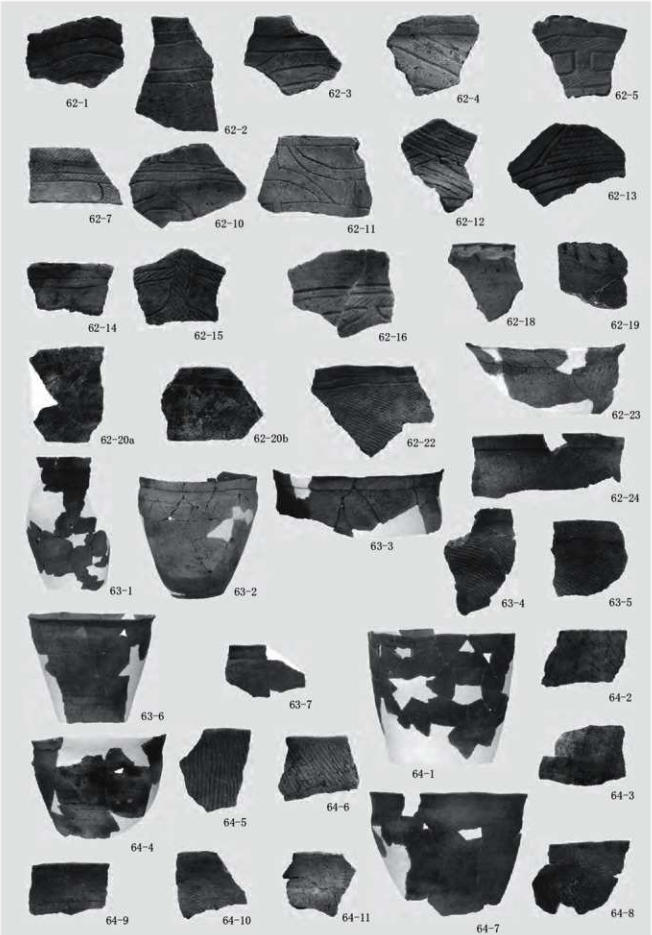


写真35　遺構外出土土器（北区４）

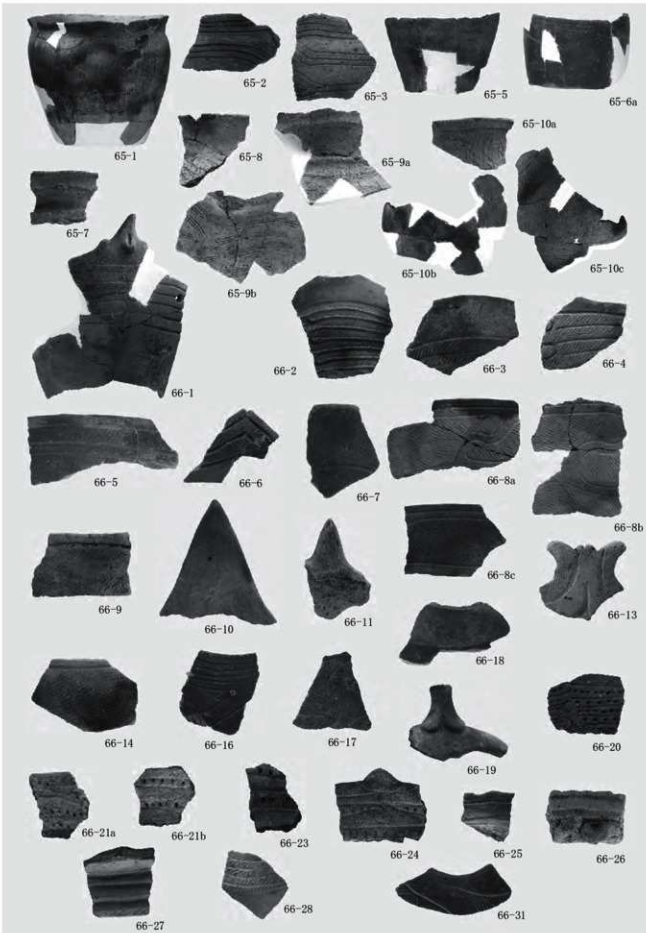


写真36　遺構外出土土器（北区５）

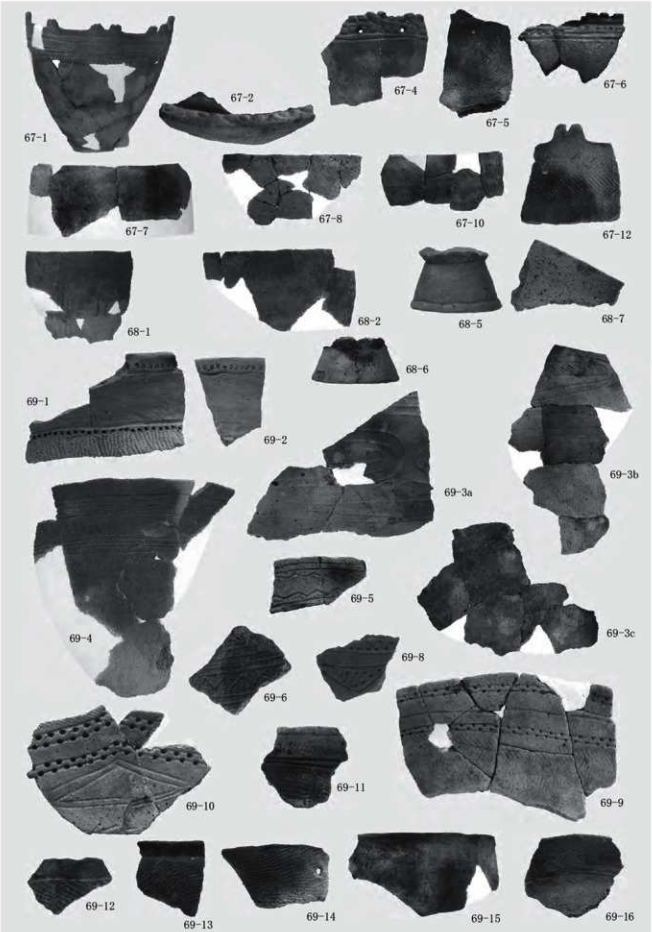


写真37　遺構外出土土器（北区６）

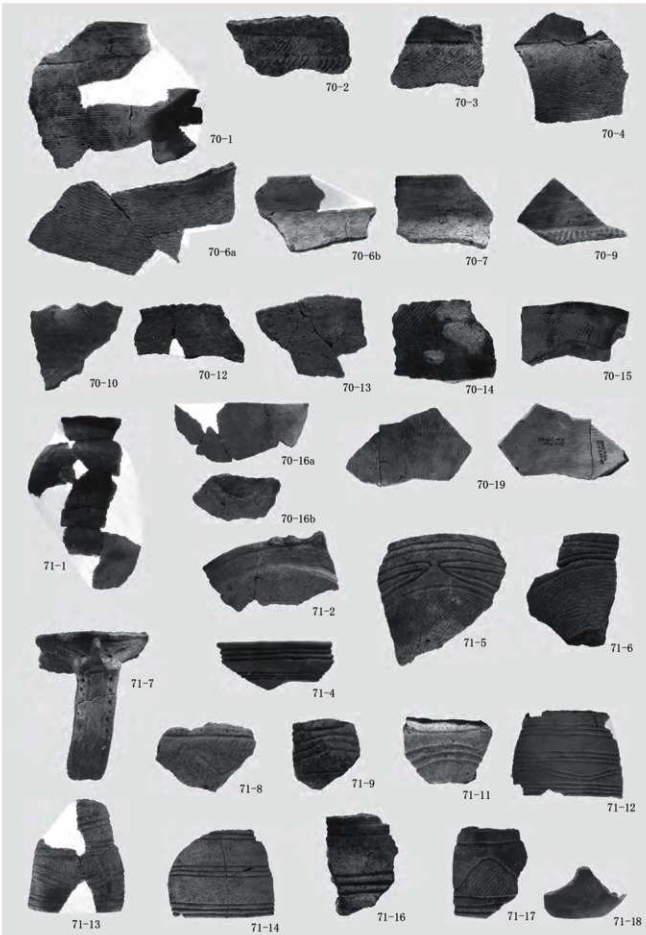


写真38　遺構外出土土器（北区７）

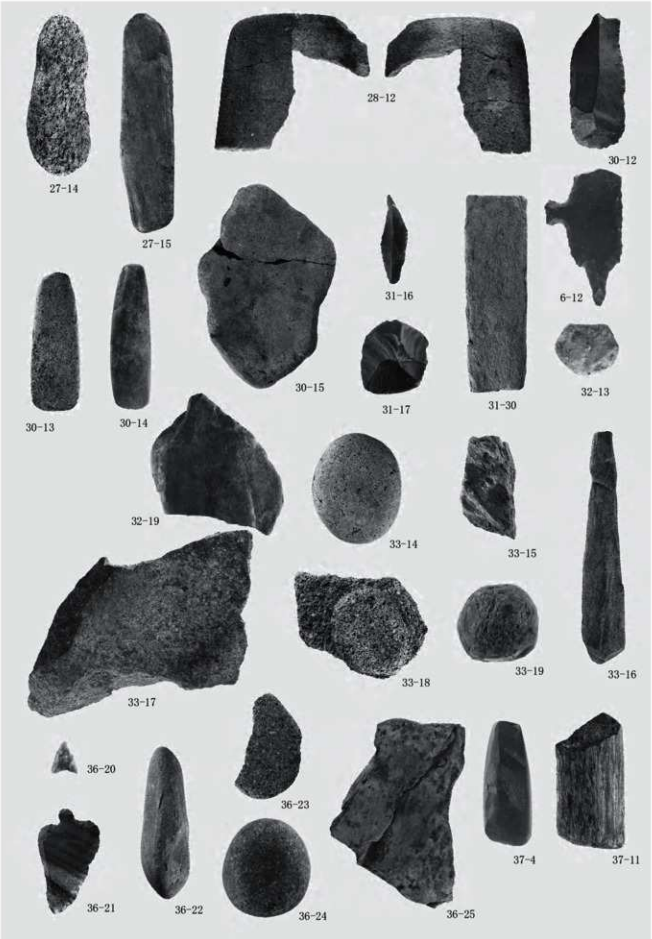


写真39　第31~44号竪穴住居跡出土石器

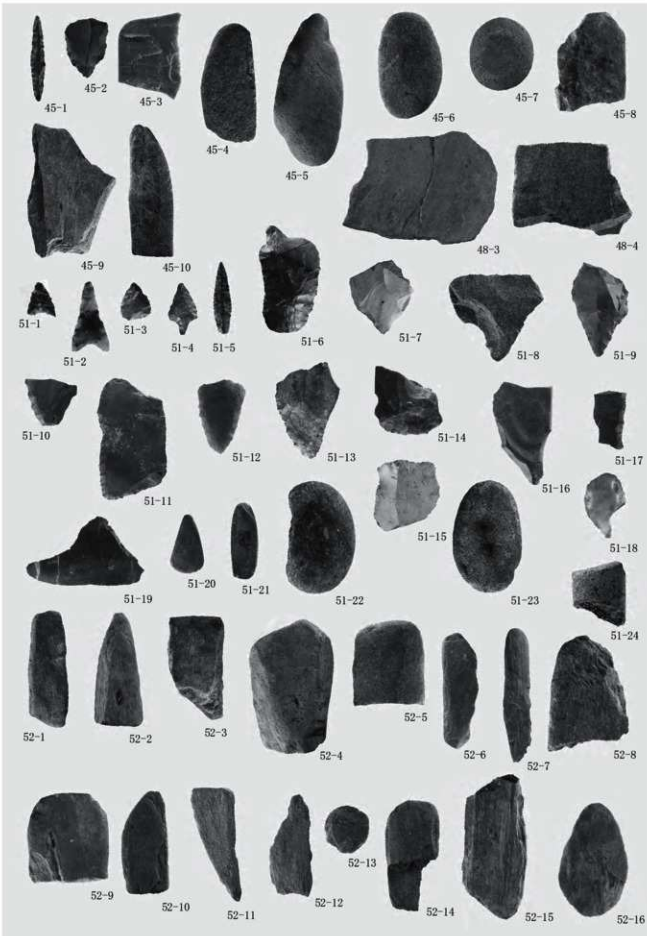


写真40　第45号竪穴住居跡・屋外炉・南区出土石器

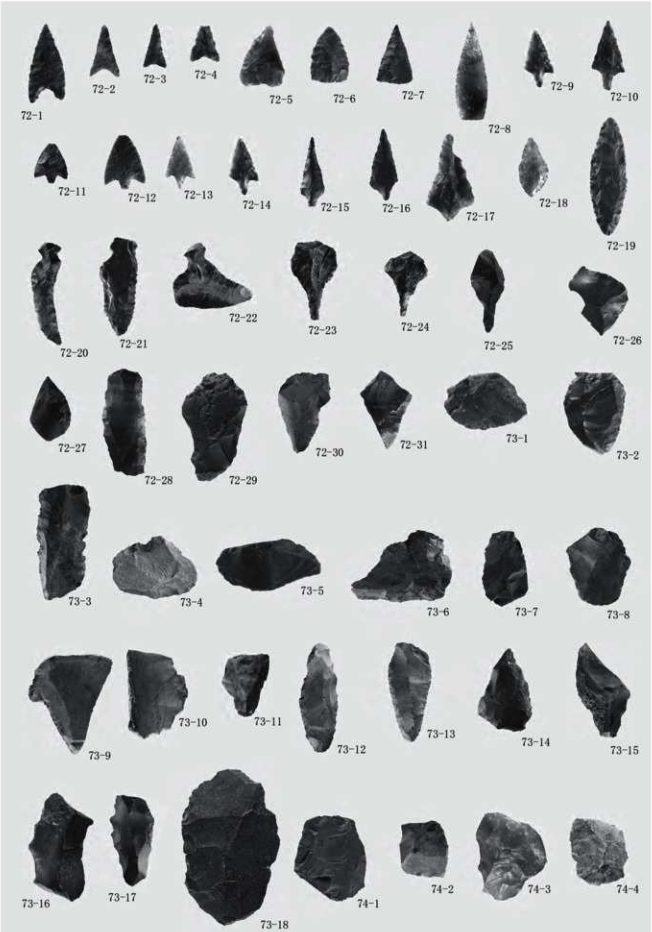


写真41　遺構外出土石器（北区１）

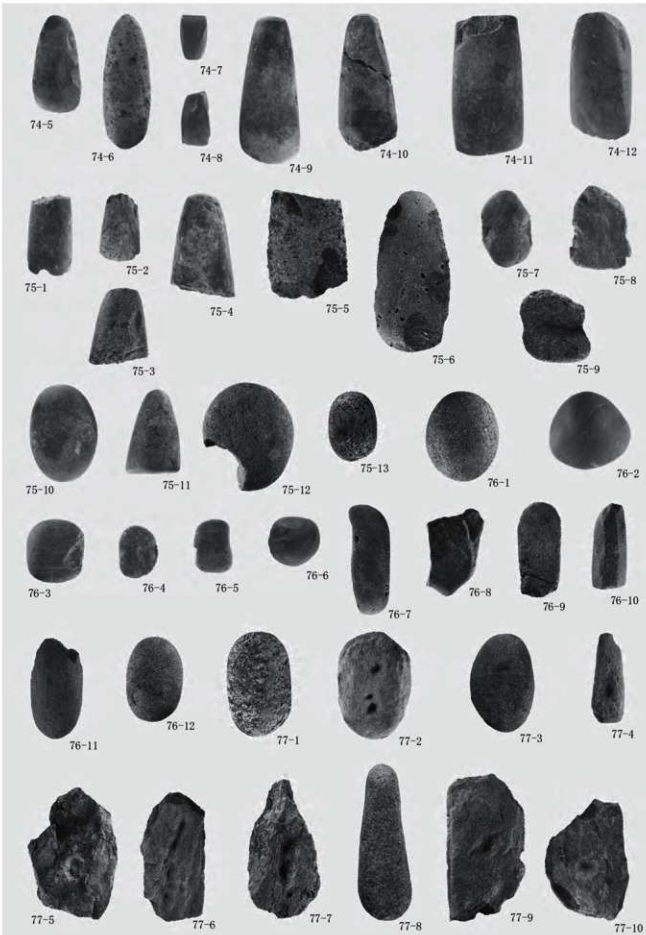


写真42　遺構外出土石器（北区２）

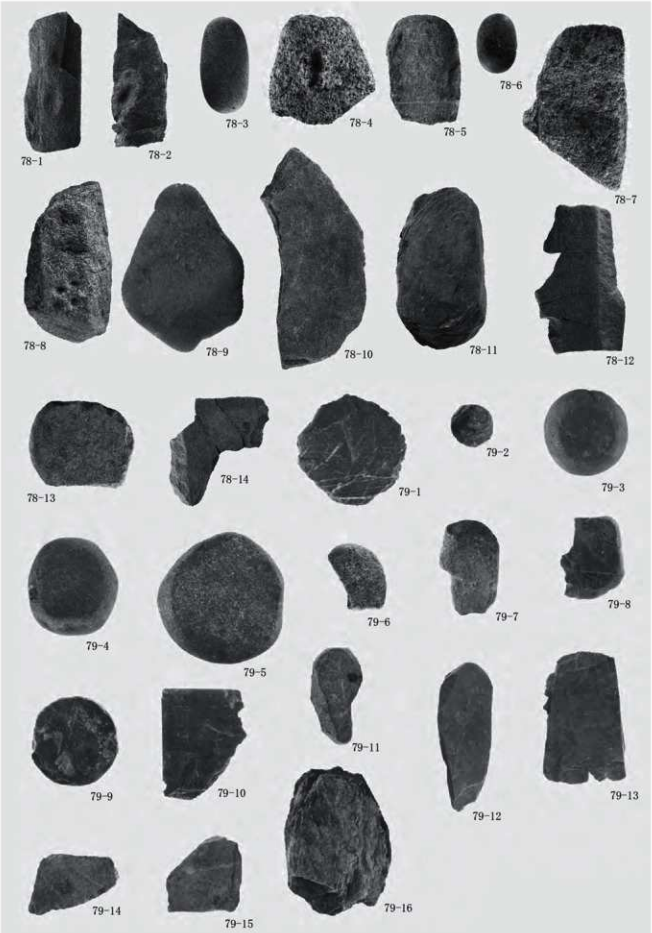


写真43　遺構外出土石器（北区３）

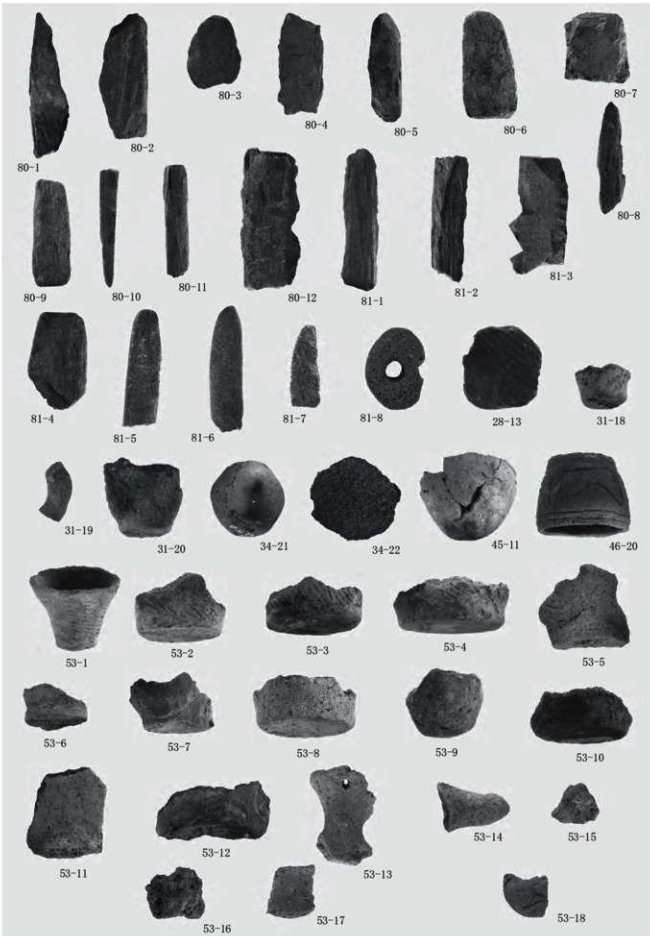


写真44　遺構外出土石器（北区４）、土製品類（１）

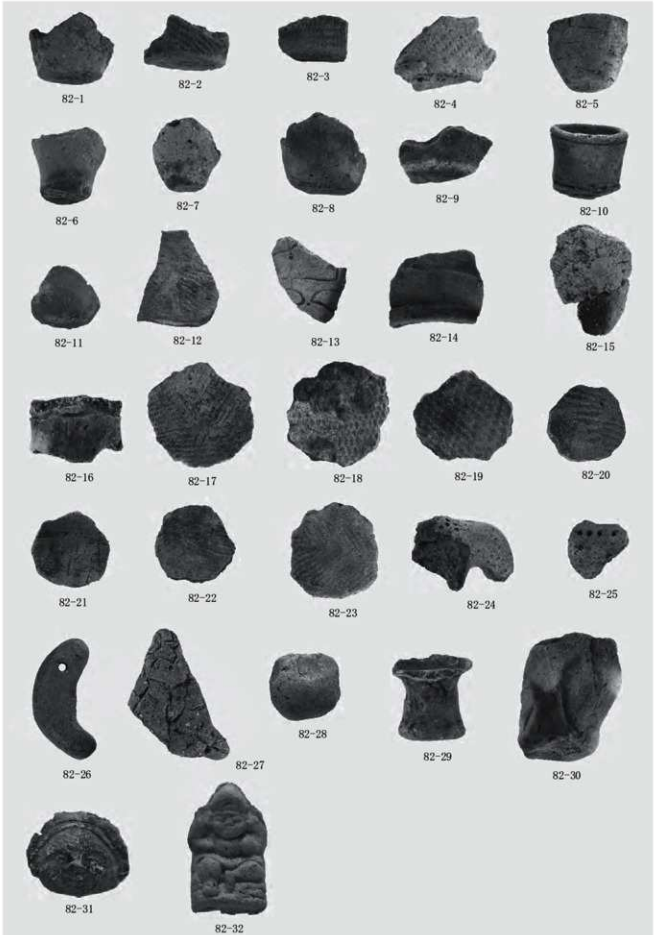


写真45　遺構外出土土製品類（２）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たしろいせき２
書　　名	田代遺跡Ⅱ
副　書　名	県道八戸大野線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告
シ リ ー ズ 名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第４２８集
編 著 者 名	坂本真弓・工藤　大・宮嶋　豊
編 集 機 関	青森県埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒038-0042　青森県青森市大字新城字天田内 152-15　℡　017-788-5701
発 行 機 関	青森県教育委員会
発 行 年 月 日	西暦　２００７年３月２３日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード		旧日本測地系 (TD)		調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
田代遺跡	青森県 八戸市 南郷区 大字島守 字番屋	02203	65042	40° 47′ 05″	140° 40′ 08″	20050420 ～ 20050729	3,600 m²	県道八戸大野線道路改良事業に伴う事前調査
				世界測地系 (JGD2000)				
				北緯	東経			
				40° 47′ 54″	140° 40′ 35″			

所収遺跡名	種別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
田代遺跡	散布地	縄文時代早期	なし	土器	
	集落跡	縄文時代　中期 中期末～後期初 頃　主体	竪穴住居跡　１３軒 土坑　１６基 屋外炉　１基 土器埋設遺構　２基 焼土遺構　２基	土器 石器 小型・ミニチュア土器、円盤状土製品、土製装飾品、土偶、三角形土版、異形土製品、焼成粘土塊	
	散布地	縄文時代後・晩期	なし	土器、石器	
	集落跡	弥生時代前期	竪穴住居跡　３軒	土器、ミニチュア土器	
	散布地	弥生時代中・後期	なし	土器、クマ意匠の把手	
	集落跡	近世・近代	杭列	泥面子	

階上岳山麓の集落跡で、南区では開析された南向きの丘陵地に縄文時代中期末～後期初頭を中心とした集落跡が形成された。傾斜が急な場所で、小型の竪穴住居跡が検出された。竪穴住居跡は壁際に複式炉を伴うものや地床炉のものが主体である。複式炉は、石組部・前庭部を合わせた二部構成のものが検出された。北区でも、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡が検出され、炉は、石囲炉が中心である。また、北区南東向きの緩斜面では弥生時代前期末の竪穴住居跡が検出された。このほか弥生時代中・後期の遺物も出土している。石器は、石皿・回石の出土が多く、とくに石皿は使用後に炉石に転用される例が多い。小型土器・ミニチュア土器のほか、円盤状土製品・土製装飾品・土偶・三角形土版・異形土製品・焼成粘土塊が出土した。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第428集

田 代 遺 跡 Ⅱ

－県道八戸大野線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日　2007年3月23日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042　青森市大字新城字天田内152番15号
TEL. 017-788-5701　FAX. 017-788-5702
印　　刷　不二印刷工業株式会社
〒030-0902　青森市合浦1-10-16
TEL. 017-741-5439　FAX. 017-741-2541